

平成 27 年度

博士論文(指導教員 田中 寛)

可能構文の成立条件に関する研究

—日中対照研究を踏まえた分析—

大東文化大学大学院外国語学研究科

日本語文化学専攻博士課程後期課程

(学籍番号 : 12233101)

魏 美 平

【章立て目次】

章立て目次	i
細目目次	iii
表目次	ix
図目次	xi
凡例	xiii
序章	1
1 本研究の背景	2
2 本研究の目的と位置づけ	6
3 本研究で用いる用語	7
4 本論文の構成	9
【注】	10
第1章 日本語と中国語における可能表現の概観	11
1.1 可能とは	11
1.2 日本語の可能表現と成立条件	12
1.3 中国語の可能表現と成立条件	30
1.4 まとめ	38
【注】	39
第2章 日本語における可能形の接辞付加をめぐる考察	42
2.1 問題意識	42
2.2 先行研究	44
2.3 本章の研究手法	49
2.4 五段・一段動詞の可能形の接辞付加	51
2.5 漢語サ変動詞の可能形の接辞付加	65
2.6 まとめ	73
【注】	73
第3章 成立条件の相互関係からみた可能構文の考察	75
3.1 問題意識	75
3.2 先行研究	76
3.3 本章の研究手法	81
3.4 自・他動詞構文における主体と動詞の意味特徴の相互作用	82
3.5 漢語サ変動詞の意味特徴と主体の相互作用について	94
3.6 日本語の可能構文における格構造の制約	97

3.7 まとめ.....	103
【注】	104
第4章 潜在可能構文と実現可能構文の視点から見た日本語可能表現.....	105
4.1 問題意識.....	105
4.2 先行研究.....	106
4.3 本章の研究手法.....	111
4.4 考察結果.....	112
4.5 まとめ.....	125
【注】	125
第5章 日本語の非可能構文・可能構文と中国語の対応表現の考察.....	127
5.1 問題意識.....	127
5.2 先行研究.....	128
5.3 本章の研究手法.....	132
5.4 可能構文・非可能構文と中国語の対応関係.....	134
5.5 漢語サ変動詞と中国語の対応関係.....	147
5.6 まとめ.....	152
【注】	153
第6章 日本語の実現可能・潜在可能と中国語の対応表現の考察.....	154
6.1 問題意識.....	154
6.2 先行研究.....	155
6.3 本章の研究手法.....	161
6.4 考察結果.....	162
6.5 まとめ.....	186
【注】	189
第7章 結論.....	190
7.1 本研究の結論.....	190
7.2 本研究で明らかになったこと.....	191
7.3 残された問題点と展望.....	196
【注】	197
用例出典	198
参考文献	201
既発表論文と各章の関係.....	211
謝辞	212

【細目目次】

章立て目次	i
細目目次	iii
表目次	ix
図目次	xi
凡例	xiii
序章	1
1 本研究の背景	2
2 本研究の目的と位置づけ	6
3 本研究で用いる用語	7
4 本論文の構成	9
【注】	10
第1章 日本語と中国語における可能表現の概観	11
1.1 可能とは	11
1.2 日本語の可能表現と成立条件	12
1.2.1 語形	12
1.2.2 意味分類の先行研究	15
1.2.2.1 格構造による意味分類	15
1.2.2.2 アスペクトによる意味分類	16
1.2.3 再分類の試み	20
1.2.3.1 グループ1(能力・属性・性能)	20
1.2.3.2 グループ2(状況・状態・条件可能)	21
1.2.3.3 グループ3(自発)	21
1.2.3.4 グループ4(評価)	22
1.2.3.5 グループ5(許可・許容)	23
1.2.3.6 グループ6(遂行可能)	23
1.2.4 可能構文の成立条件	23
1.2.4.1 意志性	24
1.2.4.2 主体性	26
1.2.4.3 命題内容	29
1.3 中国語の可能表現と成立条件	30
1.3.1 語形	30
1.3.2 意味分類の先行研究	30
1.3.2.1 助動詞による可能の意味分類	30
1.3.2.2 補語による可能の意味分類	31

1.3.2.3 「A類. V+得/不+結果補語/趨向補語」と補語の関係について	35
1.4 まとめ	38
【注】	39
第2章 日本語における可能形の接辞付加をめぐる考察	42
2.1 問題意識	42
2.2 先行研究	44
2.2.1 長友文子(1997)	44
2.2.2 青木ひろみ(1997)	46
2.2.3 中野琴代(2008)	48
2.3 本章の研究手法	49
2.3.1 本章の研究対象と目的	49
2.3.2 本章の研究手法	50
2.3.3 本章の考察資料	51
2.4 五段・一段動詞の可能形の接辞付加	51
2.4.1 可能形の接辞を付加しにくい無対・有対自動詞	52
2.4.2 可能形の接辞を付加しにくい自動詞の意味特徴	57
2.4.3 可能形の接辞を付加しにくい無対・有対他動詞	58
2.4.4 可能形の接辞を付きしにくい他動詞の意味特徴	60
2.4.5 可能形の接辞を付加しにくい自動詞と他動詞の要因	61
2.4.6 自・他動詞と可能形の対応関係	62
2.5 漢語サ変動詞の可能形の接辞付加	65
2.5.1 漢語サ変動詞と可能形の共起	65
2.5.2 「できる」を中心に調べた結果	68
2.5.3 「することができる」を中心に調べた結果	70
2.5.4 「する」を中心に調べた結果	71
2.6 まとめ	73
【注】	73
第3章 成立条件の相互関係からみた可能構文の考察	75
3.1 問題意識	75
3.2 先行研究	76
3.2.1 成立条件についての研究	76
3.2.1.1 渋谷勝己(1993)	76
3.2.1.2 張威(1998)	76
3.2.1.3 高恩淑(2012)	78
3.2.2 格構造についての研究	78
3.2.2.1 小矢野哲夫(1981)	78

3.2.2.2 寺村秀夫(1982).....	79
3.2.2.3 井島正博(1991).....	80
3.3 本章の研究手法.....	81
3.3.1 本章の研究対象と目的.....	81
3.3.2 本章の研究手法.....	81
3.4 自・他動詞構文における主体と動詞の意味特徴の相互作用.....	82
3.4.1 自動詞構文の「可能」を表す現象.....	82
3.4.1.1 主体と動詞の意味素性の相互関係.....	82
3.4.1.2 前文に意志・意図を内包する構文.....	84
3.4.1.3 前文に意志を内包しない構文.....	85
3.4.2 自動詞構文と自動詞の可能構文.....	87
3.4.3 自動詞構文と他動詞の可能構文.....	89
3.4.4 自動詞構文と自発文の異同.....	90
3.4.5 同形語から見た可能構文の成立条件.....	93
3.4.5.1 グループⅠ(語形からみて自動詞と他動詞の可能形が同じであるもの).....	93
3.4.5.2 グループⅡ(自動詞の可能形と他動詞が同じであるもの).....	94
3.4.5.3 グループⅢ(自動詞・他動詞が同じであるもの).....	94
3.5 漢語サ変動詞の意味特徴と主体の相互作用について.....	94
3.5.1 グループ1.....	95
3.5.2 グループ2.....	95
3.5.3 グループ3.....	96
3.5.4 グループ4.....	96
3.6 日本語の可能構文における格構造の制約.....	97
3.6.1 他動詞の可能構文に関する構文類型.....	97
3.6.2 自動詞の可能構文に関する構文類型.....	99
3.6.3 自動詞構文に関する構文類型.....	100
3.7 まとめ.....	103
【注】.....	104

第4章 潜在可能構文と実現可能構文の視点から見た日本語可能表現..... 105

4.1 問題意識.....	105
4.2 先行研究.....	106
4.2.1 実現可能と潜在可能の定義.....	106
4.2.2 実現可能と潜在可能の分類に関する研究.....	106
4.2.2.1 鈴木重幸(1965).....	106
4.2.2.2 小矢野哲夫(1980).....	107
4.2.2.3 渋谷勝己(1993).....	108
4.2.3 実現可能の成立条件に関する研究.....	108

4.2.3.1 井島正博(1991)	108
4.2.3.2 高橋太郎(2005)	109
4.2.3.3 林青樺(2010)	110
4.3 本章の研究手法	111
4.3.1 本章の研究対象と目的	111
4.3.2 本章の研究手法	111
4.4 考察結果	112
4.4.1 文脈の背後において時間と切り離せる場合(S)	112
4.4.1.1 先天的能力	112
4.4.1.2 属性可能	113
4.4.1.3 評価可能	113
4.4.1.4 前提条件可能	114
4.4.1.5 許可	114
4.4.2 文脈の背後において時間と切り離せない場合(S')	114
4.4.2.1 (1)過去における事象	114
4.4.2.1.1 (A) -S ₁ (過去潜在可能)	115
4.4.2.1.2 (B) -S ₁ ' (過去実現可能)	115
4.4.2.2 (2)現在における事象	119
4.4.2.2.1 (A) -S ₂ (現在潜在可能)	119
4.4.2.2.2 (B) -S ₂ ' (現在実現可能)	119
4.4.2.3 (3)未来における事象	120
4.4.2.3.1 (A) -S ₃ (未来潜在可能)	121
4.4.2.3.2 (B) -S ₃ ' (未来実現可能)	121
4.4.3 実現可能の構文的特徴	122
4.4.3.1 文中に意図・意志を内包するもの	122
4.4.3.2 文中に意図・意志を内包しないもの	124
4.5 まとめ	125
【注】	125

第5章 日本語の非可能構文・可能構文と中国語の対応表現の考察 127

5.1 問題意識	127
5.2 先行研究	128
5.2.1 張旺熹(1999)	128
5.2.2 姚艳玲(2011)	130
5.2.3 吉田雅子(2011)	131
5.3 本章の研究手法	132
5.3.1 本章の研究対象と目的	132
5.3.2 本章の研究手法	133

5.4 可能構文・非可能構文と中国語の対応関係.....	134
5.4.1 日本語可能構文と中国語可能構文の対応表現.....	134
5.4.2 「可能」の解釈が可能な自動詞構文と中国語の対応表現.....	138
5.4.3 「可能」の意味合いが含まれない自動詞構文と中国語の対応表現.....	145
5.4.4 自動詞と他動詞の可能形が同形語である場合	146
5.5 漢語サ変動詞と中国語の対応関係.....	147
5.5.1 日中両言語の可能表現の「ズレ」	147
5.5.2 意志動詞と無意志動詞の視点からみた考察.....	150
5.6 まとめ.....	152
【注】	153

第6章 日本語の実現可能・潜在可能と中国語の対応表現の考察 154

6.1 問題意識.....	154
6.2 先行研究.....	155
6.2.1 「実現」に関する中国語の先行研究.....	155
6.2.1.1 朱徳熙(1984).....	155
6.2.1.2 劉月華(1989).....	156
6.2.1.3 相原茂(2005).....	157
6.2.2 実現可能の過去形肯定文・否定文に関する日中対照の先行研究.....	158
6.2.2.1 王学群(2008).....	158
6.2.2.2 姚艷玲(2008).....	159
6.2.2.3 馬俊栄(2009).....	159
6.2.2.4 問題点.....	160
6.3 本章の研究手法.....	161
6.3.1 本章の研究対象と目的.....	161
6.3.2 本章の研究手法.....	161
6.3.3 本章の考察資料.....	162
6.4 考察結果.....	162
6.4.1 潜在可能の「過去の「タ」形」と中国語の対応表現.....	163
6.4.1.1 「タ」形肯定文.....	163
6.4.1.2 「タ」形否定文.....	163
6.4.2 実現可能の「過去の「タ」形」と中国語の対応表現.....	164
6.4.2.1 「タ」形肯定文.....	165
6.4.2.2 「タ」形否定文.....	169
6.4.3 日本語実現可能に対する中国語可能表現使用の可否についての考察.....	176
6.4.3.1 肯定文の場合.....	176
6.4.3.2 否定文の場合.....	181
6.5 まとめ.....	186

【注】	189
第7章 結論	190
7.1 本研究の結論.....	190
7.2 本研究で明らかになったこと.....	191
7.3 残された問題点と展望.....	196
【注】	197
用例出典	198
参考文献	201
既発表論文と各章の関係.....	211
謝辞	212

【表目次】

第1章

【表1】 意味分類に関する先行研究の一覧表	15
【表2】 実現系可能と潜在系可能の分類	17
【表3】 『初めての日本語教育ハンドブック』による分類	18
【表4】 可能表現の分類	19
【表5】 主体と客体の視点からみた意味分類	20
【表6】 自発に関する先行研究の一覧表	22
【表7】 助動詞による可能の意味分類	31
【表8】 助動詞を用いる可能表現と補語を用いる可能表現の区別	33
【表9】 補語による可能の意味分類	35
【表10】 複合趨向補語	37

第2章

【表1】 <分類表>動詞例	45
【表2】 可能形との共起	46
【表3】 意味特徴	48
【表4】 自・他動詞の考察資料	50
【表5】 漢語サ変動詞の考察資料	50
【表6】 接辞付加の可否	52
【表7】 可能形の接辞を付加しにくい自動詞	53
【表8】 無対自動詞の意味素性	57
【表9】 有対自動詞の意味素性	58
【表10】 他動詞と可能形の接辞付加	59
【表11】 可能形の接辞を付加しにくい他動詞の意味素性	61
【表12】 自動詞の分類	62
【表13】 自・他動詞と可能形の対応関係	63
【表14】 自動詞と自動詞の場合	64
【表15】 他動詞と他動詞の場合	64
【表16】 漢語サ変動詞と「できる」「することができる」の共起	66
【表17】 「できる」(A)の使用率	69
【表18】 「漢語+できる」 \geq 「漢語+することができる」の比較表	70
【表19】 「漢語+できる」 \leq 「漢語+することができる」の比較表	70
【表20】 「することができる」(B)の使用率	71
【表21】 「する」を中心に考察した降順表	72
【表22】 漢語サ変動詞が「可能形式」を付加しにくい動詞分類	73

第3章

【表1】「可能形」の接辞を付加しにくい動詞分類	78
【表2】考察対象の動詞数(漢語サ変動詞)	81
【表3】同形語の語例	93
【表4】格構造の比較表	103

第4章

【表1】潜在可能と実現可能の再分類	112
【表2】時間軸上の潜在可能と実現可能	114
【表3】(1)過去についての可能表現の分類	115
【表4】(1)過去における「可能」が生じる事象	118
【表5】(2)現在についての可能表現の分類	119
【表6】(2)現在における「可能」が生じる事象	120
【表7】(3)未来についての可能表現の分類	120
【表8】(3)未来の潜在可能と実現可能の事象	122

第5章

【表1】日中品詞分類	131
【表2】中国語の可能表現	131
【表3】日本語可能構文と中国語可能構文の対応関係	135
【表4】日本語の「自発」が中国語との対応表現	136
【表5】同形語・非同形語の分類	148
【表6】「同形語」の品詞分類から日中両言語の対応	148
【表7】漢語サ変動詞の分類表	150

第6章

【表1】先行研究の対照表	160
【表2】実現可能と潜在可能の再分類	161
【表3】小説における日本語実現可能と中国語の対応表現	176
【表4】潜在可能・実現可能と中国語の対応表現	187
【表5】日本語実現可能の過去形肯定文・否定文と中国語の対応表現	188

【図目次】

序章

【図1】 意志性動作三要素の関係図(張威 1998)	4
----------------------------------	---

第1章

【図1】 可能形の語例	14
【図2】 主体性の強弱について	26
【図3】 補語の分類	35
【図4】 安本真弓(2006:88)による VC から VP への変換タイプ	36
【図5】 安本真弓(2006:88)による可能補語(VP)への「全変換可」の変換条件	36

第2章

【図1】 意志動詞と非意志動詞の分類	43
【図2】 自動詞の意味分類による意志性の強弱	56
【図3】 各グループの割合	68

第3章

【図1】 視点1の置き方	84
【図2】 可能の事象について	86
【図3】 自動詞構文の視点	88
【図4】 自動詞可能構文の視点	88
【図5】 事象と状態の関係図	89
【図6】 人間と動作の関係図	89
【図7】 主体と動作の関係図(1)	90
【図8】 主体と動作の関係図(2)	90
【図9】 主体と動作の変化	93

第4章

【図1】 井島正博(1991:167)	109
【図2】 林青樺(2010:95)	110

第5章

【図1】 姚艳玲(2011:309)	130
--------------------------	-----

第6章

【図1】 中国語の対応表現の使用率表	164
【図2】 小説からの対応表現の使用率	169

【図3】可能表現における対応表現の使用率	172
【図4】張旺熹(1999)の分類による「V不C」構文の分析	173
【図5】置き換えの対応関係図	181
【図6】非可能表現と「未能/没能+V+(C/D)」の対応関係図	186
【図7】非可能表現と「可能補語(V不C)」の対応関係図	186
【図8】非可能表現と「不能+V+(C/D)」の対応関係図	186

第7章

【図1】成立条件に関わる要素の関係図	191
【図2】日中両言語の実現可能の対応関係	196

凡 例

本研究では、許容度の判定を示す記号を下記のように用例の冒頭に用いる。

- ? 用例がやや不自然であることを表す。
- ?? 用例がかなり不自然であることを表す。
- * 用例が完全に不自然に感じ、非文であることを表す。
- # 当該文脈では成立しないが、他の文脈では成立する。
- [一/一] その用例の該当部分では言い換えができることを表す。
- △ 非意志動詞であるが、人間の働きかけと切り離せない有対自動詞であることを表す。
(第2章)
- φ 可能形が対応していないことを表す。(第2章)
- 存在していないことを示す。(第2章)
- 「○」は置き換えができる関係を表す。(第6章)
- 「×」は全く置き換えができない関係を表す。(第6章)
- 「▲」は難しいが、たまに置き換えができる関係を表す。(第6章)

また、用例中の下線部分はその例文で取り上げる形式であることを示す。()で副詞やほかの文脈成分を提示する。

用例については、論文の中で出典の作品名を()で示し、全て略称で示す。出典を明記しないものは筆者の作例による。なお、翻訳については複数の中国語母語話者に確認を行った。

本研究で使用している略記号を下記のように示す。(『世界民族言語地図』p. vi を参考にした)

- S → 主語
- O → 目的語
- V → 動詞
- C → 結果補語
- VC → 動詞—結果補語
- P → 可能補語
- VP → 動詞—可能補語
- D → 趨向補語
- VD → 動詞—趨向補語
- A → 形容詞

序 章

本研究は可能という事象に潜むさまざまな意志性、非意志性、およびそれが成立する本質、条件を検討するものであるが、そもそも〈可能とは何か〉、という原初的な問題を考えていくことにしたい。我々の日常周辺を瞥見してみただけでも、可能という事象が多岐に現れ、用いられていることがあらためて了解される。

- (1) 惨憺たる中東の「現実」。日本は少なくとも傍観できる立場にない。
(朝日新聞 2015. 10. 11)
- (2) まちがいから教訓を引き出せなければ、怪しげなものうえに怪しげなものを積み上げることになります。
(同上)
- (3) 議論がふわふわといくつも超現実的な「事態」の間をさまよったのは、武力行使がもたらしうる「現実」に真正面から向き合わないままだからではないか。
(同上)
- (4) 肉も魚も値段をよく見てからでないと、おいそれとかごには入れられない。
(同上)

日常の言語生活を振り返ってみただけでも、可能という事象をとらえる視点なり観点なり、言語形式がなければコミュニケーションにも大きな支障をもたらすことは明らかであろう。しかし、繰り返すように、〈可能とは何か〉から〈なぜ可能か〉にいたる命題には多くの検討すべき問題が内包されている。その1つが本研究で扱う可能構文の成立条件に関する研究である。

ここでいう可能構文とは可能を表す、または可能にまつわる様々な可能表現の形式・構文を指す。一般に動詞の原形に「コトガデキル」が後接したもの、動詞の語幹に「レル・ラレル」がついた、いわゆる可能動詞（「食べラレル」「書ケル」「修理（ガ）デキル」）、またこれらの周辺に多様な可能表現、たとえば動詞の連用形に「得ル（ウル・エル）／得ナイ（エナイ）」が後接したものの、補文を必要とする「（の）ガ可能ダ」、また許容の「テモイイ」、さらに不可能表現をめぐる形式・構文には「ワケニハイカナイ」、「ヨウガナイ」、婉曲な不可能「カネル」、不許可の「テハイケナイ」、難易文「ニクイ」なども分布する。可能構文を広くとらえた場合、こうした諸形式の体系的把握がもとめられるが、本研究であつかうのは、一般に可能動詞とされるものの成立をめぐる諸問題である。言い換えれば可能動詞の成立条件であり、そこは動詞本来がもつところの意味現象と深く関わっている。

一般に可能表現が成立するのは意志性を持つ動詞の場合とされる。しかし、この定義に当てはまらない場合も存在している。本研究では下記の2つの問題点について解明したい。

ア. (5a)、(6a)のように文法上は「可能」の意味合いを含まないはずの自動詞構文が、なぜ「可能」のニュアンスを持ち得るのか。

- (5)a. 本棚が高くて手が届かない。
b. ?本棚が高くて手が届けない。
- (6)a. スピードが速くて止まらない。
b. スピードが速くて止まれない。

イ。(7a)のような場合の実現可能構文においてはなぜ「可能・可能性」のニュアンスが薄くなると思われるのか。すなわち実現可能構文の成立条件としては何があるのか。

- (7)a. 先生のおかげで論文が書けた。
- b. 先生のおかげで論文を書いた。

この2つの点を解決することが可能表現をより一層深く理解するアプローチとなることが考えられる。

また、本研究では、日本語の可能構文に見られる言語構造上の異同を対照言語学の見地から論じる。日本語と中国語は類型論的にも大きく異なる。本研究では例文(5)(6)(7)のような構文を取り上げ、日中両言語の相違点を考察する。同一の出来事を表そうとした場合、それぞれの言語における可能構文はおのずと用法が異なってくるが、その違いを関連分野における先行研究の知見を活かしながら考察するのが本研究の目的である。

1. 本研究の背景

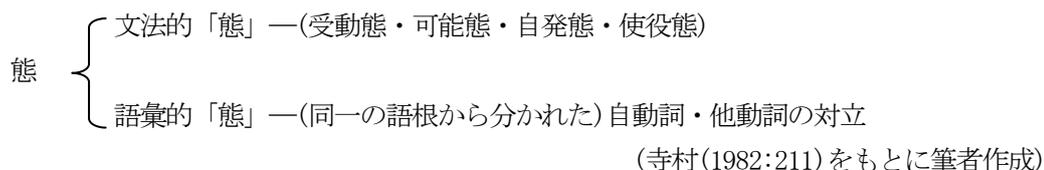
〈可能〉は〈受身〉、〈使役〉、〈授受〉などとともにヴォイス（態）の一種である。ヴォイス現象に共通して見られる視点、立場という認識、また「出来」という現象の出現という本質のほか、〈可能〉には他のヴォイスには見られない本質的特徴があるように思われる。

可能構文は可能を明示する構文形式であるが、その射程は研究する者の立場からいくつかの異同が生じる。そもそもヴォイスとは何か、という観点を明らかにしておこう。

寺村(1982)は、ヴォイスについて「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と述べている。

村木(1991)は、「ヴォイスというのは、何に視点をおいて表現するかという文の機能意味構造にもとづく統語論的な側面と、述語になる動詞がどのような形態をとるかという動詞の形態論的な側面の相互関係の体系であるといえる」と述べている。

本研究は基本的には上に挙げた寺村(1982)と村木(1991)を踏まえて、分析していく。ヴォイスの範疇には、受動態、使役態、可能態、自発態と自・他の対応等の諸形態を含めて考える。寺村(1982)はヴォイスの範疇を「文法的な態」と「語彙的な態」に分け、「態」の枠組みを次のように挙げている。



どのような形態的なタイプで人、物、ことに関わる事象の成立を表すのか、文脈から形態的、

構文的、意味的な相互関係を考えることが不可欠である。

- (8) 悪い言葉づかいを改める。 (《日動》)
- (9) なかなか悪い言葉づかいが改められない。
- (10) 悪い言葉づかいがなかなか改まらない。
- (11) * 悪い言葉づかいがなかなか改められない。

例文(8)は他動詞構文の動作主である人間に視点を置き、意志性が強い文である。例文(9)の可能構文の主語は「改める」の対象語で非情物である。視点が人間に置かれる場合には人間の「能力的に不可能であることを表す。「改める」に対応している自動詞「改まる」で表す例文(10)は例文(9)の格構造と同じであるが、視点が「悪い言葉づかい」に置かれる。しかし、例文(10)に対して、例文(11)の「改められない」で表すと不自然になり、可能構文としては成立しない。例文(9)と例文(10)は語彙的「態」から見ると、話し手の視点が異なり、事象の状態も異なっている。また、構文上に意志性が弱い文もある。例文(12)は自然発生の回避、例文(13a)は自然発生事象であるが、(13b)のように人為的な結果にもなり得る。

- (12) 解けないように紐をしっかりと結んだ。
- (13)a. 上着のボタンが(いつの間にか) 取れた。
- b. 強く引っ張られて上着のボタンが取れてしまった。

例文(12)の自動詞構文は話し手が「紐」に視点をおき、自然な事象を表している。また、例文(13a)も同じく、古い服を着ているときに、自然に発生している事象であれば、自発態の意味合いを表していると思われる。

このように寺村の分類では対応して文法の立場と語彙の立場から文法的な「態」と語彙的「態」に分けることができるが、両者は相関関係にあり、語彙的「態」が文脈上に置かれれば、文法的な「態」の意味合いも現れると考えられる。例文(10)の自動詞構文を言い換えれば、例文(11)の言い方になるはずだが、実際には例文(11)の場合、可能態を用いた可能形は「不自然」という制限が生じるために使用することができない。形態上は可能形が制限されるが、意味上から日本語の「可能」の意味合いが含まれると推測される。

さて、例文(10)のように可能構文の成立を満たす日本語の可能表現は日本語の「可能」を表すことができるが、例文(11)のように「語形」の成立条件が欠けている場合は「可能」を表すことができない。だが、もし例文(10)のように「可能」の意味合いが文脈の背景に潜んでいるような場合には、「可能」の含意がどのように生じるのかという疑問が浮かび上がる。張威(1998)はこのような文を「結果可能表現」と名付け、文脈の意味要素から分析し、〈意志性動作三要素〉と結果可能表現の関係性について述べている。下記の関係図では〈意志性動作三要素〉と結果可能表現が「可能」を表す根拠を示している。

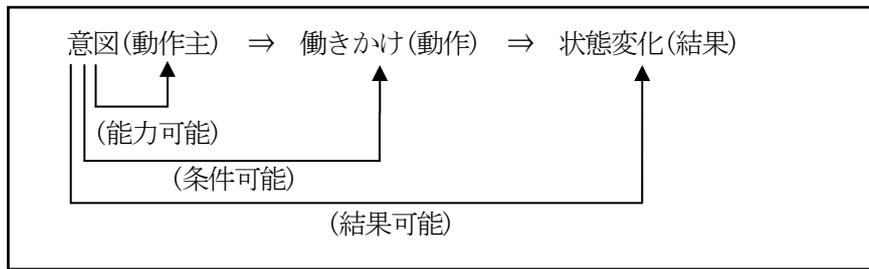


図1: 〈コト内部の可能〉意志性動作三要素の関係図(張威 1998:255)

張威が主張している「結果可能表現」は主に有対自動詞についてであるが、筆者の考察では無対自動詞にも存在する。次の通りである。

- (14) この刀は水につけても錆びない。
- (15) この子はどんなに食べさせても太らない。

「錆びる」が無対自動詞であるが、例文(14)の中で「水につける」動作があったとしても無対自動詞の実現は不可能であったことを表している。また、例文(15)も人間の働きかけがあったが、動詞「太る」は実現されなかったことを表す。このように、文脈から「可能」の意味合いを汲み取ることができる。一方、人間の働きかけが読み取れない場合の自動詞についてはこの〈意志性動作三要素〉とは異なっており、状態変化を表し、非情物の主語の属性を表す。

- (16) 水が冷たすぎて、春雨が戻らない。
- (17) 寒くなると、油は固まります。 (《日動》:82)

例文(16)は物理的な事象を述べており、春雨の状態を表している。例文(17)も同じである。例文(14)～(17)は自動詞構文であるが、文脈から「可能」の含意が生じる場合と生じにくい場合がある。もし前者であれば、可能構文とどう違うのか、可能構文の成立に関わる要素と環境にどのような関連性が存在しているのかを考察する必要があると思われる。そこで、本研究は例文(14)のように「可能」の含意が生じる自動詞構文に対しては、形態上は可能形ではないことから、可能構文と区別しておき、自動詞構文の意味合いから文法的な「可能態」との関わりを探る。

ここまではヴォイスの範疇から自動詞と「可能態」の関係性を見てきた。さらに上記の例文を振り返って、可能表現が成立しない要因はどこにあるのかを考えてみる。

- (11) *悪い言葉づかいがなかなか改まらない。 (再掲)
- (18) ??(本を取ろうとして父と話す場面)本棚が高く手が届かないよ。
- (19) ?人は一生に一度いやな人に出会うことができる。 (渋谷 1993:1)
- (20) ?優勝すれば喜ぶことができる。

例文(11)、例文(18)、例文(19)、例文(20)の可能構文が成立しない要因はそれぞれである。例文(11)は可能形の接辞を付加しにくいいため、可能構文が不自然である。例文(18)の「届く」の可能形は「届ける」であるが、「届かない」の使用例が多い。例文(19)については望みに反する内容であるため、可能構文が成立しない。例文(20)は文脈の内容から鑑みて合理性に欠けるし、また「喜ぶ」は可能形を付加しにくい動詞である。以上の分析から分かるように可能構文を分析する際には、成立条件について考えなければならない。

また、アスペクトの点から可能構文は「潜在可能構文」と「実現可能構文」に分けられ、「実現可能構文」が時間軸上に局在する可能表現であり、事象の実現を表す。例文(21)が「実現可能構文」である。例文(21)の「実現」を表す用法と類似している例文(22)は「可能」との接点がどこにあるのかを考える必要がある。

- (21) この字は一生懸命消そうとしたけれど消せなかった。
- (22) (本を取ろうとして父と話す場面)本棚が高くて手が届かないよ。

例文(21)は主体の意志性が強く、「消そうとしたけれども」「消す」動詞が実現できなかったことを表す。「消そうにも消せない」「消したくても消せない」「消すに消せない」といった同一動詞の反復現象も見られる。例文(21)は自動詞構文と比較した場合、性質上「実現」と「結果」の区別が付きにくい、「可能」の意味合いが生じることに對して何らかの接点があるのではないかと推測される。

ここまで、ヴォイスと日本語の可能構文の内容について論じた。ここからは、日中対照研究を踏まえ、日本語の「可能」を表す非可能構文に対する中国語の対応表現がどのようなものであるか見ていくこととする。

以上の「可能」を表す自動詞構文と「実現」を表す実現可能構文に関して、中国語の表現では可能表現に對するものもあれば、對応しないものもある。

- (23)a. 開けようとしても開かない。
- b. 想打开也打不开。

例文(23a)は人間の参与があり、「可能」の意味合いが含まれる自動詞構文である。「開かない」に對する中国語文の「打不开」は可能補語である。日本語文との「ズレ」が存在していると考えられる。

また、日本語の可能表現の中の「潜在可能¹⁾」(例文 24)「被動作の可能性」(例文 25)に對して、中国語ではいずれも可能表現を用いる。

- (24)a. 僕にはそんな難しい問題は解けない。 (庵 2000:85)
- b. 我解不开那么难的题。
- (25)a. あの蛙は食べられます。 (庵 2000:86)
- b. 这只青蛙能吃。

しかしながら、日本語の実現可能構文に対して、中国語の対応表現が可能表現ではない場合がある。

- (26) a. 一晩かかってレポートがやっと書けた。 (庵 2000:86)
b. 用了一个晚上终于写完了。

中国語では、例文(26b)のように「結果補語²⁾」を用いて表す。同時にこの表現上の違いは場合によって区別できる可能性がある。具体的には例文(27)のようなものである。

- (27) a. この字は一生懸命消そうとしたけれど消せなかった。 (『ネ』)
b. 这个字我涂了半天也没涂掉。 (『ネ』)
c. 这个字我涂了半天也涂不掉。

例文(27b)のように「結果補語」を用いても例文(27c)のように「可能補語³⁾」で対応しても自然である。日本語文の例文(26a) (27a)に対して中国語の対応表現は非可能構文で表すことができる。日本語の可能構文と中国語の対応表現から見るに、日中両言語の可能表現には使用上「ズレ」が存在していると推測される。

日中両言語の可能表現にはどのような「ズレ」があるのかを明らかにする。日本語の可能構文について、中国語との対応関係を通して分析してみる。

2. 本研究の目的と位置づけ

本論文では、下記の問題点を中心に考察し、日本語の「可能」そのものの意味の特質と日中両言語の可能表現の対応表現を解明するために分析する。

- ア) 可能構文の成立条件から日本語の「可能」を表す場合、可能形が用いられる。しかし、可能の接辞を付加しにくい自動詞は文脈により日本語の「可能」の意味合いが生じる場合がある。可能構文の成立条件について、自動詞構文で日本語の「可能」が含意される場合がなぜ生じるのかを調べる。中国語の可能表現と比較してどういう「ズレ」があるのかを考察する。
- イ) 漢語サ変動詞も自・他動詞があり、可能形と共起しやすい場合と共起しにくい場合がある。日本語も中国語も漢語が存在しているため、可能表現の使用上にどういう「ズレ」があるのかを考察する。
- ウ) 過去という抽象的な時間軸上に「実現」を表す場合、日本語では実現可能が使われるが、中国語では可能表現を使用する場合、「過去」「現在」「未来」における制限がある。日本語の可能表現を中国語に翻訳する時は表現上の「ズレ」が生じるため、本研究では、例文(27)のような可能表現の「ズレ」が生じる理由と日中両言語における「可能」そのものの意味の性質を日中両言語の対応表現の相違点から探ってみる。

3. 本研究で用いる用語

次に本研究で用いる用語について、若干の説明を加える。可能表現の成立に関する先行研究の中で「可能態」「可能構文」「可能表現」「主体」というキーワードがよく現れる。本研究では非可能表現がなぜ「可能」の意味合いが生じるのかを考察目的とするため、これらのキーワードは非可能表現が「可能」の意味合いを含意する場合としない場合の記述にあたってよく使われる用語となる。従って、これらのキーワードの概念を次のように明確に示す。

可能態

藤井(1971:124)によると、「可能とは動詞の相の一つ。勢相とも。「有情物(人またはその他の動物)が動詞によって表わされる動作をする可能性を有する」の意を表す。動詞がこの相をとったものが「可能態」(または「可能相」)である。

高橋(1985:104)は、ヴォイス(voice、たちは、態、相)は述語動詞のさししめず動作をめぐる、主体・対象などの動作メンバーと、主語・補語(対象語・目的語)などの文メンバーとの関係に関わる文法的なカテゴリーであると述べている。

本論文では主体の視点、客体の視点から意味分類を行うため、高橋の概念に従う。

可能構文

日本語記述文法研究会(2009:277)は可能構文について次のように述べている

可能構文とは、能動主体が意志的な動作を行おうとするとき、その動作の実現が可能か不可能かを述べるものである。

可能構文の述語は、Ⅰ型動詞では「-e-ru」、Ⅱ型動詞では「-rare-ru」という接辞を付加して作られる。「できる」によって表されることもある。

可能構文は、対応する能動文の動詞が他動詞の場合、[が、を][が、が][に、が]の3種類の文型をとる。

可能構文の意味・用法は、動作の実現が可能・不可能である条件や理由によって、能力可能と状況可能に分けられる。また動作の実現までを含めて言うかどうかによって、潜在可能と実現可能に分けられる。

本研究では上記の概念を踏まえて考察する。

可能表現

日本語の可能表現の定義について多くの研究者が述べている。例えば、藤井(1971)、岩淵(1972)、森田(1977)、青木(1980)、金子(1981)、生田(1982)、寺村(1982)、渋谷(1986)等々がある。研究者の立場によって定義の仕方も異なるが、本研究では、渋谷(1986)の定義をもとにして考察する。渋谷(1986)は「有情物・非情物の動作(状態)の実現の(不)可能性を表す表現」であるとする。

中国語の文法にも「可能」を表す表現があり、劉月華(1996:147)では「可能性を表すもの」である「可能」「会」「要」「得」「能」を取り上げ、助動詞(あるいは能願動詞)と呼び、助動詞の意味特徴を論じている。また、「可能・可能性」を表す可能補語の意味特徴についても分析している。中国語では一般的に「助動詞」からなる可能表現と補語からなる可能表現が存在している。本論文では劉月華の分類に従って分析する。

主体⁴⁾

で鈴木(1971:320)は「主体」について次のように述べている(『日本語文法大辞典』)。

言語過程説でいう言語の成立条件の一つ。言語が人間行為の一つであり、音声・文字による思想伝達の形式であることは、表現の主体(話して・書き手)、理解の主体(聞き手・読み手)を予想することであって、このような主体は言語成立の不可欠の条件として、主体・場面・素材が考えられ、聞き手・素材があげられるようになった。主体に対立するのが客体である。

高橋太郎(2003:9)は客体である対象について、主体との関係を次のような用例を提示しながら、「ウゴキが、ヒトやモノにはたらきかけるウゴキであるときには、し手のほかに、はたらきかけのうけ手が、文のあらわすコトガラの要素になる。はたらきかけのうけ手は、「対象」であるという。

- ア) 太郎が 次郎を なぐった。 主体と対象とウゴキ
- イ) 弟が 自転車を なおしている。 主体と対象とウゴキ

ア)とイ)は主体と対象の関係が明らかである。主語が人間であるが、対象語がない場合もある。

- (28) 私は中国語が話せる。
- (29) 花子が死んだ。

例文(28)の主体は「私」であるが、対象が存在しない。例文(29)の場合も同じである。「死ぬ」は意味特徴から対象語がない動詞である。次の例では主語が明示されていないが、事象から主体は人間であることがわかる。主語が非情物であるが、動詞の意味合いから主体の存在が浮かび上がる。

- (30) この魚は食べられる。
- (31) このお酒は飲めない。

「この魚」「このお酒」は対象であるため、主体がなくても人間の働きかけが存在している。主体は動作を行う者であるため、動作主とも呼ばれる。一般的には有情物の働きであり、意志動

詞がよく使われる。

4. 本論文の構成

本論文は全7章から構成される。第1章は日中両言語の可能表現を概観する。第2章から第4章は日本語の可能構文の成立をめぐる研究の目的を解明するための分析である。第5章と第6章は第2章から第4章の考察結果を踏まえ、日中対照研究の立場から日中両言語の対応表現を考察する。

第1章では、意味分類を主体と客体の視点から再分類し、日本語の可能構文の意味特徴を見る。可能構文の成立条件に含まれている「語形」「動詞の意味特徴」「格構造」に触れ、「動詞の意味特徴」に影響を与えている要素である「意志性」「主体性」「命題内容」を分析する。また、中国語の可能表現の語形と意味分類を概観してから中国語の可能表現の成立条件と特徴を見る。

第2章では、可能構文の成立条件として可能形の有無が問われるため、自・他動詞と漢語サ変動詞について可能形接辞の付加が可能か否かについて考察する。可能形を付加しにくいものと可能形を付加しやすい自・他動詞の統計を取り、可能形を付加しにくい動詞の意味分類を試みる。漢語サ変動詞に対しても可能形と共起しやすいものと共起しにくいものを考察し、日本語可能構文の成立条件が漢語サ変動詞構文へ与える影響を分析してみる。さらに、漢語サ変動詞の可能形である「できる」と「ことができる」についての使用状況を調べ、両者を全く使用しない動詞が文脈の中で「可能」を含意する場合が存在するのかを考察してみる。日本語の動詞の意味特徴から動詞の内実を分析し、可能形を付加しにくい要因を解明する。

第3章では、前章の考察を踏まえ、さらに可能形の接辞を付加しにくいものに対して、文脈の中で主体性と動詞の意味特徴の相互関係が「可能」の意味合いにどのような影響を与えているのかを考える。どのような文脈の環境で日本語の「可能」が生じやすいのかを解明する。そして、可能形の接辞を付加しにくい自動詞構文に「可能」の意味合いを含む場合は自動詞の可能構文、他動詞の可能構文、自発文との意味特徴とどう違うのかを分析し、非可能構文が「可能」を含意する場合の性質を探り出す。

第4章では、過去・現在・未来という時間軸上において実現可能と潜在可能の事象を分析する。意志性がない文脈の中で、実現可能構文が「実現」を表す事象の成立について追及する。

第5章では、日中対照研究の立場から第3章の日本語の言語現象を中心に分析する。日本語の非可能構文が「可能」を含意する場合に対して、中国語の対応表現は何があるのかを考察する。

第6章は第4章の考察を踏まえ、日本語の可能表現構文に対して中国語の対応表現とどのような対応関係があるのかを分析する。さらに、日本語の可能表現と中国語の可能表現の使用上にどのような「ズレ」が存在しているのかを明らかにする。

第7章では、本論文の結論を整理し、まだ残されている問題点を挙げ、説明する。また、中国語と日本語の可能表現に関する今後の新たな研究課題を取り上げる。

【注】

- 1) 潜在可能: アスペクトの点から可能表現を「潜在可能」と「実現可能」に分けることができる。本論文の第4章で取り上げる。
- 2) 結果補語: 動作または変化によって生じた結果を表す場合には、動詞および形容詞が結果補語になる。劉月華(1996:447)
- 3) 可能補語: 結果補語の真ん中に“得/不”を入れて、その動作の可能/不可能を表す。安本(2008)では、「現実世界を基盤とする想像空間において、話し手がある種の推測をする。すなわち動作主がある動作をし、一定の条件下では、ある結果の出現が可能であるか否かという推測である」と述べている。
- 4) 主体と動作主という用語は先行文献によって異なる。森山(1988)では「主体」という用語を使用しているが、渋谷(1993)では「動作主」を用いている。本研究では森山の主体性を参考に行っているため、森山の考え方に従う。

第1章 日本語と中国語における可能表現の概観

本章では「可能」を表す事象について日本語と中国語の可能表現を概観する。特に、日中両言語の可能表現の用法でどのような成立条件が存在しているのかを分析する。日本語の可能形で日本語の「可能」を表す可能構文についてどのような意味分類があるのかに触れてみる。先行研究の意味分類を踏まえて主体と客体の視点から再分類する。また、可能構文の成立に関わっている意志性、動詞の意味特徴と格構造などの成立条件の要素について可能構文への制限を考えてみる。それから、日本語可能表現の概観と同じく中国語可能表現の可能形と中国語可能表現の意味分類を概観する。また、中国語の可能表現の成立条件の要素を取り上げて可能構文の成立への制限を考察する。以下の節では日本語の語形、意味分類と可能表現の成立条件を述べてから、中国語の可能表現を見ていく。

1.1 可能とは

そもそも日本語の「可能」とは何か？この疑問については様々な定義がある。年代順で取り上げ、次の通りである。

藤井正(1971:124)

「動詞の相の一つ。勢相とも。有情物(人またはその他の動物)が動詞によって表される動作をする可能性を有する」の意を表す。

金子尚一(1981:103)

ウゴキの実現(可能的なもの(可能性)の実現化)のための能力の、主体における存在、あるいは、その能力にもとづくウゴキの実現に関する問題をあつかう可能の形式・可能表現を意味的側面からなづけて、ひとまとめに能力可能とよんでおく。

青木玲子(1980:169)

動作主体がある動作を、実現する力を有すること、又ある状態になる見込があることである。

寺村秀夫(1982:255)

あるものが、何ごとかをする状態にある、または、そのことをする能力がある、ということを表す。

渋谷勝己(1993:1)

有情物・非情物の動作(状態)の実現の(不)可能(性)を表す表現

張威(1998:28)

可能の意味を論ずる場合、動作主の能力や動作の実現を可能の意味を規定する基準とすることが一般的である。

尾上圭介(1998:93)

狭く定義すれば、動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する。

森田良行(2007:45)

可能とは、当事者がその主体や対象に望み期待するという意志的な働きかけと、それに応え得るか否かの問題で、主体や対象自体が本来有している属性そのものではない。期待した状況に対応することへの評価として肯定と判定すれば〈可能〉、否定ととらえれば〈不可能〉ないしは〈困難〉と理解する。

これらの先行研究では〈可能〉について定義をしているが、「可能の事象」についてさまざまな角度から〈可能〉を見て、主に「可能」「実現」、「潜在(系)可能」「実現(系)可能」などの観点から考察されている。

1.2 日本語の可能表現と成立条件

1.2.1 語形

可能形式については使用されている名称のバリエーションがある。可能表現に対して、奥田靖雄(1986)、小矢野哲夫(1979)、渋谷勝己(1993)、張威(1998)などの研究があり、可能表現の形式と意味に関しては様々である。渋谷勝己(1993:4)は可能表現の形式と意味について「形式優先型」と「意味優先型」に分けている。さらに、「意味優先型」に対して、現代標準語を対象とするものと各地の方言を対照するものの2つに下位区分している。この現代標準語を対象とする「意味優先型」に当たる研究には、小矢野哲夫(1979・1980・1982)、奥田(1986・1998)、尾上(1998・1999)などがある。本論文もこの「意味優先型」の可能表現を対象とする。現代標準語の中で、可能の意味を表す形式には次のものがある。

- | | |
|--------------------|------------|
| (A) 可能動詞 | 例:読める |
| (B) 「られる」の付加 | 例:着られる |
| (C) 「できる」形の付加 | |
| 「できる」の付加 | 例:納得できる |
| 「ことができる」の付加 | 例:読むことができる |
| 「にできる」の付加(名詞+にできる) | 例:非公開にできる |
| 名詞+ができる | 例:踊りができる |
| (D) 語彙レベルでの可能 | 例:信じ得る |

(A)と(B)については、五段動詞、一段動詞、カ変動詞が標準的な形式とみなされる。また(C)については、本論文では「研究する」から作られる「研究できる」「研究することができる」のような漢語サ変動詞を対象として考察するため、「名詞+にできる」と「名詞+ができる」は対象外とする。(D)も「語彙レベルでの可能」であるため、対象外とする。

本論文では一段動詞、五段動詞、カ変、サ変という名称を用いて、可能表現の可能形をめぐって分析する。次のような可能形式を可能形とし、可能形で日本語の「可能」を表現する構文を可能構文とする。

1.可能動詞 2.-(ら)れる	語例 →	サ変	カ変	下二段	上二段	五段	形式
		練習する	来る	出る	着る	読む	原形
						読める	可能動詞
			来られる	出られる	着られる		＋られる

} 可能形 (本論文)

3.-できる 4.-ことができる	語例 →	サ変	カ変	下二段	上二段	五段	形式
		練習する	来る	出る	着る	読む	原形
		練習できる					＋できる
		練習することができる	来ることができる	出ることができる	着ることができる	読むことができる	＋ことができる

} 可能形 (本論文)

【図1】可能形の語例

1.2.2 意味分類の先行研究

日本語の可能構文の意味・用法について、様々の視点から分析されている。格構造の視点から「可能被動」「価値被動」に分けるものもあれば、アスペクトの視点から「潜在系可能」「実現系可能」に分けるものもある。過去形と現在形から日本語の可能表現を分析する場合もある。意味分類に関する先行研究を以下のようにまとめた。

【表1】意味分類に関する先行研究の一覧表

松下大三郎(1930)			佐久間鼎(1936)			金田一晴彦(1957)			鈴木重幸(1965)		寺村秀夫(1982)		小矢野哲夫(1979)			渋谷勝口(1993)							
可能被動	価値被動	自然被動	可能被動	価値被動	自動詞・可能動詞	自発	自然可能態	中相態	運動の実現	可能性	受動的可能表現	能動的可能表現	許可	性能	能力	可能性	実現	自発	遂行可能	認識可能	外的条件	内的条件	能力可能

先行研究で格構造の立場とアスペクトの立場から日本語の「可能」についてどのように分類されているのかをこれから見ていく。

1.2.2.1 格構造による意味分類

松下(1930:170)では、可能表現を「可能被動」と「価値被動」に分けて述べている。自発は「自然被動」¹⁾であると主張している。寺村(1982:259)では「能動的可能表現」と「受動的可能表現」という分類が提示されている。

- | | |
|-----------------------------------|--------------|
| (1) 此の酒は私にも <u>飲める</u> 。(可能被動) | 松下(1930:167) |
| (2) 此の酒は誰にも <u>飲める</u> 。(価値被動) | (同上) |
| (3) 子どもの行く末が <u>案じられる</u> 。(自然被動) | 松下(1930:168) |
| (4) 泣くまいと思っても <u>泣ける</u> 。(自然被動) | (同上) |

例文(1)は動詞「飲む」能力があるかどうかという意味があって、動作主である私が飲めば、その能力があると強調している。しかし、例文(2)の場合には動詞「飲む」能力を問われることではなく、「この酒」の性質に重点が置かれ、誰でもこの酒が飲めるという意味を強調している。お酒の価値を述べている。格構造の分析から主語が「酒」で、「価値被動」である。また、例文(3)について、松下は「自然の被動には被動の客語がない。右の例の『案じられる』は事柄は「私に

案じられる」であっても『私に』は用ゐない。それは『私』は無意志であるから原動の主体即ち被動の客体としては注意されないのである。」と述べている。例文(4)も一緒に取り上げ、自分の意志に関わりなく、自然に泣き出したことを指す。渋谷(1993:28)では「動作主体の外的強制条件」と呼び、例文(5)の可能表現の使い方と同じである。

(5) お酒を見ると、ついつい飲めてしまう。(主体の性格) 渋谷(1993:28)

渋谷は、時に主体内部の条件が関与することがあるが、その動作の実現は、主体の意志と関わりがなく、あるいはそれに逆らって実現するといった意味合いが強いと分析している。

高橋太郎(2005:104)では、例文(3)(4)を異なるものに分類している。例(3)を「おもえる」型とし、例(4)を「意図しなかった、こころの動きの実現(自発)」と言う。「おもえる」型も自発に属する。

(6) このまえ、あったくろいセーターの男の子が懐かしく思われてしかたがない。 高橋(2005:104)

(7) はなしを聞いているうちになけてきて仕方がなかった。(同上)

そして、金田一(1957)では自発を「泣ける」というような「自然可能態(自発)」と「知られる、偲ばれる」を「自然受動態」に分けている。

さらに、佐久間(1936)では、「自然被動」を自動詞または可能動詞に分類している。

(8) ちょっと触ったら、ハンドルがとれた。 佐久間(1936)

例(8)の自動詞「とれる」が意志もなく、その事実を表している。自動詞と自発との区別については第2章で分析したい。

1.2.2.2 アスペクトによる意味分類

アスペクトの視点から、渋谷(1993:14)は可能表現を「潜在系の可能」と「実現系の可能」に分類し、様々な条件について、「能力条件可能」「心情条件可能」「内的条件可能」「外的条件可能」に細分類した。

【表2】実現系可能と潜在系可能の分類²⁾

A. 実現系の可能 I 条件可能 i 心情可能(例9) ii 能力可能(例10) iii 内的条件可能(例11) iv 外的条件可能(例12) v 外的強制条件可能(自発)(例13) II 結果可能(例14)	B. 潜在系の可能 条件可能のみ i 心情可能(例15) ii 能力可能(例16) iii 内的条件可能(例17) iv 外的条件可能(例18) v 外的強制条件可能(自発)(例19)
---	--

(渋谷 1993:30)

実現系可能に関して言えば、「実現可能は一回的(あるいは反復的)な動き」について述べるものである。

- (9) 恥ずかしくて結局彼女に話しかけられなかった。(心情) (渋谷 1993:29)
- (10) 日本選手団は実力の差が出てアメリカに勝つことができなかった。(能力) (渋谷 1993:29)
- (11) その日は体の調子が悪くて会議に出席できなかった。(内的条件) (渋谷 1993:29)
- (12) その日は忙しくて結局会議に出席できなかった。(外的条件) (渋谷 1993:29)
- (13) あいつが結婚するなんて考えただけで笑えてしまった。(自発) (渋谷 1993:29)
- (14) (今まで泳げなかったのが泳げるようになって)泳げた!(結果可能) (渋谷 1993:29)

例文(9)は「恥ずかしい」ことにより、心理的な原因で実現しなかった。例文(10)は日本選手団の能力の可能性を実現しなかったことを表す。例文(11)は「体の調子が悪い」という内的な原因で実現しなかったことを表す。例文(12)は会議に出席する予定であったが、忙しくて行けないという一時的な実現ができなかったことを表す。例文(13)は思わず「笑った」ことが自ら発生した事象を表す。例文(14)は達成したことを表し、実現した結果である。例文(9)～(12)については日本語の「可能」を表す条件可能であるが、例文(13)と例文(14)は例文(9)～例文(12)の性質と異なって、例文(13)は意志性が弱く発生したことを表す。例文(14)は実現した結果を表すため、再分類する必要があると考えられる。

潜在系可能にも渋谷(1993:14)の分類は適用できると述べ、次の例を挙げている。

- (15) 夜のお墓なんか、こわくてとても行けない。(心情) (渋谷 1993:27)
- (16) ぼくは体が弱いから長くは出歩けない。(能力) (渋谷 1993:27)
- (17) 今は足に怪我をしているからジョギングはできない。(内的条件) (渋谷 1993:27)
- (18) 今日の午前中は別の用事があるからその会合には出席できない。(外的条件) (渋谷 1993:27)
- (19) あの山をみるといつも故郷のことが思い出される。(自発) (渋谷 1993:27)

例文(15)は心理状態の原因で可能性がないことを表す。例文(16)は体質の理由で能力可能を表す。例文(17)も例文(16)と同じで体の原因で不可能なことを表すが、一時的な不可能である。例文(18)が外部の理由で不可能なことを表す。例文(18)も「今」「今日」という時間詞があり、一時的な不可能を表す。しかし、例文(19)が例文(15)～(18)の性質と異なる。自らの事象であり、意志性がないと思われるため、潜在可能であるかどうかは考察する余地が残っていると考えられる。以上の例文ではある何らかの理由で(不)可能・可能性を表し、時間軸上に「実現」の(不)可能・可能性と「潜在的な能力」の(不)可能・可能性に分けている。『初めての日本語教育ハンドブック』では久野(1983:150)と渋谷(1993:14)を参考に「現実的」と「潜在的」に分け、可能構文を次のように分けている。

【表3】『初めての日本語教育ハンドブック』による分類

①	現実的	
②	潜在的	一時的
③		恒常的
④		恒常的+評価

また、渋谷(1993:19)では潜在可能をめぐって、属性表現化(形容詞化)の度合によって「一時的状態段階」(例20)、「恒常的属性段階」(例21)、「評価的属性段階」(例22)に分類し、次の例を挙げている(下線は筆者)。

- (20) この魚は中まで火が通っていないからまだ食べられない。 渋谷(1993:20)
 (21) このきのこは(毒でないから)食べられる。 渋谷(1993:21)
 (22) あいつはなかなかできる。 渋谷(1993:21)

3つの例文は全て潜在的な可能に属している。例文(20)(21)の主語「この魚」「このきのこ」が動作「食べる」の対象であり、客体である。客体が主語になっていて、寺村(1982:259)ではこのような可能表現を「受動的可能表現」と言い、次の可能表現を「能動的可能表現」と言っている。

- (23) この種のスポーツカーは1時間で200キロ走ることができます。

例(20)(21)の主語と例(23)の主語は動詞との関係が異なる。例(20)(21)の主語は客体であり、「食べる」のは人間である。しかし、例文(23)の動詞「走る」の主語は「スポーツカー」であるため、「スポーツカー」の性能を表している。主語を人間と置き替えれば、人の能力を表すことになる。

- (24) この人は1時間で200キロ走ることができます

例(24)と例(22)の主語は同じく人間であるが、表している意味が異なり、例文(24)は人の能力を表しているが、例文(22)の場合には人を認めて褒めている意味合いがある。つまり、あいつの能力を評価しているため、例(24)の「能力」を表す用法とは異なる。

以上の例文を考察してみると、潜在可能を単に条件によって分類することだけではなく、主語と動作との関係、派生的な意味合いも含めて再分類する必要があると思われる。

高橋(2005:104)は鈴木重幸(1965)を踏まえ、時間軸における可能表現の使い方によって次のように分類している。筆者はその内容を次の表4にまとめた。

【表4】可能表現の分類

	分類	用例
A. 可能性を表す場合(ポテンシャルな用法、時間軸上に局在しない用法)	1. 能力としての可能性	例 25
	2. 特性としての可能性	例 26
	3. 許可	例 27
B. 運動の実現を表す場合(アクチュアルな用法、時間軸上に局在する用法)	4. 期待した運動・意図した運動の実現	例 28
	5. 期待・意図と関係のない変化の実現	例 29
	6. 意図しなかった、心の動きの実現(自発)	例 30

(高橋 2005:104 の分類をもとに筆者作成)

(25) かれはどんな難しい字でも読むことができる。

(26) このみずは飲める。

(27) あした胃の検査を受けるので今夜はわたしはご飯を食べられない。

(28) 5時間待ってやっときっぷを買うことができた。

(29) ボタンがとれた。

(30) ゆうがたに海岸をひとりで歩いていたら、昔のことが偲ばれた。

実現可能について渋谷(1993:15)は「実現系可能はその意味的特徴から一回的な動作の(非)実現について言及することが多く、ものとの動詞の動作を失って、過去・現在にかかわりなく状態的な意味の様相を帯びる。」と述べている。高橋太郎(2005:104)が鈴木(1965)の分類を踏まえながら、【表4】の[4]と[5]の違いについて次のような例文を取り上げている。

(31) 書けた人はだしてもいい。[4]

(32) ボタンがとれた。[5]

高橋太郎(2005:104)

ここでの例文(31)は「一回性」「実現の状態性」を表す。一方、例文(32)の「とれた」については、鈴木(1965)が「自発態」として扱っているが、高橋(2005)では人間の動きがある場合に自然に起こった事象ではないと述べ、可能文としてとらえている。筆者は文脈の環境が存在しているため、例文(32)の認識も異なると考える。もし誰かがボタンを取ろうとしたら、「とれた」とい

う事象が実現可能になるが、一方、服が古くてボタンが自然に「とれた」という事象が自発になると思われる。

また、【表 4】の[6]の用法では「思う、感じる、偲ぶ」のような動詞の可能形「思われる、感じられる、偲ばれる」で表す。[6]の用法が自発として分類されているため、例文(32)が自然に起こった事象として認識される場合とどういうふうに分けるのかを考察する必要がある。

1.2.3 再分類の試み

筆者が先行研究の分析を踏まえながら、意味分類を整理して再分類した。先行研究で格構造の視点からの分類は松下(1930)の「自然被動」「価値被動」「可能被動」、佐久間(1936)の「価値被動」「可能被動」、金田一(1951)の「自然可能態」「自然受動態」などの分類がある。「主体」と「客体」が文脈に存在しているため、筆者は主体(A)と客体(B)の観点から分析し、次のように分類した。

【表 5】 主体と客体の視点からみた意味分類

グループ 1	能力・属性・性能を表す	1. A
		2. A-B
グループ 2	状況・状態・条件可能を表す	1. A
		2. A-B
グループ 3	自発	1. A
		2. A-B
グループ 4	評価	1. A
		2. A-B
グループ 5	許可・許容	1. A
		2. A-B
グループ 6	遂行可能	1. A
		2. A-B

1.2.3.1 グループ 1(能力・属性・性能)

このグループは、主体自身の能力属性・性能を表すもの(例文 33、34、35)と客体の能力・属性・性能を表すもの(例文 36、37)に分けられる。

- (33) 専攻は日本語だから、日本語が話せるよ。(A)
- (34) このデリックは五十トンまで(物が)上げられる。(A)
- (35) 魚が泳げる。(A)
- (36) このペンが使える。(A-B)
- (37) この魚が食べられる。(A-B)

例文(33)の主語が「日本語」になっているが、主体(A)は人間であるため、動作「話す」は能

動的な可能表現である。例文(34)(36)の主語が無情物であり、主体(A)がそれぞれ「デリック」「ペン」の属性や性能を表している。例文(33)～(35)の可能表現は第三者の介入が入っておらず、単に主体の能力・属性を表す。これらの可能表現は単純可能構文とも言われている。一方、例文(36)の主語「ペン」は動作の客体であって、「使う」の主体(A)である人間が実行する時の可能性を表す。そして、例文(37)の主語「魚」は主体の「食べる」の客体であり、「この魚」が毒のない種なので、人間にとっては食べる可能性があることを表す。

1.2.3.2 グループ2(状況・状態・条件可能)

このグループは何らかの条件と原因で可能・不可能の事から不可能・可能の状態へ変化し、状況・状態・条件の可能・不可能を表す。

- (38) 仕事が忙しいから、しばらくの間旅行へ出られない。(A)
- (39) 今は足に怪我をしているから、ジョギングはできない。(A)
- (40) 今日は気分が悪いから、あまりたくさんは食べられない。(A)
- (41) この魚は汚染されているから、食べることができない。(A-B)
- (42) この着物は小さくなったので、もう着られない。(A-B)

例文(38)の主体が人間であり、「出られない」の実行者であり、「仕事が忙しい」という理由があって不可能なことを表す。もしこのような理由がなければ実行できる。客体が表れておらず、主体(A)だけの行為であるため、能動的な可能構文である。例文(39)(40)も例文(38)と同じく、何かの原因で可能性がなくなった意味を表し、動作の主体(A)自身の動きである。一方、例文(41)(42)の可能構文では、主語が「この魚」「この着物」であるが、主体(A)である人間の客体(B)である。主体(A)の動作「食べる」の目的語になっている。従って、例(41)(42)は被動的な可能構文である。これらの例文は本々可能性があることであるが、不可能になった事象である。

1.2.3.3 グループ3(自発)

このグループは自ら発生している事象であり、意志性が弱いものである。

- (43) ボタンがとれた。(A) (高橋 2005:104)
- (44) ほどけないようにきちんと結んでおきなさい。(A) (高橋 2005:104)
- (45) 泣くまいと思っても泣ける。(A) (高橋 2005)
- (46) そよ風にちらちらと散る花吹雪に、故郷の春も思い出される。(A-B)
- (47) 私にもそう信ぜられる。(A-B) (松下 1930:168)
- (48) あの論文はどうも核装備容認論に読めた。(A-B) (尾上 1998:87)

このグループは意志性が弱く、自発文である。自発文については、松下(1930:1)では例文(43)～(48)まで全て「自然被動(自発文)」と言うが、金田一(1957)では「自然可能」と「自然受動」に分けている。上記の例文(43)～(45)が「自然可能」、例文(46)～(48)が「自然受動」である。ま

た、尾上(1998:90)では「〈知覚次元におけるモノの存在〉、〈認識次元におけるモノの存在〉、〈感情次元におけるモノの存在〉」³⁾のように分類されている。上記の例文(46)(47)が〈知覚次元におけるモノの存在〉、例文(48)が〈認識次元におけるモノの存在〉、例文(45)が〈感情次元におけるモノの存在〉である。例文(43)(44)に対しては自動詞の範疇に属すると言う。自動詞と自発文の違いを次の章で論じたいが、筆者は上記の先行研究を踏まえ、自発文を3分類にしたい。例文(43)～(45)までは「自然可能」、例文(46)(48)は「知覚自然受動」と名づける。また、例文(48)の場合は「認識自然受動」とする。

【表6】自発に関する先行研究の一覧表

例文	松下(1930:168)	金田一(1957)	尾上(1998:90)	筆者
例(43)	自然被動(自発文)	自然可能	自動詞	自然可能
例(44)	自然被動(自発文)	自然可能	自動詞	自然可能
例(45)	自然被動(自発文)	自然可能	感情次元におけるモノの存在	自然可能
例(46)	自然被動(自発文)	自然受動	知覚次元におけるモノの存在	知覚自然受動
例(47)	自然被動(自発文)	自然受動	知覚次元におけるモノの存在	知覚自然受動
例(48)	自然被動(自発文)	自然受動	認識次元におけるモノの存在	認識自然受動

自然可能は例文(43)～(45)のように自ら発生した事象であり、人間の視覚、味覚、感覚と関係ない事象と関係ある事象が含まれる。知覚自然受動は「考えられる、思われる、思い出される、案じられる、しのばれる、感じられる、見られる、など」のような動詞が表す事象である。認識自然受動は例文(48)のように人間の認識と関わって自然に発生した事象である。

1.2.3.4 グループ4(評価)

このグループは可能・可能性より物や事柄への評価を表すものである。

- (49) あいつはなかなかできる。(A)
- (50) あいつは話せる(男だ)。(A)
- (51) このスパイクシューズはけっこう走れる。(A)
- (52) 君の格好は見られたものではない。(A-B)
- (53) このワープロは使える。(A-B)
- (54) こんな映画はとても見られたもんじゃない。(A-B)

このグループの特徴は意図性が入っていない可能構文であり、意志性が弱いと考えられる。主体(A)だけを持っている例文(49)～(51)の主語は人間の「あいつ」もあれば、物である「スパイクシューズ」もある。一方、客体(B)への評価を表す場合もある。例文(52)～(54)の主語は「君の格好」「このワープロ」「こんな映画」であるが、動詞「見る」「使う」の主動主は人間である。このグループの可能構文には「なかなか」「よく」「けっこう」「とても」などの程度を表す副詞がよく

使われる。

1.2.3.5 グループ5(許可・許容)

このグループは、状況の許可・許容を表すものである。

- (55) (雨季の海は波が荒いので)雨季は泳げません。(A)
- (56) このあたりではたきびをすることができない。(A)
- (57) あした胃の検査をうけるので、今夜は私はご飯を食べられない。(A)
- (58) 雨が吹き込むから、窓は開けられない。(A-B)
- (59) 今日から図書館が自由に使える。(使っても良い)(A-B)
- (60) 改装中なので、このプールは今月末まで使用できません。(A-B)

例文(55)(56)では主体(A)が出現していないが、動詞「泳ぐ」「する」の主体(A)が人間である。例文(57)の主語「私」が主体(A)であって、動詞「食べる」の動作主である。例文(58)(59)(60)の主語は物「窓」、場所「図書館」「プール」であるが、主体(A)が現れていなくても、動作「開く」「使う」「使用する」の主体(A)が人間であることが分かる。

1.2.3.6 グループ6(遂行可能)

このグループでは、意図性や意志性があるって実現・不実現な事象を表すものである。

- (61) ぼくにしてはめずらしく一日で絵が描けた。(A)
- (62) あの子に手紙を書いてみたが最後まで書けなかった。(A)
- (63) 那緒は50mを息継ぎなしで泳げた。(下岡 2004:14)
- (64) あの本は時間がなくて最後まで読むことはできなかった。
- (65) この論文が初めて書けた。
- (66) 一晩かかってレポートがやっと書けた。

例文(61)のように今までやったことがない事が実現できるようになったことを表す。努力や意志性があるって実現に至った事象である。渋谷(1993:14)の分類では実現可能である。時間軸上から離されない分類である。例文(62)は努力したが、実現できなかった事象を表す。例文(63)～(66)も同様に意図性があるって実現・不実現を表す。

1.2.4 可能構文の成立条件

寺村(1982:262)では可能態の成立する文法的条件については、次のように述べている。

文法的条件のうち、最も重要なのは、受動態、特に直接受動態の場合と同じく、可能の形をとり得る動詞の種類である。問題にする動詞の種類は、まずその動詞の意味素性に関わるものであり、もう一つは、「Xニ/ガYガV(可能形)」というコトの形が「XガYヲV」に対応

している、またはそれから派生したものと考えられる、というときの、「XガYヲV」というのは、どのような種類のそれか、ということである。

この記述から少なくとも成立条件が「語形」「動詞の意味素性⁴⁾」「格構造」に関わっていると分かる。「語形」については可能形の接辞を付加することが成立条件の一つである。動詞の種類はいくつかの視点から分類されている。たとえばアスペクトの視点から継続動詞、瞬間動詞(結果動詞)、状態動詞⁵⁾、形容詞的動詞に分類されるし、意味と文法的な視点から自動詞・他動詞、意志動詞、無意志動詞などに分類される。本論文では意味と文法的な視点から可能形の付加を考察するため、自動詞と他動詞を基準にして第2章で「可能形の接辞付加」「動詞の意味素性」と「格構造」について考察する。

次の節では可能構文の成立条件に関わる要素を見る。

1.2.4.1 意志性

「可能」の概念について、青木伶子(1980:170)は「動作主体がある動作を、実現する力を有すること、又ある状態になる見込みがあることである。従って、この表現は、全体が動詞であつても状態性のものである。」と述べていると記した。

意志性については話し手の心的態度を表しているモダリティの一種で、話し手のある事態を実現・遂行しようとするという意図・意志を表出したものである(仁田 1989:xxxix)。上記の意味分類で可能表現の使用に対して、意志性の存在について考える。

I) 意味分類における有情物と無情物の意志性

有情物の「能力」可能は意志性が鮮明であるが、無情物の場合には「属性・性能」を表す場合に動詞の意味特徴で意志性が存在するかしらないかが曖昧になってしまう。

(67) 私は日本語が読める。

(68) このデリックは五十トンまで(物が)上げられる。

(69) この車は400メートル12秒で走れる。

(70) このコブラは人を殺せる。

(71) この銃は人を殺せる。

例文(67)は「能力」可能であるため、人間の意志性が分かりやすいが、例文(68)(69)の場合には「デリック」「車」の性能を述べているため、人間の操作がなければ意志性が表されないが、人間の試みで動かしたら意志性が含まれるようになる。また、「コブラ」は人を殺す意志があつて殺す意志性を表すのではなく、「コブラ」の属性を表しているため、意志性の有無が曖昧になってしまうと考えられる。例文(71)と同じである。

また、例文(69)の可能構文に対して、例文(72)の自動詞文でも、同じく「車」の性能を表している。例文(73)も「ダイヤモンド」の属性を表し、非意志文である。

(72) この車は最大時速200kmで走る。

(福田翔 2009:98)

(73) ダイヤモンドが明るいところで光る。

(74) この時計はまったく動かない。

上記の例文から分かるように「属性」を表す場合には可能表現だけではなく、動詞自体が可能を表すことができる場合もある。意志性の有無も例文(69) (72)のように人間の動きが無ければ車の属性が表せず、車の属性を表すとしても人間の動きと切り離せないため、曖昧になってしまうと考えられる。一方、例文(73) (74)は主体の属性を表し、人間の参与がないため、意志性がないとはっきりしている。

そして、グループ 4(評価)の「可能」を表す場合には主語に無情物が多く、意志性を表していないと思われる。

(75) このペンはよく書ける。

(76) この魚はなかなか食える。

(渋谷 1993:20)

(77) この画面はよく見える。

以上のように意志性の有無は動詞の意味特徴と、文脈からの意味合いに関わりがある。意志動詞が可能構文に使われるが、主語が主体であるか、客体であるか、有情物と無情物によって意味分類の中で意志性の有無も変わる。

II) 意志性の曖昧さ

動詞の意志性と無意志性については曖昧な場合がある。例えば「会う」と「出会う」は「会いたい」時に時間と場所を設定してコントロールできる意志性で実現できる。しかし、「出会う(意志)」「出会いたい(願望)」と言えるため、意志動詞とも考えられるが、「偶然出会う」という場合は無意志であり、コントロールできない状態である。「会う」と「出会う」のようにコントロールできる場合とコントロールできない場合がある。

(78) 紙がないから、書けない。

(79) この事を忘れようとしたが、忘れられない。

例文(78)が「能力」可能で、もし紙があれば「書く」状態が可能になることを表すため、コントロールできる「可能」を表し、意志性が強い。しかし、例文(79)の場合には実現させる条件を備えても「忘れる」ことをコントロールできない「可能」を表し、人間の意志性が弱い。

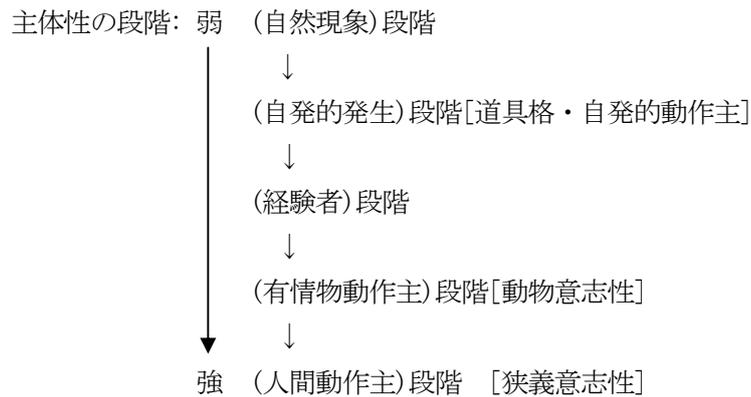
(80) 薬を飲めば、病気が治る。

例文(80)は自動詞文であるが、「治す」の自動詞である「治る」は実現させる可能性が人間の「能力」ではなく、体の状態である。意志性について、佐藤(2005:170)は自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である(自他対応する場合)と述べている。この解釈から他動詞「治す」の意志性は強いが、自動詞「治る」の意志性は弱いことが分かる。例文(79)

と例文(80)が同じくコントロールできない事柄であると思われる。

1.2.4.2 主体性

主体は一般的に主語として現れる。省略される文脈も少なくない。省略される場合には動詞の意味特徴から主体が無情物なのか、有情物なのかを判断する。主体性については森山(1988)が「主体性(主語名詞が動詞の表す動きに対してどれだけ自律的に関与(支配)しているか)」という観点から次のように主体性の段階を示している。



【図2】主体性の強弱について(森山 1988 をもとに筆者作成)

有情物が主体になる場合には、意志性が強い。無情物や抽象的なことが主体になると意志性が弱く、主体性と働きかけについては主語が動詞との関係により様々である。他動詞と自動詞に分けて見ていきたい。

I) 他動詞

他動詞構文の主語が無情物になっている場合には、動詞の客体である場合が多く、意志性がある文である。主体が特定していないが、人間の働きかけであることが分かる。

〈他動詞〉	〈可能構文〉
誰かが大分の焼酎がまあまあ <u>飲める</u> 。	→ 大分の焼酎はまあまあ <u>飲める</u> 。
誰でも仮名が <u>読める</u> 。	→ 仮名は誰でも <u>読める</u> 。

客体である「大分の焼酎」「仮名」が無情物であるが、動詞「飲む」「読む」は主体である人間の働きかけであるため、可能構文で表される。また、主語が客体ではなく、動詞の働きかけに可能性⁶⁾をもたらす状態であれば、他動詞の可能構文は自発に近い。

(81) この喫茶店はとても静かなので、本がよく読める。 (下岡 2004:12)

このような可能構文では主体性が人間であり、働きかけがある。しかし、意志性の有無が曖昧

である。

II) 無対自動詞

この部分にも主語が無情物であるが、動詞の意味合いによって人間と関係があるもの、関係がないものが存在している。

(82) この車は1時間200キロ走ることができる。

(83) このベッドはよく寝られる。

(下岡 2004:12)

(84) この種の鍵は様々な金庫の錠を開けることができる。

(85) このバスは早稲田大学に行けますか。

例文(82)の「走る」は「車が走る」であり、性能を述べている。しかし、人間の働きかけが無ければ、車が動かないため、次の内容から考えると、意志性があると思われるが、主体が無情物である。

誰かが車を走らせる → この車は1時間200キロ走ることができる。

例文(83)の場合は寝る所であるため、「このベッド」は客体ではなく、次の道具や場所の性質に近い。

(86) この部屋は100人収容することができる

(87) このペンはよく書ける。

また、無情物で働きかけもない場合には自然界の事象や物理・化学などの事象を表す。これらの主語は必ず無情物である。無対自動詞がよく使われる。

(88) 雨が降る。

(89) ダイヤモンドが光る。

例文(88)(89)のような文は可能構文で表さない。

III) 有対自動詞

有対自動詞は無対自動詞の性質と異なり、早津(1987:83)が有対自動詞の特徴を次のように述べている。

一点は、有対自動詞の主語は非情物であること、もう一点は、有対自動詞は、働きかけによって引き起こしうる非情物の変化を表すものであることでもある。

この記述については、この節で「非情物の変化」⁷⁾を2つのパターンに分けて考える。一つは無情物の変化が有情物の働きかけの参与によって実現している状態を表す場合、もう一つは無情物自身の変化で内部の状態を表す場合である。

① 働きかけがある場合

この場合、主語は無情物であって主体性が弱い、文脈の背景に他動性⁸⁾があり、自動詞構文が無情物の状態を述べている。

〈他動性〉		〈自動性〉
誰かがこの窓を <u>動かす</u> 。	→	この窓はよく <u>動きません</u> 。 ? この窓はよく <u>動けません</u> 。
誰かが(物)を鞆に <u>入れる</u> 。	→	鞆は小さくて <u>入らない</u> 。 ? 鞆は小さくて <u>入れない</u> 。
誰かがあの時計を <u>動かしたい</u>	→	あの時計は全然 <u>動きません</u> 。 ? あの時計は全然 <u>動けません</u> 。

この場合の主語は無情物であるが、無情物の変化が主語自身ではなく、外の力が事態の変化を実現した・しなかった要因になっている。このような自動詞文は主語が客体であるものは多い。文脈の背景に他動性が潜んでいる意志性の存在が読める。可能構文にならない要因については第2章で分析する。

② 無情物の働きかけがなく、内部の変化

この場合の主語も無情物であるが、外的な力がなくても無情物の内部の変化で実現する自動詞文である。主体性が低く、無意志的な事象である。

(90) 石は砂に変わる。

(91) 水は油と混じらない。

この場合の自動詞の性質が以下の意味分類のグループ1に類似している。しかし、例文(90)(91)は無意志動詞であるが、例文(92)～(94)は意志動詞で表すものである。

(92) 私は60度のお酒も飲める。

(93) 志穂は立ったままでも寝られる。

(下岡 2004:12)

(94) 夏夫は納豆が食べられる。

(下岡 2004:14)

一方、主体性が人間であっても意志性が曖昧な場合もある。

(95) 庭の方で虫の鳴く声が聞こえる。

(96) 故郷が懐かしまれる。

(97) コートを脱いだ人の姿がちらほら見られる。

この場合の主語が抽象的なもので無情物であるが、動詞「聞こえる」「懐かしまれる」「見られる」がいずれも人間と関わりがある状態である。例文(95)が聞きたい意志性がなくても聞こえてしまう場合があり、主体が人間であるが、主体性が低く、意志性も低い。例文(96)も同じくコントロールできない意志性であるため、主体が人間であっても主体性が低い。例文(97)は見たいという意図がないのに、見てしまう場合にも主体性が低い。次のパターンもコントロールできない意志性であるため、主体性が低い。

(98) 薬を飲めば、あなたの病気が治る。

(99) 薬を飲んでも体温は下がらない。

以上の例文から分かるように、主体性と意志性の関係が可能構文の成立を左右している重要な要素であるため、主語の性質だけで主体性を判断できず、文脈から主体性と意志性を判断しなければならない。

1.2.4.3 命題内容

命題内容の適切性が可能構文の成立を支える要因の一つである。渋谷(1993:9)は「「ある動作が可能である」というときの「ある動作」とは、常に話し手が期待する(待ち望む)動作、より正確には、動作主体が期待している(待ち望んでいる)であろうと話し手が考える動作でなければならない」と述べている。

(100) 人は一生に一度いい人に出会うことができる。 (渋谷 1993:1)

(101)?人は一生に一度いやな人に出会うことができる。 (渋谷 1993:1)

例文(100)は話し手が期待しているのが「いい人に会う」ことで「可能である」という適切性があるが、話し手が期待していない「いやな人に会う」ことで「可能である」というのが矛盾で適切性がないため、可能構文が成立しない。

[+話し手の期待]⁹⁾が「可能である」

?[-話し手の期待]が「可能である」

しかし、文脈の適切性はこのパターンだけではなく、次のような場合もある。

(102) 人は理念という幻想を持ってはじめて集団のために死ぬことができる。 (BCCWJ)

(103) ?優勝すれば喜ぶことができる。

例文(102)の「死ぬ」は一般に望まない事柄であるが、文脈の合理性から見れば、「死ぬ」のような悪い意味合いで[+話し手の期待]であれば「可能である」になり、可能構文の成立もあり得

る。しかし、例文(103)は「喜ぶ」ことが望む事柄で「可能である」と思われるが、可能表現で表さない。この点については次の章で分析する。

1.3 中国語の可能表現と成立条件

この節では、中国語の可能表現の語形と意味分類について簡単に触れておく。また、成立条件の視点から何かの要素は中国語可能表現へ制限するのかを考察する。

1.3.1 語形

中国語の可能表現は主に次の形式で「可能・可能性」を表す。

- | | |
|-------------|-------------------|
| I) 助動詞による可能 | 助動詞(能/会/可以)+V/A |
| II) 補語による可能 | A類. 得/不+結果補語/趨向補語 |
| | B類. 得/不+了。 |
| | C類. 得/不得。 |

(I)と(II)を具体的な文脈に置くと、さまざまな意味合いがあるため、意味分類も多い。次の節で中国語の意味分類について述べる。

1.3.2 意味分類の先行研究

呂叔湘(1980)では語形I)とII)について以下のような意味分類をしている。以下の通りである。

1.3.2.1 助動詞による可能の意味分類

呂叔湘(1980)によれば、次のような分類がなされている⁹⁾。(例文と例文の訳は筆者の作例である。)

1) 能

- ①事を行う能力や条件があることを表す
(104) 我拿到了驾照、能开车了。(免許を取得したので、運転ができるようになった。)
- ②上手に行うことを表す。前に“很”を付けられる。
(105) 他很能干活。(彼はよく働く。)
- ③ある用途があることを表す。
(106) 西瓜还能美容。(スイカは美容にいい。)
- ④可能性のあることを表す
(107) 今天的天气这么好、哪能下雨呢。(今日の天気はとてもよく、雨が降るはずがない。)
- ⑤情理から許されることを表す。
(108) 我不能替你写作业。(あなたの代わりに宿題をやってあげられない。)
- ⑥状況から許されることを表す。
(109) 研究室里不能吃饭。(研究室で食事をしたらだめです。)

2) 会

- ① どうすればよいかわかっている、…する能力がある。
(110) 我不会抽烟。(私はタバコが吸えない。)
- ② あることをするのが得意である。ふつう前に“很、真、最”などをつける。
(111) 他很会说话。(彼は話が上手だ。)
- ③ 可能性がある
(112) 他不会迟到的。(彼は遅刻するはずがない。)

3) 可以

- ① 可能を表す
(113) 这间屋子可以坐 5 个人。(この部屋には 5 人座れる。)
- ② ある用途を持つ。
(114) 辣椒可以生吃。(ピーマンは生で食べられる。)
- ③ 許可を表す。
(115) 这里可以抽烟。(ここで煙草を吸ってもいい。)
- ④ 値打ちがある。
(116) 这部电影很好看、你可以看看。(この映画はとてもいいので、見る価値がある。)

筆者は上記の分類を次のように纏めてみた。

【表 7】助動詞による可能の意味分類¹⁰⁾

	能力・属性・用途	推測	価値・評価	許可
能	能 1、能 3、	能 4	能 2	能 5、能 6
会	会 1	会 3	会 2	
可以	可以 1、可以 2		可以 4	可以 3

【表 7】の分類と日本語の【表 5】「主体と客体の視点からの意味分類」を比較すると、日本語の分類の中でグループ 1「能力・属性・性能を表す」、グループ 2「状況・状態・条件可能を表す」、グループ 4「評価」、グループ 5「許可・許容」の意味合いは表 7 の意味分類と類似する部分が多い。しかし、グループ 3 とグループ 6 が【表 7】の助動詞の意味分類に現われていないと思われる。

1.3.2.2 補語による可能の意味分類

劉月華(1996:479)は「Ⅱ補語による可能の意味分類」の意味分類について次のように分析している。[1.3.1 語形]で取り上げている A 類、B 類、C 類を順次に見ていく。

A 類. V+得/不+結果補語/趨向補語

- ① 主體的條件(能力、力など)または客觀的條件が、(ある結果または方向の)實現を許すかどうかを表す。

- (117)a. 小明的力气小, 举不起这块大石头。 (劉月華 1996:480)
b. 明くんは力が弱くて、この大きな石を持ち上げられない。
(118)a. 教室里很吵, 听不清录音。 (同上)
b. 教室が煩いので、録音がはっきり聞こえない。

例文(117a)の動詞である「举」の動作の主体が「明くん」であり、「举不起」という事象が「明くん」の「能力・力」であって、「主體的條件」可能文である。例文(118a)の場合は動詞「听」の動作主体が「私」であるが、「听不清」という實現できなかつた事象は「私」の能力・力に原因があるということではなく、客觀的な原因である「教室里很吵」が原因で實現できなかつたことを表し、「客觀的條件」可能文である。しかし、例文(117a)と(118a)の「举不起」「听不清」を「I. 助動詞(能/会/可以)+V/A」と置き換へができない。

- (119)? 小明的力气小, 不能举起这块大石头。
(120)? 教室里很吵, 不能听清录音。 劉月華(1996:480)

A 類の可能補語と「I. 助動詞(能/会/可以)+V/A」との違いについては、劉月華(1996:482)では「主體的條件、客觀的條件がある結果、方向の實現を許さない」ことを表す場合、ふつうは可能補語を用い、「“不能”+動詞+結果補語/方向補語」の形式を用いることはめつたにない。」という。例文(119)(120)のように置き換へると非文になる場合もあれば、意味合いが変わってしまう場合も存在する。

- (121) (黑板上的字写得太重)擦不掉。
(黑板の字はとても強く書いてあつて)消しきれない。
(122) (黑板上的字写得太重)不能擦掉。
(黑板の字はとても強く書いてあつて)消してはいけない。

例文(121)の場合には客觀的な事象を述べているが、「不能」と置き換へると例文(122)が「許可しない」事柄を表す。

従つて、否定文である「A 類. V+不+結果補語/趨向補語」と「I. 不+助動詞(能/会/可以)+V/A」の使用は異なる。しかし、肯定文である「A 類. V+得+結果補語/趨向補語」と「I. 助動詞(能/会/可以)+V/A」は置き換へることができる。

- (123)a. 虽然小明的力气小, 但是举得起/能举起这块大石头。
b. 明くんは力が弱いが、この大きな石を持ち上げられる。

- (124) a. 教室里虽然很吵、但是听得清/能听清录音。
 b. 教室が煩くても録音がはっきり聞こえる。

例文(123a)の「举得起」と「能举起」が置き換えても「主体的条件」可能文であり、意味合いから殆ど変わらない。例文(124a)も同じく、「听得清」と「能听清」が置き換えても「客観的条件」可能文であり、意味合いからもあまり変わらない。上記の例文(121)～(124)の置き換えから次のようなことが分かる。

擦不掉 ≠ 不能擦掉 しかし 擦不掉 = 没擦掉
 举得起 = 能举起
 听得清 = 能听清

「A類. V+得+結果補語/趨向補語」と「I.助動詞(能/会/可以)+V/A」の意味特徴が異なるため、置き換えができない場合がある。この点については、安本真弓(2007:180)が「I.助動詞による可能」と「A類. V+得/+結果補語/趨向補語」の可能表現を次の【表8】のようにそれぞれの区別を示している。

【表8】助動詞を用いる可能表現と補語を用いる可能表現の区別

	助+V(C)	“不” 助+ V(C)	V得C	V不C
主観	○	○	*	*
客観	*	*	○	○
許可	○	○	*	*
他動性	高い	関係なし	低い	関係なし
頻度	優勢	劣勢	劣勢	優勢

(安本真弓(2007:180))

【表8】から分かるように、「助動詞による可能」が主観的な可能であるため、発話者の視点が動作主に置かれると考えられる。意味合いから「許可」を表す用法は可能補語の用法と異なる。また、「補語による可能」が客観的な可能で、事象の状況や事実に視点が置かれ、他動性が低い。

B類. V+得/+了。

- ① “了”それ自体は結果の意味を表さず、“得/+了”全体が「主体的条件、客観的条件が(ある動作または変化の)実現を許すかどうか」を表す。(例文 125)
- ② 状況に対する推測を表す。(例文 126)

- (125) a. 今天下雨、去不了颐和园了。 (劉月華 1996:480)
 b. 今日は雨だから、颐和園には行けない。

(126)a. 我看小刘必小陈大不了几岁。

(劉月華 1996:480)

b. 劉君は陳君よりそれほど年上ではないと思う。

例文(125)の動詞「去不了」が状況の原因で実現できない事象なので、「客観的な条件」可能を表す。助動詞「能」の否定文と置き換えても意味合いが変わらない。

(127)a. 今天下雨、不能去颐和园了。

b. 今日は雨だから、颐和園には行けない。

「B類. V+得/不+了」の用法①を表す場合には例文(127)のように「I. 助動詞による可能」も用いられることが分かる。しかし、「B類. V+得/不+了。」の用法②に対して、「I. 助動詞による可能」とA類、C類と置き換えることができない。

C類. V+得/不得。

①「主体的条件、客観的条件がある動作の実現を許すかどうか」を表す。すなわちB類可能補語の意味と同じである。(例文 128)

② 情理の上で許されるかどうかを表し、動詞、形容詞の後に用いられる。(例文 129)

(128)a. 他倒在椅子上、半天动弹不得。

b. 彼は椅子にもたれたまま、しばらく身動きできなかった。

(129)a. 凉水浇不得。

b. 冷たい水を浴びてはいけない。

例文(128)が主動者の「能力・力」を表すため、「主体的条件」可能である。だが、劉月華(1996:491)は「C類. V+得/不得。」の用法①に対して、現代共通語ではあまり用いられないと言い、普通は“能/不能”+動詞、あるいはB類可能補語を用いると主張している。以上の内容は次のように纏められる。

【表9】補語による可能の意味分類

	用法①	用法②	置き換え
A類 V+得/ 不+結果補 語/趨向補 語	主体的条件(能力、力など)または 客観的条件が、(ある結果または 方向の)実現を許すかどうか		(○)A類(肯定文)⇔助+V(C) (?)A類(否定文)⇔助+V(C)
B類 V+得/ 不+了。	主体的条件、客観的条件がある 動作または変化の)実現を許すか どうか	状況に対する推 測を表す	B類(用法①)⇔助+V(C) B類(用法①)⇔A類
C類 V+得/ 不得。	主体的条件、客観的条件がある 動作の)実現を許すかどうか	情理の上で許さ れるかどうか	C類(用法①)⇔助+V(C) C類(用法①)⇔B類

「Ⅱ」補語による可能」の意味合いから本研究の日本語の意味分類である【表5】の分類のグループ3とグループ6に対応すると推測される。

1.3.2.3 「A類、V+得/不+結果補語/趨向補語」と補語の関係について

補語(C)というのは動詞の意味合いを補って動作の結果、程度と状態を説明するものである。補語(C)になる動詞(V)と形容詞(A)が多い。補語は次のように分類されている。

補語	結果補語	例: <u>吃完</u> (食べ終わる) <u>看到</u> (~まで見た)
	趨向補語 ¹¹⁾	例: <u>拿来</u> (持って来た) <u>想起来</u> (思い出す)
	可能補語	例: <u>吃得完</u> (食べ終われる) <u>吃不完</u> (食べ終われない)
	程度補語	例: <u>跑得快极了</u> (走るのがすごく速い) <u>累得要命</u> (死ぬほど疲れている)
	状態補語	例: <u>写得真好</u> (上手に書けた) <u>兴奋得忘了吃饭</u> (ご飯を食べ忘れるぐらい興奮している)

【図3】補語の分類

補語の中、可能補語を除いて、結果補語、趨向補語、程度補語、状態補語が可能表現ではないが、結果補語と趨向補語が可能補語との関係が密接で分けられない。「Ⅱ」補語による可能」のA類は可能補語であり、【図3】の「吃完」「看到」のように動詞の後に結果補語、趨向補語をもつとき、動詞との間に「得/不」を挿入して、「吃得/不完」「看得/不到」になって「主体的条件(能力、力など)または客観的条件がある結果または方向の)実現を許すかどうか」を表す補語である。言い換えると、動作・行為の実現の可能/不可能を表し、中国語の可能表現の一種類でもあり、補語の一種類でもある。形式上から可能補語の語形は結果補語と趨向補語から変化するもので、成立条件については語形から可能補語にならないものも存在している。

I) 形式上の制限

安本真弓(2006:88)では論理的に次の4パターンに分け、動詞-結果補語(VC)が動詞-可能補語(VP)に変換可能な場合を分析している。

Aタイプ: 吃饱	⇒	○吃得饱、○吃不饱	(「全変換可」と定義する)
Bタイプ: 吃累	⇒	*吃得累 *吃不累	(「変換不可」と定義する)
Cタイプ: 吃穷	⇒	*吃得穷 ○吃不穷	(「単変換可」と定義する)
Dタイプ: なし			

【図4】安本真弓(2006:88)によるVCからVPへの変換タイプ

上記の可能補語(VP)への「全変換可」の結果補語(VC)については、次の条件があると述べている。

V[+自主]、C[+評価] or [評価]

【図5】安本真弓(2006:88)による可能補語(VP)への「全変換可」の変換条件

V[+自主]とC[+評価]or[評価]についてもっと用例を挙げる(用例と注の解釈が安本2006:90による内容である)。

I) 動詞(V) [+自主]¹²⁾

拔_(V)完_(V) ⇒ 拔得完 拔不完
看_(V)清楚_(A) ⇒ 看得清楚 看不清楚

II) 動詞(V) [-自主]¹³⁾

变_(V)潮_(A) ⇒ *变得潮 *变不潮
病_(V)瘦_(A) ⇒ *病得瘦 *病不瘦

III) 補語(C) [+評価]¹⁴⁾ or [評価]¹⁵⁾

办_(V)好_(A) ⇒ 办得好 办不好
吃_(V)干净_(A) ⇒ 吃得干净 吃不干净
办_(V)成_(V) ⇒ 办得成 办不成
做_(V)完_(V) ⇒ 做得完 做不完

IV) 補語(C) [-評価]¹⁶⁾

办_(V)坏_(A) ⇒ *办得坏 *办不坏
办_(V)砸_(V) ⇒ *办得砸 *办不砸

上記の変換条件から分かるように結果補語が可能補語と密接的な関係を持っている。趨向補語も同じである。趨向補語については単純趨向補語と複合趨向補語があり、単純趨向補語が単純に動詞(V)の後ろに「来」と「去」が置かれて補語となり、移動と方向及び視点を伴って結果・実現を表すものである。複合趨向補語は次のような組み合わせで動詞(V)の後ろに置かれる。結果補語

の性質と似ているため、同じ範疇であるとする。

【表 10】複合趨向補語

	上	下	進	出	回	过	起
来	上来	下来	进来	出来	回来	过来	起来
去	上去	下去	进去	出去	回去	过去	——

動詞－趨向補語(VC)が動詞－可能補語(VP)に変換する場合は次の通りである。

走来(単純趨向補語) ⇒ 走得来 走不来
 走上来(複合趨向補語) ⇒ 走得上来 走不上来

「変換不可」の場合も存在している。

看起来 ⇒ *看得起来 *看不起来

「看起来」が趨向補語の派生的意味を持ち、可能補語にならない要因が意味合いの合理性がないのではないかと考えられるが、本研究では「主体的条件(能力、力など)または客観的条件が、(ある結果または方向の)実現を許すかどうか」を表す意味合いから結果補語と区別することはしないでおく。

II) 肯定・否定の制限

房(1992:262)によれば、「平常说话、可能补语大多以否定形式出现、肯定形式一般只出现在对话的答句中、或出现在反问或委婉的否定中」(筆者訳:可能補語は殆ど否定文に現れるが、肯定文は一般的には日常会話の反語、応答、婉曲的な否定文の中に現れる)としている。

- (130) 这个人靠得住靠不住?——靠得住。
 この人は頼りになる?——頼りになるよ。(筆者訳)
- (131) 这种人怎么靠得住呢。
 このような人は頼れるわけがないよ。(筆者訳)
- (132) 这世界上没有一个人靠得住。
 世の中、頼れる人がいない。(筆者訳)

例文(130)では発話者が確認するニュアンスで可能補語の反復疑問文を用いた。答えるときに可能補語の可能形「靠得住」が使える。例文(131)では「このような人は頼れない」というニュアンスを強めるために反語を使用した。例文(132)の場合は「頼れない人」が多いことを表したいため、婉曲的に否定形を使わず、肯定形を使用している。会話の中で可能補語の否定形がよく用いられることが可能表現の使用制限に影響を与えている要素の一つであると考えられる。

Ⅲ) 時間軸上の制限

時間軸上において、可能補語の発話時点は過去・現在・未来に置かれる。可能補語の肯定文は過去に使用しにくい。

- (133) 我 20 岁的时候、还是考不上东京大学。
私は 20 歳のとき、やはり東京大学に受からなかった。
- (134) 我 20 岁的时候、还是没考上东京大学。
- (135)? 我考得上的时候、已经 20 岁了。(私は受かったとき、もう 20 歳になっていた。)
- (136) 我考上的时候、已经 20 岁了。

例文(133)は過去の事柄を述べていて、「考不上」という実現していないことを表し、例文(134)「没考上」と置き換えても意味が変わらない。しかし、例文(135)は肯定文で、過去に可能補語「考得上」を用いると非文になる。例文(136)結果補語「考上」を用いて事象の結果を表す。もし、発話時点未来に置いて事象の結果を表す場合には、可能補語の肯定も否定も使える。

- (137) 不提前去排队、就买不到车票。(前もって列に並んでいないと、切符が買えないよ)
- (138)? 不提前去排队、就没买到车票。
- (139) 只要提前去排队、就买得到票。(前もって列に並べば、切符が買えるよ。)
- (140) 只要提前去排队、就能买到票。

例文(137)と例文(139)は可能補語で、まだ発生していない事柄に使用されている。まだ発生していないが、可能補語の意味合いから未来に予測されている事象の結果を表す。この場合には結果補語「买到」が用いられない。助動詞による可能である「能买到」が使用される。また、事柄の発生は発話者の陳述が発話時点で止められている場合もある。

- (141) (本を探している最中)我没找到那本书。(その本が見つからなかった)
- (142) (本を探している最中)我找不到那本书。

例文(141)と(142)は今の現状・状態に対して陳述、発話時点で止められていて事象の結果を表している。

上記のように可能補語の肯定形は過去に用いられにくく、時間軸上に制限される場合があると考えられる。否定形にはこのような制限が見当たらない。

1.4 まとめ

本章では日本語と中国語の可能表現を概観した。まず、日本語の可能表現では先行研究を踏まえながら、可能表現を再分類し、意味分類の分類[1]から[6]を主体と客体の視点から分析した。

さらに、可能表現の成立条件に関わる「意志性」「主体性」「命題内容」について考察した。考察で分かったことは以下の通りである。

- 1) 可能表現は意志動詞で表すものであるが、可能表現の意味分類によって意志性の強弱が異なる。
- 2) 可能構文の成立条件に関わる要素は日本語の「可能」の含意に影響しているもので、曖昧な部分も存在している。意志性と主体性については動詞の意味特徴と文脈の意味合いから判断しなければならない。
- 3) 副詞との共起は可能構文の意志性に影響をもたらす要素の一つである。例えば、副詞「なかなか」「よく」「非常に」「とても」などの副詞が可能構文によく使われるのが意味分類の[グループ4]である。

以上の内容は意志動詞の可能形が日本語の「可能」を表す可能表現について考察したものである。次に、中国語の形式と意味分類、さらに成立条件に関わる考察から以下のような内容がある。

- 1) 「助動詞による可能」の「能」「会」「可以」の意味特徴が共通している用法があれば、共通していない用法もある。また、「助動詞による可能」と「補語による可能」の性質が異なる。安本真弓(2007:180)から分かるように可能補語は客観的な可能・不可能に視点が置かれる。助動詞の可能が主観的な可能・不可能に視点が置かれていることが解明されている。
- 2) 肯定形と否定形の使用は時制に制限されている。時間軸上で可能補語の肯定形は過去の事象で制限され、過去に使われにくい。否定形は過去・現在・未来にも使用することができ、影響されていない。

日本語では可能表現の成立に当たって、「語形」「動詞の意味素性」「格構造」という成立条件の中で、可能形の「語形」にならない構文も「可能」の意味合いが含まれる場合が存在しているため、【第2章】で可能形の接辞付加の可否を考察する。可能形の接辞を付加しにくいものに対して、なぜ「可能」の意味を含むのかを解明するために【第3章】の文脈上で付加しにくい動詞の意味素性を分析し、文脈から主体性と意志性の相互関係を焦点に当てて、その要因を探ってみる。【第2章】【第3章】に対する中国語の対応表現を【第5章】で考察する。

【注】

- 1) 松下大三郎(1930:162)は被動を5種類に分けている。本論文では取り上げた「可能被動」「価値被動」「自然被動」がその中の3種で形式的被動に属していると述べている。他の2種は単純被動と利害被動を性質的被動に入れている。「可能被動」「価値被動」「自然被動」について次の用例を取り上げている。可能被動とは「可能の被動は被動の客體を物として取扱ひ却つて其の客體を人格とみて客體の能力を表すものである」という。また、「価値被動」とは「価値の被動に於ても「れる」「られる」に約音が行はれる。可能の被動の場合と同様である」という。「自然被動」については「「れる」「られる」の外その約音の用いられることは可能の被動、価値の被動に於けると同様である」と説明している。
 - (1) 此の本が私に読める。「可能被動」
 - (2) 此の酒が中々飲めるよ。「価値被動」

- (3) 私が泣ける。「自然被動」
- 2) アスペクトの視点から可能表現〈潜在(系)可能〉と〈実現(系)可能〉に分けられる。本論文では〈潜在可能〉と〈実現可能〉と称する。
- 3) 尾上(1998:90)では特に〈知覚次元におけるモノ〉〈認識次元におけるモノの存在〉〈感情次元におけるモノ〉を定義していないが、次の例文を取り上げている。
- (1) コートを脱いだ人の姿がちらほら見られる。
 (2) 私にはあの人の意見が正しいと思われる。
 (3) ふるさとがなつかしまれる。
- 例文(1)のように「見られる」「聞かれる」などの人間の知覚に関わるものである。例文(2)のように「思われる」「思い出される」などの人間の認識に関わるものである。例文(3)のように「懐かしまれる」「悔やまれる」などの人間の感情に関わるものである。
- 4) 池上嘉彦(2014:29)によれば、「言語形式(特に、語)の意味を分析的に捉えようとする試みから生まれた概念で、分析して得られた単位を適当に組み合わせると語義全体が合成され得るという意味合いが強調される場合だと「意味成分」、他の語の語義との対立、差異化といった機能が強調される場合は「意味特徴/素性」という名称が採られるようである。」である。
- 5) 金田一春彦氏の「国語動詞の分類」によると動詞は次の4種類に分けられる。
- ① 状態動詞 ある いる できる 飲める
 ② 継続動詞 降る 吹く 食べる 泳ぐ
 ③ 瞬間動詞 死ぬ つく 始まる 終る
 ④ 第四種の動詞 そびえる 似る 曲がる
- 継続動詞：明瞭に動作・作用を表す動詞であるが、但しその動作・作用は、ある時間内続いて行われる種類のものであるような動詞である。瞬間動詞(結果動詞)：動作・作用を表す動詞であるが、その動作・作用は瞬間に終わってしまう動作・作用である動詞である。状態動詞：「動作・作用を表わす」と言うよりも寧ろ「状態を表わす」というべき動詞で、通常、時間を超越した概念を表す動詞である。
- 6) 他動性：英語の transitivity に対する訳語として広く用いられる。日本語研究の伝統では、大槻文彦(『語法指南』)が「動詞の性」として二種を立て、「動作の、他の事物を處分する意あるもの」を「他動性」、「自ら動作して、他の事物を處分することなき意のもの」を「自動性」と呼んで区別したが、文法用語としての transitivity が英語で用いられるようになるのは大槻の時代より後のことであるから、大槻の「他動性」は transitivity の訳語ではない。(『日本語文法辞典』p392)
- 7) 早津(1987:83)では「非情物」と呼ばれているが、本研究では「無情物」と称する。
- 8) [+話し手の期待]は望みがある期待を「+」で示す。期待していない事柄や悪い意味合いの期待を「-」で示す。
- 9) 日本語訳は牛島監訳 1992 によるものである。牛島監訳 1992『中国語用例辞典』東方書店
- 10) 便宜上に「能1」が「能」の用法1で、「能2」が「能」の用法2を示す。その他も同じである。
- 11) 中国語では「趨向補語」であるが、日本語では「方向補語」と呼ばれている。本研究では便宜上中国語の「趨向補語」とする。
- 12) [+自主]：自主的意味特徴を持つもの
 13) [-自主]：自主的意味特徴を持っていないもの
 14) [+評価]：動作主にとってプラスの結果である。
 15) [評価]：動作主にとって中立的な結果である。

16) [-評価]:動作主にとってマイナスの結果である。

第2章 日本語における可能形の接辞付加をめぐる考察

可能構文の成立条件について前章で「語形」「動詞の特徴」「格構造」を取り上げた。本章では成立条件を中心にして自動詞・他動詞の可能構文と非可能構文を見ていく。非可能構文が日本語の「可能」を含意する場合とそうでない場合がある。両者を比較しながら、可能表現の性質に迫る。さらに、なぜ非可能構文が「可能」の意味合いが生じるのかを可能表現の成立条件の要素から分析する。形式的な成立条件と構文の主体性・意志性の2つの面から「語形」「動詞の特徴」「格構造」を順次考察していく。

2.1 問題意識

可能構文の成立条件について、寺村(1982:262)は、「文法的条件のうち、最も重要なのは、受動態、特に直接受動態の場合と同じく、可能の形をとり得る動詞の種類である。」と言い、動詞の可能形と動詞の意味素性が可能構文の成立に関わる要素である。動詞の可能形が一般的に意志動詞のみしか使われないため、主体の意志性と分けられない。

(1) 私は納豆を食べられるよ。

例文(1)は「私」が動作主であり、納豆を「食べよう」としたらできるという「能力」可能を表している。「食べる」が他動詞であり、意志性が強く、主体性も強い。しかし、全ての他動詞に可能形が適用されるわけではなく、例えば次の他動詞は可能構文に使えない。

(2) 読書を好む。

「好む」が他動詞であるが、例文(1)の「食べる」と異なり、「好める」と言わない。この例から分かるように意志動詞の他動詞であっても、動詞自身の性質と関係があり、接辞を付加しにくい場合がある。また、可能形の接辞を付加しにくい自動詞もよく現れる。

(3) (隣の夫婦が喧嘩して) 煩くて寝られない。

(4) 先生の字が小さくて見えない。

(5) あなたの携帯はどうしていつもつながらないの? (『ネ』:152)

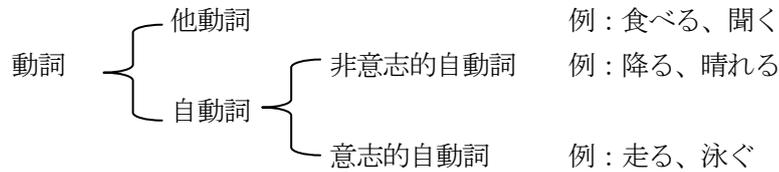
(6) 今出ればまだ終電に間に合う。 (『ネ』:103)

(7) 彼はまだ小さいので、足がまだペダルに届かない。 (『ネ』:111)

例文(3)(4)の自動詞は可能形の接辞を付加することができるため、可能構文で表す。一方、例文(5)~(7)の「つながる」「間に合う」「届く」のような自動詞は可能形の接辞を付加しにくい動詞であり、非可能構文で表す。

ここまででは可能形を付加できる動詞もあれば、付加できない動詞もあることが分ったが、どういった分類で可能形が付く動詞と付かない動詞を分けるのかが重要な論点となる。

松岡(2000:104)によれば、自・他動詞の分類は【図1】で表すことができる。



【図1】意志動詞と非意志動詞の分類¹⁾(松岡 2000:104)

非意志動詞と言え、「降る」「晴れる」「曇る」のように人の意志でコントロールできない動詞である。非意志的自動詞であるため、可能形が存在しないことが当然であると思われるが、次の動詞は意志的自動詞なのか、非意志的自動詞なのか判断しにくい。

- (8) この薬があれば助かる。
- (9) この薬があれば治る。
- (10) この教室は 200 人入る。

次の自動詞文(11) (13)とどう異なるのか。例文(8)～(10)の事象が人間の参与で成り立つものであり、自動詞文(11) (13)の自然現象と異なる。ところで、なぜ「助かる」「治る」「入る」が可能形の接辞を付加しにくいのかという疑問が生じる。

- (11) 明日雨は降らない。
- (12)?明日雨は降ることができない。
- (13) 水仙を植えたが、花が咲かない。
- (14)?水仙を植えたが、花が咲くことができない。

そして、例文(11) (13)を可能形式と入れ替えた例文(12) (14)は成り立たない。無対自動詞「降る」「咲く」が無意志動詞であるため、表せないが、次の自動詞はどうであろう。

- (15) なかなかシュートが決まらない。 (青木 1997:20)
- (16) なかなかシュートが決められない。 (同上)
- (17) 荷台が高すぎて荷物が載らない。 (同上)
- (18) 荷台が高すぎて荷物が載せられない。 (同上)

例文(15) (17)を可能形式と入れ替え、例文(16) (18)のように表現することが可能である。一方、可能形式と入れ替えられない場合もある。

- (19) このセーターは熱湯で洗っても縮まない。(青木 1997:20)
- (20) #このセーターは熱湯で洗っても縮めない。 (同上)

(21) 一生懸命に努力しさえすれば、あの名門大学に必ず受かる。

(22) ?一生懸命に努力しさえすれば、あの名門大学に必ず受かることができる。

例文(19)の「縮む」は可能形の接辞を付加する自動詞であるが、可能形式と置き換えれば、意味が変わり、不自然である。例文(21)の「受かる」は接辞「(ら)れる」を付加しないが、「ことができる」と共起する場合がある。だが、例(22)のように可能形式で置き換えない。例文(15)(17)の「決まる」「載る」「縮まる」「受かる」はいずれも有対自動詞であるが、「決まる」「載る」は例文(16)(18)のように置き換えが可能で、「縮まる」「受かる」は例文(20)(22)のように置き換えが不可能である。このような言語現象に対して、その原因を明らかにする必要がある。

2.2 先行研究

本章では可能構文の成立条件についての先行研究を踏まえながら、語形の可能形の接辞付加を中心に考察する。自動詞・他動詞の視点から日本語の可能形を分析する論文があまり多くないため、長友(1997)、青木(1997)、中野(2008)を参考にした上で、また不十分なところを考察する。

2.2.1 長友文子(1997)

可能構文の自動詞・他動詞の可能形について、長友(1997:4)は次のように分類している。

【表 1】 (分類表) 動詞例 2)

分類 記号	自動詞 可能形	他動詞 可能形	自動詞 例	他動詞 例	備 考
A=規則 2 を適用できる動詞					
A1	+	∅	会う - u	∅	該当なし 該当なし
A2	+	∅	いる -ru	∅	
A3	∅	+	∅	もらう - u	
A4	∅	+	∅	感じる -ru	
A5	+	+	() - u	() - u	
A6	+	+	() -ru	() -ru	
A7	+	+	立つ - u	立てる -ru	
A8	+	+	隠れる -ru	隠す - u	
B=規則 2 を適用できない場合がある動詞					
B1	-	+	冷える - ru	冷やす - u	vi 辞書形 eru
B2	-	+	見える - ru	見る -ru	vi 辞書形 eru
B3	-	+	落ちる - ru	落とす - u	vi 辞書形 eru 以外
B4	-	+	決まる - u	決める -ru	vi 辞書形 eru 以外
B5	-	+	ひらく - u	ひらく - u	
B6	-	∅	暮れる - ru	∅	vi 辞書形 eru

長友(1997:4)

【表 1】 から分かるように A 類が可能形の接辞を付加して問題がない分類であるが、B 類の場合には B6 の他動詞が存在していないため、B1~B5 の他動詞が殆ど可能形の接辞を付加しやすいが、B1~B6 の自動詞のほうは可能形の接辞を付加しにくいことが明白である。長友は形態論の角度から分析し、可能形の接辞付加について有対他動詞と無対他動詞に分けている。可能形接辞が付加されにくい自動詞を以下のように分析している。

- イ) 他動詞は対応する動詞がないもの(A1、A2、B6)以外に、その他(A3~A8、B1~B5)の可能形がある。自動詞の場合には可能形が作れるものもあれば、作れないものもあること。(A1、A2 と B6)
- ロ) 可能形が作れないものを構文上で意志性が読み取れるが、自動詞の可能形が存在しないため、可能表現に使うことができない。(例文 23)
- ハ) 構文によって意志性を表していないため、自動詞の可能形があっても使うことができない。(例文 25)

(23) このペンキは特殊な薬品で落ちる。

(24)?このペンキは特殊な薬品で落ちられる。

(25) 知らない間に、扉がひらいた。

(26)?知らない間に、扉がひらけた。

しかし、以上の内容には2つ疑問点がある。一つ目は表1を見ると、殆どの他動詞には可能形の接辞が付くものの、例文の「好む」は他動詞であるにもかかわらず、可能形の接辞を付加しにくいことである。これは【表1】と矛盾している。他動詞にも可能形の接辞を付加しにくいものが存在していると思われるため、もう少し分析する必要がある。二つ目は、長友は形態上からの分析で動詞の性質について分類されていないことである。可能形が作れないものがなぜ可能形が作れないのかは動詞の性質に関わると推測され、考察する余地が残っている。

2.2.2 青木ひろみ(1997)

青木(1997)は動詞の意味特徴に着目し、可能形が存在している動詞と存在していない動詞を比較しながら分析している。形態上から自動詞だけを対象にして可能形の接辞との付加について分類を行われている。その分類は【表2】の通りである。

【表2】可能形との共起

	自動詞の例	(ラ)レル	コトガデキル
タイプ1	上がる、止まる、集まる、動く、変わる	○	○
タイプ2	受かる、助かる、育つ、増える、覚める	×	○
タイプ3	決まる、載る、開く、閉まる、広まる	×	×
タイプ4	見える、割れる、折れる、切れる、焼ける	×	×

(青木 1997:12)

青木(1997)はこの4つのタイプを「意志性」の有無から分析している。タイプ1の自動詞は「意志性」があるものであるが、タイプ2の場合はタイプ1より「意志性」が低い。タイプ3とタイプ4は「意志性」が関与していない。青木は可能形の接辞付加を分析しただけではなく、自動詞の特徴によって分類し、動作主性、意味的な役割、自動詞の特徴をめぐって「可能」を表す自動詞について論じる。青木(1997:12)では一部の有対自動詞が「可能」を表すことを説明している。この分類の中で、タイプ3とタイプ4が「可能」の意味を含む。タイプ3が「可能」を表す理由としては次のように述べている。

《可能》におけるこのタイプに属する自動詞の特徴は、自他の対応における構造からも、また他動詞構文の《可能》に置き換えても同じ意味内容を表すということからも、これらの文には含意された動作主の存在が認められるものである。

これから分かるように、条件としては動作主の存在が必要で、例文(27)(28)のように置き換えても意味が変わらないものは《可能》の意味を含むと判断されている。しかし、青木は例文(31)(32)のような置き換えができず、動作主性が無生である場合の「縮む」に対して、適切な説明を与え

ていない。

- | | |
|-------------------------------------|------|
| (27) なかなかシュートが <u>決まらない</u> 。 | (再掲) |
| (28) なかなかシュートが <u>決められない</u> 。 | (再掲) |
| (29) 荷台が高すぎて荷物が <u>載らない</u> 。 | (再掲) |
| (30) 荷台が高すぎて荷物が <u>載せられない</u> 。 | (再掲) |
| (31) このセーターは熱湯で洗っても <u>縮まない</u> 。 | (再掲) |
| (32)#このセーターは熱湯で洗っても <u>縮められない</u> 。 | (再掲) |

筆者の印象では、例文(27)～(32)にはやはり意味合いが若干異なるニュアンスが含まれると感じる。例文(27) (29)は確かに例文(28) (30)と置き換えても表現事実の違いが生じないと思われるが、ニュアンスには例文(27) (29)の客観性が高いため、事象の事実に視点が置かれている。例文(28) (30)には文脈の背景にある動作主の能力と事象の可能性に視点が置かれ、「実現」「可能」を強調している。例文(31)は文脈の背景に人間の存在がないため、視点は「セーター」にしか置かれない。しかし、例文(32)の「縮められない」はなぜ置き換えが不可能なのか、構文の中の意志性に関わると推測されるが、分析が行われていない言語現象である。また、なぜ《可能》の意味合いが含意されているのか。このような疑問点も含めて考察する必要がある。

青木(1997)はタイプ4に2種類が存在していると主張している。1種類は動作主性が有生であり、「見える」のような自動詞である。もう1種類は動作主性が無生であり、「切れる」のような自動詞である。両者が《可能》の意味が含まれる理由に対して、前者の場合には青木が「人間に生得的に与えられている能力を表す「見える」「聞こえる」には《可能》が含意されていて、主体の意志によって影響を受けるものではないことから、「(ら)れる」「ことができる」というどちらの表現形式とも共起できないものとする」というように説明している。後者については、動作主性が無生である「切れる」「折れる」などの自動詞が《可能》の意味を含意するのは、道具としての意味役割持つ場合であると述べている。道具の性能を表す場合も可能構文の意味分類の一つであるため、《可能》が含意されていると思われる。

以上の記述の中で、例文(31)のような動作主性が無生で、構文から「縮む」の背後に人の働きかけがないものを除き、タイプ3とタイプ4の構文から自動詞の背後に人の働きかけや人の参与に関係がある自動詞が《可能》を含意されることが分かる。

また、青木は Hopper and Thompson(1980)の研究と Jacobsen(1991)の研究を踏まえ、《可能》の成立を3つの要因から考察している。3つの要因については、①主体の「動作主性」、②意味役割、③動詞の「意味特徴」である。

Hopper and Thompson(1980)では、「意志性」には主体が有生なのか、あるいは無生なのかという「動作主性」の要因が関係していると述べている。そして、「動作主」「被動者」あるいは経験者といった主体の「意味役割」という要因が挙げられている。

Jacobsen(1991)には、関与物が一つしか関わっていない次の例文(33) (34)のような自動詞構文にも、「動作主」と「客体物」の関係が成立するものであるとしている。

(33) 人が歩いている (A person is walking.) 意図的自動詞構文

(34) 花瓶が壊れた。(A vase broke.) 変化を表す自動詞構文

「意図」か「変化」かを表すのは「③動詞の「意味特徴」」になると思われる。青木(1997)は以上の3つの要因から考察した結果が次の通りである。

【表3】意味特徴

	表現形式	動作主性	主体の意味役割	自動詞の特徴
タイプ1	(ラ)レル コトガデキル	有生	動作主 被動者	動作性が強い 意志表出が可能
タイプ2	コトガデキル	有生	被動者	状態性が強い 意志表出が困難
タイプ3	—	無生	被動者(動作主の含意)	可能の含意の可能性
タイプ4	—	有生 無生	経験者 道具	可能の含意

(青木 1997:24)

青木(1997)は自動詞を中心に可能の接辞付加の状況について分析しているが、可能接辞が付加しにくい自動詞を動詞の意味から分類していない。可能形の接辞を付加しにくい動詞に対してどのような分類があるのかを考察する必要がある。

2.2.3 中野琴代(2008)

中野琴代(2008:103)は有対自・他動詞と無対自・他動詞の可能形を中心に分析し、可能構文の成立条件について述べている。三つの成立条件は次の通りである。

- 1) 動作主体性：有生主語がその動詞の表わす動作に於いて主体性を持つ
- 2) 文の命題内容：「それをかなえたい」という希望・期待を表現する
- 3) 音韻形態：「eru、reru」という形態を持つ。アクセント型も原形動詞とのつながりを示す補助となりえる。

他動詞がほとんど可能形を持っていて、上記の3つの条件が備えているという。自動詞も可能形が作れるものが多く、上記の3つの条件を満たすと可能構文で表すことができる。

(35) 車は急に止まれない。(動作主体「車」(擬人化)の能力条件)

(36) 規定により危険物はあずかれません。(動作主体の内的条件)

例文(35)は「動作主体「車」(擬人化)の能力条件」として分析されている。また、例文(36)

は「動作主体の内的条件」によって不可能な意味を表すと説明している。一方、可能構文の成立条件を満たしていない場合、可能構文では表されない。

(37) *足が弱まれて車椅子に乗れる。

例文(37)のように車椅子にずっと乗りたい人がいないため、自動詞「弱まる」は可能構文の命題内容の条件を満たしにくいいため、可能形「乗れる」が使われない。

従って、自動詞の中で可能形が存在しているものにしても、可能構文に使えるというわけではない。他動詞も同様であり、構文の中で上記の3つの成立条件が備えたら可能構文で使われるが、そうではない場合には可能構文は使用しない。この点については長友の主張と一致している。

また、中野(2008)では、可能形が存在していない自動詞を動作主体性の有無から分析し、「動作主体性が無いため不成立である」と主張しているが、動詞の意味分類が行われていないため、動詞の性質が可能形の付加にどのような影響を与えているのかは不明である。

以上の三者は成立条件に関わる要素と可能形が作れない自動詞の語形を考察するが、意味分類の視点からの分析、他動詞への分析もまだ不十分なところがあり、考察する余地が残っている。本章では、可能形の接辞を付加しにくい動詞の意味分類について何があるのかを解明し、動詞の意味素性との相関関係を考察する。

2.3 本章の研究手法

本節では、研究の対象と目的、研究方法、及び考察資料を述べて本章の問題意識を解決していきたい。

2.3.1 本章の研究対象と目的

第1章の「1.2.1 語形」で述べたように、本研究では五段動詞、一段動詞、カ変、サ変を対象にして考察する。動詞を活用の観点から五段動詞、一段動詞とカ変動詞、サ変動詞に分けて分析する。

五段動詞、一段動詞の可能形の接辞付加については早津(1987、1989)の自・他動詞を中心に考察する。早津(1987、1989)は『分類語彙表』などを参考し、自・他動詞を分け、意味分類している。本節では早津が取り上げている自・他動詞の可能形の接辞付加を考察する。筆者が次の資料から自・他動詞を抽出する。

【表 4】自・他動詞の考察資料³⁾

	早津(1987)	早津(1989)
有対自動詞	128	
無対自動詞	158	
有対他動詞		126
無対他動詞		269
合計	286	395

一方、サ変動詞の可能形の接辞付加については次の 1) と 2) とする。

- 本研究で考察する語形
- 1) (二字)漢語+できる
 - 2) (二字)漢語+することができる

カ変動詞とサ変動詞の考察内容については、次の論文や辞典から抽出する。サ変動詞が一文字漢語サ変動詞、二文字漢語サ変動詞などがあるが、考察資料の中に二文字漢語サ変動詞が多いため、今回の考察は二文字漢語サ変動詞を考察する。

【表 5】漢語サ変動詞の考察資料⁴⁾

	動詞数	二文字漢語サ変動詞
庵功雄(2008)		126
相澤正夫(1993)	1080	887
『日本語基本動詞用法辞典』	729	162

庵功雄(2008:47)では漢語サ変動詞の選定範囲を日本語能力試験 1 級以内の日中同形語の自他動詞に絞っている。庵功雄(2008)では中国語母語話者の漢語サ変動詞の自・他動詞の使用について考察しているが、可能表現に関しては触れていない。

相澤正夫(1993)では『日本語教育のための基本語彙調査』をもとにして複合サ変動詞を対象にして 1080 語が取り出されている。また、語幹部の意味分野や語種の違いによってその分布状況を分析している。本研究では二文字の漢語を対象とするため、1080 語から 887 語を抽出した。同様に『日本語基本動詞用法辞典』から二文字の漢語を 162 語抽出する。

本章の研究目的は五段動詞、一段動詞、カ変動詞と二文字漢語サ変動詞から動詞の可能形の接辞付加を考察し、可能形を付加しにくい動詞がどのような意味分類があるのかを明らかにする。また、可能形の接辞を付加しにくい分類に属している動詞に対して意味素性を分析し、接辞を付加しない要因を解明する。

2.3.2 本章の研究手法

まず、可能形の確認については、早津(1987、1989)の自・他動詞に対し、辞書『新選国語辞書第 8 版(小学館)』『岩波国語辞典第 6 版(岩波書店)』の自・他動詞の記載を参考し、先行研究と一致するものを確認し、一致しないものを除く。

そして、可能形の判定に関しては、日本語のネイティブスピーカーである大学院生(3人)にチェックしてもらう。漢語サ変動詞については現代日本語書き言葉均衡コーパス⁵⁾で「漢語サ変動詞+できる」(A)、「漢語サ変動詞+ことができる」(B)をキーワードにして、グループにわけ、それぞれの用例数を統計し、使用実態を分析する。

次に、可能形の接辞を付加しないものを抽出して、早津の意味分類を参考して分類し、データ化する。

最後に、語形から日本語の可能形の接辞を付加しない動詞の意味素性を分析し、可能形の接辞を付加しない要因を明らかにする

2.3.3 本章の考察資料

考察資料は以下の通りである。

1) 小説類(左の文字が資料の略称である)

『ノ』: 村上春樹(2004)『ノルウェイの森(上)(下)』講談社文庫

『窓』: 黒柳徹子(1984)『窓際のトットちゃん』講談社

『1Q84(1)日』: 村上春樹(2009)『1Q84(book I)』新潮社

『1Q84(2)日』: 村上春樹(2009)『1Q84(book II)』新潮社

『海(上)』: 村上春樹(2002)『海辺のカフカ(上)』新潮社

『海(下)』: 村上春樹(2005)『海辺のカフカ(下)』新潮社

『中』: 村上春樹(1997)『中国行きのスロウ・ボード』中央公論社

2) 辞典・資料類・学習類

『日ヴォ』: 大東文化大学外国語学部日本語学科(1997)『日本語のヴォイスに関する用例集—受身・使役・可能—』日本語学研究資料用例集①

『外』: 文化庁(1971)『外国人のための基本語用例辞典』(第二版)大蔵省印刷局

《日動》: 潘贤忠・张国强(2001)《日语常用自他动词用例》北京工业大学出版社

3) [BCCWJ]: 中納言

2.4 五段・一段動詞の可能形の接辞付加

可能構文が可能形で表すが、全ての動詞が可能形を持っているというわけではない。どういうものが可能形の接辞を付加しにくいのかを①無対自動詞と有対自動詞、②無対他動詞と有対他動詞の中で調べる。自・他動詞と可能形の接辞の有無を考察し、可能形の接辞を付加しやすいものと付加しにくいものを統計する。次の表6にまとめる。

【表6】接辞付加の可否⁶⁾

	接辞を付加しやすい動詞	接辞を付加しにくい動詞
無対自動詞(157)	65	92
有対自動詞(126)	22	104
無対他動詞(269)	222	47
有対他動詞(125)	116	9
合計	425	252

(筆者作成)

これからは「可能形を付加しにくい」場合と「可能形を付加しやすい」場合に分け、順次に分
析していく。そして、可能形の接辞を付加しにくい動詞が可能形にならない要因と可能表現の成
立条件に関わる要素を通して分析する。

2.4.1 可能形の接辞を付加しにくい無対・有対自動詞

この節から自動詞の可能形を付加しにくい動詞の分類と意味特徴を分析してから、他動詞の可
能形の接辞を付加しにくい内容を分析していく。

まず、①無対自動詞と有対自動詞の可能形の接辞付加については次のような結果が得られた。

【表 7】 可能形の接辞を付加しにくい自動詞

分類 番号	意味分類	自動詞の数		接辞を付加しにくい自動詞	
		無対	有対	無対	有対
1	物や人の静的状態や性質	28	3	25	3
2	人の動作・行為・表情など	63	2	12	2
3	人の感情・精神的な状態など	21	1	12	1
4	天候・気象・時間の経過など	14	0	14	0
5	人や動植物の自然な生育に関する事象や、人や動植物の状態に生じる自然や変化など	18	3	18	3
6	物の属性や物理的と特性の一つ、例えば形・大きさ・長さ・温度・湿度・品質・数量・強度・向きなどが変化する事象	4	55	4	51
7	物の移動すなわち物の存在場所が変化する事象	1	11	1	3
8	ある物に付着していた物がそこから取り除かれたり、ある場所に存在していたものがそこに存在しなくなったりする事象	0	8	0	6
9	物がある場所に存在あるいは接触するようになる事象を表す自動詞があり、これらもほとんどが有対自動詞である	1	25	1	20
10	抽象的な事柄や事態そのものの変化	4	17	4	13

(早津 1987 の分類をもとに筆者作成)

【表 7】の左側にある意味分類が早津(1987)の分類で、対応している右側のデータがそれぞれの「動詞数」と「接辞を付加しにくい」動詞数である。便宜上、表 7 に「無対自動詞」を「無対」に、「有対自動詞」を「有対」と略す。分類[1]には無対の動詞数が 28 で、可能形の接辞を付加しにくい動詞数が 25 である。つまり、付加する無対自動詞が 3 である。また、「有対」の動詞数が 3 であり、可能形の接辞を付加しにくい動詞も 3 である。「無対」と合わせ、28 個動詞が可能形の接辞を付加しにくいことが分かる。このような付加しにくいものが分類[4]、分類[5]、分類[6]、分類[8]、分類[9]にも多く、可能形の接辞を付加しにくい分類であると言える。このような分類に対して、順次意味分類と動詞の性質を見ていく。

1) 分類[1]物や人の静的状態や性質を表す自動詞

無対自動詞:ある、ありふれる、優れる、異なる、聳える、要る、偏る、など。

有対自動詞:見える、聞こえる、知れる

分類[1]は、物や人の「静的状態」や「性質」を表す自動詞は殆ど無意志動詞であるため、可

能形は使いにくい。無情物が主語になっている場合は動詞の主体が物であり、視点が物に置かれ、物の「静的状態」や「性質」を表す(例文 38)。同じく有情物が主語になっている場合は例文(39)のように動詞の主体が人であり、視点が人に置かれ、人の「静的状態」を表す。

(38) ピンク色の桃の花の向こうに、富士山がそびえる。(BCCWJ)

(39) 閉じたまぶたの裏に、二人の姿が見える。(BCCWJ)

有対自動詞である「見える」、「聞こえる」「知れる」の他動詞は「見る」、「聞く」、「知る」に対応する。人の意志性があるかどうかという問題点は構文の中で判断する必要がある。例文(39)の場合は見たくないと思っても自ら出てくる時もあり得る。自分の意志でコントロールができない場合に主体性が弱い。

先行研究では Jacobsen(1991)が「意図的自動詞構文」「変化を表す自動詞構文」について分析している。この例文(38)が人間の働きと関係なく、「静的状態や性質を表す自動詞構文」である。

2) 分類[4]天候・気象・時間の経過などを表す自動詞

無対自動詞:晴れる、曇る、降る、ふぶく、映える、(時間が)経つ、など。

有対自動詞:なし

分類[4]は殆ど可能形を付加しない自動詞である。典型的な無意志動詞の種類であると思われる。人間の働きかけと関係がない。

3) 分類[5]人や動植物の自然な生育に関する事象や、人や動植物の状態に生じる自然や変化などを表す動詞

無対自動詞:死ぬ、病む、疲れる、しびれる、咲く、茂る、実る、枯れる、しぼむ、かぶれる、など。

有対自動詞:育つ、覚める、癒える

分類[5]自動詞は人との関わりがあるものが生理的な事象であり「死ぬ」「病む」「疲れる」という動詞がある。人の意志によってコントロールができないものであるため、可能形の接辞を付加しにくいと思われる。また、変化を表す動詞は「花が咲く」「花が枯れる」「花がしぼむ」のように、自然現象であり、主語である主体自身の変化を表す。「意図性」がない「変化を表す自動詞構文」になる。

4) 分類[6]物の属性や物理的と特性の一つ、例えば形・大きさ・長さ・温度・湿度・品質・数量・強度・向きなどが変化する事象を表す自動詞。

無対自動詞:腐る、錆びる、濁る、腫れる

有対自動詞:折れる、切れる、砕ける、潰れる、破れる、裂ける、縮まる、焼ける、焦げる、冷える、など。

分類[6]有対自動詞が多く、可能形を付加しないものも多い。「折れる」「切れる」「砕く」等に
対応している他動詞は「折る」「切る」「砕く」などがある。前章の「1.3.2.3 有対自動詞」の記
述と重なるが、早津(1987:83)は有対自動詞の本質的な特徴について2つの内容を述べている。さ
らに、「非情物の変化」について「外因的な変化」と「内発的な変化」に分けて説明している。無
対自動詞の「腐る」「錆びる」「濁る」等の動詞は物質の内在的な変化を表すため、人為的な働き
かけが背景に潜んでいない。人間の働きと関わりが薄く、物の属性や特性を表す場合は意志性が
表せない。しかし、「折れる」「切れる」「砕ける」などの自動詞は外的な原因で発生した変化を表
し、人間の働きかけが背景に潜んでいる。視点を主語である無情物に置かれると推測される。

(40) この刀はよく切れる。

例文(40)のように人間の働きかけが無ければ、「この刀」の属性が分からないことであるが、「切
れる」ことが「刀」の性質を指しているため、客観性が高い。この分類から分かるように「変化
を表す自動詞構文」は「外因的な変化を表す自動詞構文」と「内発的な変化を表す自動詞構文」
に分けられる。前者は外的な働きかけが背景に潜み、人間の働きかけである場合に意志性が生じ
る。後者には意志性がない。この点について前者と後者の動詞のニュアンスが少し異なるところ
である。

- 5) 分類[8]ある物に付着していた物がそこから取り除かれたり、ある場所に存在していたも
のがそこに存在しなくなったりする事象を表す自動詞
無対自動詞:なし
有対自動詞:はずれる、剥がれる、はげる、ほどける、もげる、取れる

この部分では有対自動詞しかない。意志性がある他動詞「はずす」「剥く」などの対応してい
る「はずれる」「剥がれる」のような自動詞は外因的な変化を表す場合もあれば、内発的な変化も
存在する。

(41) それを一回引っぱれば、ホースが洗濯機本体からはずれる。

(42) それとも、爪が剥がれるのはうちの子だけなのでしょうかね？

例文(41)の場合には人間の働きかけがあって、「はずれる」ことになる。視点が「ホース」に
あるが、人間の意志性が背景に潜んでいる。例文(42)の場合は自然に発生している現象で、内発
的な変化であり、意志性がないと思われる。

- 6) 分類[9]物がある場所に存在あるいは接触するようになる事象を表す自動詞があり、これら
もほとんどが有対自動詞
無対自動詞:こもる

有対自動詞:納まる、付く、埋まる、詰まる、重なる、並ぶ、備わる、はまる、揃う、当たる、など。

この部分の自動詞も無対自動詞より有対自動詞のほうが多く、事象の状態を表す。対応している他動詞があるため、自動詞の状態の存在が何らかの働きかけがあり、客観的な角度から事象を表す動詞であると見られる。人間の働きかけを視点に置かれていないため、他動性も弱く、意志性もないと考えられる。

7) 分類[10]抽象的な事柄や事態そのものの変化を表す自動詞

無対自動詞:こじれる、寂れる、栄える、はかどる

有対自動詞:始まる、定まる、決まる、改まる、済む、滅ぶ、絶える、など。

早津(1987)では、この類の自動詞の性質については「第四類の動詞が表しているのは自然現象といえる事象であるのに対し、この類の動詞が表しているのはその成立に関わっている『人』の存在が感じられる事象であるという点である」と述べている。第四類の動詞は人間と関係がなく、無対自動詞であるため、意志性が感じられない。しかし、この分類で「始まる」「定まる」「決まる」のような有対自動詞の背景に人間の働きかけがあり、意志性がある。視点が事柄や事態に置かれているため、「可能」を含意するかどうかについては曖昧になってしまう。

可能形になりにくい自動詞を「人」の存在感⁷⁾が弱いものから強いものへ並べる。

【無対自動詞】

弱 分類[1] (例:ある、ありふれる、優れる、異なる、など)
↓
分類[4] (例:晴れる、曇る、降る、ふぶく、映える、など)
↓
分類[6] (例:腐る、錆びる、濁る、腫れる)
↓
分類[5] (例:死ぬ、病む、疲れる、しびれる、咲く、茂る、など)
↓
分類[9] (例:こもる)
↓
強 分類[10] (例:こじれる、寂れる、栄える、はかどる)

【有対自動詞】

弱 分類[8] (例:はずれる、剥がれる、はげる、ほどける、など)
↓
分類[9] (例:納まる、付く、埋まる、詰まる、重なる、など)
↓
分類[6] (例:折れる、切れる、砕ける、潰れる、など)
↓
分類[10] (例:始まる、定まる、決まる、改まる、済む、など)
↓
分類[5] (例:育つ、覚める、癒える)
↓
強 分類[1] (例:見える、聞こえる、知れる)

【図2】自動詞の意味分類による意志性の強弱

【無対自動詞】の分類[1]の「優れる」「聳える」「劣る」「秀でる」のような形容詞に似たよう

に動詞の意志性が弱い。たとえ「人」との関わりがあっても「優れる」のような動詞が形容詞の性質を持っているため、人の意図や意志を表しにくいものである。また、天気や物理的な事象を表すものである分類[4]と分類[6]は背景に人との働きかけがない。分類[5]の「死ぬ」「病む」のような動詞は人間の意志でコントロールできるものではないため、主体性が弱いと考えられる。分類[1][4][6]と同じく主体性と意志性が弱いように思われる。分類[9][10]も「人」の存在が感じられるが、人間の意志でコントロールできないものであるため、意志性が弱いと思われる。

【有対自動詞】は【無対自動詞】より「人」の存在感が強い。例えば、「定まる」「決まる」「育つ」「見える」「聞こえる」など。だが、分類[8]は事物側の角度から客観的に事象を描写するニュアンスが強く、分類「5」「1」と比べ、「人」の存在感が薄いと思われる。

2.4.2 可能形の接辞を付加しにくい自動詞の意味特徴

可能形の接辞を付加しにくい動詞の特徴に対して、【表 8】のようにまとめた。横の行に分類(1)、分類(4)、分類(5)、分類(6)、分類(9)、分類(10)を示し、それぞれの分類に一つの語例を挙げ、「参加者」「意志性」の有無、動作主性、目的語の有無、能動/受動の要素に対して動詞の性質について考察した。

【表 8】 無対自動詞の意味素性

分類	(1)	(4)	(5)	(6)	(9)	(10)
語例	優れる	晴れる	咲く	錆びる	こもる	寂れる
参加者(1人) ⁸⁾	+	-	-	-	+	+
意志性	-	-	-	-	-	-
動作主性	-	-	-	-	+	+
目的語	-	-	-	-	-	-

【表 8】の参加者は「人」の存在を表し、「+」で示す。分類[4][5][6]には人間の参加がない場合を「-」で示している。この6つの分類で意志性が殆ど見られないが、「人」の存在があると思われていても「優れる」のような形容詞の性質を持っている動詞や、「寂れる」など、その実現を望むことが有り得ない動詞の意志性が薄い。動作主性の角度から見れば、「天気が晴れる」「刀が錆びる」のように主語が無情物である動詞に「-」を付けた。「咲く」のような自動詞の場合には「花が咲く」のように蕾から開花までの変化を表し、物質の内発的な変化であるとする。従って、動作主が物質自身であり、内発的な変化を表す。この6つの分類の動詞はほとんどヲ格をとらないため、目的語が存在しないと考え、「-」にした。

【表9】有対自動詞の意味素性

分類	(1)	(3)	(5)	(6)	(8)	(9)	(10)
語例	見える	苦しむ	育つ	切れる	剥がれる	埋まる	始まる
参加者(1人)	+	+	+	-/+	-	-/+	-/+
意志性	-/+	-	-/+	-/+	-	-	-
動作主性	+	+	+	-/+	-	-/+	-/+
目的語	-/+	-	-/+	-	-	-/+	-/+

【表9】の「見える」のように有情物の行為を「+」にしている。「切れる」の場合は「この刀がよく切れる」のように無情物の性質を表すと思われる。だが、人間の行為を通して、刀の性質が分かるようになるので、人間の参加が構文の背景にあると考えられ、参加者の所に「-/+」を付けた。「穴が埋まる」「映画が始まる」は「切れる」と同じ、人間の行為の働きかけがないと実現できないことであるため、「-/+」にした。意志性の部分では「見える」の意志性が構文によってあるかないかを判断する。

(43) 今日晴れなので、富士山が見える。

(44) 9階に登ったら、富士山が見える。

例文(43)は見たくなくてもこの事実が存在している。例文(44)の場合は人の意志があれば実現できる。前文の状況が異なるため、意志性の有無も異なる。動作主性は人間の行為である「見える」が「+」で「有生」を示している。「この刀はよく切れる」と「この刀が錆びて切れない」のように「動作主性」を判断しにくい場合がある。目的語を判断しにくい場合もあり、「苦しむ」のように判断しやすいものもあり、有情物の感覚なので目的語がない。

2.4.3 可能形の接辞を付加しにくい無対・有対他動詞

他動詞は殆ど可能形の接辞を付加しやすいと思われるが、付加しにくい場合も少なくない。どんな性質の他動詞が可能形の接辞を付加しにくいのかを考察した。以下の【表10】に纏める。

【表 10】他動詞と可能形の接辞付加⁹⁾

分類 番号	意味分類	他動詞の数		可能形を付加しにくい他動詞	
		無対	有対	無対	有対
1	変化	6	70	0	1
2	移動	1	9	0	0
3	設置	14	21	0	1
4	除去	7	7	0	0
5	再帰的	21	6	11	5
6	所持・保有	11	2	1	0
7	飲食	5	0	1	0
8	授受	29	2	6	0
9	打撃・接触・利用	23	0	0	0
10	感情・評価	27	0	15	0
11	態度	14	2	6	1
12	発話・伝達・要求	20	1	0	0
13	思考・判断・知覚	16	2	0	0
14	追求・探求	16	0	0	0
15	逃避・防御・遮断	20	0	3	0
16	関係・状態	6	0	1	0
17	生産	14	1	0	0
18	形式動詞的	7	0	1	0
19	その他	10	3	2	0

(意味分類は早津 (1989:353) による)

表 10 から「可能形を付加しにくい他動詞」の「無対」と「有対」に動詞数が少ないことが分かる。例えば、分類[1]に他動詞の「無対」の動詞数が6個で、「有対」の動詞数が70個であるが、対応している「可能形を付加しにくい他動詞」の動詞数がそれぞれ「0」と「1」であった。つまり、この分類の他動詞は可能形の接辞を付加しやすいことが分かる。一方、「可能形を付加しにくい他動詞」の動詞数が多い分類[5][8][10][11]は可能形にならないという意味特徴もっている。

1) 分類[5]再帰的

無対他動詞: 失う、病む、患う、挫く、損ねる、損なう、しくじる、(顔を)しかめる、(眉を)ひそめる、(口を)つぐむ、(顔を)そなける、など。

有対他動詞: 眠らす、腫らす、覚ます、(おなかを)すかす、(目を)覚ます

分類[5]は再帰性¹⁰⁾がある他動詞で、可能形にならないものが多い。可能形にならないものは事象から成り立たない事であるため、可能形で表さない。しかし、可能形になる再帰性を持って

いる他動詞も存在している。

(45) 腕が良くなったので、上げられる。

(46)? 早く寝れば、(目を)覚ませる。

例文(45)は再帰性があり、可能形で表すが、例文(46)の「覚ます」は他動性があるが、事象から不可能であるため、不自然である。

また、この分類では再帰性より望まない意味合いの動詞が少なくない。例えば、「失う」、「病む」、「患う」、「挫く」など。可能構文の成立が命題内容にも関わりがあるため、これらの動詞は可能形が付きにくい。

2)分類[8]授受

無対他動詞: 差し上げる、くださる、くれる、よこす、授かる

「差し上げる」「くださる」「くれる」は可能構文と共起しにくい、「もらう」「頂く」が「頂ける」のように可能構文で使える。授受表現の中でなぜ「差し上げる」「くださる」「くれる」が可能構文と共起しにくいのか、今後の課題にしたい。

3)分類[10]感情・表現

無対他動詞: 恐れる、好む、嫌う、憎む、羨む、惜しむ、悔やむ、哀れむ、慕う、恨む、いとう、卑しむ、恥じる、いぶかる、怪しむ

これらの無対他動詞は感情を表すものが多く、人の意志でコントロールできる事象ではない。自動詞である「走る、歩く、寝る」等は動作主の意志によって実現する可能性があるが、「好む、嫌う、憎む、羨む、など」の動詞が人間に特有な他動詞であるため、動作主の意志性によって左右されない。

4)分類[11]態度

無対他動詞: 励ます、おだてる、いたわる、責める、けなす、いじめる

有対他動詞: 負かす

分類[11]では良くない事象を表す動詞が多いが、そうでない「励ます」のような良い事柄を表す他動詞も存在している。渋谷(1993)で取り上げている「命題内容」については文脈の適切性が問われることだけではない。この分類の接辞付加から命題内容の適切性のほかに語形上の制限もあることが分かった。

2.4.4 可能形の接辞を付加しにくい他動詞の意味特徴

接辞を付加しにくい他動詞の分類[5][8][10][11]についてそれぞれの意味特徴を次の表 11 で

分析した。

【表 11】可能形の接辞を付加しにくい他動詞の意味素性

	分類(5)	分類(8)	分類(10)	分類(11)
語例	失う	さしあげる	恐れる	いじめる
参加者(1人)	+	+	+	+
意志性	-	+	-	+
動作主性	+	+	+	+
目的語	+	+	+	+

他動詞は目的語があるが、意志性がない他動詞もある。

(47) チャンスを失った。

(48)?(欲しくない)チャンスを失えた。

可能形の接辞を付加しにくい他動詞には殆ど参加者がいるが、全てに意志性があるというわけではない。動詞の性質が意志性の有無に関わっている。動作主性については、殆ど人間の行為を表す動詞であるが、能動/受動になるものとならないものがそれぞれある。

2.4.5 可能形の接辞を付加しにくい自動詞と他動詞の要因

可能形にならない要因が自動詞と他動詞の意味特徴によって異なる。自動詞の場合は動詞の意味特徴に人間の存在があるかどうか、人間のコントロールに左右されるかどうかという要因が人間の相互関係の要素にある。他動詞の場合には動詞の意味合いが望みであるかどうか、あるいは非再帰性をもっているかどうかという要因がある。また、他動詞であるが、人間の存在があっても人間自身のコントロールができない性質を持っている動詞も可能形の接辞を付加しにくい要因の一つになる。

【自動詞】1)人間の働きかけとコントロールの強弱に制限されるもの。【表 12】の通りである。

2)動詞の性質が形容詞であるもの。

例：(人間に関するもの) 優れる、秀でる、似合う、似る、等
(物に関するもの) 聳える、冴える、優れる、秀でる、等

【表 12】自動詞の分類¹¹⁾

	語例	働きかけ	コントロール	人間の存在
自然現象	晴れる、曇る、降る、(風が)吹く、(雪が)積もる、ふぶく、しける、映える、等	なし	不可能	なし
事物の状態	ある、属する、等	なし	不可能	なし
事物の変化(内発)	腐る、錆びる、濁る、腫れる、等	なし	不可能	なし
事物の変化(外因)	切れる、納まる、決まる、備わる、等	なし	不可能	△
抽象的な現象	こじれる、寂れる、栄える、はかどる	なし	不可能	あり
生理の変化	死ぬ、病む、疲れる、しびれる、	なし	不可能	あり

【他動詞】 1) 命題内容の制限

例: 飽きる、呆れる、懂れる、焦る、怒る、慌てる、めいる、いじめる、怠る、誤る、責める、等等。

2) 感情・心理・態度

例: 励ます、おだてる、いたわる、責める、けなす、いじめる、恐れる、好む、嫌う、憎む、羨む、惜しむ、悔やむ、哀れむ、

3) 授受表現

例: 差し上げる、くださる、くれる、よこす、授かる、等

4) 再帰的

例: 失う、病む、患う、挫く、損ねる、損なう、しくじる

以上の分析は単に動詞の意味特徴を単位として分析した。構文の中に何らかの影響で動詞の意味特徴と反するニュアンスが生じる可能性もあると推測されるため、この点については「2.5 節」で述べる。

2.4.6 自・他動詞と可能形の対応関係

前節で自・他動詞は可能形の接辞を付加するかしないかで動詞の性質を見てきた。しかし、「届く(自動詞)―届ける(他動詞)」のような有対自・他動詞に可能形の接辞付加は「届く(自動詞)―?(可能形)」「届ける(他動詞)―届けられる(他動詞の可能形)」のように対応関係が非対称である。この節では自・他動詞と可能形の対応を考察し、様々な対応関係を分析する。

次の【表 13】では代表的な実例を取り上げ、8つのパターンに纏めてみる。真ん中の2列に自動詞と他動詞が対応していて、隣にはそれぞれのを並べる。

自・他動詞と可能形の対応が複雑で、無対自動詞の中で可能形を持っているもの、可能形を持っていないものがある(表 13 の 1 と 2)。無対他動詞も同じである(表 13 の 3 と 4)。有対自動詞の場合は可能形を持っているものと可能形を持っていないものがある(表 13 の 5)。さらに複雑なの

は自動詞と他動詞の可能形が同形である場合(表 13 の 6)、他動詞と自動詞の可能形と同形である場合(表 13 の 7)と自動詞・他動詞が同形である場合(表 13 の 8)である。

【表 13】 自・他動詞と可能形の対応関係

	自動詞の可能形	自動詞	他動詞	他動詞の可能形
1	φ	ふぶく	—	—
	φ	映える	—	—
2	歩ける	歩く	—	—
	来られる	来る	—	—
3	—	—	失う	φ
	—	—	くれる	φ
4	—	—	置く	置ける
	—	—	剃る	剃れる
5	φ	早まる	早める	早められる
	止まれる	止まる	止める	止められる
6	抜けられる	抜ける	抜く	抜ける
7	立てる	立つ	立てる	立てられる
8	φ	ひらく	ひらく	ひらける

【表 13】の 1 は無対自動詞で可能形が存在していないものである。2 の場合は可能形が存在する。無対他動詞の可能形がない 3 と可能形がある 4 がある。無対自・他動詞に可能形の接辞を付加しにくい要因については前節で分析した。5 の「早まる」「早める」は語形が異なり、自動詞なのか、自動詞の可能形なのかは分かりやすい。6 は自動詞「抜ける」と他動詞の可能形と語形が同じであるが、性質が異なるものである。「抜ける」が自動詞なのか、他動詞の可能形なのかを判断するのは構文の意味合いを通して判断しなければならない。7 も同じである。8 の「ひらく」が両用動詞であるが、自動詞は使われる時に可能形が存在しない。

【表 13】は一つの動詞に一つの可能形に対応する場合である。自動詞が 2 つか、2 つ以上の場合には可能形がどうなっているのか、さらに複雑な場合が存在している。また、他動詞が 2 つ、3 つの場合にどういう可能形と対応しているのかを調べてみる。次の【表 14】で纏める。

【表 14】 自動詞と自動詞の場合

	自動詞の可能形	自動詞	他動詞	他動詞の可能形
1	休める	休む	—	—
	—	休まる	休ませる	φ
2	φ	増す	増やす	増やせる
	—	増える	増やす	増やせる
	φ	増さる	増さらす?	—
3	浮ける	浮く	—	φ
	浮かべる	浮かぶ	浮かせる	φ
	浮かれられる	浮かれる	浮かべる	浮かべられる
4	φ	のぼる	のぼらす	のぼらせる
	φ	のぼせる	—	—
5	転がれる	転がる	転がす	転がせる
	転げられる	転げる	—	—

【表 14】の対応関係に対して、述べたいことは一つの単語に対していくつかの用法があり、対応関係は意味と用法の中で共通している項目だけ対応しているというふうに分析する。全ての意味用法が対応しているというわけではない。形態上から動詞の対応関係が非対称であることが分かる。例えば、「のぼせる」に対応する他動詞と他動詞の可能形が存在していない。一方、「浮かれる」が対応する他動詞もあり、自動詞と他動詞の可能形も存在している。しかも、「浮かべる」(他動詞)は「浮かぶ」(自動詞)の可能形の語形と同形語である。

そして、複数の他動詞の可能形にも同じ現象がある。次の【表 15】の通りである。

【表 15】 他動詞と他動詞の場合

	自動詞の可能形	自動詞	他動詞	他動詞の可能形
1	抜けられる	抜ける	抜く	抜ける
	—	—	抜かす	抜かせる
2	φ	欠ける	欠く	φ
	—	—	欠かす	φ
3	φ	聞こえる	聞く	聞ける
	—	—	聞かす	聞かせられる
4	—	—	授かる	φ
	—	—	授ける	φ
5	—	—	預かる	預かれる
	—	—	預ける	預けられる

【表 15】から分かるように対応関係が非対称的であり、他動詞「授かる」「授ける」のように

対応する自動詞も存在せず、可能形も対応しない。また、同形語である「抜ける」が自動詞であり、他動詞の可能形と同形である。

2.5 漢語サ変動詞の可能形の接辞付加

本節では各グループの考察結果をまとめ、形式から分析していく。形式については漢語サ変動詞の接辞付加の実態と使用率を分析する。

2.5.1 漢語サ変動詞と可能形の共起

考察資料から(A)「漢語サ変動詞+できる」、(B)「漢語サ変動詞+ことができる」をキーワードにして、4つのグループに分けた。次の通りである。

【表 16】漢語サ変動詞と「できる」「することができる」の共起

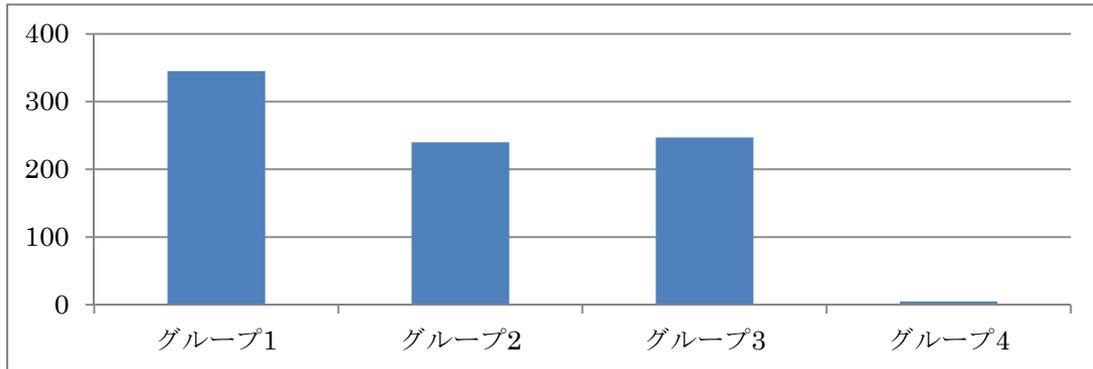
グループ	語例	A	B
1 (35) 語	利用する、変更する、理解する、確認する、指定する、申請する、使用する、説明する、選択する、延長する、分類する、決定する、指示する、参加する、提出する、処理する、指摘する、表現する、評価する、確保する、活用する、適用する、実現する、設置する、発揮する、発見する、維持する、公表する、判断する、計算する、実施する、推測する、主張する、発行する、要求する、対抗する、解釈する、整理する、交付する、想像する、観察する、構成する、購入する、保存する、管理する、許可する、区別する、改善する、禁止する、実行する、処分する、獲得する、認識する、調査する、解決する、体験する、省略する、支給する、生活する、移動する、撮影する、記録する、継続する、短縮する、拒否する、検査する、開始する、停止する、停止する、実感する、証明する、調整する、行動する、比較する、見学する、回復する、検討する、修正する、制限する、期待する、特定する、展開する、予想する、吸収する、監視する、採用する、経営する、追加する、開催する、確定する、設立する、除外する、操作する、実践する、入学する、存在する、強化する、依頼する、満足する、集中する、成長する、無視する、予防する、防止する、肯定する、緩和する、承認する、中止する、生長する、接続する、出席する、生産する、印刷する、収容する、通過する、形成する、転換する、観測する、拡大する、経験する、派遣する、保証する、命令する、分離する、放棄する、組織する、棄権する、相談する、相談する、相談する、活動する、供給する、等等	有	有

2 (210語)	<p>照明する、主張する、収穫する、出場する、反映する、感動する、退院する、代用する、運動する、断定する、通信する、卒業する、外出する、出品する、共存する、回答する、妊娠する、作業する、独占する、入浴する、修理する、勝負する、避難する、投資する、投資する、進出する、乗車する、入場する、同感する、料理する、掲載する、輸出する、決断する、送金する、研究する、出演する、進学する、通勤する、帰宅する、散歩する、上陸する、着陸する、結論する、楽観する、案内する、出産する、出勤する、出世する、妥協する、着手する、入院する、解放する、独立する、競争する、見物する、一周する、改良する、商売する、訪問する、通学する、食事する、休憩する、反撃する、面会する、一致する、電話する、掃除する、改革する、往来する、当選する、解答する、勤務する、応援する、換算する、動作する、翻訳する、繁殖する、入国する、登場する、解説する、充実する、歓迎する、喧嘩する、新築する、配達する、開通する、握手する、承知する、加減する、批評する、作製する、辛抱する、発電する、意見する、空想する、細工する、試合する、結果する、挨拶する、相当する、低下する、上昇する、興奮する、挨拶する、審議する、報道する、反抗する、注射する、開拓する、冷凍する、復習する、創作する、禁煙する、演技する、発掘する、読書する、発掘する、航海する、借金する、稽古する、配列する、等等</p>	有	無
3 (247語)	<p>執着する、付属する、記念する、合計する、一変する、経由する、混雑する、発足する、動揺する、終始する、進歩する、進歩する、発病する、嫉妬する、出血する、流行する、予定する、循環する、催促する、見物する、侮辱する、噴出する、重宝する、相違する、停滞する、妥当する、行進する、中傷する、振動する、暴露する、油断する、誘惑する、沈黙する、診察する、消耗する、出張する、決心する、発車する、拝見する、蒸発する、崇拜する、企画する、承諾する、装置する、遅刻する、失礼する、沸騰する、集合する、降伏する、開会する、構想する、用心する、伝染する、戦死する、脅迫する、浪費する、戦争する、会談する、墜落する、無理する、会見する、滅亡する、酸化する、誤解する、代理する、故障する、欠席する、化粧する、憤慨する、視察する、演説する、侵略する、退屈する、講演する、失望する、迷惑する、恐縮する、装飾する、団結する、負傷する、公演する、怪我する、破損する、敗北する、合唱する、討論する、麻痺する、頂戴する、絶望する、主演する、拍手する、病死する、紅葉する、超過する、失業する、並行する、繁盛する、預金する、公募する、平行する、等等</p>	無	無
4 (5語)	<p>孤立する、同封する、突破する、分裂する、増大する</p>	無	有

(筆者作成)

【表 16】は漢語サ変動詞が可能形の接辞付加を考察したものであるが、BCCWJ の用例数を目盛りにして判断した。

次の図 3 は各グループの割合を示している。グループ 1 とグループ 3 の数字が高く、グループ ①～③ではほぼ全体を占めるグループ 4 がわずかである。この考察で分かるように、動詞が「できる」と共起する漢語サ変動詞に対して、「ことができる」と共起するものもあれば、共起しないものも多い。もし「できる」と共起しない場合、「ことができる」と共起しにくいことも分かる。



【図 3】各グループの割合

4つのタイプの使用数について中納言から調べた使用実態は次の節で提示する。「利用する」のような意志性が高い漢語サ動詞は「できる」「ことができる」と共起する用例数が多い場合もあれば、「意味する」のような意志性が低い漢語サ変動詞は「できる」「ことができる」と共起する用例数がない場合もある。また、(A)「できる」、(B)「ことができる」と(C)「する」の並べ方で順次に使用数の降順で示す。それぞれ上位 20 語を取り出し、比較しながら考察する。

2.5.2 「できる」を中心に調べた結果

この部分では、「できる」形の使用数を降順で並べた。動詞の意志性が高く、主体が人間であるものが多い。特にグループ 1 の上位 20 語から人間の存在が無ければ成り立たない事象が多い。グループ 2 のトップ 20 語もグループ 1 と類似し、意志性が少し弱くなり、「妊娠する」「感動する」のような主体自身の意志でコントロールできない漢語サ変動詞も含まれている。

【表 17】 「できる」(A)の使用率

	グループ 1	A	B	C	グループ 2	A	B	C
1	利用する	1312	85	4009	証明する	165	0	5
2	理解する	1127	79	1938	主張する	70	0	1483
3	期待する	702	8	885	収穫する	49	0	79
4	確認する	578	65	2323	出場する	47	0	299
5	使用する	494	57	3519	反映する	41	0	398
6	参加する	462	35	1990	感動する	32	0	195
7	信頼する	458	3	173	退院する	31	0	77
8	納得する	398	3	344	代用する	31	0	44
9	説明する	375	37	2540	運動する	30	0	217
10	発揮する	352	22	965	断定する	30	0	93
11	選択する	291	37	1514	通信する	27	0	77
12	安心する	279	1	229	卒業する	25	0	337
13	実現する	270	23	1946	外出する	24	0	233
14	実感する	265	9	249	出品する	23	0	332
15	想像する	260	17	723	共存する	23	0	129
16	確保する	253	24	2304	回答する	22	0	269
17	判断する	252	20	1622	妊娠する	20	0	185
18	購入する	245	16	1232	作業する	20	0	148
19	活用する	245	24	1058	独占する	20	0	87
20	満足する	230	6	333	入浴する	20	0	53

【表 17】はグループ 1 とグループ 2 が「できる」「ことができる」と共起するものである。「できる」の使用率の高い順から並べ、上位 20 語を取り上げた。表 17 のグループ 1 から分かるように「できる」の使用率が高い動詞は「ことができる」の使用率も高いものが多いが、逆に「安心する」のように「ことができる」との共起が少ない場合もある。グループ 2 の列から分かるように 1 番目の数値が高く、2 番目の数値が非常に低いことも分かる。

さらに、次の【表 18】と【表 19】はグループ 1 の「できる」と「することができる」の使用率と比較してみた。「漢語+できる」の使用率が「漢語+することができる」より多い場合と「漢語+することができる」の使用率が「漢語+できる」より多い場合を次の【表 18】と【表 19】にまとめた。

【表 18】 「漢語+できる」 ≧ 「漢語+することができる」 の比較表

	「漢語+できる」		「漢語+することができる」
利用する	1314 例	≧	85 例
理解する	1127 例		79 例
期待する	702 例		8 例
確認する	578 例		65 例
使用する	494 例		57 例
参加する	462 例		35 例
信頼する	458 例		3 例
納得する	398 例		3 例
説明する	375 例		37 例
発揮する	352 例		22 例

(筆者作成)

【表 19】 「漢語+できる」 ≦ 「漢語+することができる」 の比較表

	「漢語+できる」		「漢語+することができる」
請求する	193 例	≦	215 例
申請する	23 例		58 例
延長する	27 例		37 例
指示する	17 例		36 例
提出する	33 例		33 例
公表する	8 例		21 例
交付する	5 例		18 例
許可する	9 例		16 例
禁止する	7 例		15 例
支給する	8 例		11 例

(筆者作成)

2.5.3 「することができる」を中心に調べた結果

この部分では「することができる」の使用率が高い順から調べた結果である。グループ1とグループ4の漢語サ変動詞は該当であり、グループ4の動詞数が少ないが、グループ1の動詞数が多い。トップ20語を取り上げ、次の【表20】にまとめた。

【表 20】 「することができる」(B) の使用率

	グループ 1	A	B	C
1	利用する	1312	85	4009
2	変更する	134	81	1404
3	理解する	1127	79	1938
4	確認する	578	65	2323
5	指定する	67	64	1143
6	申請する	23	58	304
7	使用する	494	57	3519
8	説明する	375	37	2540
9	選択する	291	37	1514
10	延長する	27	37	257
11	分類する	88	36	351
12	決定する	70	36	1300
13	指示する	17	36	347
14	参加する	462	35	1990
15	提出する	33	33	994
16	処理する	142	32	1152
17	指摘する	156	29	876
18	表現する	229	28	1489
19	評価する	195	26	1357
20	確保する	253	24	2304

(筆者作成)

【表 20】 の B 列に漢語サ変動詞の意志性が高く、主体が殆ど人間であると推測される。表 20 から分かるように、A 列の数値も低くないので、よく可能表現に使われることが分かる。

2.5.4 「する」を中心に調べた結果

この部分では「する」の使用率が高い順から調べた結果である。グループ 4 の漢語サ変動詞を除き、使用率が高いトップ 20 語をグループ 1~3 まで次のように纏めた。

【表 21】 「する」を中心に考察した降順表¹²⁾

	グループ1	A	B	C	グループ2	A	B	C	グループ3	A	B	C
1	存在する	23	7	4502	該当する	1	0	2794	意味する	0	0	2530
2	利用する	1312	85	4009	登場する	5	0	1975	関連する	0	0	1247
3	実施する	151	19	3729	相当する	2	0	1930	希望する	0	0	1189
4	使用する	494	57	3519	主張する	70	0	1483	関係する	0	0	1031
5	推進する	14	3	3052	成立する	1	0	1126	心配する	0	0	841
6	発生する	1	1	2554	注意する	1	0	998	共通する	0	0	768
7	説明する	375	37	2540	整備する	1	0	896	影響する	0	0	581
8	確認する	578	65	2323	低下する	2	0	875	所属する	0	0	567
9	確保する	253	24	2304	反対する	1	0	855	象徴する	0	0	559
10	参加する	462	35	1990	上昇する	2	0	742	違反する	0	0	489
11	実現する	270	23	1946	一致する	7	0	631	対立する	0	0	447
12	理解する	1127	79	1938	通用する	4	0	552	刺激する	0	0	410
13	紹介する	33	2	1889	進行する	4	0	480	後悔する	0	0	325
14	検討する	25	9	1827	失敗する	1	0	469	悪化する	0	0	305
15	促進する	4	2	1643	研究する	12	0	450	誕生する	0	0	292
16	判断する	252	20	1622	追放する	3	0	450	死亡する	0	0	282
17	変化する	7	2	1573	反映する	41	0	398	矛盾する	0	0	271
18	選択する	291	37	1514	勤務する	6	0	396	不足する	0	0	259
19	表現する	229	28	1489	電話する	7	0	374	主催する	0	0	250
20	主張する	70	19	1483	経過する	1	0	342	苦勞する	0	0	244

(筆者作成)

「する」の使用数が当然多いと思われる。グループ1の「利用する」のように(A)「できる」も(B)「ことができる」もよく使用される漢語サ変動詞もあれば、「発生する」のように(A)「できる」も(B)「ことができる」もあまり使われていないものもある。グループ2では「該当する」の(C)「する」の使用数が高いのに、(A)「できる」との使用数が少ないことが分かる。「主張する」のように「する」(C)の使用数が多いだけでなく、可能表現の(A)「できる」とも多く使用されている。グループ3の場合には「意味する」がよく使われるが、可能表現とあまり使われない。

以上の分析から分かるように、グループ1とグループ2はいずれも意志性が高く、主体が人間であるものが多いと考えられる。また、「できる」と「することができる」と共起しにくいグループ3は意志性が低く、人間のコントロールできない動詞と「苦勞する」のような命題内容の期待に反する動詞が多い。そして、「できる」と「することができる」と共起しないグループ3を、早津(1987、1989)の分類を踏まえ、次のように分類してみた。

【表 22】 漢語サ変動詞が「可能形式」を付加しにくい動詞分類

①	抽象的な現象	影響する、挫折する、大敗する、など
②	心理、感情の変化	苦心する、苦勞する、激怒する、など
③	非意志的な生理現象	混乱する、心配する、出生する、誕生する、など
④	自然現象	紅葉する、
⑤	物事の状態や変化	流行する、衰弱する、蒸発する
⑥	命題内容が望みに反するもの	悪化する、後悔する、違反する

【表 22】 から可能形を付加しにくい漢語サ変動詞は自・他動詞の可能形の接辞を付加しにくい動詞の意味特徴と類似していて、人間のコントロールできない事象である。また、「心配する」のような動詞の主体が人間であってもコントロールできないため、人間の主体性が弱い。これらの漢語サ変動詞において「可能」の意味合いが生じる現象が構文の中で可能表現の成立条件とどう関わっているのかを第 3 章で分析する。

2.6 まとめ

本章では語形から日本語の可能形の接辞を付加しにくい動詞を中心に考察した。次のように自・他動詞(I)と漢語サ変動詞(II)の分類で接辞を付加しにくい種類を纏める。

- I) 日本語で可能形の接辞を付加しにくい動詞は主に自動詞であるが、他動詞の例もある。可能形を付加しにくい自動詞は、①人間の働きかけとコントロールの強弱に制限されるもの、②動詞の性質が形容詞的であるもの、という特徴がある。他動詞の場合はこれと若干異なり①命題内容の制限、②感情・心理・態度、③授受表現の一部、④再帰的などを表すものがある。
- II) 可能形を付加しにくい漢語サ変動詞グループ 3 とグループ 4 を①抽象的な現象、②心理、感情の変化、③非意志的な生理現象、④自然現象、⑤物事の状態や変化、⑥命題内容が期待に反するもの、6 つに分類した。⑥番に対して構文上には命題内容が人の期待ではない場合は可能形と共起しにくいだが、全てはそうではない。「孤立する」の意味が元々消極的であるが、構文上に何らかの条件を満たれば、意味的な合理性があれば成立する。

この章では可能表現の成立条件の「語形」から分析した。可能形の接辞を付加しにくい動詞は文脈で「可能」の意味合いが内包する事象がなぜ生じるのかを考察していない。第 3 章には文脈で「動詞の意味特徴」と主体の相互関係、及び「格構造」の視点から分析し、「可能」の意味合いが内包する事象の要因を解明する。

【注】

- 1) 動詞を、人の意志的な動作を表す動詞であるかそうでないかという観点からみた二種。「読む、調

べる、食べる、帰る」は人が自らの行うという意志によって引き起こすことのできる動作を表しており意志動詞である。それに対して、「老いる、疲れる、あおぎめる」の表す生理的な変化はそれを自らの意志によって生じさせることができないものであり、これらは無意志動詞である。『日本語文法辞典』 p. 18

- 2) 規則 2 というのは、動詞(u 動詞)語幹+eru ; 動詞(ru 動詞)語幹+rareru ; 不規則動詞「来る」→「来れる」、「来られる」; 「する」→「できる」。可能形が作れるもの(+)、可能形が作れないもの(-)、対応する動詞がないもの(0)、() は見つけることができなかったものである
- 3) 異なり語数を示している。
- 4) 異なり語数を示している。
- 5) 検索には中納言を使用した。
- 6) 異なり語数を示している。
- 7) 動詞を『人』の存在感: 判断する根拠は辞書に載っている意味合いから人との関わりによって判断する。
- 8) 参加者(1人): ここの参加者が有情物の参与を指し、「+」で示す。
- 9) 異なり語数を示している。
- 10) 再帰性: 木村は「再帰性は『(自分の)足を折る』『けいれんをおこす』…などの用法にみられ…、主格あるいは主語で表れる動作主体それ自身の動きを表現している。こうした再帰的な用法には、当然のことながら対応する受動文は成立しない。…」(村木 1986:63)
- 11) 【表 12】自動詞の分類: 早津 1987 をもとにして筆者が簡潔にまとめた分類である。
- 12) 数値の中で非常に高い数値とか、非常に低い数値とか、あるいは一方の数値が高いが、一方の数値が低いことを□でマーカした。

第3章 成立条件の相互関係からみた可能構文の考察

第2章では成立条件の「語形」と「動詞の意味特徴」について考察した。接辞を付加しにくい場合には、構文の中で可能形が欠けても「可能」の意味が生じるのかをまだ考察していない。本章では、成立条件をめぐり、第2章の考察結果を踏まえながら、可能形の接辞を付加しにくい動詞を中心に構文の中で「可能」の意味合いがなぜ生じるのかを解明する。「語形」の成立条件が欠けても「動詞の意味特徴」と主体の相互関係で「可能」の意味合いが生じるだろうか。もし生じるならば、どんな場合に「可能」の意味合いが生じるのか、「可能」の解釈できる構文は可能形で表す構文との相違点が何があるのかを解明する。

3.1 問題意識

日本語の構文には意志性がある動詞が可能表現に用いられやすいが、もし意志性がなければ、例文(1)(2)のように可能表現が用いられない。

- (1) この辺の雪は、五月頃まで溶けません。 (《日活》:548)
(2) 手に点いた臭いが消えないです。 (《日活》:478)

例文(1)が自然の事象であり、意志性がない構文である。例文(2)も同じく意志性がなく、実際の事象を表す。例文(1)(2)のように意志性が含まれない構文には可能表現が用いられない。また、例文(3)～(5)のような場合も使われない。

- (3) 息子の病気が治りますか? (《日活》:561)
(4) 頭痛がなかなか治りません。 (《日活》:561)
(5) 日本に来たばかりの頃、私は日本食になかなか慣れませんでした。 (《日活》:1069)

例文(3)～(5)は人間の存在と切り離せない事象であるが、人の意志でコントロールできる事象ではない。いずれも可能表現で表すことが困難であるが、「可能」の意味合いが含意すると思われる。さらに、次の例文も可能表現で表しにくい。

- (6) 私では、あの荷物に手が届かないので、取ってください。 (《日活》:371)
(7) 換気扇のこの部分の汚れは、私がどんなに洗っても落ちませんでした。 (《日活》:430)

例文(6)の「届かない」事象は「取ろうとする」動きがあったが、実現できない状態を表わす。意志性が含まれる構文であっても可能形の接辞を付加しにくい「届く」が用いられる。また、例文(7)にも意志性がある「どんなに洗っても」という努力した行動があったが、自動詞構文で表し、可能表現で表さない。「落ちる」の可能形がないという要因は一つであり、他の要因も存在していると推測される。

(8) 洞窟の入り口は広いので、私でも中に入れます。

(9) 外が五月蠅いので、何を読んでも頭に入りません。

(《日活》:974)

例文(8)の「入る」の可能形「入れる」が使われ、可能構文で可能性を表す。例文(9)が非可能構文で表すが、前文に「読んで」という意志性があるため、努力したが実現できない事象を表す。例文(3)～(9)のように文脈に意志性がある場合とない場合、日本語の「可能」の意味合いが生じるのはなぜであろう。可能構文の性質とどう異なるのか、この2点について考察したい。

3.2 先行研究

本節では動詞の意味特徴と命題内容などの成立条件に関する研究と格構文に関する研究を分けて分析する。

3.2.1 成立条件についての研究

3.2.1.1 渋谷勝己(1993)

渋谷(1993:1)では可能表現の成立条件について、「可能表現はすべての(補)文について成立するとは限らない。アル、似ルなどの無意志動詞については成立しないし(動詞の条件)、また、同じ動詞でも次のように補文の命題内容によってその適格性に違いが見られることがある(命題内容条件)」と述べている。この中で可能表現の成立条件について、「動詞の条件」と「命題内容条件」を取り上げている。

(10) 雨が降る。

(11)? 雨は降ることができる。

(渋谷 1993:8)

(12) 人は一生に一度いやなやつに出会う。

(13)? 人は一生に一度いやなやつに出会うことができる。

(渋谷 1993:1)

渋谷(1993:8)では、例文(10)が自然現象で可能表現を使用しない。例文(12)の場合は語用論から誰でも期待していないことで「命題内容」が可能表現に適応しないと説明している。例文(12)を可能の意味合いから考えると、確かに「いやな奴」に出会う望みもないので、可能表現が使えないのが理解できるが、「いやな奴」のようなマイナス面の語彙を除き、「命題内容」の合理性を考察する必要があると思われる。

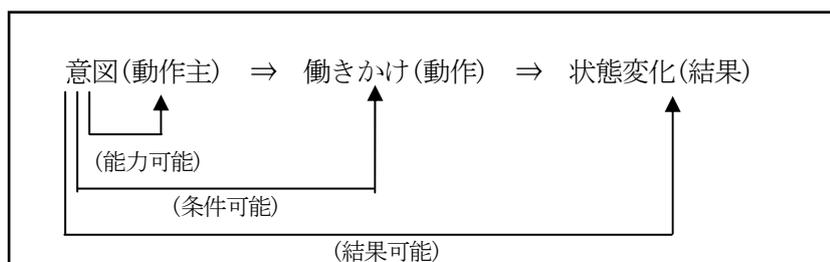
3.2.1.2 張威(1998)

張威(1998:255)は主張している有対自動詞が「結果可能構文」を表すと主張し、無標の可能構文とも呼ばれている。この論説は主に構文の意味要素から分析し、〈意志性動作三要素〉と結果可能構文の成立について次のように述べている。

本研究は〈意志性動作三要素〉概念の中で、動作主の実現しようとする目的(即ち動作主

の意図)は、動作の実現であることもあれば、出来事(状態変化)の実現でもあり得ると指摘した。このような立場によって、これまで論及されてこなかった無標の可能構文の存在に理論的根拠を与えることができた。

さらに、次の関係図で〈意志性動作三要素〉が結果可能構文で「可能」を表す根拠を示している。



【図序-1】意志性動作三要素の関係図(張威 1998:255)¹⁾(再掲)

結果可能構文について次のように定義している(張威 1998:253)。

〈結果可能構文〉とは、動作主がある出来事またはある種の状態変化を実現しようとして動作を行なう場合、動作が行なわれた後、主体的または客体的条件によって、動作主の意図が思い通りに実現することができるかできないかを表わす表現である。

この定義の中で「動作主の意図が思い通りに実現することができるかできないかを表わす表現である。」と述べている。

(14) 次郎は病気のため、学校へ行けなかった。

例文(14)には次郎が学校に行きたくても、体の調子が良くないため、実現しなかった「実現可能」を表す。この例文の「行く」が無対自動詞であり、可能形と共起するものである。次の結果可能構文の意味的な特徴とどう違うだろう。

(15) ドアを開けようとしたら、開かなかった。

例文(15)は動作主の意図があり、結果としては実現しなかったことを表す。「結果可能構文」と「実現可能」が意味的特徴から見ると似ているが、前者が可能形を使わない自動詞であるが、後者が可能形を使う動詞である。

また、無対自動詞にも「可能」の意味合いが含まれる場合がある。

(16) この子はどんなに食べさせても太らない。

例文(16)の「食べさせる」という働きがあるが、意図的には太ってほしいが、体質の原因で実現できないことを表す。張威は有対自動詞が「結果可能構文」を表すと主張しているが、例文(16)のような無対自動詞構文にも「可能」の意味合いが含意すると考えられる。

さらに、「可能」の意味合いが含まれる自動詞構文は意志性がない自動詞構文と性質上から異なる。

(17) 彼は脳内出血がひどくて、1日や2日では意識がもどらないだろう。

(18) 風がないので、旗がはためかない。

(19) 水が冷たすぎて、春雨が戻らない。

(20) もう春になったのに、気温がずっと上がらない。

例文(17)の場合には明らかに意志性がなく、事実を述べているだけである。例文(18)～(20)には意志性が入っていない自動詞文である。以上の例文(15)～(20)から、「可能」の意味合いが生じる要素はどのようなものが存在するのかを、意志性がある構文と意志性がない構文に分けて考察する必要がある。

3.2.1.3 高恩淑(2012)

日本語可能構文の成立に関する条件として意志性がある場合に使用するが、無意志性の場合には使用しにくい。高恩淑(2012:125)では、上記の例(1)、(3)のa文は該当している④番の「自然現象」以外、①「無意識・不注意による動作」②「心的状態」③「非意志的」⑤「物事の状態・変化」も共起しにくいと分析している。高恩淑(2012)は次のような語例を取り上げている。

【表1】「可能形」の接辞を付加しにくい動詞分類

①	無意識・不注意による動作	遅れる、間違える等
②	「心的状態」類の心理作用	慌てる、驚く、困る等
③	非意志的な生理現象	(病気に)かかる、疲れる等
④	自然現象	乾く、凍る、咲く、光る、吹く、降る等
⑤	物事の状態や変化	異なる、割れる、なくなる等

(高恩淑 2012:125)

高恩淑は可能構文の文法的な成立条件について、「動詞の意志性」を考察している。しかし、高恩淑(2012)は漢語サ変動詞を調査対象にしていないため、考察する余地が残っている。

3.2.2 格構造についての研究

3.2.2.1 小矢野哲夫(1981)

小矢野哲夫(1981:23)は可能動詞と単純自動詞、他動詞を比較している。可能動詞と自動詞が同形語の場合、可能動詞と他動詞が同形語の場合、次の文型を取り上げられている。

- (26)? 掃除をできないじゃないの。
 (27) 忙しくて研究室を出られない。
 (28)? 忙しくて研究室が出られない。

「掃除をする」ことを可能構文に言い換えると、「掃除ができる」になり、「を」格で表すと非文である。また、例文(27)の場合には「を」格の意味的な制約があり、「が」格を使用すると非文になる。

3.2.2.3 井島正博(1991)

動作主格が〈人間〉ではない場合に、井島正博(1991:149)は次のような分析をしている。

- (29) 人がこの魚を食べる(こと)。(井島 1991:151)
 (30) この魚が食べられる(こと)。(同上)

井島が例文(29)について、「他動詞が可能構文を作っているのであるが、この場合は完全に動作主格は現れなくなり、客体格がガ格をとることになる」と述べている。

さらに、主語に道具、場所も現れる。

- (31) このペンはよく書ける。(井島 1991:151)
 (32) 太郎の家は駅まで三分で行ける。(同上)

井島は「このペン」を道具格、「太郎の家」を場所格と言い、状態性述語の特徴があると説明している。これらの道具格と場所格は動詞との関係性が主体と客体ではないため、動詞との相互関係について可能構文の主体性と意志性をもう少し考察する必要がある。

松下(1930:170)では「可能被動」、「価値被動」という分類があり、例文(30)に対しては、「可能被動」と称するが、寺村(1982:259)では「受動的可能構文」と言う。「受動的可能構文」に対して、「能動的可能構文」もある。次のようなものである。

- (33) この魚が木に上れる。「能動的可能構文」
 (34) 太郎が中国語(を/が)話せる。「能動的可能構文」
 (35) このお酒は誰にも飲める。「価値被動」

例文(33)～(35)は動作主体が〈人間〉や〈動物〉のような有情物で、主体の能力を表す。例文(33)の主語が例文(30)と同じであるが、例文(33)が能動的可能構文、例文(30)が受動的可能構文である。例文(30)の「この魚」が客体格であるが、例文(33)の「この魚」が動作主体である。だが、格構文が同じく「ガ」格を使用している。これは動詞の性質に関わりがあることだけではなく、格構造が同じであっても主体と客体の関係性が異なる。自動詞文も「が」格がよく使われ、例文(30)と例文(33)のような文脈の格構造に異なる所があるかどうかを調べる必要がある。

3.3 本章の研究手法

3.3.1 本章の研究対象と目的

本章の研究対象が第2章で考察した自・他動詞と漢語サ変動詞である。第2章の【表2】にある動詞を対象とする。

【表2-6】接辞付加の可否(再掲)²⁾

	接辞が付きやすい動詞	接辞が付きにくい動詞
無対自動詞(157)	65	92
有対自動詞(126)	22	104
無対他動詞(269)	222	47
有対他動詞(125)	116	9
合計	425	252

(筆者作成)

漢語サ変動詞については、下記の表【3】の可能形を付加しない動詞を中心に考察する。

【表2】考察対象の動詞数(漢語サ変動詞)

	動詞数	A	B
グループ1	345	有	有
グループ2	240	有	無
グループ3	247	無	無
グループ4	5	無	有

(筆者作成)

3.3.2 本章の研究手法

まず、第2章で考察した結果をもとにして、可能形の接辞を付加しにくい動詞と付加しやすい動詞に分け、意味分類を記録する。

次には、可能形の接辞を付加にくい動詞に対して、以下の考察資料で使用例を収集する。

《日動》：潘贤忠・张国强(2001)《日语常用自他动词用例》北京工业大学出版社

『日基』：小泉保他編(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

『外』：文化庁(1971)『外国人のための基本語用例辞典』(第二版)大蔵省印刷局

『ネ』：陳文芷、陸世光主編(2008)『ネイティブ中国語補語例解』大修館書店

考察資料から次のような構文に分けてデータ化する。

- 1) 自動詞構文と他動詞構文
- 2) 自動詞可能構文と他動詞可能構文
- 3) 意志性が高いと意志性が低い自動詞構文
- 4) 同形語の動詞構文と可能構文

1)～4)の分類をデータ化にし、ネイティブの大学院生(2名)にデータの分類をチェックしても

らう。

最後に、(1)自動詞構文と自動詞の可能構文、(2)自動詞構文と他動詞の可能構文、(3)自動詞の可能構文と他動詞の可能構文という順でそれぞれの相違点を分析する。

3.4 自・他動詞構文における主体と動詞の意味特徴の相互作用

日本語の可能構文の成立条件について、寺村(1982:262)の「可能の形をとり得る動詞」と「動詞の特徴」に関する内容は前章で取り上げている。また、前章では可能形の接辞付加について分析した。本節では、先行研究と語形の考察結果を踏まえ、可能形を付加しにくい動詞に対して、構文の中で主体性と動詞の意味特徴の相互作用、及び「可能」の表出に関わる成立条件の要素に焦点を当てて考察する。「可能」の意味合いが含意する自動詞構文はなぜ「可能」の意味合いが生じるのかを究明する。

3.4.1 自動詞構文の「可能」を表す現象

前章では可能形の接辞を付加しにくい自動詞に対して、意志性の強弱に関わる「人」の存在感の強弱を提示した。ここでもう一度取り上げ、構文の中で主体性との関係がどうなっているのかを分析する。

3.4.1.1 主体と動詞の意味素性の相互関係

可能構文の成立条件の中で主体性と動詞の意志性という要素がある。これから非可能構文の文脈では両者がどのような関係を持つことによって「可能」の意味合いが生じやすいのかを分析する。

第2章で取り上げた[【図3】主体性の強弱について]と前節の[【図2】自動詞の意味分類による意志性の強弱]を踏まえ、主体性と動詞の意味特徴の相互関係をめぐり、A、B、C、Dの4つのグループに分けた。Aグループは【図3】の主体性が強いものと【図2】の意志性が強い動詞が入っている構文である。主語が省略されても意志性が高い。これに対してBグループは主体性も動詞の意志性も弱い構文である。

A: 主体(主体性が強いもの)+動詞の意味特徴(意志性が強いもの)

B: 主体(主体性が弱いもの)+動詞の意味特徴(意志性が弱いもの)

AとBに対応する例文が次の通りである。

(36) 開けようとしても開かない。A

(37) だれを代表にするか、なかなか決まらない。A (《日動》: 103)

(38) 高くて手が届かない。A (《日動》: 220)

(39) この傘はもう直らない。A (《日動》: 235)

(40) 熱帯の植物を日本へ持ってきて植えても育たない。A (《日動》: 60)

(41) 雨が降る。B

(42) シャツのボタンが外れる。B (《日動》: 273)

- (43) このセーターは洗うと縮む。B (《日動》: 187)
 (44) ノートに本が重なる。B
 (45) 洗車しないと錆びる。B

Aグループの「開く」「決まる」「届く」「直る」「育つ」のような動詞は人間の働きかけがあり、「人」の存在が構文の背景に潜んでいて「可能」の意味が含意している。主語が省略されている文も多いが、構文から主体性が人間の行動に関わっていることが推測できる。Bグループの自動詞は意志性が薄く、主体性が人間との関わりが薄いため、「可能」の意味合いも読めない。AグループとBグループの例文を通して、Aグループのように動詞の意味特徴の意志性も主体性も高い構文には「可能」の意味合いが生じやすい。一方、Bグループのように動詞の意味特徴も主体性も低い場合、「可能」の意味合いが生じにくい。だが、CグループとDグループの場合も存在している。

- C: 主体(主体性が弱いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が強いもの)
 D: 主体(主体性が強いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が弱いもの)

- (46) 梅雨の季節が始まる。C (《日動》: 272)
 (47) いつも6時ごろ目が覚める。C (《日動》: 141)
 (48) 天候が定まる前日に多く観られる。C (BCCWJ)
 (49) この状態になると、あかし達の仕事は大きいにはかどる。C (同上)
 (50) 事故の防止で心が疲れる。D (同上)
 (51) 操作は簡単、価格対性能比に優れる。D (同上)
 (52) 又、髪が傷んでくると層がどンドン剥がれる。D (同上)
 (53) 見ているだけでも息が詰まる。D (同上)
 (54) 注文の品が納まる。D

前章の考察では無対自動詞の意味特徴に「人」の存在があっても意志性が非常に薄いものがある。例えば、「寂れる」「はかどる」「こじれる」など。また、「疲れる」のような動詞は「目」や「心」などの感情を表し、主体性が弱い。このような動詞の性質によって主体性が決まっているように固定化になっている。しかも、「疲れる」事象は人間の意志で実現させることではなく、無意志的な事象である。Dグループでは、「可能」の意味合いが生じるかどうかは不明瞭である。しかし、CグループとDグループを否定文に変えると「可能」の意味が生じる場合がある。

- (55) いつも6時ごろ目が覚めない。
 (56) 注文の品が納まらない。

例文(55)の背景には人間の意志が存在しているが、実現できないことを表す。「可能」の意味合いが含まれていると思われる。例文(56)も同じで人間の働きかけがあり、実現できなかったこ

とを表現している。

さらに、副詞を加わると意志性が強くなり、「可能」の意味合いが生じやすい。

(57) いつも6時ごろ目がなかなか覚めない。

(58) 注文の品がなかなか納まらない。

副詞だけではなく、一定の文型にも「可能」の意味合いが生じやすくなる。例えば「いくら～でも～」「どうしても～」「～しようとしても～」など。

(59) いくら探しても僕のカメラが見つからない。

(60) 金庫にどうしても錠がかからない。

(61) 火をつけようとしてもつかない。

例文(59)～(61)の自動詞構文の背景に人の努力を経て達成しなかったことを含意している。意図性がある意志性が強いと思われる。上記の「A: 主体(主体性が強いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が強いもの)」の文脈環境で「可能」の意味合いが生じやすいことだけではなく、「なかなか」「よく」「いくら～でも～」などの副詞や文型も文脈環境に影響を与える要素であることが分かる。また、例文(59)～(61)の自動詞構文は「可能」の含意が含まれても自動詞構文の特質が存在すると思われる。視点の置き方において自動詞構文の視点が可能構文と異なり、客観的な事象に視点が置かれる。



【図1】視点1の置き方

例文(59)では人の意図性があったが、結局実現できなかった現実を客観的に事象の角度から見ている。「可能」の意味合いが背景にあるが、事実の立場からこの事象を述べる場合は自動詞構文で表す。事象の現実を表す場合には自動詞構文で、事象の実現を表す場合には可能構文で表す。

(62) 一生懸命に努力しさえすれば、あの名門大学に必ず受かる。

(63)? 一生懸命に努力しさえすれば、あの名門大学に必ず受かることができる。

以上の分析で可能形の接辞を付加しにくい自動詞が「可能」の意味合いが含まれる場合に一定な構文環境で生じやすいが、自動詞可能構文との違いは視点の置き方が異なる。

これから複文で可能形の接辞を付加しにくい自動詞の構文を見ていく。

3.4.1.2 前文に意志・意図を内包する構文

前文に意志性が強い自動詞構文は構文の背景に「人」の存在が強く、「可能」の意味合いが生じやすい。

- (64) だれを代表にするか、なかなか決まらない。
- (65) 注射もしましたし、薬も飲みましたが、それでも体温は下がりません。
- (66) 毎日練習しているが、ちっとも上手にならない。
- (67) 一心に本を読んでいるときは、いくら読んでも聞こえません。
- (68) 一日考えてみたが、まだ決心が固まらない。 (『外』: 203)
- (69) 知恵を絞ってみたが、なかなかいい考えが浮かばない。 (同上)
- (70) 今からこの仕事を始めれば、夕方までにはきっと終わります。 (同上)
- (71) これだけ仕事を手伝えば、お母さんが助かるだろう。 (『外』: 570)
- (72) 勉強すれば、日本語の力が付く。 (『外』: 630)
- (73) 急いで行っても、もう間に合わないだろう。

例文(64)の前文の「する」が意志性を表す動詞であり、意志性が高いと思われる。後文の事象が未達成した。この「決まらない」が決める人の能力や状況可能を表すより自動詞「決まる」がこの事象の現実の重点が置かれている。発話者はこの事柄をどういうふうに述べたいのかを発話時の状況により、事象の事実性や客観性の立場に立て述べたいのか、それとも主体の能力や状況の可能性の立場に立て述べたいのか、発話時の一定的な期間で判断する。例文(64)のように意志性が強い自動詞構文は「可能」の意味合いが含まれるが、発話者が客観的な立場に立って現実を陳実し、聞き手に客観性の強い事実を伝える。

例文(65)～(69)は努力したが、結局この事態が主体のコントロールが利かず、実現しなかったことを表す。例文(70)～(72)は条件文で実現したい意志があれば、可能性があることを表す。この場合にも人の存在感があり、意志性が強く、「可能」の含意が生じやすい。

例文(73)の「間に合う」は慣用句であるが、この例文の中でも動作を実行したが、実現しなかったことを表す。

以上の分析は構文の意味合いから主体性が人間であり、意図性や意志性が強く、「可能」の意味が生じやすい文脈環境がある。さらに、自動詞構文に「可能」の意味合いが含意しても視点が事象の立場に置かれ、客観性を伝える。可能構文と異なる。

3.4.1.3 前文に意志を内包しない構文

この節の事象に対して、前文に意志性がなくて、客観性が強い自動詞文が「可能」の意味が含意していない。

- (74) 寒くなると、油は固まります。 (『日動』: 82)
- (75) 遊んでばかりいると、みんなより勉強が遅れますよ。 (『日動』: 48)
- (76) 五つで200円だから、一つ40円に当たります。 (『日動』: 13)
- (77) 冬になると、私は腰が冷える。 (『日動』: 279)
- (78) 先生の前に出ると、その生徒は急に態度が改まる。 (『日動』: 19)
- (79) もう春だというのに、夜はなかなか冷える。 (『日動』: 279)

例文(74)～(79)は前文の意志性が弱く、恒常的な事象を述べていて、自然な出来事である。「人」の存在感がある例文(75)(77)(79)の事象が客観的なことであり、「可能」の意味合いが含まれないと思われる。否定文の中でも同じである。

(80) 使う人が多いので、電話はなかなか空かない。 (《日動》: 8)

(81) ちっとも勉強しないので、成績が上がらない。 (《日動》: 5)

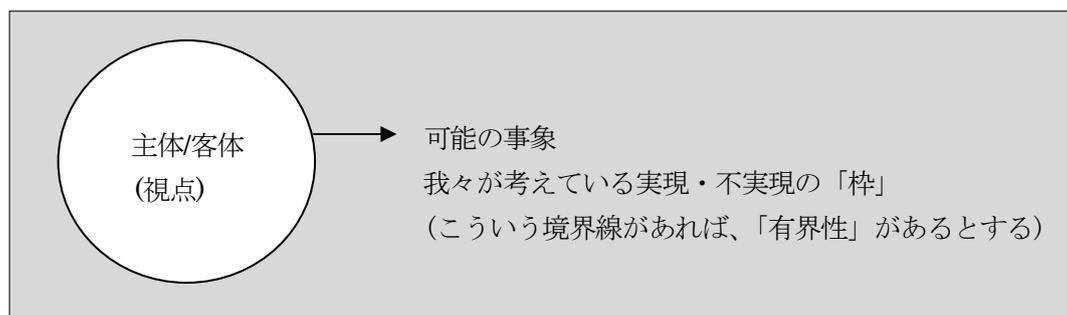
しかし、以下のように前文に意志がないが、「可能」の意味合いが含意する場合もある。

(82) 放っておいても治ると思った。

(83) はっきり言って、旅行が好きなら勉強しなくても受かるぐらい簡単な試験です。

(84) ただの風邪だと思っていたら、いつまでも熱が下がらない。

例文(82)～(84)の主体は「人」であるが、例文(82)の「治る」が身体の状態によるもので、主体の意志で実現するものではない。また、例文(83)の「受かる」も主体が経験者であり、結果を決めるのが採点側の人間にあるので、主体である側の意志に左右されず、コントロールができない自動詞である。例文(84)の「下がる」の主体性が低く、自らの事象を表す。例文(82)～(84)のように、意志性の低い構文にはなぜ「可能」の意味合いが生じるのか。下記の【図 1-2】のように、我々の認識が事実になっていない時、推測や常識で事象の「実現」「不実現」を認識している。一旦事実と真逆になる場合に、境界線が生じる。例文(84)のように前文に「ただの風邪だ」というふうな認識があり、後文の「熱がさがらない」という事象がこの認識に反する。認識と事実の間に不特定な境界線が生じ、「可能」の意味合いが含意されていると考えられる。



【図 2】 可能の事象について

この現象は自動詞構文だけ存在しているわけではなく、他動詞構文も見える。一旦境界線が存在すると、「可能」の意味が生じやすくなる。

(85) この機械は、10 個の卵を割る。

(86) この機械は、30 秒間に 10 個の卵を割る。 [機能/属性を表す] (福田 2009:98)

- (87) この炊飯器は1升の米を炊く。
 (88) この炊飯器は30分間で1升の米を炊く。 [機能/属性を表す] (同上)
 (89) 食べても(身体)を壊さないから、多ければ多いほどいい。
 (90) 栄養食品は食べても(身体)を壊さないから、多ければ多いほどいい。 [可能性を表す]

例文(85)はただ機械が卵を割る事象を述べ、制限を設定していないことを表す。だが、例文(86)のように条件の設定をしているため、境界線が現れ、この機械の「30秒間に10個」という限定があり、事象の可能性が表出する。例文(87)(88)も同じで、普通の炊飯器ができない機能がこの炊飯器には「30分間」の境界線を設定し「可能」「不可能」を表す。意志性がなくてもただ炊飯器の機能を述べ、境界線の加入によって「可能・可能性」が生じる。例文(89)(90)では境界線の設定は「栄養食品」である。他の食品であれば「身体を壊す」可能性があるが、栄養食品であればそういう可能性がないことを表し、「可能・可能性」の意味合いが構文に存在していると思われる。

また、可能の接辞を付加しにくい無意志自動詞に対して境界線を設定したら、「可能」の意味合いが生じやすくなる。

- (91) (前略)海は一気圧のもとでは、それが摂氏0度から100度の間であれば、存在できる。
 或いは地表に雨が降ることもできる。 (大江2014:9)
 (92) 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲くことができる。 (大江2014:4)

「降る」が自然現象で、意志性が含まれていない。一般的には可能構文に用いられないが、例文(91)の構文で「摂氏0度から100度の間であれば」という境界線が存在しているため、不可能の事象がこの境界線の設定で可能性が生じることを表す。例文(92)も同じで、「桜は咲ける」ように言わないが、一定の境界線があったら可能性が表出する。

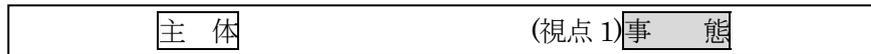
従って、文脈では意志性がない場合に「可能」の意味合いが生じにくいだが、もし境界線があれば、「可能」の含意が生じやすくなる。

3.4.2 自動詞構文と自動詞の可能構文

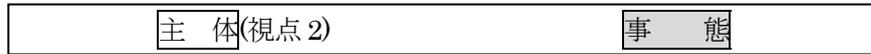
この節では可能形が存在している自動詞が場合によって可能構文の使用と不使用の言語現象があり、筆者が話し手の視点から分析する。

- (93) 十日もすれば、この国に慣れるよ。
 (94) 十日もすれば、この国に慣れられるよ。

例文(93)と(94)の文脈は自動詞「慣れる」が可能形「慣れられる」と置き換えることが可能である。だが、例文(93)の「慣れる」は人間の能力に視点1が置かれ、自動詞が用いる。例文(94)の人の能力に視点2が置かれるため、自動詞の可能形で表す。次の図で示す。



【図 3】自動詞構文の視点



【図 4】自動詞可能構文の視点

しかし、次の例文(95)では主語が「耳」であるが、事実を述べているため、自動詞の可能形を用いていない。当然「耳」が人間の一部であるが、慣れることが人間の意志がなければ実現しない。例文(95)では「耳」を人間の行動と切り離し、単にその事実を述べる場合、「耳が英語に慣れる」という事実に視点が置かれる。可能・可能性の意味を表すよりその事実を強調するように思われる。自動詞を使うのか、自動詞の可能形を使うのか、例文(93)と(94)のように話し手が出来事に対する物理的・心理的な要素がある。そのため、例文(95)(96)は自動詞と自動詞の可能形との置き換えが不可能である。

(95) 耳が英語に慣れる。[自動詞]

(96)? 耳が英語に慣れられる。[自動詞の可能形]

視点 1 の場合には話し手が出来事を客観的に見る場合、自動詞構文で表す。人の能力・可能性を主観的に見る場合に可能構文を用いる。従って、構文の背後に人間の意図が含まれているかどうかは視点 1 と視点 2 の置き方によって異なる。例文(95)は視点 1 に置かれ、成立する。例文の「耳」が人間の一部であるが、ここでは個別性が低く、総称である。このような総称が主語になる場合には人間の意志性が表れていないため、例文(96)のように視点を視点 2 の所に置かれると不自然である。

また、動詞と主体の相互関係に矛盾点があれば、自動詞も自動詞の可能形と置き換えない。次の用例がある。

(97) 部屋がたくさんある家では、子供はどこにでも隠れられる/隠れることができるので、楽しそうだ。 (青木 1997:15)

(98) この箱はソファの後ろに*隠れられる/*隠れることができる。 (青木 1997:16)

例文(97)の自動詞「隠れる」の主体が人間に制限され、有情物の意志性がなければ可能形で表せない。主語である「この箱」は無情物であり、例文(98)のように可能形が用いられない。

以上の例文から分かるように自動詞構文と自動詞可能構文の違いが視点の置き方によって異なる。視点が異なると、意志性が問われ、例文(96)のように人間との関わりがある総称とかは単に事実を述べるだけで、人間の意志性が含意していないため、可能構文で表さない。さらに、例文(97)(98)のように自動詞の意味合いと主体の間に矛盾している場合も置き換えない。

3.4.3 自動詞構文と他動詞の可能構文

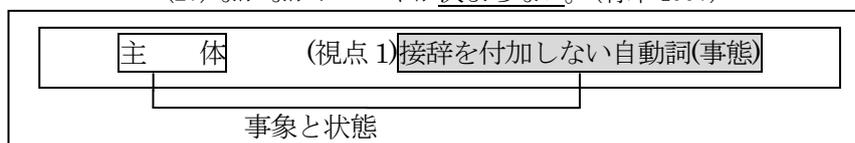
自動詞と他動詞の可能構文の違いが一目瞭然である。例文(99)と(101)は有対自動詞と他動詞の可能表現で、自動性と他動性の特徴が鮮明である。例文(100)と(102)も同じである。

- | | |
|----------------------------------|-------------|
| (99) 妻が台所に <u>下がる</u> 。 | 《《日動》》：135) |
| (100) 生活態度が <u>改まる</u> 。 | 《《日動》》：19) |
| (101) これ以上後ろに椅子を <u>下げられない</u> 。 | 《《日動》》：137) |
| (102) なかなか態度が <u>改められない</u> 。 | 《《日動》》：20) |

だが、有対自・他動詞の中、可能形の接辞を付加しやすい動詞であっても非可能形の自動詞を用いて、「可能」の意味合いが生じる場合がある。可能形で表現する可能構文との違いは何があるのかを考えてみる。

自動詞の意味特徴については関与している事物(人物)が現実の時間において変化を被る内的な事象を表すことをもっている。例えば、次の例文(27)の視点が「決まる」の客体「シュート」に置かれ、内的な事象を表す。だが、「決める」のが人間であり、「決まる」の背景に人間の意志性も潜んでいて客観的な視点から「可能」の含意が含まれる。さらに、副詞「なかなか」が程度を表すため、この例文から「可能」の意味合いが生じやすくなる。他動詞の可能構文と比較すると視点の置き方が異なり、自動詞構文は客観性が強い。

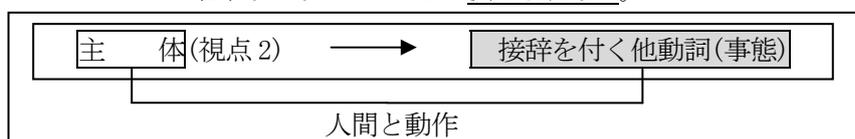
(27) なかなかシュートが決まらない。(青木 1997)



【図5】事象と状態の関係図

例文(27)は例文(28)の「決められない」と入れ替えができる。例文(28)は動作主である「人」の能力に視点2が置かれる。

(28) なかなかシュートが決められない。

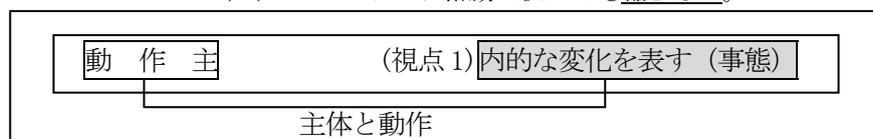


【図6】人間と動作の関係図

例文(28)は主体である人間の能力を表し、視点も人間の能力に置かれる。例文(27)の視点と異なる。

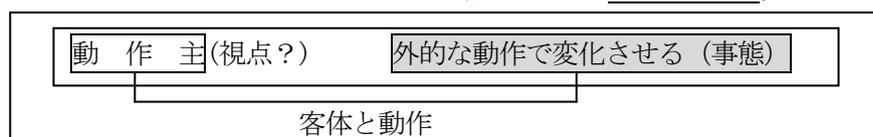
次の例文(31)と例文(32)が置き換えできない。例文(32)のように主体と動作の関係が矛盾している。

(31) このセーターは熱湯で洗っても縮まない。



【図7】 主体と動作の関係図(1)

(32) #このセーターは熱湯で洗っても縮められない。



【図8】 主体と動作の関係図(2)

例文(27) (28) (31)の主語はいずれも物であるが、主語と動詞の関係によって表現する内容が異なり、例文(31)のように制限される場合も存在している。事象の変化や状態が現実になるまで、人の関与で完成するか、人の関与と関係なく物自体の変化を被る内的な事象で完成するのか、動詞の意味特徴に大きく左右されることが例文(27) (28) (31)から分かる。前者の動詞は「人」に関わる事態で、人間の働きかけがないと事象の完成ができない。後者の動詞は「セーター」の性質に関わる事態である。人間の働きかけがあっても「セーター」の性質が変わらないため、視点が人間の能力に置かれると矛盾になる。

次の例文も同じである。

(103) ちょっとした風邪なら、暖かくしていれば治るでしょう。 (『外』)

(104) 僕のこの体調を貴方は治せるんですか？

(105) 手術がうまくいけば、助かるだろう。 (同上)

(106) 夫人はまだ死んでいません。今ならまだ助けられるかもしれません。

例文(103) (104)の「治る」と「治す」が異なる意味合いで日本語の「可能」を述べている。例文(103)は視点1が事態に置かれ、事象の可能・不可能を客観的に述べている。しかし、例文(104)は視点2が動作主に置かれ、人の能力で実現の可能・不可能を述べている。例文(105) (106)も同じである。

3.4.4 自動詞構文と自発文の異同

可能形の接辞を付加しにくい自動詞は場合によって「可能」の意味合いが含まれる。この点については前の節で述べてみた。この節では自発文との違いを分析してみたい。今までの研究の中で自発文と自動詞構文の区別についての異議がある。筆者が金田一(1957)の動詞分類に沿って自動詞構文と自発文の異なりを掘り下げて考える。

金田一(1957)では、動詞の態を「中相態」「自然可能態」「自然受動態」に分けている。具体的な動詞例が次の通りである。

中相態(動詞)…煮える、売れる、崩れる、決まる、授かる、教わる、預かる
自然可能態…泣ける
自然受動態…知られる、僂ばれる

「自然可能態」と「自然受動態」が自発であると思われ、中相態の動詞に殆ど自動詞が占めている。さらに、自動詞は文脈で自発を表す場合もある。例えば、次の例である。

(107) この商品がよく売れた。

森山(1988)では、自発文の特徴については次のように記述している。

第一に、主語の保存ということが考えられる。〈中略〉自発では、むしろ、「故郷が思い出される」というように、ガ格(部分主格になるだろう)をも含めての動きが、全体として自動詞的な動詞句とでもいうべきまとまり(述語)になっていて、主語として取り上げられた主体において動きが発生する、というような意味になっていると思われる。

第二には、自発の意味が、感情、感覚、嗜好など基本的に内的な意味の動詞に限られていて、これらの動詞が、主体として、感情主(通常、一人称)を取ると言う特徴を持っているという関係が考えられるかもしれない。

また、第三に、言うまでもなく、自然に動きが発生するという自発の意味は、意志性(主体性)とは相反するものである。

自発文の特徴を表せる例文が次の通りである。「きた」と繋がって事象の変化を鮮明に表している。

(108) 話しを聞いている、泣けてきたよ。 (高橋 2003)

(109) なんだか自分が間違っているように思えてきた。 (高橋 2003)

この変化の発生を追究すれば、外部と内部に要因があり、事象の状態が自ら実現されるようになったと考えられる。

(110) ゆうがたに海岸をひとりであるいていたら、昔のことがしのばれた。

(111) また犬の声が聞こえたが、それは前よりいくぶん我々の方に近づいているように思えた。 (『ノ』)

(112) それに加えて彼女のしゃべり方にはどことなく角があった。直子は僕に対してなんとなく腹を立てているように見えたが、その理由は僕にはよく分らなかった。(同上)

例文(110)のように自然に発生した「しのばれる」は海岸の景色に影響されて元々何もない状

態から「偲ぶ」ようになった状態への変化になる。自ら発生した事象に重点が置かれている。自動詞も次の自動詞構文のように何らかの理由で実現しなかった事象を表すが、自発と異なって、結果や状態の事実に重点が置かれる。

- (113) 女の人が高い声は出るが、低い声は出ない。
- (114) 失業者が増え、社会不安が広まる。
- (115) 水がゆったりと流れる。
- (116) 何時に家を出ますか。
- (117) ちっとも勉強しないので、成績が上がらない。
- (118) 薬を10日間飲んでも風邪が治らない。

例文(113)の背景に人の存在があつて事実を述べ、自発の意味合いが含まれない。同じく例文(114)も「広まる」の状態を表し、意志性が入っていない。例文(115)が水の動きを表しているが、風景を描写しているため、水の変化より水の状態を表していると思われる。例文(116)は自動詞で人の動きを表し、自発文と異なる。また、自動詞構文が例文(117)(118)のように否定文によく使われ、自発文にあまり使用しない。これらの例文が自発文の特質と全く異なるため、判断しやすい。

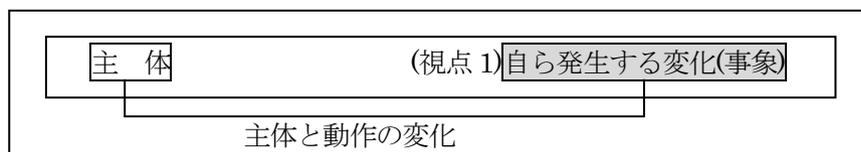
だが、森山(1988)の記述で第二に述べている感情、感覚などの動詞が「見える」「聞こえる」などの動詞も自動詞に含まれ、文中に自動詞構文か自発文かが分りにくい。判断しにくい自動詞が有対自動詞のものが多い。例えば、「見える」、「聞こえる」、「知れる」、「切れる」、「抜ける」、「解ける」、「焼ける」、など。構文の中で、自動詞なのか、可能動詞なのか、自発なのかを判断しにくく、意味合いがとても似ている部分が重なっているわけで、場面と状況を明白する必要があると思われる。また、この点については形態から同形であるため、より判断が難しい。自発文の「思われる」「知られる」「思い出される」「思いやられる」「考えられる」「案じられる」「微笑まれる」「しのばれる」「感じられる」のような自然受動態が判断しやすいが、自然可能態と中相態の動詞文が語境の角度から判断しなければならない。

- (119) 外にカラスの鳴き声が聞こえる。
- (120) 今日の天気が良いので、富士山が見える。
- (121) この喫茶店の雰囲気が良いので、静に本が読める。
- (122) 母と一緒に謝ってくれて、ようやく父の怒りが解けた。 (洪競春 1995:39)
- (123) 新製品は飛ぶように売れた。 (同上)
- (124) ケーキがうまく焼けた。
- (125) ボタンが取れた。 (高橋 2003:110)

例文(119)～(125)は自動詞構文も自発文も意志性が薄くて、意図せず、事象に視点が置かれている。その違いとしては自発文のほうがもともと存在していない状態から実現されている状態に変化し、産出性が読み取れる。「ル」形の例文(119)はもし「先ほど静かであった」が今は「鳴き

声」があれば、聞きたい意志性がなくても自然に聞いてしまったことが構文の背景に潜んでいれば、自発文の性質に近い。ただ、この事実を述べるだけで何らかの変化がなかった場合には自動詞構文の性質に近いと思われる。例文(120)も同じで富士山が見えない所に居てもこの事実を述べられる。だが、自発文の場合には富士山に向かって運転すれば、近づいて行く途中で見えない状態から見えるようになったら自発文の性質に近いと考えられる。従って、例文(119)と(120)は発話の場面によって自動詞構文であるのか、自発文であるのかは異なる。例文(121)の場合は喫茶店の雰囲気によって自ら発生する可能性がある事象であって、自発文であると思われる。

また、「ル」形より「タ」形のほうが自発文の特徴が分り易く、例文(122)は父の「怒っている」状態から「機嫌が直った」状態への変化があつて、もちろん意志性がなく、自然に実現されたことを表す。例文(123)～(125)も同じで意志性がなく、自ら変化が発生している状態を表すのが自発文の特徴である。例文(125)が人間の働きかけがなくて、服に付いている状態から外れた状態を表し、自発文である。次の図9で自発文の視点と自動詞構文の視点の置き方が同じであるが、自動詞の「事象」より自発文は事象の状態が場面の状況や時間の推移などの拘りがある。



【図9】主体と動作の変化

3.4.5 同形語から見た可能構文の成立条件

前章で可能形の語形を考察した。その中で、同じ語形の可能形が存在していて、構文で自動詞なのか、他動詞なのか、可能構文なのかを判断しにくい。以下の内容では自動詞、自動詞の可能形、他動詞、他動詞の可能形を比較しながら、それぞれの特徴を見る。前章の分析結果から以下のグループⅠ、Ⅱ、Ⅲに分けた。

【表3】同形語の語例

	自動詞	他動詞	用例
I	自動詞	他動詞の可能形	切れる、抜ける
II	自動詞の可能形	他動詞	立てる、入れる
III	自動詞	他動詞	ひらく

【表4】のようにグループⅠ、Ⅱ、Ⅲを順次に述べていく。

3.4.5.1 グループⅠ(語形からみて自動詞と他動詞の可能形が同じであるもの)

A1: 折れる、切れる、売れる、削れる、

A2: 焼ける、脱げる、縫える、煮える、見える、聞こえる

A1が接辞 - reru によって終わるもので、A2が接辞 - eru によって終わるものである。A1、A2が他動詞の可能形と同形であるため、自動詞なのか、他動詞の可能形なのかを構文の意味から判

断しなければならない。

(126) このナイフはよく切れる。[自動詞]

(127) 硬くないので簡単に切れる。[他動詞の可能形]

例文(126)が「ナイフ」の性質を評価し、物の状態を表す。「ナイフ」が人間に使われるが、この文では意志性が表れていないと思われる。これに対して、例文(127)が動作主の意志があれば可能になる。可能性を表す。従って、動作の可能・可能性を表す場合には他動詞「切る」の可能形で表すが、「評価」「状態」を表す場合には自動詞「切れる」で表す。自動詞「切れる」の可能形が存在していない。

3.4.5.2 グループⅡ(自動詞の可能形と他動詞が同じであるもの)

(128) 一緒にステージに立てる日を楽しみにしています。[自動詞の可能形]

(129) 卵が立てられる。[他動詞の可能形]

例文(128)では、自動詞の可能形「立てる」が期待されている状況、あるいは状態の可能性を表している。例文(129)の他動詞の可能形「立てられる」は、動作主が出ていないが、「立てられる」ことが動作主の働きかけによって可能になることを表す。「状況・状態の可能性」を強調する場合には自動詞の可能形で、「動作の可能性」を強調する場合には他動詞の可能形を用いるのである。

3.4.5.3 グループⅢ(自動詞・他動詞が同じであるもの)

「開く」の自動詞・他動詞は同じであるが、自動詞「開く」は可能形にできない、他動詞「開く」は可能形にでき、「開ける」と表す。

(130) 門が開いた。[自動詞]

(131) 子供はハサミで包みを開いた。[他動詞]

(132) 私は薬剤師なので薬局が開ける。[他動詞の可能形]

例文(130)(131)のように、可能構文を使用しない。例文(132)は「私」の能力・可能性を表し、「薬局を開く」条件が揃っているため、可能性を表している。

3.5 漢語サ変動詞の意味特徴と主体の相互作用について

第2章では各グループの動詞の意味特徴と主体との相互関係を見ながら、可能形と共起しにくい漢語サ変動詞に対して分析した。この節では、構文の中でどういう環境で《可能》の意味合いが生じるのかを分析する。

3.5.1 グループ1(「できる」形と「ことができる」形の接辞を付加しやすい場合)

このグループの漢語サ変動詞の意志性は強いものが多く、可能形と共起しやすい。例えば、「利用する」「理解する」「使用する」「参加する」「説明する」「選択する」等等。このグループの特徴が次の通りである。

- a. 人間の動作性がある
- b. 意志、意図がある
- c. サ変動詞の性質は他動性が強く、他動詞が多い。

次の用例を見てみる。

- (133) 博多駅の近くで、2人から個室が利用できるおいしい食事が出来るお店を教えてください。
(BCCWJ)
- (134) 下水道を利用できる範囲が拡大!
(BCCWJ)

例(133)と(134)の動作主が出現していないが、漢語サ変動詞だけで人間の行動が思いつくものである。そして、日本語可能構文で「が」がよく使われるが、このグループでは「を」が使われる用例も少なくない。

3.5.2 グループ2(「できる」形を付加しやすいが、「ことができる」形を付加しにくい場合)

このグループの漢語サ変動詞は「できる」形を付加しやすいが、「ことができる」形を付加しにくいものである。第2章の【表17】のようにグループ2のAの用例数はグループ1のAより少ない。このグループの特徴としては次の通りである。

- a. 人間の動作性がある
- b. 意志、意図がある
- c. サ変動詞の性質は自動性が強く、自動詞が多い。

次の用例を見てみよう。

- (135) 他の人と違った格好をすれば、それで個性を主張できるというような単純なものではない。
(BCCWJ)
- (136) 「ここでお前の腕を折ったところで、こちらは立派に正当防衛が主張できるんだぞ」
もはや、男は声を上げることすらできなかった。
(BCCWJ)

例文(135)と(136)の「主張できる」が人間の行いに関わる漢語サ変動詞であるため、グループ1と同じく「が」「を」が使われているが、「が」を使用する漢語サ変動詞が多い。例えば、「～が

運動できる」で調べると、用例数が30例であるが、「～を運動できる」の場合は0例であった。

3.5.3 グループ3(「できる」形と「ことができる」形も付加しにくい場合)

第2章の【表21】では、このグループのAもBも用例数が0例である。このグループの特徴としては次の通りである。

- a. 人間の意志でコントロールできない
- b. 意志、意図がない
- c. サ変動詞の性質は良くない意味が含まれているものが多い。

次の用例を見てみよう。

(137) 過去のことは僕の試合に影響しない。 (BCCWJ)

(138)? 過去のことは僕の試合に影響できない。

(139) 葉の色はやや淡い緑だが、秋には紅葉する。 (BCCWJ)

(140)? 葉の色はやや淡い緑だが、秋には紅葉できる。

例(137) (138)は人の意志で実現する事象ではなく、自然に起こる事象を述べている。人間の動きとか、意図とかの意志性が入っていないため、可能表現を使用すると不自然である。また、命題内容が人の望みではない場合は可能形を用いない。

(141)* だから、しばしば人は俺を誤解することができる。

例(141)の漢語サ変動詞自体から消極的な意味合いがあり、語用論の面から可能表現の使用場面がないのではないかとと思われる。

3.5.4 グループ4(「できる」形を付加しにくい、「ことができる」を付加しやすい場合)

このグループに「孤立できる(?)」のように不自然で、「孤立することができる」を使用することができる。

(142) エリザベス一世やドレークのおかげで、イギリスはこの後、大陸から孤立することができるようになった。 (BCCWJ)

例(142)の「孤立する」の意味が元々消極的であるが、「孤立することができる」の後ろに「ようになった」が付くと、構文の中で適切性が読める。従って、消極的な漢語サ変動詞とはいえ、全て可能形と共起しないというわけではないが、場面の合理性が求められる。

3.6 日本語の可能構文における格構造の制約

本節では他動詞の可能構文、自動詞の可能構文、自動詞に分け、主語が〈人間〉〈もの〉〈こと〉である場合の格構造を比べる。格構造の角度から性質の異なりを分析し、可能構文への制約、可能表現と非可能表現の格構造に関する同異点を考察する。

構文の成分を次のように規定とする。

- X—動作主体(が、は)
- Y—客体(を)
- Z—相手(と、に、から)
- E—結果・内容(と、に)
- F—場所・方向(に、で、を、へ、から、まで)
- G—材料・手段(で)
- O—その他

以上の x~o までの略語がそれぞれの成分を示し、可能表現である「他動詞の可能構文」「自動詞の可能構文」と非可能表現である「自動詞構文」の格構造を比較してみる。

3.6.1 他動詞の可能構文に関する構文類型

他動詞の可能構文は先行研究から次のような格構造がある。

- a. X が Y を 他動詞の可能形
- b. X が Y が 他動詞の可能形
- c. (X に)Y が 他動詞の可能形

実際の例文を考察し、主語を〈人間〉〈もの〉〈こと〉の三つのグループに分け、a~c 以外の構文があるかないかを考察する。

I) 〈人間〉

a~c 文型の例文が次のようなものがある。

- (143) マリアさんがまだ漢字を書けないことをみな知っています。
- (144) マリアさんがまだ漢字が書けないことをみな知っています。
- (145) マリアさんに(は)まだ漢字が書けないことをみな知っています。
- (146) 僕には物理学の専門書など読めない。

例文(144)(146)の「マリアさん」「僕」は動詞「知る」「読む」の動作主であるので、動作主体が X である。しかし、動詞によって、X が動作主体になるか、相手格になるのかは曖昧になる場合がある。

(147) あの人には金が預けられない。

動詞「預ける」の動作主が例文(147)で省略されているが、次のような文が構文の背景であることが読める。

(148) 私はお金をあの人に預ける。

例文(148)の「あの人」が信用できないため、可能性を表す「預けられない」で表す。従って「あの人」がここでは相手のZである。動詞の性質によって、次の文型も存在していると言える。

(Z に)Y が 他動詞の可能形

II) 〈モノ〉

「もの」の性質を表す場合には主語が無情物で、動詞の主動者ではなく、性能や性質を表す。

(149) ゼリーは冷蔵庫で固められる。

(150) 卵が立てられる。

(151) この論文はなかなかうまく縮められない。

この場合の可能構文を「Y が(は) 他動詞の可能形」になる。また、井島(1993)では道具格や場所格もあると言い、次のような例文がある。

(152) このペンはよく書ける。

(153) 今度できたホテルは千人の客が泊められるそうだ。

(154) この会場は1000もの観客を入れられない。

こうすると、次のような構文になる。

- a. Yは他動詞の可能形。
- b. FはXが他動詞の可能形。
- c. Fは他動詞の可能形。

III) 〈コト〉

「こと」が抽象的なもので可能構文の格構造に制限されないと思われる。

(155) この美しさは写真に写せない。

(156) なかなか考えが纏められない。

上記の例文を構文形式で表すと次の通りである。

- a. OはFに他動詞の可能形。
- b. Oが他動詞の可能形。

3.6.2 自動詞の可能構文に関する構文類型

井島(1993)では自動詞の可能構文に関して、格構造に次のようなものがある。

Xが自動詞の可能形。

この構文以外にどのような格構造が存在しているかを探ってみる。

I) 〈人間〉

主語は働きかけの主体である場合に能力と可能性を表す。動作主が省略される場合もあるが、動作の可能形から人間の働きかけが構文の背景に存在していると思われる。

- (157) 今度失敗したら、彼はもう一生浮かばれないだろう。
- (158) ボクが東京に戻れる日は来るのでしょうか。
- (159) お腹がすいて動けない。
- (160) 私たちの仲間には誰でも加われる。

これらの文型を次のような形式である。

- a. Xは自動詞の可能形。
- b. XがFに自動詞の可能形。
- c. (Xは) Yが自動詞の可能形。
- d. Z(相手)には自動詞の可能形。

「ニ」格で相手格に使うし、固定用語にも現れる。

- (161) 私は自転車に乗れる。

この場合の自転車が「乗る」の客体者であるが、「ニ」格を使う。また、自動詞の可能形に「を」格も現れる。

- (162) 敬意と感謝の気持ちで、国民の大多数が拍手で送り出すような環境を整えられるのが政治ではないか」 数年前の小泉のこの発言に私は異議はない。 (BCCWJ)
- (163) チャンスをつかむ人は、座った席を動ける人です。 (BCCWJ)

II) 〈モノ〉

この部分の主語は無情物であるが、動詞の主体である人間の存在もある。

(164) 太郎の家は駅まで三分で行ける。

(165) この魚はどこで取れるのですか。

例文(164)の主語は場所であるが、実行するのが人間である。また、例文(165)の主語は「この魚」であるが、「取れる」主体が人間である。

- a. F 自動詞の可能形。
- b. Yは 自動詞の可能形。

III) 〈コト〉

この部分は時間が主語になっている場合である。自動詞の可能形は事柄の可能性を表し、実行するのが人間である。

(166) 来年は山形へ行ける。

(167) 今夜はたくさんの星が見えます。

(168) 今年は米がたくさん取れる。

上記の例文を構文形式で表すと次の通りである。

- a. Oは 自動詞の可能形。
- b. Oは Y が 自動詞の可能形。

次の自動詞の可能形が「を」格で表す場合も存在している。それから、「から」との共起もある。

(169) 結局、選手生命を長く保てるか否かは、そうやってコンディションを整えられるかど
うかなのだと都並は確信していた。 (BCCWJ)

(170) 亡くなった恋人のことが頭から消えない。 (BCCWJ)

以上の[3.6.1]と[3.6.2]は可能構文の格構造を考察した。次には非可能表現である自動詞構文の格構造と可能表現の格構造を比較してみる。

3.6.3 自動詞構文に関する構文類型

自動詞の構文「N(が/は)～」以外に、「N1はN2が自動詞」、「N1はN2に(は)自動詞」の構文も

ある。格構文の制限が他動詞のように「を」格を使用しない。小矢野(1979)で挙げている可能構文の「N1 {に、には、は} (N2 が) ——」、「N1 が N2 に——」を踏まえて考察していく。

I) 〈人間〉

主語が人間である場合には

(171) うちのお爺さんは、病気で手足が利かなくなった。

例文(171)の格構造が「XはYが自動詞。」であり、XとYの関係が「XのYが自動詞。」である。

II) 〈モノ〉

主語が無情物である場合には、「XのYが自動詞。」のような関係もある。

(172) この自転車は ブレーキがきかない。

(173) この服はまだ裏返しがきく。

(174) ミシンの機械にいとが巻き付いて動かなくなった。

主語が無情物であるため、意志性がない。構文の背景に人間の働きがなく、客観的なことを表している。だが、人間の動きが存在している場合もある。

(175) この本はあの本と見分けがつかないほど、よく似ています。

例文の動詞「つかない」が人間の行う行動であり、意志性があると思われる。上記の例文の格構造を纏めて次の通りである。

- a. X は Xの一部 が 自動詞。
- b. X は O が 自動詞。
- c. X に G が 自動詞。

III) 〈コト〉

この部分では、自動詞が人間の働きかけと関係があり、事柄の実現に至る内容である。

(176) なかなか交渉がまとまらない。

動詞「まとまる」が人間の行動で完成させることであるため、意志性が存在していて、可能の意味が含意していると思われる。また、「に」格が使われる場合もある。

(177) こんなつらい仕事は、からだの弱い私には勤まらない。 (『外』: 641)

(178) そんな難しい役がぼくに勤まるだろうか。 (『外』: 641)

(179) この激しい思いが相手に通わないはずはない。

(180) あなたの親切は向こうに届かなかったようだ。

(『外』: 712)

例文(177)～(180)の格構造は他動詞の可能構文に近いが、動詞「勤まる」「届く」の可能形が存在していないため、自動詞で表す。可能の意味が含意する文脈の文型「～が(は)～に(は)～」で現れやすいと思われる。格構造は次の通りである。

a. Y は/が X に(は) 自動詞。

b. Y は/が O に 自動詞。

以上の分析から、自動詞構文の中で、原因を表すもの、文型「いくら～ても～」や「どうしても～」などの成分と一緒に使われると可能の意味合いが読める。また、自動詞の格支配も「が」が良く使われる。

(181) のどがいたくて、食事が通らない。

(182) いくら働いてもお金はちっとも残らない

(183) いくら考えても決心がつかない。

(《日動》: 194)

(184) これだけ仕事を手伝えば、お母さんが助かるだろう。

(185) 金庫にどうしても錠がかからない。

「は」格を使用する場合もあるが、「に」格との交替が不可能である。「に」格が使用される場合は固定用語である。

(186) タクシーで行けばまだ間に合います。

(187) 毎日練習しているが、ちっとも上手にならない。

(188) あの男は物事に夢中になるとブレーキがきかなくなる性質だ。

この場合の「に」格は自動詞構文の格構造に含まれない。結論としては、「可能」の意味合いが含意する自動詞文の格構造が可能構文と似ている。両者の格構造に違いが殆ど現れないが、【表18】のように自動詞構文の主語は人間である場合に「XはYが自動詞」構文しかない。

【表 4】格構造の比較表

主語 構文	〈人間(x)〉	〈もの〉	〈こと〉
他動詞の可 能構文	xがyをv-可能形 xがyがv-可能形 xに(は)yがv-可能構文 (Zに)Yが他動詞の可能形	Yは他動詞の可能形。 FはXが他動詞の可能形 Fは他動詞の可能形	0はFに他動詞の可能形 0が他動詞の可能形
自動詞の可 能構文	Xは自動詞の可能形 XがFに自動詞の可能形 (Xは)Yが自動詞の可能形 Z(相手)には自動詞の可能形	F自動詞の可能形。 Yは自動詞の可能形。	0は自動詞の可能形 0はYが自動詞の可能形
自動詞構文	XはYが自動詞	XはXの一部が自動詞。 Xは0が自動詞。 XにGが自動詞。	Yは/がXに(は)自動詞。 Yは/が0に自動詞。

3.7 まとめ

本章は第2章で考察した可能形の接辞を付加しにくい動詞に対して、文脈上から「可能」の意味合いが生じる要因を分析した。さらに、「可能」を含意する自動詞構文と可能構文の相違点も考察し、「可能」の生成環境を掘り下げて探ってみた。少なくとも次の3点が分かった。

ア) 主体と動詞の意味特徴の相関関係の分析で A タイプは「可能」の意味合いが生じやすい場合である。B タイプが「可能」の意味合いが生じにくい場合であることが分かった。C タイプと D タイプについては判断しにくい。

- A: 主体(意志性が強いもの)+動詞の意味特徴(意志性が強いもの)
- B: 主体(意志性が弱いもの)+動詞の意味特徴(意志性が弱いもの)
- C: 主体(意志性が弱いもの)+動詞の意味特徴(意志性が強いもの)
- D: 主体(意志性が強いもの)+動詞の意味特徴(意志性が弱いもの)

イ) 一定な文型と副詞が存在している文脈環境の中、あるいは一定の原因と条件が前文にある文脈環境の中で自動詞の「可能」の意味合いが生じやすい。構文の特徴は以下の内容である。

- (a) 文中に「うまく、すぐに、ようやく、はっきり、すでに、やっと、全部、よく、綺麗に、意外に、十分、ついに」などの副詞がよく使われているもの。
- (b) 文中に「あまり～ない。～ようとしたが、～。何も～。誰も～。何度も～ない。いつも～ない。どうしても～ない。～しか～ない。」などの文型がよく現れるもの。
- (c) 前文に状況や原因により、実現した・しなかったもの。
- (d) 動詞によって意図・意志があるもの

ウ) 格構造からも自動詞可能構文と類似しているため、視点が客観的な事象に置かれる「可能の解釈をもつことのできる自動詞文」と言える。

【注】

- 1 **【図序-1】** は序章の**【図 1】** を指す。
- 2 **【表 2-6】** は第 2 章の表 6 を指す。

第4章 潜在可能構文と実現可能構文の視点から見た日本語可能表現

アスペクトの視点から日本語の可能表現を実現可能と潜在可能に分類される。過去・現在・未来の時間軸上に実現可能と潜在可能の成立事象が異なる。日本語の可能表現は意志性に制限されるが、考察の中で意志性が含まれない実現可能構文もある。意志性がない文脈では実現可能の成立に当たってどういう要素に関わっているのかを分析する必要があると思われる。

本章では、時間軸上において「実現」を表す実現可能がどのような状況で実現・不実現の事象になったのかを潜在可能との比較で分析してみたい。さらに、構文に意志性がない場合はどの要素が「可能」にあるのかを解明する。

4.1 問題意識

現代日本語における可能表現は、例文(1)(2)の潜在可能構文と例文(3)(4)の実現可能構文に分けられる。

- (1) 僕は泳げる。
- (2) 昔は僕も泳げたのだが。 (渋谷 1993)
- (3) 今始めれば日暮れまでには書ける。(「書き終わる」の意) (渋谷 1993)
- (4) 昨日勇気を出してやってみたら泳ぐことができた。 (渋谷 1993)

例文(1)(2)は主語の「僕」自身の能力が備えていて、可能であることを述べている。このような文を潜在可能構文と呼ばれている。

例文(3)(4)は主語の能力を述べているより出来事が実現の可能性があるかどうか、また実現した事に重点を置いている。このような文は実現可能構文である。

また、実現可能構文が実現された行為を表すものである。「タ」形で表す場合は分りやすいが、「ル」形で表す場合には実現可能構文であるかどうか曖昧で判断しにくい場合がある。

- (5) こんな勉強法を早く知っていたら、憧れの大学に合格できたのに。 (林 2010)
- (6) 僕は明日までに絵が画ける。 (渋谷 1993)

例文(5)は既に過去の事であるが、前文の仮設で「合格」の可能性があったので、潜在可能構文であると推測できるが、もし未実現の立場から考えると実現可能構文になる。可能性を表す場合が潜在可能であるが、「タ」形の存在で分かりにくいケースである。

例文(6)が未発生の事柄であるが、もし今まで2日間で「絵を描いた」ことがある場合、潜在的な能力があるため、潜在可能と言えるが、もし2日間で「絵を描いたことがない」場合には実現可能と認識しても可能である。

潜在可能構文と実現可能構文の違いについては、奥田(1986)は、「動作・状態が人あるいは物に備わっている、ポテンシャルな特性としてとらえられているときには、可能表現の文は可能

あるいは不可能を表現しているし、いちいちの、具体的な現象として動作・状態がとらえられているときには、実現あるいは非実現を表現していると、規定するほうがより本質的であるように思われてくる。動作・状態がアクチュアルであるか、ポテンシャルであるかということは文の temporality のなかにあらわれてくる。それとも、場面あるいは文脈が方向付ける。」と説明している。また、渋谷(1993)では実現可能構文について、「様々な条件によって、ある動作を実現することが可能・不可能である・あった(=実現する・した:実現しない・しなかった)」ことを表す」とし、潜在の可能については、「様々な条件によって、ある動作を実現することが、やる(やった)かどうかは別にして、潜在的に可能・不可能である(あった)」と述べている。

いずれも意味的特徴から分析したものであるが、それぞれの特徴を踏まえ、潜在可能と実現可能を見分ける要因を探る。

4.2 先行研究

これから実現可能の意味合いが生じる事象の成立について先行研究を踏まえながら、考えていきたい。「実現可能」と「潜在可能」の違いに関する研究を見てから、「実現可能」の成立条件に関わる要素を分析する。

4.2.1 実現可能と潜在可能の定義

奥田(1986:208)は、「動作・状態が物に備わっている、ポテンシャルな特性として捉えられている時には、可能表現の文は可能あるいは不可能を表現しているし、いちいちの、具体的な現象として動作・状態が捉えられているときには、実現あるいは非実現を表現していると、規定するほうがより本質的であるように思われてくる。動作・状態がアクチュアルであるか、ポテンシャルであるかということは文の temporality のなかに現われてくる。それと、場面あるいは文脈が方向づける。」と説明している。

渋谷(1993:14)によれば、「実現の可能は、『様々な条件によって、ある動作を実現することが可能・不可能である・あった(=実現する・した:実現しない・しなかった)』ことを表す。例:三日かかってようやくレポートが書けた。潜在の可能は、『様々な条件によって、ある動作を実現することが、やる(やった)かどうかは別にして、潜在的に可能・不可能である(あった)』ことを表す。例:僕にはたとえ三日かけてもレポートなんか書けない」と述べている。

以上の概念から実現可能と潜在可能の定義をしているだけでなく、両者の区別までも言及している。実現可能は「実現」に重点を置いているが、潜在可能は「可能」に重点を置いていると分かる。

4.2.2 実現可能と潜在可能の分類に関する研究

この部分では「実現可能と潜在可能の意味分類」「実現可能構文の成立条件」の視点から実現可能と潜在可能を表している「可能」「実現」を掘り下げて考える。

4.2.2.1 鈴木重幸(1965)

鈴木(1965:279)では現代日本語動詞の実現可能と潜在可能をめぐって次のように分類している。

A. 可能性を表す場合(ポテンシャルな用法、時間軸上に局在しない用法)¹⁾

可能動詞は、主体の属性を表す場合と、対象や状況の属性を表す場合がある。

- ① 能力としての可能性
- ② 特性としての可能性
- ③ 許可

B. 運動の実現を表す場合(アクチュアルな用法、時間軸上に局在する用法)

可能動詞の実現を表す用法には、意図したこと、期待したことの実現を表す場合と、そうでない実現を表す場合がある。後者のうち、人間の心のウゴキにかかわるものは、「自発」と言われてきた。

- ① 期待した運動・意図した運動の実現
- ② 期待・意図と関係のない変化の実現
- ③ 意図しなかった、こころのウゴキの実現(自発)

実現可能について渋谷(1993)では明確に「実現可能はその意味的特徴から一回的な動作の(非)実現について言及することが多く、ものとの動詞の動作を失って、過去・現在にかかわりなく状態的な意味の様相を帯びる。」と述べている。潜在可能の特徴と異なり、鈴木(1965)が述べているように実現可能より「主体の属性を表す場合と、対象や状況の属性を表す」場合が多いと思われる。文脈の意味合いから動作の実現なのか、属性の能力・可能性なのかを表しているので、「ル」形と「タ」形と直接的な関係を持っていないことが分かる。

4.2.2.2 小矢野哲夫(1980)

小矢野(1980:22)が鈴木(1972)を踏まえ、過去形と現在形の用法を次のように分類している。

1. 過去形

- ① 過去の特定の時間における可能性・能力の実現を表す
- ② 反実仮想
- ③ 未来の特定の時点における可能性・能力の実現を表す
- ④ 過去における可能性・能力
- ⑤ 「～たものではない」の形

2. 現在形

- ① 属性の表現としては、経験者に関する能力や性能を表す
- ② 可能動詞のもとになる動詞によって表わされる動作が、一時的であれ継続的であれ、現在において実現している、または未来において実現することを表すものである。
- ③ 可能動詞が許可を表すものがある。

小矢野の分類から分かるように「ル」形で表す可能は時間軸上にもう発生した事象が現在までその状態が残っている意味合い②も存在している。また、「タ」形はもう既に終わっている事象に限らなく、潜在的な能力や可能性を表す①～④の使用もある。従って、「ル」形と「タ」形を用い

て現在、過去の事象や能力・可能性を表し、文脈の意味から判断する。

4.2.2.3 渋谷勝己(1993)

「1. 問題意識」で述べているように、潜在可能構文と比較しながら実現可能構文に対して定義をしている。さらに、渋谷(1993:15)によれば、「実現可能はその意味的特徴から一回的な動作の(非)実現について言及することが多く、ものとの動詞の動作を失って、過去・現在にかかわりなく状態的な意味の様相を帯びる。」と述べている。この記述に従えば、「1. 問題意識」の例文(3)～(6)が確かに、動作の一回性、実現の状態性を表している。しかし、意志がある例文(3)(4)と例文(5)(6)の構文は文脈から少し異なっているように思われる。

渋谷(1993:30)では可能表現の意味分類について、「能力可能」「内的条件」「外的条件」「認識条件」「遂行可能」「自発可能」に分け、それぞれの使用を説明している²⁾。アスペクトの立場から実現可能と潜在可能に分け、条件可能を再分類した。実現可能の「ル」形と「タ」形がいずれもこの分類に適応であると述べている。

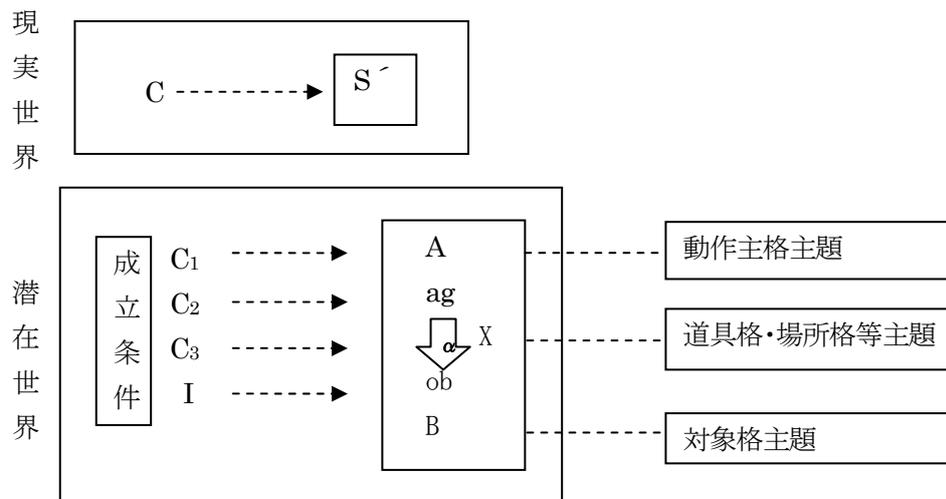
以上の分類から小矢野(1980:22)から分かるように鈴木氏の分類がまだ不十分である。また、渋谷(1993)と小矢野(1978)の「ル」形と「タ」形の意味分類と少し異なるため、本論文では鈴木氏の分類に沿って、時間軸上で改めて潜在可能と実現形可能の意味分類を考察してみる。

4.2.3 実現可能の成立条件に関する研究

実現可能の成立条件に関する研究が少なく、潜在可能と実現可能の違いはどのような成立条件で見分けるのか、この点については下記の先行研究を取り上げる。

4.2.3.1 井島正博(1991)

成立条件についての記述が井島(1991:182)では下記のような【図1】を示している。



【図1】井島正博(1991:167)³⁾

【図1】に対して、井島正博(1991:167)は下記のように記述している。

現実世界で生起する唯一の出来事の背後にある潜在世界に、いまだ実現されていない出来事とそのさまざまな成立条件と組み合わさって複数存在していると考えられる。これは、実際にシンタグラマティックに文として実現された唯一の語彙の背後にあるパラディクマティックな複数の語彙群に比べせられるもので、いくつかの成立条件の異同によってさまざまな出来事が並列的に存在すると考えられる。

可能表現において S(事態)が成立条件の異同によって様々な使い方が生まれる経緯になるため、成立条件の要素をはっきりさせたら、可能表現の使い方の特徴が著しくなるが、明白でない場合には可能表現の用法も曖昧になってしまう。

4.2.3.2 高橋太郎(2005)

高橋太郎(2005:110)では、例文(3)～(6)のようなアクチュアル用法を次のように分類している。

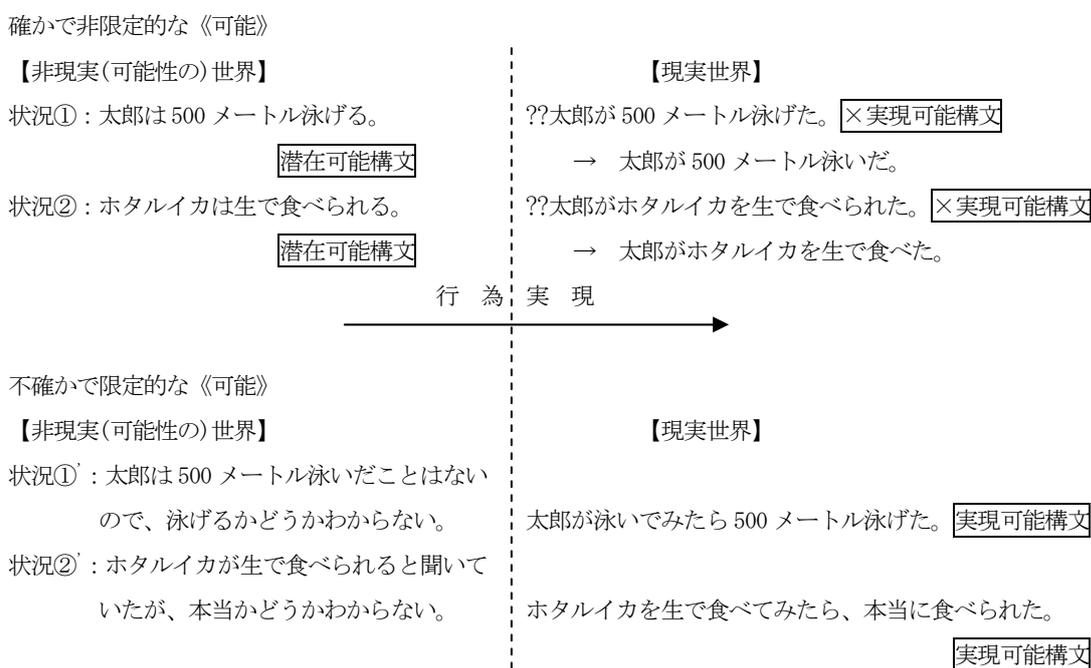
- [1] 期待した運動・意図した運動の実現
 - a. 書けた人はだしてもいい。
- [2] 期待・意図と関係のない変化の実現
 - b. ボタンがとれた。

ここでの分類[1]aが「一回性」「実現の状態性」であるが、分類[2]bの「とれた」は、場合によって「自発」を表す可能性もある。例えば、動作が自ら発生した場合は自発を表すことも考えられる。高橋(2003)では、このような実現を表す可能表現を一つの用語で表していないが、「実現」を表す文の特徴を述べている。

一方、尾上(1998:90)も例文(3)～(6)のようなものを分析している。「この煎餅はゆっくり噛めば食べられる」のような潜在可能構文を「可能」として扱い、「太郎が頑張って、首尾よく持ち上げられた」「大丈夫かなと思ったが、食べてみたら食べられた」のような実現可能構文については、「やろうとしてその行為が実現した」ことを説明している。つまり、「意図した行為の意図どおりの実現」を表し、許容性、萌芽の有無を問題にする可能とは遠く離れているため、「可能」の語を含んで呼ぶことは避けるべきであるとし、「意図成就」と名付けられている。そして、「可能」と「意図成就」の共通点は「事態全体の生起に関してその成就への期待の存在を意識する用法」という一点のみであるとし、「許容性、萌芽の有無を問題にする「可能」と、結果的成就を正面に出して表現する「意図成就」とは、遠く離れた二つの用法だと見るのが妥当である。」と述べている。さらに、「この実現可能は、ある意味で自発の用法と共通点がある。(中略)意図したか否かの差はあるものの、自体の実限界成就を表現の眼目とするという点では実現可能は典型的自発と共通である。」と述べている。

4.2.3.3 林青樺(2010)

林青樺(2010:89)では井島の図を踏まえ、潜在可能と実現可能の異同について「行為実現の確かさ」と「限定性」の観点から潜在可能と実現可能の特徴をさらに明白した内容を述べている。林青樺の分析の中で「行為実現の確かさ」と「限定性」を次の【図2】で示している⁴⁾。



【図2】 林青樺(2010:95)

林青樺(2010:89)によると、潜在可能構文と実現可能構文との異同について行為実現の確かさと限定性の観点から分析し、潜在可能構文と実現可能構文は単に「行為実現の有無」という点で異なるわけではなく、両構文の表す《可能》の内実が根本的に違い、非現実の世界と現実世界

における潜在可能構文と実現可能構文の対立のあり方に両者の違いが現れているということが述べられている。

【図 2】から分かるように、潜在可能が非現実の世界でやるかやらないかと関係なく、元々その「能力」が存在しているので、やると現実になる。しかし、実現可能が非現実の世界でもともとその能力が持っているかどうかを知らず、やってみたら現実になった。この表から明白に潜在可能と実現可能の区別が表現している。

以上の先行研究から例文(3)(4)のような実現可能構文を明確に記述している。その特徴としては、意志性があり、事柄の一回性、行為の意図、期待性の意味が文の中に存在している。しかし、例文(5)(6)に対して、意志性の有無が実現可能構文であるかそうでないかを左右する要素であり、「実現」と「潜在」、「実現」と「自発」の境目が曖昧な場合があるため、また考察する必要がある。

本研究は「タ形」の実現可能構文の特徴と成立条件を探ってみたい。

4.3 本章の研究手法

4.3.1 本章の研究対象と目的

本研究の研究対象は実現可能構文である。そして、「できなくなった、可能表現+なくなった」を除き、「できた」「可能動詞のタ形」「することができた」が入っている可能構文を対象とする。実現可能が「過去・現在にかかわらずなく状態的な意味の様相を帯びる。」と日本語の「可能」がなぜ生じたのかを結びつき、可能表現の成立条件に支える要素が何かあるのかを考察する。

本章では次のような参考資料から調べる。

- 1) 『ネ』：陳文芷、陸世光(2008)『ネイティブ中国語補語例解』大修館書店
- 2) 《日動》：潘賢忠・張国强(2001)《日語常用自他動詞用例》北京工業大学出版社
- 3) 小説類
 - 『ノ』：村上春樹著(2004)『ノルウェイの森(上)(下)』講談社文庫
 - 『窓』：黒柳徹子著(1984)『窓際のトットちゃん』講談社
 - 『1Q84(1)』：村上春樹著(2009)『1Q84 (book I)』新潮社
 - 『1Q84(2)』：村上春樹著(2009)『1Q84 (book II)』新潮社
 - 『海(上)』：村上春樹著(2002)『海辺のカフカ(上)』新潮社
 - 『海(下)』：村上春樹著(2005)『海辺のカフカ(下)』新潮社
 - 『中』：村上春樹著(1997)『中国行きのスロウ・ボード』中央公論社
- 4) 新聞
 - 朝日新聞(社説)2014年6月～2014年12月

4.3.2 本章の研究手法

まず、日本語の小説から可能表現「タ形」を取り出し、先行研究の記述に基づいて潜在可能構文と実現可能構文を分類する。そして、実現可能構文を「意図・意志があるもの」「意図・意志がないもの」「曖昧なもの」に分ける。最後、「意図・意志があるもの」「意図・意志がな

いもの」の実現可能構文からそれぞれの特徴を探す。

4.4 考察結果

先行文献を参考しながら、潜在可能と実現可能を再分類してみた。分析した結果を次のようにまとめる。

【表1】潜在可能と実現可能の再分類⁵⁾

	文脈の背後に時間と切り離せる場合(S)	文脈の背後に時間と切り離せない場合(S')	
潜在可能	1) 先天的能力 2) 属性可能 3) 評価可能 4) 前提条件可能 5) 許可	過去(1)	1) 反事実可能 2) 恒常(不)可能 3) 一時的 ⁶⁾ (不)可能
		現在(2)	(技能、知識を身に付けた) 1) 能力獲得可能 2) 程度達成可能
		未来(3)	一時的能力・可能性を獲得(喪失)
実現可能		過去(1)	1) 達成性可能 2) 予想外の(未)達成 3) 未実現
		現在(2)	1) 反復実現可能
		未来(3)	積極的・消極的な態度・決心・結果

4.4.1 文脈の背後において時間と切り離せる場合 (S)

この節では主に時間軸に制限されないような可能構文の分類を取り上げる。第1章には意味分類について可能構文を述べた内容と重なることになるが、この節が時間軸上の角度から分析するため、「時間と切り離せる」内容に合わせ、少し内容を加えて見ていきたい。次の節では「時間と切り離せない」場合の可能構文を考察する。

4.4.1.1 先天的能力

人間に関する能力が生れ付きで潜在的な能力を持っている場合と生まれてから学習を経て身に付けた能力があると考えられる。

(7) 彼は先天的な視覚障害者なので見ることができない。

(8) 山口さんはピアノが弾ける。

人間以外に有情物もこのような潜在的な能力を持っている。

- (9) 犬が泳げる。
(10) このオウムは「こんにちは」が話せる。

犬が生まれつきで教えなくても「泳ぐ」ことができる。オウムに言葉を教えないと、話せないオウムもいるので、習得することによって、「こんにちは」をスキルして話すことができる。有情物が可能構文で能力を表すが、無情物が可能構文で用いにくい。

- (11) この花が4月咲く。
(12) ダイヤモンドが光る。

しかし、もし動詞が擬人的な場合に使われている可能構文でもあり得る。

- (13) この玩具は「こんにちは」が話せる。

この場合には「話す」が人間の行動で無情物に使うと、擬人化になっている。以上の可能構文については、いずれも能力可能であるため、時間と関係がない。

4.4.1.2 属性可能

無情物の性能や属性を表す場合にも時間と関係がなく、潜在的な可能を表す。

- (14) このキノコは食べられる。
(15) このハンマーは5ミリの鉄板が曲げられる。

主語が無情物であるが、動作の対象になっていて客体である。主体である人間に対して、「このキノコ」と「このハンマー」の属性が人間の動作によって実現する可能性があることを表す。

4.4.1.3 評価可能

この分類も無情物が客体であるが、主体である人間の動きがあって客体への評価を表す。

- (16) このワープロは使える。
(17) この酒はいける。

例文(16)がこのワープロが使いやすいことを評価し、可能形「使える」を使用している。同じく例文(17)に対して、他のお酒がなかなか飲めないかもしれないが、「この酒」は口に合って飲める。この類の可能構文も時間に縛られない。

4.4.1.4 前提条件可能

この分類は条件節があって、いつ実行するか分からないが、とにかく条件に満ちれば可能であ

ることを表す。

(18) スイカがあれば、どこでも行ける。

(19) お金さえ払えば、誰でも銃が買える。

例文(18) (19)のように時間詞が置かなければ、潜在的な可能性を表し、時間軸上に置かれない。もし、時間詞が出現したら、時間軸上に置かなければならない。渋谷(1993)は条件可能について細かく分類している。

4.4.1.5 許可

この分類では通常の規定や常識などの許す・許さないことを表す。昨日・今日・明日のような時間詞が文脈に出現したら、「前提条件可能」と同じく時間軸上に置かなければならないが、普段のルールや規定を述べる時に時間軸上に置かないことになる。

(20) 学生証がないと図書館に入れない。

(21) あした胃の検査をうけるので今夜は私はご飯を食べられない。

例文(20)が時間と関係なく、ルールとしては恒常的な意味合いが入っているため、時間と切り離せると考えられる。例文(21)の場合は時間詞があつて、時間軸上に置くことが可能であるが、時間詞がなくても「胃の検査」の前夜にご飯を食べられないという常識が存在していて、許可を表す。

以上の分類に対しては実行すれば可能・可能性があることを表すが、実行しなければ潜在的な能力を表し、時間の制限に左右されない。次の節では時間軸上において潜在的な能力や実現的な可能が異なる意味合いを表しているため、時間と切り離せないと考えられる。

4.4.2 文脈の背後において時間と切り離せない場合(S')

4.4.1 では時間軸に影響されない潜在可能であるため、可能・可能性を表す特徴が明白であるが、時間軸上で実現可能との境目がはっきりしないものが存在している。実現可能の特徴がある動作を実現することがやる(やった)かどうかには重視され、時間軸上から切り離せない表現である。この節で時間軸を過去、現在、未来を切り分け、場面あるいは文脈から潜在可能と実現可能の動作・状態を分析しながら境目をより明白する。次の表の過去(1)、現在(2)、未来(3)の順で分析していく。

【表2】時間軸上の潜在可能と実現可能

	潜在可能(A)	実現可能(B)
(1) 過去	(A)-S ₁	(B)-S ₁ '
(2) 現在	(A)-S ₂	(B)-S ₂ '
(3) 未来	(A)-S ₃	(B)-S ₃ '

4.4.2.1 (1) 過去における事象

この節で既に過去の事柄の可能・不可能、あるいは実現・未実現の出来事である。

【表3】(1)過去についての可能表現の分類

	潜在可能(A) -S ₁	実現可能(B) -S ₁ '
過去	1) 恒常(不)可能 2) 一時的(不)可能 3) 反事実可能	4) 未(不)実現 5) 達成性可能 6) 予想外の(未)達成

4.4.2.1.1 (A) -S₁(過去潜在可能)

1) 恒常(不)可能

この部分は過去の(不)可能・可能性がある・ないことを表す。人が昔のことを振り返る時にこういう潜在的な能力・可能性の可能表現を使用する場合もあれば、現在の状況と対照し昔の状況を述べる場合もある。

- (22) 小さいころは夜のお墓なんて怖くて一人で行くことができなかった。
- (23) 小さい頃から大人しく無口で自分の意見は言えない子供でした。 (BCCWJ)
- (24) 久礼小時代、二年生まで泳げなかった。 (同上)
- (25) トットちゃんは、このとき、まだ時計が読めなかったんだけど、それでも長い時間、
と思ったくらいなんだから、もし読めたら、ビックリしたに違いない。 (『窓』)

例文(22)が小さい頃の思い出である。また、現在の自分は勇気があるので、行くことが可能になったことも読める。例文(23)(24)が自分、他人の今までできなかったことを表す。こういう恒常(不)可能の[4.1 文脈から背後に時間と切り離せる場合(S)]と異なって、人間の活動や人間の経歴などと繋がる。時間軸上で人間の思い出とか、人間の成長とか、人間の感情が含まれている。この部分に使われている動詞は可能形の接辞を付加しにくいものを除いて、「思い出す、始まる、終わる等」の瞬間動詞が少なく、継続動詞の「泳ぐ、食べる、書く」などの動詞が良く使われる。例文(23)は「言えない」が「タ」形ではないが、過去の状態を表し、この状態が今までも続いている可能性があるとして推測される。また、例文(24)が二年生以降の久礼の現在と比較して昔の状況を述べている。例文(25)が小説の描写であるため、「このとき」がもう既に過去の事象を言うため、「読める」能力も事が発生する当時になかったことを表す。この部分の潜在的な能力が現在の時点になって過去の能力や可能性があった・なかったことを表現する。

2) 一時的(不)可能

1)は過去の可能・不可能が一定の期間に恒常的な能力や可能性のある・なかったことを表すが、この部分では、過去の一時的に可能・不可能であることを表す。

- (26) きのは体調が悪くて仕事に行くことができなかった
- (27) 私は足を怪我してきてきのは泳ぐことができなかった
- (28) 17歳の誕生日を目前にして、私は不安と期待で朝方まで寝付かれなかった。(『阿』)
- (29) 当時、巨人には村田真がいて、なかなかゲームに出られなかった。(BCCWJ)

例文(26)(27)のように文脈の背後に普段「仕事に行くこと」「泳ぐ」が一般的なことであり、主体の永続的な属性が存在している。一時的にこの動作を行なう可能性がなくなったという表現である。この部分の潜在可能が一時的に実現した(しなかった)ことを表す実現可能との異なりが背後に存在している永続的な属性があるからである。

3) 反事実可能

反事実可能の文脈で「のに」が使われ、残念な気持ちを表す。このグループでは能力・可能性の存在については、恒常的な潜在もあり、一時的な潜在もある。

- (30) 昔は韓国語を話せたのに。
- (31) 5年前に実際に震災を経験されたドクターにこの試作品をお見せしたところ、「あの震災の時に、このような製品があったら、もっと多くの患者さんが救えたのに。」とおっしゃいました。(BCCWJ)
- (32) 一週間前だったら、俺はこんな音楽を聴いても、たぶんただの一切れも理解できなかっただろう、と青年は思った。(『海(上)』)
- (33) もし彼女がいなかったら、私はたぶんこの生活に耐えられなかったと思います。淋しくなると私は泣きます。(『ノ』)

例文(30)の能力が恒常的な能力であり、生まれつきの能力とか、習得を得て獲得した能力とか、昔こういう能力があったのに、現在何らかの原因で失ってしまった。例文(30)では韓国語を話す能力は昔あったが、現在「話せない」ことを表す。例文(31)が一時的な能力を表す。何らかの状況があってそういう可能性があったことを表現する。例文(32)と例文(33)も反事実であるが、仮設文で可能構文の不可能を表している。この分類では「のに」が出現して今の事実と反対のことを述べるが、次の用例と紛らわしく混乱しやすい。

- (34) 結局今日はちっとも上手く弾けなかったのに、悪戦苦闘そのものがその後の知的活動に役立ってくれたのだ。(BCCWJ)
- (35) 入学するまでは自分の名前をちっとも書けなかったのに、今ではお母さんに言われて名前の練習をするようになりました。(同上)

例文(30)と(31)の「のに」が逆接な意味を表し、例文(34)(35)のニュアンスと異なる。ここの例文(34)の「弾けなかった」が一時期な不実現を表す。例文(35)が過去の恒常的な能力を表し、今は練習することに辿った。「のに」の使い方によって異なり、反事実の意味合いと逆接な意味合

いが文脈から判断しなければならない。

4.4.2.1.2 (B) -S₁' (過去実現可能)

4) 未(不)実現

この部分の可能表現は頑張り続く事を経て達成した・達成しなかった事を表す。文脈の中で「結局」「最後まで」のような要素が入っていて、動作主の達成したい意志を強く表出していると思われる。

- (36) あの本は時間がなくて最後まで読むことはできなかった。 (渋谷 2008)
- (37) 最後まで喧嘩もせずに彼女と共同作業ができたのは僕一人だけだった。 (『中』)
- (38) 私は何年もかかってやっとこれら古代の銅銭を収集できた。 (『ネ』)
- (39) この七年間、私はそれを解明しようと自分なりに努めてきたが、結局手がかりひとつ掴めなかった。 (『1Q84(1)日』)
- (40) 夕食のあとで緑に手紙を書こうとしたが何度書きなおしてもうまく書けなかったのも、結局直子に手紙を書くことにした。
- (41) 天吾は結局なにひとつメモに書き留めなかった。 (『1Q84(1)日』)
- (42) 郵便局に小包を送りたいが、雑用があつて結局行けなかった。

例文(36)では動作主が本を全部読みたかったが、忙しくて実現できなかった。「あの本」が客体であるが、「読む」主体が人間で意志性が強い。例文(37)が「喧嘩する」ことを起こさないように頑張ったことを表している。例文(38)～(40)が同じで一つの事柄を達成するように努力した。例文(41)が心理的な要素が入っていて実現しなかったのも、未実現であるが、例文(42)が「郵便局に行く」ことを達成したいが、「雑用」があるため実行しなかったことを表す。この文脈の中で「結局」があるため、実行したい意志が強かったことが感じられる。以上の例文では実現した・しなかった時点まで内的な要因である心理的な面や能力不足などのことで未実現になった、或いは、外的な要因である用事や時間などのことで未実現、未実行になったことを表す。

5) 達成性可能(チャレンジ成功・失敗の可能表現)

この分類は今まで経験したことがない事をチャレンジしてみると達成した意味を表すものである。前文に試してみることを表し、「やってみる」や「～たら」などがよく使われる。

- (43) 先週は手すりに捕まらなければ登り降りができなかったけど、今日やってみたら捕まらなくても登り降りができた。 (BCCWJ)
- (44) 実験開始色々やってみたら、出来たけど、1個作るのに2個作り、1個を犠牲にしないと出来なかった。 (同上)
- (45) 私たちはいろいろやってみたが、皆の気持ちを奮い立たせることは出来なかった。 (『ネ』)
- (46) 彼はいろいろ調整してみたが、漢字を表示することはできなかった。 (同上)

例文(43)の場合は失敗してから再びチャレンジして成功したことを表す。例文(44) (45)が試作でチャレンジして達成しなかったことである。例文(46)が改善したくチャレンジしてみたが達成しなかったことを表している。何れも意図があって意志性が強い事柄である。

6) 予想外の(未)達成(予想外・努力の達成を表す可能表現)

文脈の背後に動作や状態の潜在的な能力が潜んでいる意味がある。その上に自分の予想より(不)理想的な結果を得たことを表す。

(47) きのは体調がよくて、1キロ泳ぐことができた。(渋谷 2002:25)

(48) きのは天気がよくて、頂上まで行くことができた。(渋谷 2002:25)

(49) きのは時間ができてやっと郵便局に行くことができた。(渋谷 2002:25)

例文(47) (48)の目標達成が少し難しいが、内的な要素と外的な要素があって実現できたことを表す。例文(49)の場合は忙しくて「郵便局に行く」ことが難しいと思ったが、実現できたことを表現している。文脈に「やっと」という副詞が入っていて動作主にとって過去の一定な期間でなかなか実現できないことを実現したニュアンスが読める。副詞と実現可能の成立条件に密接な関係が存在していると考えられる。

7) 結果可能

また、次の例文は努力を経て実現したものである。

(50) (長時間絵を描いていて)かけた！できた！(完了) (渋谷 2002:25)

渋谷(1993)では例文(50)が実現可能の「結果可能」に分類されている。努力を経て実現した結果を表す。実現可能の特徴が鮮明であるものである。

【表 4】 (1)過去における「可能」が生じる事象

	状況	可能・可能性/実現・実行
潜在可能(A) - S ₁	能力が状況によって	(可能・不可能/可能性がある・ない)を表す
	能力が一時的な状況によって	
	もう一回やり直せばその能力が	
実現可能(B) - S ₁ '	努力とチャレンジをしてみたら	実現・可能になった/ならなかった
	予想外の	
	未実現	

(筆者作成)

4.4.2.2 (2) 現在における事象

この部分では現時点で「可能」を表す潜在可能と実現可能がどのように事象の可能・可能性を生じるのかを分析し、次のようにまとめる。

【表5】(2) 現在についての可能表現の分類

	潜在可能(A) - S ₂	実現可能(B) - S ₂ '
現在	(技能、知識を身に付けた) 1) 能力獲得可能 2) 程度達成可能	3) 反復実現可能

4.4.2.2.1 (A) - S₂ (現在潜在可能)

1) 能力獲得可能

能力を獲得した可能構文である。習得することを経て、昔できないことが今その能力を身に付けた意味を表す。

- (51) うちの孫は(もう)一人で着物を着ることができる。
- (52) うちの孫は字を覚えたのもう本を読むことができる。
- (53) その学校に通ってから、難しい課題も解ける。

例文(51)～(53)はできないことからできるようになったことを表し、習得することを経て、その能力を持つようになった。時間軸上に置かれ、できない状態からできる状態への変化を表し、恒常的な能力である。

2) 程度達成可能

この部分は文脈の背後にそういう能力を持っているが、一定の程度に届く、届かないという事態が不確定で、条件を満たすと達成できる分類である。

- (54) (ご飯を作っている場面で)この魚は中まで火が通っていないからまだ食べられないよ。
- (55) 200ポイントに貯めたら、炊飯器を交換できる。
- (56) 今日は風邪を治ったから何時間でも泳ぐことができる。

例文(54)の「この魚」は食べることが可能であるが、火を魚の中まで通さなければならないという条件がある。この条件が一定な程度までに達したら可能になることを表す。例文(55)も同じである。例文(56)が健康の状態でも時間も泳ぐことが可能であるが、風邪を引いている時に無理なので、今は治った状態になったため、可能性のあることを表す。

4.4.2.2.2 (B) - S₂' (現在実現可能)

この部分が実現可能であり、現時点に反復で実現しよう、した事態を表す。現在発生している

期間でチャレンジしたら、失敗したと達成したことを表す。そういう能力があるかどうかは未知で、心理的な予想が要因になって実現したものが多い。

3) 反復実現可能

発話時に発生している場合に何度も試作して実現した・しなかったことを表す。

- (57) (成績が良いクラスメートに見せながら)ほら、この問題は私も解けるよ。
- (58) (風邪を治ったばかりの私を心配している母に見せながら)ほら、泳ぐことができるよ。
- (59) (ドアがあかないと言い張る相手に)ほら開けることができるよ。
- (60) (流れの急な川を途中まで渡りながら) 怖くて向こうまで渡ることができないよ。
- (61) (難しい字を書こうとして途中まで書きながら) どうもうまく書くことができないよ。
- (62) (錆ついてあかないドアをあけようと試みて) 開けることができないよ。

現在に発生している場面に動作主が達成した・しなかったことを表す。例文(57)は普段勉強しない私が多分この問題を解けないと思っているクラスメートの前に、問題を解決したことを現し、能力の実現を表す。動作主の試作と努力が文脈の背景に含まれ、意志性があると思われる。例文(58)も同じで何かを証明したいという気持ちが入っていてやったことを表す。それから、例文(59)の相手が開かなかったため、恐らく動作主である私も開かないだろうと考えている時に、この事象を達成したことを表す。例文(60)～(62)が達成できなかったことである。例文(60)の動作主が心理的な原因があってやってみたが達成しないことを表す。

【表6】(2)現在における「可能」が生じる事象

	分類	状況	可能・可能性/実現・実行
(A) - S ₂	1) 能力獲得可能	元々できない状態から	可能になる。
	2) 程度達成可能	一定の条件が必要で	
(B) - S ₂ '	1) 反復実現可能	努力すれば	

4.4.2.3 (3) 未来における事象

この部分は未発生な事柄であり、予測で可能・不可能あるいは実現しようと思っている事象を表す。

【表7】(3) 未来についての可能表現の分類

	潜在可能(A) - S ₃	実現可能(B) - S ₃ '
未来	1) 一時的な能力・可能性を獲得(喪失)	2) 積極的・消極的な態度・決心・結果

4.4.2.3.1 (A) -S₃ (未来潜在可能)

1) 一時的能力・可能性を獲得(喪失)

この分類では時間詞が現れ、何らかの理由で元々潜在している能力を失ってしまう。或いは元々潜在している能力をもっと発揮していくことを表す。一時的だけの状態である。

- (63) 今日嬉しいことがあったから明日は泳いだらきつとすいすい泳ぐことができる。
- (64) 宝くじ 1000 万円に当たったから、明日高級車が買える。
- (65) 私は指を骨折して、明日はパソコンを打つことができない。

例文(63)の主語が表れていないが、主体である私は調子が良いので、元々潜在している能力をもっと発揮できることを表す。例文(64)が宝くじに当たらなかつたら高級車を買いたくても経済的な能力がないが、今 1000 万を持っているため、明日買う能力があることを表す。例文(65)が元々パソコンを打つことができるが、今指を骨折した原因があつて明日一時的にパソコンを打つ可能性が失ってしまったことを表現する。

4.4.2.3.2 (B) -S₃' (未来実現可能)

この分類では実現出来るかどうか分らないが、決心と態度で実現しようという気持ちがある。前節の「一時的能力・可能性を獲得(喪失)」と異なる。この部分の可能構文は文脈の背景に潜在的な能力があるかどうかのニュアンスが含まれていない。とにかく発生する事象の達成への望みがあつて頑張ろうという気持ちが文脈の背景に含意していると考えられる。このような文脈で「明日」のような時間詞が使われている。

2) 積極的・消極的な態度・決心・結果

- (66) あれだけ勉強したんだから、明日は絶対試験に合格することができる。(渋谷 2002:25)
- (67) 三日も休んだんだから、疲れもとれて明日は絶対最後まで走ることができる。(同上)
- (68) いまインクを取り替えたから、明日中に全部印刷することができる。(同上)
- (69) 今日は疲れていて、夜までには論文を書き上げることができない。(同上)
- (70) 原稿用紙がなくなったから、夜までには論文を書き上げる事ができない。(同上)

例文(66)は努力を経て、明日の試験でうまく発揮すれば合格することを望んでいる。合格する可能性があることを表す。例文(67)も実現する可能性があり、主体の決心を表している。例文(70)が突発な出来事で突然達成することが不可能な意味合いを表す。何れも未発生なことだが、今の状況・状態は未来に影響を与えているため、「実現する・しない」ことに関わる。

【表 8】 (3) 未来の潜在可能と実現可能の事象

	分類	状況	
(A) -S ₃	1) 一時的な能力・可能性を獲得(喪失)	一時的に状況があつて	可能になる。
(B) -S ₃ '	1) 積極的・消極的な態度・決心・結果	心理的な動きがあつて実現したい、一定の状況があつて	

4.4.3 実現可能の構文的特徴

高橋太郎(2003:110)の研究を踏まえ、実現可能に対して構文上の特徴があるかどうかを考察する。さらに、成立条件に関わる要素が何かあるのかを分析してみたい。

4.4.3.1 文中に意図・意志を内包するもの

この部分では意志性があつて、実現した・しなかった文の特徴を持っている。述語としてよく使われるが、修飾として使われているものが少ない。これらの実現可能構文の意味と特徴を次のように分析する。

1) 副詞との相関関係

文中に「うまく、すぐに、ようやく、はっきり、すでに、やっと、全部、よく、綺麗に、意外に、十分、ついに」などの副詞がよく使われる。

- (71) うっかりして車が泥沼にはまってしまい、皆で懸命に押してやっと脱出できた。(『ネ』)
- (72) 長いことかかってやっと問題をはっきりさせることができた。(同上)
- (73) 私は何年もかかってやっとこれら古代の銅銭を収集できた。(同上)

例文(71)(72)(73)では、「車が泥沼にはまったこと」、「長いこと」「何年」などの不利なこと、ある動作の実現を妨害している状況や背景により、働きかけの意図があつて実現したことを表す。文中に「うまく、すぐに、ようやく、はっきり、すでに、やっと、全部、よく、綺麗に、意外に、十分」などの副詞の出現により、実現した事柄は意志性との係わりが強くなる。もし、これらの副詞がなくなると、意志性が弱くなる。例文(71)の「やっと」を消して、例文(74)のようになる。

- (74) うっかりして車が泥沼にはまってしまい、皆で懸命に押して脱出できた。
- (75) うっかりして車が泥沼にはまってしまい、皆で懸命に押して脱出した。

例文(74)の意志性が弱くなり、例文(75)に近い語感をもっている。「うまく、すぐに、ようやく、はっきり、すでに、やっと、全部、よく、綺麗に、意外に、十分」などの副詞が使われている文は肯定文に多いが、否定文もある。

- (76) うまく隠れられなかったので、彼に見つかった。 (『ネ』)
 (77) 先生ははっきり聞き取れなかったので、私はもう一度繰り返した。 (同上)
 (78) その広告はしっかりくっついていて、どんなにはがそうとしても、綺麗にはがせなかった。 (同上)

実現しなかったことは前文も後文も置かれる。例文(76)(77)は不利な内容が提示されていないが、意図・意志の存在が動詞の可能表現から表している。例文(78)は前文に不利な事があり、副詞の使用によって意志性をさらに強めている。このような意図・意志がある否定文は用例の中でもよく現れる。

2) 文型との相関関係

文中に「あまり～ない。～ようとしたが、～。何も～。誰も～。何度も～ない。いつも～ない。どうしても～ない。～しか～ない。」などの文型がよく現れる。

- (79) 昨夜は一睡もできず、今日は授業中どうしても集中できなかった。 (『ネ』)
 (80) 彼の唇はずっと震えていて、何も話せなかった。 (同上)
 (81) この字は一生懸命消そうとしたけれど消せなかった。 (同上)
 (82) 彼の質問に私は1つも答えられなかった。 (同上)
 (83) 今ではヒバリの鳴き声はあまり聞かれなくなった (同上)

例文(79)～(83)の接続表現の出現により、努力したが、実現しなかったことを表す。接続表現の意味から意志性が強くても意図を達成できなかったことが読める。このような接続表現が使われていない場合には、前文に不利な事と有利な事があって実現した・しなかったことを表すものも多い。

3) 原因・理由との相関関係

前文に状況や原因により、実現した・しなかった事態があらわれる。

- (84) 彼女はやり手なので、うまく対応できた。 (『ネ』)
 (85) 彼は一晩中苦しんで、眠れなかった。 (同上)
 (86) おしゃべりの声が深夜まで響き渡って、隣部屋の人によく眠れなかった。 (同上)
 (87) 船は沈むのがとてもはやく、多くの人が逃げられなかった。 (同上)
 (88) ボールの勢いがよすぎて、彼はキャッチできなかった。 (同上)

例文(84)～(88)の実現した・しなかったことは文中の状況・原因によって発生した結果である。肯定文の場合は実現した理由が有利な原因や状況である。否定文の場合は前文に不利な原因や状況を表わすものが多い。このような不利な事によって意図・意志を達成しなかったことを表す。この角度から分析すると、実現の過程で努力する意志性が重要な要素である。

4) 動詞の意味素性との相関関係

動詞自身の意味素性によって意図・意志があるもの。人間の働きかけに関わる動詞であり、主体性も意志性もある場合である。

(89) 私たちは楽しく問題なく協力することができた。 (『ネ』)

(90) 私が初めて理解できた日本語は、お正月に酒を飲みすぎないように。 (同上)

例文(89) (90)の「協力する」「理解する」は努力する意味合いがあると思われる。「協力する」という動詞が一人でできることではなく、他人との交流を努力する必要がある。「理解する」も対象を知るように努力せずに実現できないものであるため、意志性が強いと考えられる。

4.4.3.2 文中に意図・意志を内包しないもの

この節では、実現しようという意図・意志と関係なく、出来事の結果やこの事実が結果として表れている。この部分の「可能」を渋谷(1993)の「Ⅱ. 結果可能」に近い。

1) 自然発生の事態について

意図・意志を表わしていない構文である。

(91) 彼はそこに着いてすぐ、親友が一人できた。 (『ネ』)

(92) このところ新聞を読みたいという気持ちになれなかったんだ。 (『1Q84(2)日』)

(93) 会話というほどのものは交わされなかった。 (同上)

例文(91)～(93)は目標に向かって実現する意図・意志が表わしていないと思われる。自然に起こった事柄である。例えば、例文(91)は「彼」がもしかしたら、友達を作ることが上手で、短期間である人と親友になった可能性もある。また、例文(92)は読もうという意図・意志が表わしていない。読む気がないため、自然になった事柄を表す。例文(93)も会話できるように努力するニュアンスがなく、意図・意志がないと推測できる。

2) 結果を表す事態について

主語が現れず、結果だけを表すもの。

(94) 燃料をタイミングよく補充できた。 (『ネ』)

(95) このドラマはうまく改編できた。 (同上)

(96) この台本はすでに改編できた。 (同上)

例文(94)～(96)の「補充」「改編」は明確に誰がやったのかを表していない。ここでは、ただ客観的な状態や性質を表す。例文(94)は動作主を表していないが、文末の動詞「補充する」が人間の存在を示している。例文(95)(96)の主語が物になっているが、「改編」の主動者が人であり、

実現した結果を表している。

以上の分析から分かるように「意志性」がある場合と「意志性」がない場合の違いによって「実現可能」と「結果可能」に分類される。では、「実現」と「結果」がどう違うのかを視点の置き方からもう少し加える。

実現の視点が人の望みと意図に置いて、人間のコントロールが存在しているため、最後まで¹⁾の事象の「達成」にも視点が置かれている。結果の視点が人の望みと意図に関係がなく、過程に人間のコントロールも存在していないため、最後の事象の「結果」に視点が置かれている

4.5 まとめ

本章では時間軸上から分析し、日本語の「可能」の意味合いを表す可能表現の構文の成立条件の要素を考察してみた。考察した結果としては次の通りである。

ア) 文型や副詞との共起

実現可能構文を判断することが容易な文は4.1の処に取り上げた「うまく、すぐに、ようやく、はっきり、すでに、やっと、全部、よく、綺麗に、意外に、十分、ついに」などの副詞と、「あまり～ない。～ようとしたが、～。何も～。誰も～。何度も～ない。いつも～ない。どうしても～ない。～しか～ない。」などの接続表現があるものであった。これらの文に意志性を表出しやすいため、実現可能構文の特徴の一つである。

イ) 主語の有無と関係なく、動詞の主動者が人間である

考察の中で4.2のように、主語がある場合とない場合のいずれも動詞の主動者が人であることは実現可能構文の成立に関わっている。文中に意図・意志がなくても主動者の行動によって実現した結果を表す。しかし、次の例とは異なる。

(97) 長い熱心な拍手だった。ブラヴォ! というかけ声も時折聞こえた。(『1Q84(1)日』)

例文(97)が「ブラヴォ!」の声がなかったら、「聞こえた」が発生しないため、人との施動関係がなく、自発であると思われる。4.2の処に取り上げている文は人との施動により、出来事の実現した・しなかったことを表す。主語が物になっている例もあるが、例文(95)(96)のように「ドラマ」「台本」の主動者が人であり、良い結果を表している。従って、自発と実現の境目を見極めることが困難であった。

【注】

- 1) 実現可能と潜在可能のほかに、アクチュアルとポテンシャルと呼ばれる場合もある。
- 2) 実現可能と潜在可能について第1章の「1.2.2.2」を参照。
- 3) I:意志性である。C:(意志性以外の)成立条件である。S:事態である。
- 4) 林青樺(2010:89)を参照。
- 5) 表の専門用語については先行研究の内容を参考にしている。但し、内容については本研究の分析で

先行研究の分類をさらに細かく分けたものである。

6) 本論文では一時的な事象と状態を指す。

- (1) 先ほど走っていたのは誰か。
- (2) 午後、雪が降っている。

第5章 日本語の非可能構文・可能構文と中国語の対応表現の考察

本章では、日中対照研究の観点から、日本語の可能形の接辞を付加しにくい動詞に対して、対応する中国語の表現を考察する。中国語の可能表現は、動詞の意志性・非意志性を問わず、可能性・能力を表す意味があれば、可能表現を使用することができる。日本語の自・他動詞の可能表現が形式上と命題内容などの成立条件に制限される。本章の考察で日本語の非可能構文と可能構文は中国語の可能表現との対照を通して日中両言語の可能表現が使用上に存在している「ズレ」を明らかにする。

5.1 問題意識

日本語において可能表現が用いることができる動詞は意志動詞のみであり、非意志動詞には可能形を付加しにくい。基本的な動詞の可能形は「読む→読める」、「食べる→食べられる」のように可能表現を作ることができるが、「降る→降れる」、「咲く→咲ける」のような動詞の場合、可能表現を用いにくい。

- (1)a. 雨は降らない日が続いている。
- b. 不下雨的天气一直在持续。
- (2)a. 水仙を植えたが、花が咲かない。
- b. 种了水仙、可是不开花。

例文(1a)、(2a)は自然の現象で、意志に左右されない非意志動詞であるため、可能表現で表すのが困難である。この場合には、中国語も可能表現を用いない。しかし、例文(1)、(2)に対して、次の例文(3b)、(4b)の動詞も非意志動詞であるが、中国語では可能表現で表すことができる。

- (3)a. ? この薬を飲めば、一週間で治れる。
- b. この薬を飲めば、一週間で治る。
- c. 吃了这个药的话、一周就(能)好。
- (4)a. ? ファイルが開けられない場合には電話をください。
- b. ファイルが開かない場合には電話をください。
- c. 文件打不开的时候给我打电话。

例文(3b)の「治る」は有対自動詞かつ非意志動詞であるが、中国語に翻訳すると(3c)の「能好」で表すことができる。例文(4c)も「打不开」のように可能補語を用いて例文(4b)に対応する。「治る」の可能形が存在していないため、例文(3a)は非文となっている。例文(4a)の場合には「開かない」を使用するのが好む。日本語と中国語の対応は次の通りである。

	(日本語)		(中国語)
例文(4)	開かない	→	打不开
	? 開けられない	←	打不开

例文(3)(4)の対訳から日中両言語の可能表現の特徴が異なる。例文(3c)と(4c)のように文脈の中で可能の意味があれば中国語可能表現を用いるが、例文(1b)と(2b)のように可能の意味が無ければ可能表現は用いないことが分かる。日本語はそうではない。日本語可能表現は語形、命題内容、格構造、意志性などの要素に制限され、成立する条件がある。それで、第3章で分析した可能形を付加しにくい自動詞の構文の中では「可能」の含意が含まれる場合も存在しているため、これらの表現を含めて中国語との対応関係はどのように現れているのかを考察する。

5.2 先行研究

これから日本語の自・他動詞と中国語の可能表現に関する先行研究を見ていく。本章の疑問意識に対して解決していない内容を確認し、さらに考察する必要がある所を明確する。

5.2.1 張旺熹(1999)

張(1999:137)は「非不愿也、实不能也」について、意味と形式から「1. 企望意¹⁾的表现」、「2. 原因意²⁾的表现」、「3. 企望+原因的表現」の三種類に分けている。次のように具体的な説明を示している。

「1. 企望意的表現」：主観的にある動作を行い、目的と望みを実現できない或いは実現できなかったことを表す。この分類の構文には3つの特徴がる。

- 「V」或いは「V」と相当する意味の動詞が前文と後文に二回現れる特徴。(例文 12)
- 「願望動詞³⁾」を使う。例えば：「想、愿、担心、怕、生怕、害怕、恐怕、试图、只可惜、怀疑、思思念念」等。(例文 13)
- 「V不C」と一緒に使用する文型や副詞がある。例えば：「怎么也、谁都、实在、一点也、哪个也、连……也……、根本、终于、无论如何、什么都、再也、万一、如果、既然、总也、竟然、往往、一百个里也、哪个也、终究」等。(例文 14)

- (12) 而就凭一把伞、躲过一阵潇潇的冷雨、也躲不过整个雨季。 張(1999:137)
傘一本だけでは、一時のどしゃぶりをしのげても、雨季をずっとしのげるわけではない。(筆者訳)
- (13) 赵丹说出了我们一些人心里的话、想说而说不出来的话。 張(1999:137)
趙丹はわれわれが言いたいが、言えない事を言いました。(筆者訳)
- (14) 正如妻在信上所说：“三天三夜也摆不完！” 張(1999:137)
妻が手紙に書いてあるとおり、三日間をかかっても並べて終わらない。(筆者訳)

例文(12)は「躲」という動作が前文と後文に二回現れ、傘一本だけが雨季を耐えられないという意味を表している。例文(13)は望みを表す「想」を用い、願望を明確している。話したかったが、話せなかったことを表す。例文(14)の「V不C」は副詞「也」の文型と一緒に使われ、願望があったが、実現できなかったことである。

「2. 原因意的表現」：客観的な原因により、動作の結果を実現しなかったことを表す。その形式の特徴は二つに分けられる。

- d.) 原因が前文にある。(例文 16)
- e.) 「V不C」が「得」の後ろにある。(例文 17)

- (15) 因为地方太穷苦、前任区长收不起来款来被撤了职。 (1999:137)
地方が貧しく、前代の区長がお金を納められなかったので、首になった。(筆者訳)
- (16) 真静啊、静得我反倒睡不着了。 (1999:137)
本当に静かだ。返って眠れなくなってしまった。(筆者訳)

例文(15)の原因が前文にあり、「貧しい」という客観的な原因で「収める」ことが実現できなかったことを表す。例文(16)の原因は「静」であり、「V不C」が「得」の後ろにあり、実現できない状態を表している。

「3. 企望+原因的表現」：願望と原因の両方が含まれ、実現できなかったことを表す。

- f) 望み・願望+原因の後ろに「V不C」が現れる。

- (17) 我又吃力地走着、干渴疲乏、几乎拉不开双腿。
私は懸命に歩いた、喉が渇き、疲労で、両足を動けないほどだった。(筆者訳)

例文(17)は「走」という意志があったが、喉の渇き、疲労が原因で、足を動かすことが困難であることを表している。

「1. 企望意的表現」、「2. 原因意的表現」、「3. 企望+原因的表現」を次のような構文形式で表すことができる。

- 1. 「意図+非実現」
- 2. 「原因+非実現」
- 3. 「意図+原因⇒非実現」

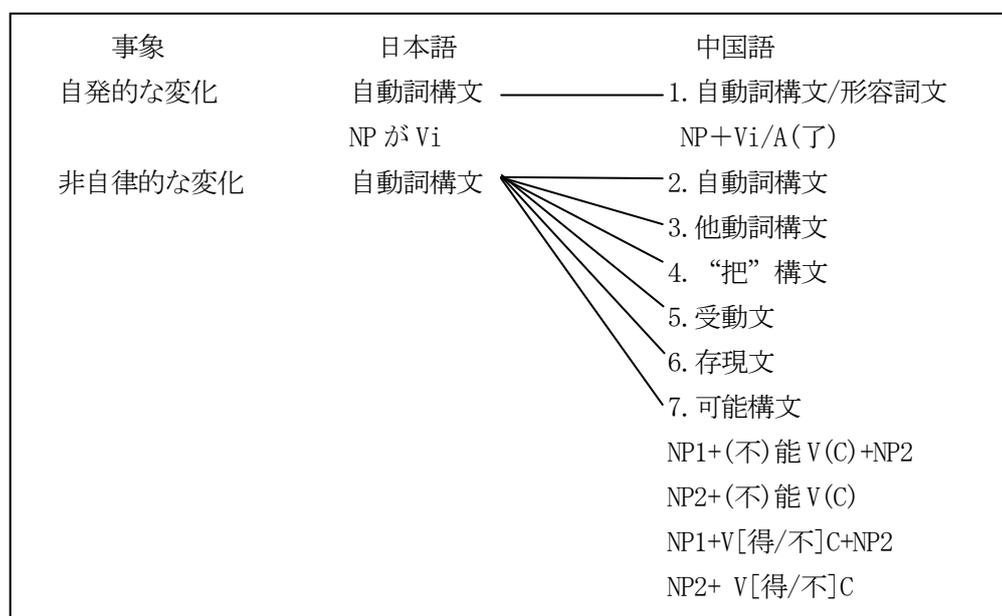
中国語の例文は日本語実現可能の性質と近いが、「非不愿也、实不能也」を表す場合に、日本語実現可能と「V不C」は対応できるかどうかはまだ検証されていないため、考察する必要がある。

中国語の可能表現の意味分類において、使用上に紛らわしい処があるため、たくさんの議論が存在しているが、本研究で日本語の「可能」を表す日本語可能構文と自動詞構文はどのように中国語に対応しているのか、日中両言語の可能表現は使用上にどのような相違点があるのかを焦点に当てて、対照研究の角度から分析する。

5.2.2 姚艳玲(2011)

姚艳玲(2011:309)では日本語の変化自動詞に対応する中国語の表現形式について、次のような対応表現があると分析している。【図 1】から分かるように、日本語の自動詞構文に対応する中国語の対応表現が多く、中国語の対応表現 1~5 の構文はそれぞれの特徴があると考えられる。

本研究の注目する点については、「非自律的な変化」を表す自動詞構文と「7. 可能文」の対応関係である。4 つの可能表現の形式から日本語の自動詞構文が中国語の「I) 助動詞による可能」と「II) 補語による可能」の一部に対応していることが分かる。



【図 1】 姚艳玲(2011:309)

本研究の第 2 章で「可能」の解釈をもつことのできる自動詞構文と自動詞可能構文、他動詞可能構文の比較の中で、視点の異なりを分析した。自動詞に対する論点について姚艳玲(2011)の主張を支持したい。この論点については、姚艳玲(2011)は日中両言語の変化自動詞文の違いについて次のように述べている。

(前略)、日本語ではもっぱら対象物に焦点が置かれ、自動詞構文として言語化されるが、中国語では使役主と対象物という 2 つの視点からの叙述が可能であるため、VC 構造をとる他動詞的構文や自動詞的構文として言語化されるのである。

この論点に対して、日本語の自動詞と中国語の対応関係に局在しているため、「可能」の解釈をもつことのできる自動詞構文と中国語の対応表現を考察する余地が残っている。また、自動詞の可能文に関する同形語と中国語の対応関係も含めて考察すべきである。

5.2.3 吉田雅子(2011)

漢語サ変動詞が殆ど可能形の接辞を付加しやすいため、漢語サ変動詞の可能形を考察する先行研究が少ない。さらに、漢語サ変動詞の可能表現と中国語の可能表現との対照研究も少ない。吉田(2011:49)では日本語と中国語の同形語についての相違点を整理しているが、可能構文については触れていない。吉田は日中両言語の同形語を品詞分類の方法でその相違点を分析している。下記のような品詞分類を提示している。

【表1】日中品詞分類

分類内容	具体例
① 非述形容詞	応用、確定、活動、等等
② 和製漢語	運動、解散、改良、等等
③ 1. 日本語がサ変動詞で、中国語が名詞だけのもの	故障、同感、作文、等等
2. 中国語が動詞と名詞のもの	暗示、移民、運動、等等
④ 1. 日本語がサ変動詞で、中国語が形容詞のもの	一致、乾燥、合格、執着
2. 形容詞と動詞	安定、失望、活躍、等等
⑤ 本語がサ変動詞で、動詞以外に他の品詞を持つもの	活動、分別、肯定、等等

(吉田 2011:49 をもとに筆者作成)

【表1】から日本語と中国語の同形語において品詞分類上、異なるものが少なくない。漢語サ変動詞の形式が「漢語+する」であり、語幹の「漢語」は可能表現で使用される際に、品詞の分類に制限されないが、第3章で解明したように漢語サ変動詞の意味特徴で制限される。しかし、中国語の場合は以下のように動詞(V)と形容詞(A)にしか使用しない。中国語の可能表現の可能形式は以下の通りである。

【表2】中国語の可能表現

I) 助動詞による可能	助動詞(能/会/可以)+V/A
II) 補語による可能	A類. 得/不+補語 ⁴⁾ B類. 得/不+了。 C類. 得/不得。

【表2】から中国語の可能表現は動詞および形容詞と共起するが、名詞および他の品詞とは共起しないことが分かる。【表1】の項目③の「1. 日本語がサ変動詞で、中国語が名詞だけのもの」を取り上げ、日本語の漢語サ変動詞の可能表現と中国語の対応表現を見る。

- (18)a. 単語が分らないから英作文できない。 (BCCWJ)
 b. 不懂单词、所以不会写英语作文。
- (19)a. 悔しいけど・・・同感できるよ！ (BCCWJ)
 b. 很懊悔・・・但是有同感！（筆者訳）

例文(18)と(19)のa文は可能表現が使われている。しかし、中国語の例文(18b)は可能表現が使われているが、「写」と共起しているので、「作文」が可能表現と一緒に使われにくい。例文(19)のb文では非可能表現である「有」が用いられ、日本語の可能表現に対応する。従って、中国語文の「作文」「同感」が可能表現と共起しにくいことが分かるが、「故障」の場合は少し異なる。

- (20)a. ギターも練習しないと引けなくなるが、やり過ぎると故障する。
 b. ? ギターも練習しないと引けなくなるが、やり過ぎると故障できる。
 c. 吉他不练习就不会弹了、练得太多也会⁵⁾出故障。

例文(20a)は可能表現が使えない。その要因は渋谷(1993:1)の「命題内容条件」に制限され、人が望ましくない内容が可能表現に用いられにくいため、(20a)と(20b)は置き換えができない。しかし、中国語(20c)は中国語の可能表現である「会」が使われている。「会出故障」の「出」が可能表現と共起している。例文(18)～(20)のa文から分かるように、例文(18)aと(19)aの可能表現が使われる場合と例文(20)aの可能表現を使用しない場合に対して、中国語の対応表現が可能表現に翻訳されているが、品詞の制限があるため、可能表現に対応しない場合がある。第2章で考察した可能形の接辞を付加しにくい日本語の漢語サ変動詞に対して、どのような同形語が中国語の可能表現を使用するかしないかを分析する必要がある。

以上の内容から分かるように、日本語可能表現の成立条件と中国語可能表現の成立条件が異なるため、対応表現も異なると考えられる。本章では、日本語の非可能構文と可能構文に対して、中国語との対応表現と対応関係はどのように現れているのかを考察する。

5.3 本章の研究手法

第2章で可能形の接辞について考察した。その結果を再掲し、日本語の可能構文と非可能構文の中で日中対照の視点から分析する。

5.3.1 本章の研究対象と目的

本研究の第2章で可能形を中心に可能形の接辞付加について調べた。本章は対照研究の視点から、日本語では可能表現を使用しないが、中国語では使用する、あるいは日本語では可能表現を使用するが、中国語では使用しないというような「ズレ」がなぜ生じるのかを成立条件の立場から明らかにする。

第2章と第3章では主に自・他動詞と漢語サ変動詞を中心に考察した。本章も同じく第2章と第3章で考察した内容を考察対象として分析する。自・他動詞は次のように再掲する。

【表 2-6】接辞付加の可否(再掲)

	接辞が付きやすい動詞	接辞が付きにくい動詞
無対自動詞(157 語)	65	92
有対自動詞(126 語)	22	104
無対他動詞(269 語)	222	47
有対他動詞(125 語)	116	9
合計	425	252

【表 2-5】漢語サ変動詞の考察資料⁶⁾(再掲)

	動詞数	二文字漢語サ変動詞
庵功雄(2008)		126
相澤正夫(1993)	1080	887
『日本語基本動詞用法辞典』	729	162
合計		1175

5.3.2 本章の研究手法

まず、本章では次のような考察資料から用例を収集する。

1) 小説類

『ノ』：村上春樹著(2004)『ノルウェイの森(上)(下)』講談社文庫

『窓』：黒柳徹子(1984)『窓際のトットちゃん』講談社

『1Q84(1)日』：村上春樹(2009)『1Q84 (book I)』新潮社

『1Q84(2)日』：村上春樹(2009)『1Q84 (book II)』新潮社

『海(上)』：村上春樹(2002)『海辺のカフカ(上)』新潮社

『海(下)』：村上春樹(2005)『海辺のカフカ(下)』新潮社

『中』：村上春樹(1997)『中国行きのスロウ・ボード』中央公論社

《挪》：林少华(2007)《挪威的森林》上海译文出版社

《窗》：赵玉皎译(2011)《窗边的小豆豆》南海出版社

《1Q84(1)》：施小炜译(2010)《1Q84 (book I)》南海出版社

《1Q84(2)》：施小炜译(2010)《1Q84 (book II)》南海出版社

《海》：林少华译(2007)《海边的卡夫卡》上海译文出版社

《去》：林少华译(2008)《去中国的小船》上海译文出版社

2) 辞典・資料類と学習類

『日ヴォ』：大東文化大学外国語学部日本語学科(1997)『日本語のヴォイスに関する用例集
—受身・使役・可能—』日本語学研究資料用例集①

『外』：文化庁(1971)『外国人のための基本語用例辞典』(第二版)大蔵省印刷局

《日动》：潘贤忠张国强(2001)《日语常用自他动词用例》北京工业大学出版社

3) [BCCWJ]：中納言

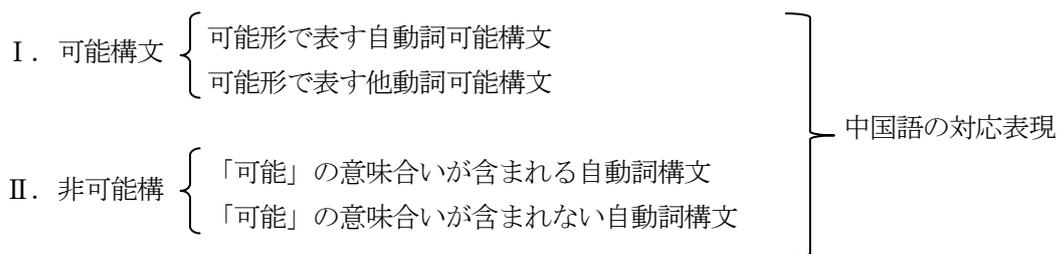
そして、収集した用例を a~d のようにグループに分け、データ化する。漢語サ変動詞に対して、日本語の同形語も取り出し、中国語との対応表現を考察する。漢語サ変動詞の場合には同形語と非同形語の品詞分類を確認し、吉田(2011)を踏まえ、名詞(N)、副詞(ADV)、動詞(V)と形容詞(A)をグループに分け、日中両言語の同形語の「ズレ」を考察する。

- a. (日本語の可能表現)——(中国語の可能表現)
- b. (日本語の非可能表現)——(中国語の非可能表現)
- c. (日本語の可能表現)——(中国語の非可能表現)
- d. (日本語の非可能表現)——(中国語の可能表現)

最後に、日本語と中国語の対応表現を分析し、「ズレ」が生じる場合の要因を明らかにする。

5.4 可能構文・非可能構文と中国語の対応関係

第2章で日本語の可能形の接辞を付加しやすい動詞と付加しにくい動詞に分け、「可能」の解釈をもつ日本語文を中心にして分析した。これから以下のように日本語の可能構文と中国語の対応表現、日本語の非可能構文と中国語の対応表現を順番に対応関係を見ていく。



日本語の可能構文と中国語の対応表現を考察した結果としては、日本語可能構文と中国語可能構文が対応する場合もあれば、対応しない場合もある。「日本語可能構文と中国語可能構文が対応する場合」と「日本語可能構文と中国語可能構文が対応しない場合」に分けて分析する。

5.4.1 日本語可能構文と中国語可能構文の対応表現

この節では可能形の接辞を付加しやすい動詞が可能構文に使われる時に、中国語の対応表現がどうなっているのかをみる。

1) 日本語可能構文と中国語可能構文が対応する場合

一般的には日本語可能構文は次のように中国語の可能表現に対応する。

- | | |
|------------------------------------|------------|
| (21)a. おなかがすいて <u>動</u> けない。 | (《日動》:31) |
| b. 肚子饿得 <u>动</u> 不了了。 | (同上) |
| (22)a. <u>入</u> れるが、出られない。 | (《日動》:264) |
| b. <u>能</u> 进去但出 <u>不</u> 来。 | (同上) |
| (23)a. <u>歩</u> いても <u>逃</u> げられる。 | (《日動》:247) |
| b. 即使走着也 <u>能</u> 逃走。 | (同上) |
| (24)a. 滞在はいつまで <u>延</u> ばせるか。 | (《日動》:258) |

b. 逗留时间能延长到什么时候？

(同上)

意味分類の角度から分析すると、これらの可能構文が第1章で述べた意味分類のグループ1[能力・属性・性能を表す]、グループ2[状況・状態・条件可能を表す]とグループ5[許可・許容]に属している。

また、グループ3[自発]、グループ4[評価]とグループ6[遂行可能]が中国語の可能表現に対応する用例が少ない。次の通りである。

【表3】日本語可能構文と中国語可能構文の対応関係⁷⁾

	日本語可能構文の意味分類	中国語可能構文との対応関係
グループ1	[能力・属性・性能を表す]	対応しやすい
グループ2	[状況・状態・条件可能を表す]	対応しやすい
グループ3	[自発]	対応しにくい
グループ4	[評価]	対応しにくい
グループ5	[許可・許容]	対応しやすい
グループ6	[遂行可能]	対応しにくい

【表5】のグループ1、2、5の意味分類は中国語の可能表現に対応しやすいため、日本語の可能表現の用法と共通している点である。また、グループ3、4、6は中国語の可能表現に対応しにくいため、日中両言語の可能表現の「ズレ」が存在している。

2) 日本語可能構文と中国語可能構文が対応しない場合

この節では、可能表現になっている日本語は中国語の可能表現で翻訳できず、他の表現で表しているものを取り上げる。中国語との対応表現は以下の通りである。

① 意味分類グループ3[自発]を表す場合

第1章の意味分類の分析で、自発の分類を行ったが、用例を再掲する。例文(25)～(30)が次の通りである。

(25)a. ボタンがとれた。 (高橋 2005:104)

b. 扣子掉了。

(26)a. ほどけないようにきちんと結んでおきなさい。 (同上)

b. 好好儿系好、不要让它松开。

(27)a. 泣くまいと思っても泣ける。 (同上)

b. 我想不哭、还是哭了。

(28)a. そよ風にちらちらと散る花吹雪に、故郷の春も思い出される。

b. 微风飘雪般吹落的花瓣、让我想起了家乡的春天。

- (29)a. 私にもそう信ぜられる。 (松下 1930:168)
 b. 你那么相信我。
 (30)a. あの論文はどうも核装備容認論に読めた。 (尾上 1998:87)
 b. 这篇论文怎么读都觉得是核装备容许论。

以上の例文(25)～(30)の a 文は性質が少し異なり、可能表現に属するべきかどうかという議論が様々である。これらの自発文は殆ど中国語の可能表現に翻訳されにくく、対応しないと思われる。しかも、対応表現も様々である。

【表 4】日本語の「自発」は中国語との対応表現

日本語	中国語
思われる (思う)	想到
思い出される (思い出す)	想起
思いやられる (思いやる)	可想而知
考えられる (考える)	认为
案じられる (案じる)	担心
泣ける (泣く)	流泪
微笑まれる (微笑む)	微笑
しのばれる (しのぶ)	怀念
感じられる (感じる)	觉得

以上の分析から分かるように中国語の可能構文が感覚、感情、思考を表す場合に自ら発生する事象に対して、可能表現を使用するのが極めて少ないと思われる。例文(25)～(30)のようにそのまま感覚や心理状態の中国語を使用する。この部分の中国語の対応表現から見ると、様々であるため、日本語学習者にとって難しい文法点であると分かる。

② 意味分類グループ4[評価]を表す場合

日本語の可能構文は一部の副詞と共起すると、物の属性や性質を評価する意味になる。中国語に訳すと様態補語に対応する。

- (31)a. この新商品がよく売れる。
 b. 这个新产品买得很好。
 (32)a. この刀はよく切れる。
 b. 这把刀很好用。
 (33)a. 硬くないので簡単に切れる。 [他動詞の可能形]
 b. 因为不硬、所以很容易切。

例文の副詞「よく」「簡単に」の他には「うまく」「一番」「はっきり」などのような程度副詞

がある。

- (34)a. 彼女はやり手なので、うまく対応できた。 (『ネ』)
b. 她很能干、事情办得很漂亮。
- (35)a. 今学期の中国語のテストが一番よくできた。 (『ネ』)
b. 这学期汉语考试考得最好。
- (36)a. 後ろに座っていてもはっきりと見える。 (『ネ』)
b. 坐在后面也看得很清楚。

以上の可能構文から、日本語の可能構文が程度副詞⁸⁾と共起する際に、中国語の対応表現には程度補語に対応する。

中国語の可能構文は評価を表す場合もある。

- (37)a. 他很会唱歌。
b. 彼は歌を歌うのが上手だ。
- (38)a. 他能吃能喝。
b. 彼はよく食べるし、よく飲む。

例文(37a)「会」で「歌を歌う」ことを評価し、中国語の可能表現「会」の「②あることをするのが得意である。ふつう前に、“很/真/最”などをつける。」⁹⁾を表す使い方である。例文(38a)の「能」を用いて彼の「よく食べる」ことを評価している。だが、日本語の可能表現で表さない。もし、日本語の可能表現を用いると、次のような例文がある。

- (39)a. 彼はよく歌える。
b. 彼はうまく歌える。
c.? 彼はとても歌える。

例文(39a)では、彼は曲が良く知ってたくさんの歌を歌うことを表す。例文(39b)が一曲の歌をコントロールができるため、度合を測りながら歌うことを表す。例文(39c)の「とても」が程度副詞であるが、可能構文にあまり用いられなくて不自然な文であると見られる。

③ 意味分類グループ6[遂行可能]を表す場合

日本語の可能構文「ル」形が中国語の可能表現に対応するものが多いが、「タ」形の場合は中国語の非可能表現に対応しやすい。

- (40)a. 明日までレポートを書けるよ。
b. 明天就能写完报告。
- (41)a. 一日かかってやっとレポートが書けた。

- b. 我花了一天的时间终于写完了报告。

例文(40a)の「書ける」が可能性を表し、中国語の「能写完」に対応する。例文(41a)の「書けた」は実現した事柄を表わし、中国語の結果補語「写完」に対応する。このように日本語の可能表現は時制に制限されないが、中国語の可能表現は時制の制限が存在している。時間軸上に「実現できた」可能と「実現できなかった」可能が中国語の可能表現に対応しない場合もある。この点については第5章の【4】「実現系可能と潜在系可能の日中両言語の対応表現の考察」で分析したい。

5.4.2 「可能」の解釈が可能な自動詞構文と中国語の対応表現

前節では可能形の接辞を付き易い動詞の可能構文と中国語の対応表現を考察した。この節から日本語の可能表現ではない自動詞構文が「可能」の意味合いが含まれる場合はどのように中国語の表現に対応するのかを分析してみたい。張威(1998)では、このような有対自動詞表現を「結果可能表現」と呼ばれ、「動作主の意図したものでなければならない」と強調している。このような自動詞構文を中国語に訳すと中国語の可能補語に対応し、中国語の可能を表す。

(42)a. 腕が痛くて手が上がらない。

b. 胳膊疼得手都抬不上来了。

(43)a.? 腕が痛くて手が上がれない。

b. 胳膊疼得手都抬不上来了。

例文(42a)の「上がる」の可能形がないため、例文(43a)が誤用である。中国語ではいずれも可能表現で表し、意志性の有無に影響されない。

また、日本語の可能表現は意志性がある動詞を使用するが、文脈の中で主体の意志性がない場合、可能表現を用いにくい。

(44)a. 明日雨が降る。

b. 明天会下雨

(45)a. ダイヤモンドが光る。

b. 钻石会发光。

(46)a. 今からこの仕事を始めれば、夕方までにはきっと終わります。

b. 如果从现在开始工作的话、到傍晚一定做得完。

c. 如果从现在开始工作的话、到傍晚一定能做完。

例文(44)～(46)のようにa文は自動詞構文であるが、対応している(44b)、(45b)、(46b)、(46c)の中国語が可能表現である。このような現象について考察する。

1) 自動詞(日本語) —— 中国語(可能補語)

「可能」の含意が含まれる自動詞構文について前章で分析し、なぜ「可能」の意味合いが生じ

たのかを主体性、動詞の特徴、意志性などの面から考察した。この中で、意志性が強いものが「可能」の意味合いが含まれやすく、一定の文構造によく表れる。中国語に翻訳されると次の通りである。

- (47)a. その流れがどうしても世界に広まらないのか。
b. 那种流行在世界上怎么也推广不了嘛？
- (48)a. 薬を飲まなければ、あなたの病気は治らない。
b. 不吃药的话、你的病就好不了。
- (49)a. 肝心の「ぼっぺん」という主人公の名前が最後まで決まらない。 (『窓』)
b. 叫「ぼっぺん」的主人公的名字到最后也决定不下来。
- (50)a. ところが、いきなりドアがパタンと閉って、開けようとしても開かない。 (『窓』)
b. 可是、突然门“啪”的一声被关住以后、想打开也打不开。

以上の例文が中国語に翻訳すると、可能補語になる。可能補語の否定形「V不C」はこのような構文によく使用される。この節では日本語の自動詞構文が「可能」の意味合いを含意する肯定文と否定文を分析する。意志性が強く表れる日本語自動詞の否定文が中国語文の可能補語「V不C」構造に対応する内容を述べる。

① 日本語の自動詞否定文と中国語の「V不C」構造

張旺熹(1999)は「V不C」構造をめぐって意味と形式から「1. 企望意的表現」、「2. 原因意的表現」、「3. 企望+原因的表現」の三種類に分けている。「1. 企望意的表現」、「2. 原因意的表現」、「3. 企望+原因的表現」を次のような構文で表すことができるという。

1. 「意図+非実現」
2. 「原因+非実現」
3. 「意図+原因⇒非実現」

以上の考察において、日本語の自動詞構文を中国語に訳すと以上のような文構造にもよく使われることがわかる。それぞれ次の通りである。

1. 「意図+非実現」

この部分の自動詞構文は前文に意志性が強いが、動詞の意味特徴から見ると意志性が強いものもあれば、弱いものもある。文脈から殆ど背景に人の動きが存在していると思われる。以下の例文で意志性があって実現しなかった意味を表す。

- (51)a. 開けようとしても開かない。
b. 想打开也打不开。
- (52)a. 知恵を絞ってみたが、なかなかいい考えが浮かばない。

- b. 我们绞尽脑汁、可是怎么也想不出来。
- (53)a. いくら考えても決心が付かない。 (《日动》:193)
 b. 无论怎么考虑都下不了决心。 (同上)
- (54)a. 勉強しても、日本語の力がつかない。
 b. 学也学不会日语。
- (55)a. 注射もしましたし、薬も飲みましたが、それでも体温は下がりません。
 b. 即使是打了针、吃了药、体温降不下去。
- (56)a. 残そうと思ってもお金はちっとも残らない。
 b. 想剩下点儿钱、却一点儿也剩不下。
- (57)a. あの人は失ったことは埋めようにも埋まらないそうだ。
 b. 那人想填补上失去的东西、好像也填补不上。
- (58)a. 勘定がへたなので、何度しても勘定が合いません。
 b. 算账很不擅长、几次都算不对。
- (59)a. 金庫にどうしても錠がかからない。
 b. 保险柜怎么锁也锁不上。
- (60)a. 音楽に対してはどうしても興味が湧かない。
 b. 对音乐怎么也提不起兴趣。

例文(51)～(60)の構文からよく「～ても」「いくら～ても～」「どうしても～」「～ようとして～」「なかなか」などの意志性が現れやすい要素が出てくる。

2. 「原因+非実現」

この部分の自動詞構文を分析してみると、動詞の意味特徴により主体性が強く、意志性が強いものが結構存在している(例文64、65、66、67、68、70)。背景に人間の存在が読めるが、意志性が「1. 「意図+実現できなかった」より薄い。また、実現できなかったもの以外に、何らかの原因で実行しない意味を表すものもある(例文62、65、66、69)。

- (61)a. 使う人が多いので、電話はなかなか空かない。 (《日动》:8)
 b. 使用的人太多、电话怎么也空不下来。 (同上)
- (62)a. ちっとも勉強しないので、成績が上がらない。 (《日动》:5)
 b. 因为一点也不学习、所以成绩上不去。 (同上)
- (63)a. のどがいたくて、食事が通らない。 (《日动》:216)
 b. 嗓子很疼、咽不下食物。 (同上)
- (64)a. 車がこむので、たびたび止まって、進まない。 (《日动》:152)
 b. 堵车、所以总停、前进不了。 (同上)
- (65)a. 行く所が決まらないので、計画が立ちません。
 b. 定不下去的地方、所以计划也定不下来。
- (66)a. けががひどいので、助からないだろう。

- b. 伤太重、也许救不了了。
- (67)a. 周りがうるさいから、両方で怒鳴らなければ話が聞こえない。
- b. 周围太吵了、双方不吼着说话就听不见。
- (68)a. 木が太いから、こんな小さいのこぎりでは切れない。
- b. 树太粗、这么小的锯是锯不断的。
- (69)a. 時間が来ないので、診察が始まらない。
- b. 不到时间、所以诊察开始不了。
- (70)a. 足が大きくて、くつが入らない。
- b. 脚太大、穿不进去。

例文(63a)が「食べたい」という意志があるが、「のどが痛い」事実があって、実現できなかったことを表している。例文(65a)の場合には「計画を立つ」動きかけがなかったが、立てたい気持ちがあるので、意志性が読めるが実行していないことを表す。例文(69a)も同じで、「時間」がまだまだなので、「診察」の行動も実行していないことである。

3. 「意図+原因⇒非実現」

意図と原因が共存する場合は少なく、しかも意図と原因をはっきりと示すものも少ない。

- (71)a. 猛吹雪で汽車が動かない。
- b. 因为刮着大雪、火车动不了了。
- (72)a. 行きたいことは行きたいが、お金があるので、なかなか決心が付きません。
- b. 想去是想去、可是要花钱、所以下不了决心。

例文(71a)の意図が操作する人間の意志が存在しているが、実現できなかったのが猛吹雪で動かないことである。例文(72a)の意図、原因で実現できなかった事象をはっきりと示している。

以上の三つのグループで自動詞文は殆ど辞書形で表す場合である。もし「タ」形で表すと中国語の可能補語に対応せず、結果補語に対応するようになる。

- (73)a. 開けようとしたが、開かなかった。
- b. 想打开，可是没打开。
- (74)a. 腕が痛くて手が上がらなかった。 (『外』)
- b. 胳膊疼得手都没抬上来。

目の前に発生する、或いは目の前に発生したことを実現できなかった、実行しなかった「一時的な実現」を辞書形で表す場合には中国語の可能補語に対応するが、「タ」形で過去の「結果」を表す場合には結果補語に対応する。このような現象については原・常次(2006:74)で言及している「现阶段」的实现」「已然句」「未然句」が中国語の可能補語の使用への制限と影響を与えていると考えられる。従って、「タ」形で過去の結果を表す場合には結果補語に対応する。

- (75)a. (昔の大学受験の事を思い出して)二十歳の時に、やはり受からなかった。
 b. (想起以前考大学的事)20岁的时候、还是没有考上。
 c. ? (想起以前考大学的事)20岁的时候、还是考不上。

「受からなかった」の事実が結果として今まで残っていて、例文(75b)の「没有考上」で訳すと「結果」を表し、自然な文であり、問題がないと思われる。だが、例文(75c)の「考不上」を使用する不自然である。

以上の分析で殆ど意志性が読める場合の自動詞構文は「可能」の意味合いが含まれるものである。次には肯定文について述べる。

② 日本語の自動詞肯定文と中国語の可能表現

意志性が潜在している自動詞構文の中では否定文より肯定文のほうが少ない。対応表現も一定の文構造の分類に対応する特徴も現れない。

- (76)a. 木の間から青空が見える。
 b. 从树的中间能看到天空。
 c. 从树的中间看得到天空
 (77)a. 汽車のまどから海が見える。
 b. 从火车的窗边能看到大海。
 c. 从火车的窗边看得到大海。
 (78)a. どんなに一生懸命やったって、あの人に敵う者ですか。
 b. 尽管你拼了命地努力、你能胜过那个人吗？
 c. 尽管你拼了命地努力、你胜得过那个人吗？
 (79)a. タクシーで行けばまだ間に合います。
 b. 如果坐出租车去的话、还来得及。

例文(76)～(79)のa文は「可能」の意味合いが含まれ、対応する中国語も可能表現である。中国語の可能構文が能力や可能性を表している。例えば、例文(76b)の助動詞「能」で「見える」可能性を表すことができるし、例文(76c)の可能補語「看得到」で表すこともできる。例文(77)も同じである。例文(78a)には「敵う」で人の意志性が表わし、自動詞構文の「可能」の意味合いが含意していると思われる。この自動詞構文に対応している中国語も助動詞「能」と可能補語である。例文(79)の「間に合う」が固定している言い方であるが、自動詞の性質を持っている。この文にも意志性があり、「可能」の含意が存在し、中国語も可能補語に対応する。

2) 自動詞(日本語) —— 中国語(必然性を表す可能表現)

日本語の自動詞構文の中、意志性もなく、「可能」の意味合いがあるかどうか曖昧な文がある。中国語の可能表現で必然性を表す。この場合の自動詞は意志性が薄くて、2つの場合に分

けることができる。

I. 人間の動きかけが潜在し、常識が人間の認識の枠にある場合

- (80)a. ちゃんと休めば病気が良くなるよ。
b. 如果好好儿休息的话病就会好。
- (81)a. 試験は簡単、だれでも受かる。 (BCCWJ)
b. 考试很简单、谁都会合格。
- (82)a. そうすれば村は助かるのか？
b. 如果这样做的话、村子就会得救吗？
- (83)a. 放っておいても治ると思った。
b. 我以为自然而然就会好。
- (84)a. はっきり言って、旅行が好きなら勉強しなくても受かるぐらい簡単な試験です。
b. 明确地说、这个简单的考试只要是喜欢旅行不学习也会考上。
- (85)a. 失業者が増え、社会不安が広まる。
b. 失业者增加、社会的不安定会扩大。
- (86)a. それより、一か月後の二月には夏の展示会が始まる。
b. 从那儿以后、一个月后的二月中夏天的展示会开始。
- (87)a. 放っておいても治ると思った。
b. 我还以为放着不管也会好起来。
- (88)a. 今からこの仕事を始めれば、夕方までにはきっと終わります。 (『外』)
b. 如果从现在开始工作的话、到傍晚一定做得完。
c. 如果从现在开始工作的话、到傍晚一定能做完。
- (89)a. あの人は一足さきに出たが、あなたが急げばすぐに追いつきますよ。
b. 虽然那人先迈出了一步、但是你如果加速的话能赶上。

例文(80)～(87)の中国語訳では「会」で訳される可能構文が多く、この場合の「会」が可能・可能性を表すより必然性を表す「会」である。「だろう」「でしょう」の意味合いがあるが、未来に発生する可能性があるとして読める。日本語の自動詞構文が例文(82)～(86)のように意志性が薄くて「可能」の意味合いを含まれていないと思われる。だが、例文(82)の前文に「そうすれば」という意志を表す内容があり、意図を示している。後文に推測する「会」で希望がある可能性を表す。「会」を殆ど省略できない。

II. 自然反応、物理的な事象、習慣などを表す場合

この場合の「会」は(I)と異なり、「会」を省略できる。意志性がないため、日本語の自動詞構文が「可能」の意味合いが含まれていないと思われる。

- (90)a. 水と油はよく混ざらない。 (《日動》:294)

- b. 水和油不(会)融合。
- (91)a. この材料は水に浸かっても錆びない。
 b. 这种材料放到水里也不(会)生锈。
- (92)a. 寒くなると、油は固まります。 (《日动》:81)
 b. 油一冷便(会)凝固。
- (93)a. 冬になると、私は腰が冷える。 (《日动》:279)
 b. 一到冬天、我的腰就(会)发凉。
- (94)a. 悪い人とつきあうと心が汚れる。 (《日动》:338)
 b. 如果和坏人交往心灵就会变肮脏。

この部分の自動詞は可能形の接辞を付加しにくい。動詞の意味特徴から見ると、意志性がとても低い。人間の存在が潜在していない例文(90)(91)(92)が物理的な事象で意志性がないし、主体性も無情物である。例文(93)(94)の主体性がある有情物の身体部位であるため、人間の存在があると考えられるが、働きかけと関係がなく、働きかけの意図もなく、自然的な事象或いは習慣的な事象を表す。

3) 自動詞(感情や心理作用を表す日本語) —— 中国語(可能表現)

日本語の可能形の接辞を付加しにくい分類の中で、「好く、好む、嫌う、惜しむ、羨む、恐れる、ねたむ、懐かしむ、慌てる、驚く、困る、等等」の感情や心理作用を表す動詞は可能表現を用いにくいだが、中国語の場合には可能表現と一緒に用いられる。

- (95)a. 这两年、我只能羡慕别人的爱情。
 b. この数年、私は他の人の恋愛を羨むだけであった。
- (96)a. 也许有些事儿只能怀念了。
 b. これらの事が懐かしむだけになるかもしれない。
- (97)a. 不知道为什么就是讨厌不起来那个人。
 b. なぜか知らないが、あの人を嫌うことにならない。
- (98)a. 他看了会吃惊吗?
 b. 彼が見たら驚くか?

例文(95)の「能」が「事を行う能力や条件があること」を表す。日本語文ではこのような感情的なことが自ら生まれ、可能表現で表すことができない。例文(96)と例文(97)も同じである。例文(97)の「讨厌不起来」が可能補語であって、感情的な面で「事を行う能力や条件があること」を表す。例文(98)の「会」は推測を表し、事象の可能性を表す。何れも中国語の可能表現でこれらの動詞の可能・可能性を表す。従って、これらの動詞が中国語の可能表現と共起することができるが、日本語の可能構文であまり表れないことを示している。

5.4.3 「可能」の意味合いが含まれない自動詞構文と中国語の対応表現

日本語の可能形の接辞を付加しにくい分類に「可能」の意味合いが含意する動詞と「可能」の意味合いが含意しない動詞は存在している。前節では「可能」の意味合いが含意する場合を述べてきた。この節では「可能」の意味合いが含まれない文と中国語の対応表現を分析する。

日本語の可能形になりにくい動詞が第2章で分析した。第2章で取り上げた図2を再掲する。

【無対自動詞】

弱	分類[1] (例:ある、ありふれる、優れる、異なる、など)
	↓
	分類[4] (例:晴れる、曇る、降る、ふぶく、映える、など)
	分類[6] (例:腐る、錆びる、濁る、腫れる)
	分類[5] (例:死ぬ、病む、疲れる、しびれる、咲く、茂る、など)
↓	
強	分類[9] (例:こもる)
	↓
強	分類[10] (例:こじれる、寂れる、栄える、はかどる)

【有対自動詞】

弱	分類[8] (例:はずれる、剥がれる、はげる、ほどける、など)
	↓
	分類[9] (例:納まる、付く、埋まる、詰まる、重なる、など)
	分類[6] (例:折れる、切れる、砕ける、潰れる、など)
	分類[10] (例:始まる、定まる、決まる、改まる、済む、など)
↓	
強	分類[5] (例:育つ、覚める、癒える)
	↓
強	分類[1] (例:見える、聞こえる、知れる)

【図2】自動詞の意味分類による意志性の強弱(再掲)

第3章で文脈に主体性も意志性も弱い文のパターンである「B: 主体性(意志性が弱いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が弱いもの)」が「可能」の意味合いがあまり読めない。中国語に翻訳しても可能表現で対応しない。対応する表現もそれぞれである。

- (99)a. 雨が降る。
 b. 下雨。[自動詞構文]
- (100)a. シャツのボタンが外れる。 (《日動》:273)
 b. 衬衫的扣子掉了。[自動詞構文] (同上)
- (101)a. このセーターは洗うと縮む。 (《日動》:187)
 b. 这件毛衣一洗就缩。[自動詞構文] (同上)
- (102)a. ノートに本が重なる。
 b. 本子上擦着书。[存現文]
- (103)a. 洗車しないと錆びる。
 b. 不洗车就生锈。[自動詞構文]
- (104)a. 五つで200円だから、一つ40円に当たります。 (《日動》:13)

- b. 5 个是 200 日元、一个合 40 日元。[自動詞構文] (同上)
- (105)a. もう春だというのに、夜はなかなか冷える。 (《日動》:280)
- b. 已是春天、但晚上很冷。[形容詞文] (同上)
- (106)a. サイダーがあふれて、コップから零れる。 (《日動》:124)
- b. 汽水满了、从杯中溢出。[自動詞構文]
- (107)a. 地震で大地が裂ける。 (《日動》:139)
- b. 因地震、大地震裂了。[自動詞構文]

例文(99)～(107)の意志性がなく、物理的な事象と自然現象を表す自動詞文に対して、中国語の表現も様々である。例文(99)の「降る」に対応する中国語は動詞「下」で表す。例文(102)のように状態を表す「着」が使われる例もある。そして、例文(103)の物理的な事象は動詞「生锈」で表す。また、例文(105)のように形容詞「冷」に対応する場合もある。他には例文(106)(107)のように方向補語「溢出」と結果補語「震裂」で表し、結果を表す文もある。

5.4.4 自動詞と他動詞の可能形が同形語である場合

自動詞と他動詞の可能形が同じ場合、文脈から自動詞であるのか他動詞であるのかを判断する。文脈では「動作」を強調するのが他動詞で、「状態」を強調するのが自動詞であるという性質を持っている。

- (108)a. 紙をカッターで切る。[他動詞]
- b. 用工具刀切紙。
- (109)a. この刀は何でも切れる。[他動詞の可能形]
- b. 这把刀什么都能切断。
- (110)a. このナイフはよく切れる。[自動詞]
- b. 这把小刀很快。

例文(108)は例文(109)のように刀の使用者が人であり、使用してからこの刀の良さが分かるため、「切る」という動作により可能性を表している。例文(110)の「切れる」は、ナイフの良さを褒めるために刀の状態を表現している。例文(109)を中国語に訳すと、中国語の可能表現である「能」で表すが、例文(110)は中国語の可能表現を使わず、形容詞を用いて物の性質を評価する。類似する自動詞は、他に「焼ける—焼く」「売れる—売る」等がある。

1) 自動詞の可能形と他動詞が同形語である場合

- (111)a. 一緒にステージに立てる日を楽しみにしています。[自動詞の可能形]
- b. 期待着我们一起能站在舞台上的那天。
- (112)a. 生徒たちは校庭に旗を立てた。[他動詞]
- b. 学生们在校园里把旗竖起来了。
- (113)a. 卵が立てられる。[他動詞の可能形]

b. 鸡蛋能(被)立起来。

例文(111)では、自動詞の可能形「立てる」が期待されている状況、あるいは状態の可能性を表している。「立つ」という動作の意志がないため、動作性がない。例文(113)の他動詞の可能形「立てられる」について、動作主が出ていないが、「立てられる」ことが動作主の動作によって可能になる。中国語に訳すと、例文(111)も例文(112)も可能表現で表す。ただし、例文(113)の「立てられる」が可能になるため、動作主の存在をはっきりとさせる目的で、人の動作を強調する場合に中国語で「被」を使わなければならない。「被」がないと、卵の「立つ」可能性があることを表すことになってしまう。

従って、日本語の自動詞の可能形と他動詞の可能形は、文脈の中で表している重点が異なる。「状況・状態の可能性」を強調する場合には自動詞の可能形で、「動作の可能性」を強調する場合には他動詞の可能形をとるのである。

2) 自動詞・他動詞が同形語である場合

「開く」の自動詞・他動詞は同形語であるが、自動詞「開く」は可能形にできない、他動詞「開く」は可能形にでき、「開ける」である。

(114)a. 門が開いた。[自動詞]

b. 门开了。

(115)a. 子供はハサミで包みを開いた。[他動詞]

b. 孩子用剪刀打开了包裹。

(116)a. 私は薬剤師なので薬局が開ける。[他動詞の可能形]

b. 我是药剂师、所以能开药店。

中国語も例文(114b)(115b)のように、可能表現を使用しない。例文(116b)は「私」の能力・可能性を表し、中国語の対応表現「能」で表す。この場合「薬局を開く」条件が揃っているため、可能性を表している。

5.5 漢語サ変動詞と中国語の対応関係

日本語の可能表現においては、可能形と共起しにくい漢語サ変動詞は何があるのか、その要因を第3章で探って分析した。本節では対照研究の視点から両言語の可能表現の成立条件によって可能表現の使用上に存在している「ズレ」を考察する。品詞分類と意志性に分けて述べていく。

5.5.1 日中両言語の可能表現の「ズレ」

第3章のグループ1~4までの漢語サ変動詞を中国語との対照から「同形語」と「非同形語」に分けた。そして、可能形の接辞を付加しやすい日本語の漢語サ変動詞(A)、可能形の接辞を付加しにくい日本語の漢語サ変動詞(B)に分けた。また、同形語と非同形語に分けて示す。「a. 同形語」は日本語の漢語サ変動詞の語幹と中国語と同じであるものである。「b. 非同形語」はその逆である。

以下の【表6】に纏めた。

【表5】同形語・非同形語の分類

	a. 同形語	b. 非同形語
(A) 付加し やすいもの	使用する、修理する、証明する、 説明する、発明する、比較する、 など (114)	我慢する、工夫する、試合する、紹 介する、相談する、発見する、注文 する、支度する、など (38)
(B) 付加し にくいもの	影響する、関係する、後悔する、 誤解する、故障する、混乱する、 失敗する、不足する、流行する	心配する、迷惑する

【表6】の日本語の場合は可能表現に用いられない同形語である(B)aの動詞と(B)bの動詞が少ない。(A)aと(A)bの動詞が多いと思われるが、全て中国語の可能表現で用いられるとは限らない。漢語が同じであっても品詞分類が違う場合があるため、【表6】の考察結果をさらに分析した。

上記の【表6】の同形語と非同形語に対して品詞分類を行った。日中両言語の(A)と(B)が【表7】のように「可能形の接辞を付加しやすい日本語の漢語サ変動詞(A)」と「可能形の接辞を付加しにくい日本語の漢語サ変動詞(B)」である。考察の結果は次の通りである。

【表6】「同形語」の品詞分類から日中両言語の対応

	(A)	(B)
ア. 中国語(名詞)	同感する、作用する、記憶する、 始末する、など	意図する、外交する、故障する、 作文する、紅葉する、など
イ. 中国語(副詞)		一貫する、一致する、連続する
ウ. 中国語(形容詞)	乾燥する、緊張する、興奮する、 安心する、満足する、など	混雑する、腐敗する、沈黙する、 浪費する、混乱する、など
エ. 中国語(動詞)	利用する、使用する、処理する、 呼吸する、制作する、など	拍手する、造船する、蒸発する、 噴出する、沸騰する、など

【表7】の分類では(A)と(B)の非同形語が入っているが、次の分析は同形語の用例だけを取り上げ、日中両言語の「ズレ」を分析していく。

1) 日本語の漢語サ変動詞→中国語(名詞)

この部分では中国語の品詞分類が名詞であるため、可能表現を使用しない。一方、日本語の漢語サ変動詞は可能表現で表すものがある。【表7】のAグループの日本語の漢語サ変動詞が使われる。Bグループの日本語が中国語と同じく可能表現に用いられない場合もある。

(117)a. 書いてあることの95%くらい同感できる本というのは少ない。(BCCWJ)

- b. 让人 95%会有同感的书很少。
- (118)a. 葉の色はやや淡い緑だが、秋には紅葉する。 (BCCWJ)
- b. 叶子是淡绿色、可是、秋天会变红。

例文(117a)は可能表現で表すが、中国語の可能表現である「会+V」の後ろに「同感」が置かれている。例文(118a)は可能表現を使用しないが、中国語の例文(118b)には「会」で翻訳され、動詞「变」と共起している。「同感する」「紅葉する」の語幹である「同感」と「紅葉」が名詞であるため、「?会同感」「?会红叶」のように表現しにくい。

2) 日本語の漢語サ変動詞→中国語(副詞)

この部分では、日本語の漢語サ変動詞の語幹が中国語の品詞分類の中で副詞となっているものである。日本語の漢語サ変動詞(B)は殆ど可能表現に用いられないものである。中国語の分類でも「副詞」であるため、可能表現で使用するのが困難である。この分類において日中両言語の同形語の何れも可能表現に用いられないと思われる。

- (119)a. このストーリーは端的かつ明快な言葉で、理論的にも一貫するよう心がけた。 (BCCWJ)
- b. 这个故事的言直截了当、明快、而且也留意贯彻了理论。

例文(119a)も(119b)も可能表現の使用が困難である。中国語の場合には副詞が可能表現と共起しにくいという理由であるが、例文(119 a)は可能表現の接辞を付加しにくい理由である。何れも可能表現に用いにくい。

3) 日本語の漢語サ変動詞→中国語(形容詞)

この部分では中国語の場合には可能表現が使用できるが、日本語の(A)と(B)が同時に存在している。可能形の接辞を付加しにくい(B)は日本語の成立条件の「語形」条件に制限される要因と命題内容からの制限がある。

- (120)a. 私は予想外のことが起こると混乱する。 (BCCWJ)
- b. 我一发生意外、就(会)混乱。

例文(120 a)は可能表現で表せないが、中国語の場合には可能性を表す「会」が使われる。省略しても意味があまり変わらない。この場合の「会」は事象の必然性を表すが、日本語の例文(120 a)では可能表現を用いていない。さらに、日本語の可能表現を使用するかどうかということは動詞の命題内容にも左右される。

4) 日本語の漢語サ変動詞→中国語(動詞)

この部分では中国語の品詞分類が動詞である。日本語の(A)から可能表現を使用する漢語サ変動

詞の意志性が強い。だが、日本語の可能表現を使用しにくい(B)もある。少し異なっているのは「蒸発する」「噴出する」「沸騰する」などの自然現象を表す漢語サ変動詞が(B)グループでよく見られる。

- (121)a. 日本の精神的土壌から同じようなヤング・パワーが噴出するでしょうか。(BCCWJ)
 b. 从日本精神土壤中会喷出同样的年轻力量么?(筆者訳)

日本語の場合には、例文(121 a)のように「噴出する」が火山、蒸気、火山灰などの自然現象に使うので、可能表現に使用されない。同じ事象を表す中国語の例文(121 b)では可能表現である「会」で「可能性」を表す。この点にも日中両言語の可能表現の「ズレ」であると言える。

この部分の動詞に対して、意志動詞と無意志動詞の視点から日中両言語の「ズレ」をさらに分析する。

5.5.2 意志動詞と無意志動詞の視点からみた考察

『日本語基本動詞用法辞典』にある162語の漢語サ変動詞を意志形の有無によって(I)意志動詞と(II)無意志動詞に分けた。さらに、『新選国語辞典第8版(小学館)』と『岩波国語辞典第6版(岩波書店)』によって、a)自動詞、b)自・他動詞、c)他動詞に分類した。朝日新聞デジタルサイトで各漢語サ変動詞に「できる」を綴る用例の使用率を調べ、上記の「可能形の接辞を付加しやすい日本語の漢語サ変動詞(A)」と「可能形の接辞を付加しにくい日本語の漢語サ変動詞(B)」に分け、【表8】に纏めた。

【表7】漢語サ変動詞の分類表

	(I)意志動詞	(II)無意志動詞
a)自動詞	(A)：【挨拶する、握手する、安心する、運動する、関係する、感心する、帰国する、参加する、等】 (B)：【苦心する、欠席する、喧嘩する、失礼する、拍手する、用心する、乱暴する】	影響する、関係する、誤解する、故障する、混乱する、失敗する、不足する、流行する、迷惑する
b)自・他動詞	(A)：【完成する、感謝する、運転する、我慢する、化粧する、研究する、呼吸する、実現する、等】 (B)：【遠慮する】	後悔する、心配する
c)他動詞	(A)：【案内する、歓迎する、記憶する、希望する、教育する、許可する、記録する、等】 (B)：【意味する、合計する、承知する、選挙する、都合する、予定する】	無

(筆者作成)

1) 意志動詞である漢語サ変動詞

この部分の動詞が意志動詞であるが、「可能形の接辞が付きにくい日本語の漢語サ変動詞(B)」に属するものが少なくない。a)~c)の順で分析していく。

a) 自動詞の場合

(A)と(B)に属している動詞を取り上げ、可能表現の成立条件から日中両言語の対応表現を分析する。

- (122)a. 国内在住であればプロ・アマチュアは問わず、誰でも参加できる。
(朝日新聞デジタルサイト)
- b. 在国内居住的、不管内行外行、谁都能参加。
- (123)a. 絶対に今年度は欠席しない！
(朝日新聞デジタルサイト)
- b. 今年绝对不(会)缺席！

例文(122a)の「参加する」と例文(123a)の「欠席する」の意味から分かるように、前者が積極的な意味合いがあり、可能性を表している。例文(122 a)の「できる」を中国語に翻訳され、同じく可能表現で表す。一方、例文(123 a)の場合は動詞自体から消極的な意味合いで希望や可能性を表すのが難しいため、「できる」が使えない。しかし、中国語の場合には可能表現を使用しても使用しなくても自然な文である。この分析から中国語の可能表現が命題内容に制限されないと考えられる。

b) 自・他動詞の場合

朝日新聞デジタルサイトで使用率を調べたところ、「実現できる」の用例が153例で、「実現する」の用例が817例であった。「遠慮できる」の用例が無くて、「遠慮する」の用例が35例であった。

- (124)a. 生産から販売まで、私の哲学を実現できる。
(朝日新聞デジタルサイト)
- b. 从生产到销售、能实现我的哲学理念。
- (125)a. 国のえらいさまに遠慮するという。
(朝日新聞デジタルサイト)
- b. 据说会对国家要员客气。

例文(124a)の可能構文は「実現する」の可能性と能力を表す。例文(125a)の「遠慮する」は心理状態を表すため、可能表現を使用するのが困難である。中国語の場合には(124b)も(125b)も可能表現が使用する。可能形の接辞を付加しにくい漢語サ変動詞の分類は第2章で6つの分類に分けた。例文(125)の分析から中国語の可能表現では6つの分類に属する動詞にも使えると推測される。

c) 他動詞の場合

この部分の動詞は他動詞であるため、他動性が強いと思われる。「可能形の接辞を付加しにくい日本語の漢語サ変動詞(B)」に属している動詞も存在する。

(126)a. 仲間との楽しい思い出を、自由なスタイルで記録できる。

(朝日新聞デジタルサイト)

b. 如果购买了这个商品、你可以自由地记录下你和朋友的美好回忆。

(127)a. 店名の「じょうり」は美しい宝石を意味する。

(朝日新聞デジタルサイト)

b. 店名「じょうり」意味着美丽的宝石。

例文(126a)の「記録する」が機能や潜在能力を表している。例文(126b)も同じく可能表現を使用するが、例文(127b)の場合には用いられない。例文(127a)の「意味する」は成立条件に制限され、「できる」が使えない。

2) 無意志動詞である漢語サ変動詞

これらの動詞は中国語の漢語と同形で同義であるものもあれば、そうでないものもある。例えば、「影響する」「後悔する」「誤解する」が中国語の「影响」「后悔」「误解」と似ているが、日本語の場合は無意志動詞で可能表現を使用しにくい。

(128)a. 過去のことは僕の試合に影響しない。

b. ? 過去のことは僕の試合に影響できない。

c. 过去的事儿不影响我的比赛。

d. 过去的事儿不会影响我的比赛。

例文(128a)の「影響しない」に対して、例文(128c)のように非可能表現である「不影响」に対応し、例文(128d)のように可能表現である「会」で表しても自然である。主体は抽象的な「過去のこと」であり、人の意志性が読めない。「影響する」自体も意志が入っていないと思われる。日本語では可能表現を使わないが、中国語では可能表現が用いられる。

5.6 まとめ

本章では可能形の接辞を付加しにくい自動詞文に対して、日本語の「可能」を表す場合とそうでない場合はどのような中国語に対応するのかを分析した。以下の3点が分かった。

- ア) 日本語の「可能」を表す自動詞構文は中国語の実現可能である可能補語「V 不 C」に対応する。意志性が文脈に潜んでいる自動詞文は日本語の「可能」を含意する場合に、否定文が中国語の実現可能文に対応するものが多いが、肯定文はそうではない。
- イ) 中国語の可能表現は時制に制限されるが、必然性を表す事象と感情・心理的な作用を表す事象が可能表現で表す。日本語の場合は時制に制限されないが、後者の事象を可能文で表現しにくい。

ウ) また、漢語サ変動詞と中国語の同形語について、日中両言語の可能表現の使用上で日本語の可能表現が「命題内容」に関わり、期待されない意味合いとか、大自然の状態や現象を表す動詞とかは可能表現で用いられにくいですが、中国語の場合はそういう制限がない。中国語の可能表現に制限されるのは品詞の分類で、動詞(V)と形容詞(A)以外の同形語は可能表現に用いられない。

【注】

- 1) 企望意:動作の実現を意図し、期待することを表す。
- 2) 原因意:結果の実現を妨げる客観的な原因を表す。
- 3) 多くの願望動詞は事態の実現を希望する態度や心理状態を表わす動詞である。
- 4) 補語には形容詞(A[adjective])、動詞(V[verb])、方向補語、語句を用いることが多い。
- 5) この場合の「会」が中国語の可能表現で蓋然性を表す。
- 6) 【表2-5】は第2章の表5を指す。合計の中で、延べ語数が1175語、異なり語数が1015語である。
- 7) この部分の分析は第1章を参照。
- 8) 日本語の副詞は通常三種類に分類される。『日本語概説』p.256
 - (1) 状態副詞(例:さっと、はるばる、ゆっくり、いきなり、わざわざ等)
 - (2) 程度副詞(例:たいへん、すこし、ちょっと、とても、もっと等)
 - (3) 陳述副詞(例:たぶん、けっして、かならず、まるで、おそらく等)
- 9) 第1章で「会」の用法を提示している。

第6章 日本語の実現可能・潜在可能と中国語の対応表現の考察¹⁾

第4章では日本語の実現可能と潜在可能の違いと実現可能の特徴を考察した。特に日本語の実現可能は実現・不実現を表す性質を持っている。中国語にも実現を表す表現があるが、日中両言語において「実現」を表す可能表現が対応するかしらないかを研究する先行研究は必ずしも十分ではないため、本章で小説の対訳を通して探ってみる。また、日本語の実現可能に対して、どのような中国語の対応表現が存在しているのか、この点を含めて考察し、日中両言語の「ズレ」を明らかにする。

6.1 問題意識

中国語学習者はよく次のような誤用がある。

- (1)a. (原爆発生後) 飲用水が足りないが、今日私はミネラル・ウォーターを2本買えた。
- b. (原爆発生後) 飲用水不_足够、但是今天我买得到了两瓶矿泉水。

例文(1a)の「ミネラル・ウォーターを2本買えた。」と表現したいのに、「买得到了」を使ってしまう。正しく直すと、可能表現を使わずに、「飲用水不_足够、但是今天我买到了两瓶矿泉水。」になる。「买到」が中国語の結果補語で、「結果」「実現」を表す表現である。しかし、日本語の「買えた」が日本語の可能表現に属するので、意味合いから日本語と中国語の「ずれ」が存在していると考えられる。山田(2008)は「現代中国語では、動作の状態が可能か不可能を表すのが可能補語であり、動作が完成かどうか、実現されたかどうかを表すのが結果補語である」と主張している。

しかし、筆者は村上の日本語版『ノルウェーの森』と林少華が訳した中国語版『挪威的森林』を対照しているうちに、次のような例文に気づいた。

- (2)a. 直子はあなたに返事を書こうとずっと悪戦苦闘していたのだが、どうしても書きあげることができなかった。(『ノ』173)
- b. 他写道、直子始终在为写回信而竭尽全力、但无论如何也写不出来。(『挪』291)

例文(2)aは努力を果たしたが、実現できなかったという状態を表す。これに対して、例文(2)bの可能補語「写不出来」でその状態を表現している。もちろん、結果補語を使っても問題がなく、例文(2b)のようになる。

- (3) 他写道、直子始终在为写回信而竭尽全力、但无论如何也没写出来。

例文(1)aと(2)aは同じく日本語の実現可能の「タ形」であるが、例文(1)bが結果補語しか使えないが、例文(2)bが結果補語も使えるし、可能補語も使える。少し矛盾しているように見える

ので、実現可能の肯定と否定に分け、考察する必要がある。

6.2 先行研究

本節では「実現」「結果」「可能」を表す中国語の表現を分析し、日本語の実現可能・潜在可能に中国語の可能表現が対応するかしないかを考察して問題点を明確する。

6.2.1 「実現」に関する中国語の先行研究

中国語の可能表現では「実現」を表す場合に、非可能表現と可能表現の一部のみで表すことができる。まず、「実現」を表す中国語の表現を非可能表現と可能表現に分け、考察していく。

6.2.1.1 朱德熙(1984)

朱德熙(1984)は「補語」の機能を動作の結果または状態を表すと記述している。補語の中には結果補語、趨向補語、様態補語、可能補語がある。従って、日本語の実現可能を中国語の結果補語、趨向補語、様態補語、可能補語で翻訳できると考えられる。結果補語、趨向補語、様態補語の場合は次の通りである。

- (4)a. 三日かかってようやくレポートが書けた。 (『ネ』)
b. 花了三天终于写完报告了。 (同上)
(V+C)
- (5)a. 私たちはいろいろやってみたが、皆の気持ちを奮い立たせることは出来なかった。 (同上)
b. 我们用了许多办法也没鼓动起大家的激情来。 (同上)
(V+D)
- (6)a. 今学期の中国語のテストが一番よくできた。 (同上)
b. 这学期汉语考试考得最好。 (同上)
(V+得+(最)+A)

例文(4)～(6)の日本語実現可能の過去形肯定文・否定文に対して、翻訳された中国語の例文(4)では、「写」という動作によって、「完」でもたらした結果を表している。否定形は「没」が用いられ、「没写完」になる。劉(2002:534)は中国語では、ある動作・状態によって具体的な結果が引き起こされたことを述べる時に結果補語を使わなければならないという。例文(5)では、「趨向補語」が用いられ、動作の「鼓動」を実行したが、結果として実現できなかったことを表す。「趨向補語」は、「来(来る)」「去(行く)」のような方向を表す意味もあり、動作の結果また目的の達成を表すこともあると劉(2002)も言及している。例文(6)は、テストの結果を評価し、様態補語を使用している。相原(2005:234)では、様態補語は「考得最好」のように、動詞の後ろに“得”を伴って、既に実現済みのことについてどうであるかを描写すると述べている。

しかし、可能補語の場合は少し異なる。

- (7)a. しかし彼女の座った場所からは外が見えなかった。 (『1Q84(1)』日)

b. 但从她坐的位置看不见外面。

(《1Q84(1)》中)

例文(7)の日本語「見えなかった」を例文(7)の中国語の「看不见」で翻訳される。例文(7)は結果補語「看见」の間に「不」を加えて「可能・可能性」を表す可能補語「看不见」になる。可能補語は補語であるが、中国語の可能表現の一種である。中国語の文意は、動作主が「座っている位置から外を見えない」ところにいる属性を描写している。動作主の意志と関係なく、その位置の属性の「可能性」を表している。可能補語を「結果補語」と入れ替えた文が例文(8b)である。

(8)a. しかし彼女の座った場所からは月が見えなかった。

b. 但从她坐的位置看不见月亮。[可能補語]

c. 但从她坐的位置没看见月亮。[没+V+C]

例文(8b)は可能補語の「看不见」が用いられている。その場所はいつも月が見えない所であり、見える可能性がないことを表している。この可能性は過去と現在のような時制とは関係がない。例文(8c)の場合はいつものことではなく、月が昇る位置によって、過去の一時的な動作を実現しなかったことを表す。可能補語が「実現」を表す用法もあり、結果補語と異なるのは可能補語も可能・可能性を表す性質を持っている。

6.2.1.2 劉月華(1989)

劉月華(1989:14)は中国語の可能表現が上記の例文(7)のように「可能・不可能」を表す可能補語もあれば、「実現」を表す場合もあるという。原文を次のように示す。

由于受主、客观条件的限制、不能实现某种结果或趋向、即“非不愿也、实不能也”这个意义、在表达这个意思上、“V不C”是最恰当的甚至往往是唯一的表达方式。(筆者訳:主體的、客観的な制限⁽¹⁰⁾を受け、ある結果や趨向を実現できない。すなわち、「非不愿也、实不能也」。望まないのではなく、できないという意味を表現する場合に“V不C”が一番ふさわしく、唯一の形式である。)

つまり、「非不愿也、实不能也」を表現する場合のみ、この「実現」の意味が表れ、「V不C」しか用いられない。次の例文を見てみよう。

(9)a. 前边的人挡着我、看不见黑板上的字。

b. 前に人がいて、黑板に書いている字が見えない。

(10)a. 教室里很吵、听不清录音。

b. 教室がうるさくて、はっきりと聞こえない。

例文(9b)、(10b)は「前に人がいる」「教室がうるさい」という客観的な条件で、「黒板が見えない」と「聞こえない」ことが一時的に実現しなかった。時間軸上に発話時よりやや前の過去と

いう抽象的な時間帯に、一時的な状態の実現が不可能であることを表している。「能力」より客観的な条件で状態・状況の不可能に着目している。劉月華(1989:14)では、可能補語が「結果」を表す場合に「这种情况多出现在假设句中。这说明“V不C”有时不一定包含“不能”的意思、或“不能”的意思很不明显、而只表示作了某个动作、但没有取得某种结果。而“V得C”则总包含“能、可以”的意义。(訳：このような状況が仮設文の中で多く現れる。これは“V不C”が必ずしも“不能”の意味、あるいは、たまに“不能”の意味が薄くなる意味だけ含まれているというわけではなく、ただある動作を実行したが、結果として実現しなかったことだけを表す。しかし、“V得C”はいつも“能、可以”の意味が含んでいる。)」と記述している。劉月華(1989:14)から次のような例文がある。

- (11)a. 那是正犯、拿住呢有点赏、拿不住担“不是”。 (劉月華 1989:14)
 b. その人は犯人だ、捕まえたら賞金が貰えるが、捕まえなかったら、責任を負う。
- (12)a. 你猛拉弓、感觉左手中指碰到箭头、就是弓拉满了；碰不到、就是弓未拉满。
 (劉月華 1989:14)
 b. 君はギョッと弓を引いて、左の中指が矢じりに接触できたら、弓が一杯引いたということになる、接触できなかつたら、弓が十分引いていないということになる。

例文(11a)は仮設の中で「拿住」「拿不住」の結果補語と可能補語で実現した場合と実現しなかった場合の事象である。一般に「拿住」と「没拿住」、「拿不住」と「拿得住」が対応関係になっていると思われるが、例文(11a)から分かるように、「実現」「結果」を表す時の中国語が非対称である。例文(12)の場合も同じである。「碰到」と「碰不到」は前者が「結果」を表す結果補語で、後者が「可能」を表す可能補語であるが、「実現」を表すと、非対称な関係が現れる。

6.2.1.3 相原茂(2005)

相原(2005:214)は、「動作の完了・実現は動詞の後ろにアスペクト・マーカ―の助詞「了」を付けて表す。」と述べている。

- (13)a. そういう経緯で、私はその人と電話で直接話をすることができたわけ。
 b. 就这样、我跟此人直接通了话。
 (V+了+O)

例文(13a)は奥田(1989)が述べた動作・状態がリアルな存在で一時的な現実の出来事を表している。

例文(13b)では“了”が用いられ、「通话(電話で話す)」事を「実現」したことを表す。この「了」の後ろに「目的語」があり、「洗了衣服(洗濯した)」「做了饭(ご飯を作った)」「买了菜(買い物した)」のように実現した事を表現できる。

6.2.2 実現可能の過去形肯定文・否定文に関する日中対照の先行研究

中国語の可能表現は「可能」「可能性」という視点から分類した研究は多数存在するが、日本語の実現可能と潜在可能の分類を分析したものもある。よく参考にされているのは奥田(1986、1996)、渋谷(1993)、小矢野(1979)の他に、高橋(2003)、鈴木(1996)等がある。

これから、奥田(1986、1996)、渋谷(1993)の先行研究と関わりがある日中対照先行研究から、本研究の問題点を提起する。

6.2.2.1 王学群 (2008)

王学群(2008:27)は潜在可能と実現可能の視点から、中国語の「看见」(結果補語)、「没看见」(結果補語の否定形)、「看得见」(可能補語)、「看不见」(可能補語の否定形)との対応性を研究している。可能補語が全て潜在可能であると主張している。しかし、文脈で「実現の可能性」を表す「看不见」が日本語実現系可能に対応できるという。

王学群(2008:45)は下記のように、条件的可能として「不可能」を表す用例(14b)に対して、時間軸上に局在する発話時より以前に実現しなかった用例(14a)と対照してみた。

- (14)a. 三次町の場合は、山を隔てているので広島のコラゲ雲は見えなかったろう。
(王学群 2008:45)
- b. 由于三次町和广岛市中间隔着山、也许就没有看到蘑菇山。 (同上)
- c. 由于三次町和广岛市中间隔着山、也许就看不到蘑菇山。 (同上)

王学群は(14b)と(14c)について、「看不到」に訳しても決して非文にはならないと言い、「没有看到」と「看不到」の違いを次のように述べている。「没有看到」の場合は、限界性のある一回性の一時的な状態としてとらえ、「看不到」の場合はポテンシャルな用法(条件的な可能)としてとらえると分析している。

筆者も(14b)と(14c)の意味の違いが王学群の述べている内容の通り、前者が実行したが、結果として実現しなかった。cに不可能の状況が存在しているので、潜在的な不可能であると考えられる。

また、王氏は「実現の可能性」を表す日本語実現可能と中国語の可能表現「V不C」が対応できると主張し、下記の例文を挙げている。

- (15) (富士山)看不见了。
(16) (富士山)看不到了。

例文(15)(16)は「時間軸上に局在する一時的な状態が実現することが可能かどうかに着目するので、“看得见”類を用いる」と述べている。(“看得见”類の否定は「看不见」である。)2文とも「一時的な状態」が不可能になった事を表すため、「実現の可能性」であると指摘している。

この2文がいずれも可能から不可能の状態への変化にあり、文脈の場面を考えると、先ほどはまだ見えたのに、今は何かの障害物があって、その可能性が失われてしまったことを表すことができる。奥田(1986)では潜在可能として見られている。「実現」を表す「没看见」「没看到」と入れ替えると、意味が不自然になり、検討する余地が残っていると考えられる。

王学群 (2008) では実現可能の肯定文について、「看见」のような結果補語・趨向補語に対応すると論じているが、様態補語と「実現・完了を表す“了”」の内容を触れていなかった。

6.2.2.2 姚艷玲(2008)

姚艷玲(2008:98)では、潜在可能と実現可能の二つの意味的類型に基づいて、中国語の可能補語「V不C」に対して、「〈不可能〉も「結果の非実現」という事象の実現性によって同様な意味的分類を行うことができる。即ち、結果がすでに実現しなかったものとして現われているのであれば、「実現的不可能」と見なされるが、結果が実現する可能性のないものとして現われているのであれば、「潜在的に不可能」と見なされる。」と分析している。さらに、「中国語では『実現的不可能』は“V不C(了)”を用いて過去に実現しなかった状態・状況を表す」と述べている。

以上の先行文献から中国語の可能補語「V不C」が文脈によって、「結果」と「可能」の両面性があることが分かった。また、「V不C」が仮設文で「可能」を表すことより「実現」の意味も表す。しかし、「V得C」の意味が必ず「可能」を表すことも劉(1989)に指摘されている。

姚艷玲(2008:98)では、「『実現的不可能』は“V不C(了)”を用いて過去に実現しなかった状態・状況を表す」というふうに中国語の対応表現を述べている。具体的な例文は次の通りである。

- (17)a. 小翠一会儿回转身、慢慢地朝东头走去、越走越快、捞渣撵不上了。 (《小鮑庄》)
b. しばらくしてから、小翠子は背を向け、ゆっくりと東に向かった。行くほどに足を速めたので、捞渣は後を追いきれなくなった。(『小鮑莊』)

姚艷玲(2008:98)では、「“捞渣”は“小翠子”の後を追ってついていこうと思っていたが、“小翠越走越快”ということによってとうとう後を追い切れなくなったという事象を表している。“撵上”とう行為は結果的に実現しなかったため、『実現的不可能』である」と分析している。

例文(17)に対し、過去の時間軸上に追いかけることを努力したが、不可能であったことと読み取れる。「結果」を表す補語で入れ替えてみると、「没(能)撵上」でも表すことができる。中国語の意味から実現できるかどうか分からないが、やってみた結果として実現しなかったことを表しているので、実現の不可能であると思われる。だが、日本語の可能表現の形式から見ると、「追い切れなくなった」が能力の喪失を表し、潜在系可能の形式になっているため、まだ吟味検討する余地があると思われる。

6.2.2.3 馬俊栄(2009)

馬俊栄(2009:115)は、日本語可能表現の過去形否定文においては、ほとんどの場合、中国語可能表現の過去の否定形式「没能+動詞+補語」で表すことができると述べている。

- (18)a. 三日かけても結局レポートは書けなかった。(渋谷 1993:14)
b. 用了三天时间、结果却没能写出研究报告。(馬俊栄 2009:115)

例文(18a)の中国語は「没能」から「能」を除いても基本的な事実は変わりがないと言える。

つまり、「結果補語」を使っても、可能助動詞の「能」を使っても対応するということになる。だが、中国語の「可能補語」が日本語の実現可能に対応することに言及していない。

肯定文については、馬(2009)で「中国語の実現済みの出来事を表せる動態助詞“了”、「結果補語」「趨向補語」または「様態補語」に訳すことが自然である」と述べているが、中国語の可能表現に対応するかどうかを考察していない。また、馬俊栄(2009:112)によれば、「日本語の潜在的可能を表す用法は中国語可能表現に訳すことが容易にできると考えられる。しかし、日本語可能表現タ形用法における実現済みのことがらを表す表現、厳密に言えば重点を結果においた表現については、中国語可能表現の形式で表せない場合がほとんどである。」と出張している。従って、中国人学習者にとって、可能の意味があれば、可能表現を使うが、可能の意味がなければ、可能表現を使わないという母語干渉によって日本語実現系可能の学習が難しく、使用回避現象があると推測される²⁾。

そして、張威(1998:3)によれば、中国人学習者によく見られる誤用例として、「この窓はどうしても開かれない。」が挙げられる。このような間違いは日本語学習の初心者のみに限られるのではなく、相当な日本語学習歴のある上級の学習者の場合においてもしばしば見られるという。この誤用の原因について、張威は「中国語話者の日本語学習者の頭の中では、『この窓はどうしても開かない』というような状況は可能表現の形式でなければ、表すことができないものとして認識されている。これは中国語で上のような状況を表現する時、通常『这个窗子怎么也打不开』のように可能補語の形式をとるということから明らかである」と分析している。

6.2.2.4 問題点

以上の分析によって、対応表現の問題点を纏めて【表1】で示す。

【表1】 先行研究の対照表

日本語実現系可能	中国語非可能表現	中国語可能表現	先行論文
過去肯定文	「結果補語」「趨向補語」「様態補語」、「了」、	対応しない	馬(2009)
	「結果補語」「趨向補語」		王(2008)
過去否定文	「結果補語」「趨向補語」	実現系可能と <u>対応しない</u> が、「実現の可能性」を表場合には可能補語が対応する	王(2008)
	言及していない	実現系可能と <u>対応できる</u> が、文脈によって「実現不可能」を表す場合には可能補語が対応する 例：「追い切れなくなった」	姚(2008)
	「結果補語」「趨向補語」「様態補語」、	<u>没能+V</u>	馬(2009)

日本語実現可能の肯定文においては、異論がなかったが、日本語実現可能の否定文においては、異論があり、三人の結論が異なる。中国語の可能補語と日本語実現可能の過去形否定文に対応するのか。もし対応すれば、どのような場合に対応するのかという疑問点が残っている。本研究はこの疑問点を解明する。

6.3 本章の研究手法

本節では対照研究の角度から日本語の実現可能・潜在可能と中国語の対応関係をみる。考察対象のデータを抽出し、本章の問題意識を明らかにする。

6.3.1 本章の研究対象と研究目的

日本語の潜在可能と実現可能の「た形」がどんな場合に「結果補語」しか使えないか、どんな場合に「可能補語」も使えるのか、あるいは中国語の可能表現が使えるのかを分析する。少なくとも、中国語の可能表現と日本語の可能表現の特質が異なっている要素を少しでも解明できるのではないかと考えられる。

6.3.2 本章の研究手法

第4章の[4.4]で述べた【表1】のような分類を基にして、本章では日本語の可能構文の「た形」を考察する。渋谷(1993)の分類を参考しながら、渋谷(2002)から可能構文の用例を挙げ、a. 「実現系可能+「過去の『た』形」の肯定文」、b. 「実現系可能+「過去の『た』形」の否定文」、c. 「潜在系可能+「過去の『た』形」の肯定文」、d. 「潜在系可能+「過去の『た』形」の否定文」の四つのグループに分け、中国語と対照する。

【表2】 実現可能と潜在可能の再分類³⁾

	文脈の背後に時間と切り離せる場合	文脈の背後に時間と切り離せない場合	
潜在系可能	1) 先天的能力 2) 属性可能 3) 評価可能 4) 前提条件可能 5) 許可	過去(1)	1) 反事実可能 2) 恒常(不)可能 3) 一時的(不)可能
		現在(2)	(技能、知識を身に付けた) 1) 能力獲得可能 2) 程度達成可能
		未来(3)	一時的能力・可能性を獲得(喪失)
実現系可能		過去(1)	1) 達成性可能 2) 予想外の(未)達成 3) 未実現
		現在(2)	1) 反復実現可能
		未来(3)	積極的・消極的な態度・決心・結果

まず、日本語の小説から実現可能の過去形文を全て抽出し、肯定文と否定文に分類する。小説から抽出した日本語文を中国語版の翻訳と対比させ、意識で表現された例文は除外し、直訳部分のみを研究対象とする。中国語訳では日本語の可能表現を可能表現と非可能表現に分けているため、中国語訳を可能表現と非可能表現に分けてその特徴を分析する。

例文の分析は、日本語実現可能文で、「頑張ろう」や「～しよう」などの「意志性を表す部分」が明示されているものが少なくない。また、「時間があつた(なかつた)」と「足が怪我した」などの条件(原因)が前文に書かれ、「実現できた(できなかつた)」結果が後文に表れる例文もある。意味的な特徴と意志性の強弱を考察するため、次の記号を使用する。{ }は「強い意志性を表す部分」、〈 〉は「原因を表す部分」、下線は「実現を表す可能表現」を示す。

日本語実現可能の過去形に対し、中国語で翻訳されている非可能表現と可能表現は全て対応性が強いというわけではないと思われる。対応性が強い例文はお互いに置換えができ、「実現」が表せる。対応性が弱い例文はお互いに置換えができず、「実現」を表せない。その理由、原因を分析する。

6.3.3 本章の考察資料

主に中国語に翻訳された小説であり、中国で広く読まれているものを厳選し、分析対象とする。また、『ネイティブ中国語補語例解』は1000もの日中対訳例を収録しているため、本書からも例文を引用する。以下に本研究で用いる言語資料とその略称を列举する。

『ネ』：陳文芷・陸世光主編(2008)『ネイティブ中国語補語例解』大修館書店

『ノ』：村上春樹(1984)『ノルウェイの森(上)(下)』講談社文庫

『窓』：黒柳徹子(1984)『窓際のトットちゃん』講談社

『1Q84(1)』：村上春樹(2009)『1Q84 (book I)』新潮社

『1Q84(2)』：村上春樹『1Q84 (book II)』(新潮社)2009

『海(上)』：村上春樹(2002)『海辺のカフカ(上)』新潮社

『海(下)』：村上春樹(2005)『海辺のカフカ(下)』新潮社

『中』：村上春樹(1997)『中国行きのスロウ・ボード』中央公論社

《挪》：林少华(2007)《挪威的森林》上海译文出版社

《窗》：赵玉皎(2011)《窗边的小豆豆》南海出版社

《1Q84(1)》：施小炜(2010)《1Q84 (book I)》南海出版社

《1Q84(2)》：施小炜(2010)《1Q84 (book II)》南海出版社

《海》：林少华(2007)《海边的卡夫卡》上海译文出版社

《去》：林少华(2008)《去中国的小船》上海译文出版社

6.4 考察結果

この節では潜在可能と実現可能の「タ」形について、それぞれの中国語の対応表現を見ていく。また、中国語の対応表現と日本語の実現可能との対応関係を分析する。

6.4.1 潜在可能×「過去の「夕」形」⇔中国語の対応表現

潜在可能は中国語の可能表現に対応するものが多いが、第4章の分類の中で「た」形で表す構文と中国語の対応表現から、肯定文の対応関係は対称性があるが、否定文の場合には対称性が低い。

6.4.1.1 「夕」形肯定文

第4章の分類で潜在可能が過去の事柄を表す場合に「1)反事実可能」「2)恒常(不)可能」「3)一時的(不)可能」の意味合いを表す。

- (19)a. 盃一杯ぐらいの酒なら、昔は私だって飲むことができたのに。(生得能力)
 - b. 一杯酒的话、以前我也是能吃完的。
- (20)a. 前は海で10メートル以上潜ることができたのに。(獲得能力)
 - b. 以前本来也能潜海、深度达到10米以上。
- (21)a. むかしはどんな難しい字でも読むことができたのに。(獲得能力(知識))
 - b. 以前不管多难的字、我都会读。
- (22)a. こんな簡単な仕事は昔はおれにだってすることができたのに。(生得?獲得?)
 - b. 这么简单的工作、以前连我都会做。

以上の例文(19)～(22)には「能」や「会」などの可能表現を省略してはいけない。「能力」を表しているので、省略すると意味が変わる。この部分の可能構文が翻訳しやすくて、日本語と中国語が共通しているように思われる。ただし、日本語では過去を表す時間や副詞を加え、過去の事を「夕」形で表すことができるが、中国語では動詞の変形がないので、「了」や副詞の以外に、「以前」みたいな昔の時間を表す表現と一緒に使い、過去の事を表現する。

6.4.1.2 「夕」形否定文

否定文の場合には肯定文と若干異なって結果補語で表すものが多い。

- (23)a. 小さいころは夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができなかつた。
 - b. 小时候、我一个人没去过墓地。
- (24)a. ラブレターなんて恥ずかしくて書くことができなかつた。
 - b. 觉得难为情、没写过情书。
- (25)a. うちの妹は恥ずかしがり屋だからアブレターなんて書くことができなかつた。
 - b. 我妹妹挺害羞的、没写过情书。

例文(23)～(25)のa文では昔からのような状態で「できなかつた」ことを表している。中国語に翻訳すると、可能表現が使えにくく、経験や履歴などを表す「过」の否定を使い、「やったことがない」となる。こちらの例文も可能表現に入れ替えてみた。次の通りである。

- (26) *小时候、我一个人没能去过墓地。

- (27) *觉得难为情、没能写不过情书。
 (28) *我妹妹挺害羞的、没能写不过情书。

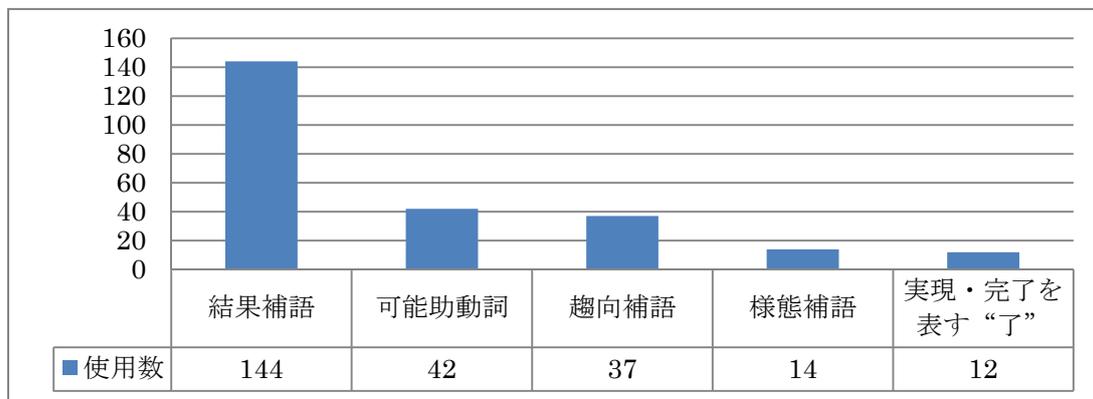
全て非文で、中国語の可能表現で表せない。日本語では潜在可能で不可能だったことを表現することができるが、中国語では不適切であると考えられる。

6.4.2 実現可能×「過去の「夕」形」⇔ 中国語の対応表現

まず、先行研究で実現可能の過去形肯定文・否定文の意味的な特徴をもう一度見ておく。

- ① 動作の発動(試行)であること
- ② 一時的な動作であるが、その動作が成立する可能性を示すこと
- ③ 文の内容から「現実性」を持ち、結果性、期待、志向、試みの意味があり、動作・状態の可能性・能力の実現を表すこと。

この三つの特徴に基づき、日本の小説と『ネイティブ中国語補語例解』から日本語の可能表現肯定文 335 文を収集した。小説中の日本語実現可能の過去形肯定文・否定文に対応する中国語訳の表現は次の五類に分けることができる。この五類は「1. 結果補語」、「2. 趨向補語」、「3. 様態補語」、「4. 実現・完了を表す“了”」、「5. 可能助動詞」である。翻訳されていない例文は 86 文であった。使用頻度は【図 1】の通りである。



【図 1】中国語の対応表現の使用率表

【図 1】で示しているように、結果補語の使用率が高く、全体の半分以上を超えている。次に可能助動詞が 11% ぐらいを占めている。趨向補語、様態補語と「実現・完了を表す“了”」の使用数が非常に低い。これらの対応表現の中では、可能助動詞が「可能・可能性」を表す可能表現であり、他は非可能表現である。

これらの表現は日本語実現可能の肯定文とどのように対応しているのかを分析する。非可能表現と可能表現を 2 つの部分に分け、例文を挙げて特徴を見てみたい。

6.4.2.1 「タ」形肯定文

1) 非可能表現

結果補語、趨向補語、様態補語と「実現・完了を表す“了”」は「可能・不可能」という意味を表せず、結果と実現を表す表現である。日本語実現可能の過去形肯定文との対応の使用率から、「1. 結果補語」、「2. 趨向補語」、「3. 様態補語」、「4. 実現・完了を表す“了”」の順に見ていく。

① 「V+結果補語」

まず、日本語に対応する例文を見てみよう。

- (29)a. 私は{しばらく流して}、ようやく靴の泥を洗い落とせた。 (『ネ』)
b. 我{冲了半天}、才把鞋子上的泥冲掉。 (同上)
(V+C)
- (30)a. 私は{何年もかかって}やっとこれらの古代の銅銭を収集できた。 (同上)
b. 我{搜集了很多年}才搜集到这些古代铜钱。 (同上)
(V+C)
- (31)a. {長いことかかって}やっと問題をはっきりさせることができた。 (同上)
b. {闹了半天}才把问题弄清楚。 (同上)
(V+C)

例文(29)～(31)のaは日本語実現可能構文の過去形肯定文である。時間軸上から見ると、過去の特定の時間帯に一時的に発生した事柄である。いずれも意志を表す{ }部分があり、決して容易にできることではない意味を表している。例文(29a)の「洗い落とす」、例文(30a)の「収集する」、例文(31a)の「はっきりさせる」の前に「を」が使われ、他動性が強いことが分かる。一方、例文(29)～(31)のbの中国語の例文から2つのことが分かった。

一つは、一文に前文と後文で同じ動詞が2回使われていること。例えば、例文(29b)の前文では動詞「冲(流す)」が用いられ、後文には「冲(流す)」の後に結果補語「掉(落とす)」を補い、「冲掉(流し落とす)」という結果を表している。例文(30b)の前と後にも同じ動詞「搜(収集)」が使われている。例文(31b)の「闹(やる、する)」は「弄清楚」の「弄(やる、する)」と違う動詞であるが、意味は同じく「やる」という意志を表している。例文(29b)、(30b)と同じ特徴を持っていると考えられる。このような特徴は中国語の先行研究で述べた「意志+原因+実現した」構文で見られるが、結果補語にも適用できる。

二つ目は副詞の使用である。例文(29a)～(31a)が副詞「すぐに」、「ようやく」、「やっと」の使用によって大変であったことを表現している。中国語の場合には例文(29)～(31)のbにいずれも「才」を用いている。

② 「V+趨向補語」

劉(2002)は、「趨向補語が趨向を表すのではなく、動作の結果または目的の達成を表すことがある。大部分の趨向補語が結果という意味を持っている」と述べている。日本語との対応は下記

の通りである。

- (32)a. {長いことかかって}やっと思い出すことができた。 (『ネ』)
b. 我{回忆}了很久才回忆起来。 (同上)
(V+D)
- (33)a. うっかりして車が泥沼にはまってしまい、皆で{懸命に押して}やっとなんか脱出できた。 (同上)
b. 一不小心、汽车陷进泥里去了、大家{推}了半天才推出来。 (同上)
(V+D)
- (34)a. 大型クレーン車を持ってきてやっとなんかあの大きな石を吊り上げられた。 (同上)
b. 开来一辆大吊车才把那块大石头吊起来。 (同上)
(V+D)
- (35)a. こんなに苦しい生活を、意外にも彼女は辛抱できた。 (同上)
b. 这么困苦的生活、她居然忍受下来了。 (『ネ』)
(V+D)
- (36)a. 最後まで喧嘩もせずに彼女と共同作業ができたのは僕一人だけだった。 (『中』)
b. 直到最后也不发一句牢骚而同她搭档干下来的只有我这样的人。 (《去》)
(V+D)
- (37)a. 押し合いへへし合いしてやっとなんか乗車できた。 (『ネ』)
b. 我被人群挤来挤去好容易才挤上车。 (同上)
(V+D)

例文(32)～(37)のaは能力条件可能である。いずれも意味があり、実現の大変さを表している。例文(32)～(34)のaでは動詞の「思い出す」「脱出する」「吊り上げる」があるため、時間が掛かったり、皆の力を借りたり、クレーン車を使ってみたりして、目的を達成したことが表されている。例文(35)～(37)のaでは、「押し合い」「苦しい生活」「喧嘩」というような外的な状況を克服するため、自分の努力を遣り遂げたことを表している。副詞は「やっとなんか」「ようやく」「意外に」を使用している。

中国語の例文(33)～(35)のbでは、いずれも方向を表す「起来」「出来」「下来」のような趨向補語が使われ、過程で努力した意味、やり遂げた意味を表す。結果補語の部分と同じ一文に動詞を二回使っている例文である。例文(34)では、動詞「吊(吊る)」が一回しか現れていないが、「大吊车(大型クレーン車)」の役割が「吊りあがる」ものであるため、後文の「吊る」と関連している。例文(35)(36)の動詞「忍受下来」「干下来」は「困苦的生活(困難な生活)」という困難な事態、「不发一句牢骚(喧嘩もせず)」の目的があり、遣り遂げたことを表す。副詞「好容易才」「才」を用いている。この部分では結果補語と同じ性質で「実現」を表現している。

③「V+得+様態補語」

日本語との対応は次の通りである。

- (38)a. 彼は最初の問題はうまく答えられたが、ほかは全部間違えた。 (『ネ』)
 b. 第一个问题他答得很好、其他的问题都答错了。 (同上)
 (V+得+A)
- (39)a. 彼女はやり手なので、うまく対応できた。 (同上)
 b. 她很能干、事情办得很漂亮。 (同上)
 (V+得+A)
- (40)a. このドラマはうまく改編できた。 (同上)
 b. 这个电视剧改编得很成功。 (同上)
 (V+得+A)
- (41)a. 今学期の中国語のテストが一番よくできた。 (同上)
 b. 这学期汉语考试考得最好。 (同上)
 (V+得+A)
- (42)a. 比較的良く書けた作品もあれば、箸にも楨にもかからないものも——もちろんあの方が圧倒的に多いんだけど——ありました。 (『1Q84(1)』日)
 b. 其中既有写得相对不错的作品、也有根本不值一提的作品——当然是后者居多。 (『1Q84(1)』中)
 (V+得+A)

例文(38)～(42)のaは出来事を評価する意味が含まれている。この部分の日本語は次の2つの特徴が見られる。

一つは、動詞の前に「を」が現れていないことである。努力する意志を表すより、動作・状態の可能性・能力の実現を表す。

二つ目は、「はやく」、「うまく」、「よく」などの副詞が必ず動詞の前に置かれ、実現したことを評価している。人を褒めるときに使う「よくできたね」や、「上手に書けたね」などの表現は日本語でよく使われる。この場合には中国語は様態補語を使用する。

例文(38)～(42)のbのように、評価する意味が含まれている「好」「漂亮」「成功」「好」が「得」の後ろに付くことにより、実現した出来事を評価する。

結果補語と趨向補語の部分と比較してみると、様態補語の部分が困難な事態の実現というより、上手く遣り遂げたという意味の達成を表現する。

④「完了・実現を表す“了”」

相原(2005:214)は、動作の完了・実現は動詞の後ろにアスペクト・マーカの助動詞“了”をつけて表すと言う。日本語との対応を次のように示す。

- (43)a. 『空気さなぎ』を書き直す許可を、僕は先生から与えられたのでしょうか? (『1Q84(1)』日)
 b. 老师、您是否把改写《空气蜗》的许可给了我? ” (同上)
 (V+了+O)

- (44)a. そういう経緯で、私はその人と電話で直接話をすることができたわけ。 (同上)
 b. 就这样、我跟此人直接通了话。 (《1Q84(1)》中)
 (V+了+O)
- (45)a. もちろんはじめから上手くいったわけじゃないけれど、少しずつ友だちもできたし、
 学校に行くのも以前ほど苦痛じゃなくなってきたわ。 (『中』)
 b. 当然一开始并不顺利、后来多少有了朋友、上学也不像以前那么难受了。(《去》)
 (V+了+O)
- (46)a. 無事におうちに帰れたかなと思って。 (『1Q84(1)』日)
 b. 我担心你是不是安全到了家。 (《1Q84(1)》中)
 (V+了+O)
- (47)a. 新しいボーア・フレンドができたのだ。 (『中』)
 b. 有了新的男朋友。 (《去》)
 (V+了+O)

例文(43)～(47)のa文はいずれも「一時的な実現の出来事」を表す。難しい状況の実現や実現した後の評価などの達成よりも出来事が可能になったかどうかに着目しているようである。この部分の特徴としては例文(43)～(47)のa文がいずれも副詞を用いていない。その動作や状態が「リアルな存在」を表現している。

中国語の例文(43)～(47)のb文では「実現・完了を表す“了”」もその過去の出来事が一時的な実現を表している。意志や期待が強いというニュアンスが現れていない。日本語の例文と同じく副詞を用いていない。

2) 可能表現

⑤可能助動詞

黄(1995:86)によると、「能」「可以」「会」のそれぞれの意味特徴を一言で表すとすれば、「能」は「達成」、「可以」は「許容」、「会」は「自発」と主張している。日本語との対応表現は次の通りである。

- (48)a. なるほど。君の気持ちはおおむね理解できたような気がする。 (『1Q84(1)』日)
 b. 原来如此。我觉得大致能理解你的心情了。
 (能+V)
- (49)a. 教団の子供たちが学校に行きたくない気持ちは彼女にも理解できた。
 (『1Q84(1)』日)
 b. 教团的孩子们不愿意去上学的心情、她也能理解了。
 (能+V)

例文(48a)、(49a)は出来事の可能性を実現したことを表す。例文(48b)、(49b)は過去にある事柄であるが、「能理解」が「理解する」動作主の能力の可能を表すと思われる。時間と関係がなく、

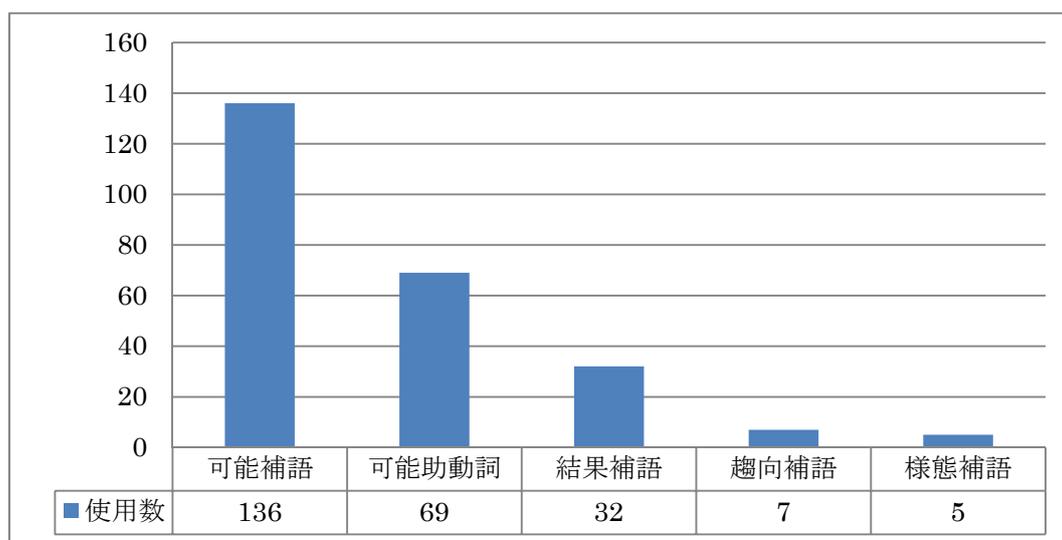
「能力」の「達成」を表す。

6.4.2.2 「タ」形否定文

本節は肯定文と同様に次の特徴に基づき、否定文の例文を収集した。

- ① 動作の発動(試行)であること
- ② 一時的な動作であるが、その動作が成立する可能性を示すこと
- ③ 文の内容から「現実性」を持ち、結果性、期待、志向、試みの意味があり、動作・状態の可能性・能力の実現を表すこと。

この三つの特徴に基づき、日本の小説と『ネイティブ中国語補語例解』から405文を取り出した。この405文に対応する中国語の表現を中国語の対訳版から抽出し、結果を表す「結果補語」「趨向補語」「様態補語」と可能表現である「可能助動詞」と「可能補語」の使用率を考察した。具体的なデータを下記の【図2】に纏める。



【図2】小説からの対応表現の使用率

実現済みの事柄を表す非可能表現は合計44例あり、結果補語(32例)、趨向補語(7例)、様態補語(5例)であった。

可能表現は合計205例である。その中には、可能助動詞は69例あったが、可能補語の使用率はそれを遥かに上回って136例であった。

日本語実現可能の過去形肯定文に中国語の結果補語がよく用いられると【図1】で分かった。否定文の場合には、結果補語の否定形が良く使われると推測していたが、上記の【図2】が示す通り、結果補語の使用数は低く、可能補語がよく用いられたことが分かった。

本節では非可能表現と可能表現に分け、それぞれの特徴を考察する。

1) 非可能表現

本節では「結果補語」、「趨向補語」、「様態補語」について、日本語実現可能の過去形否定文に対応する時に、どのような特徴があるのかを分析する。趨向補語と様態補語の使用率が低いため、結果補語と一緒に並べてみる。

① 「没+V+結果補語/趨向補語」

以下の例文(51)～(54)のa文は日本語実現可能の過去形否定文である。(51)～(54)のb文はその中国語訳である。

- (50)a. この七年間、私はそれを解明しようと自分なりに{努めてきた}が、結局手がかりひとつ掴めなかった。(『海(下)』)
b. 这七年间、我{努力试图揭开真相}、却连一丝线索也没抓住。(《海》)
(没+V+C)
- (51)a. 夕食のあとで緑に手紙を{書こうとした}が何度書きなおしてもうまく書けなかったので、結局直子に手紙を書くことにした。(『ノ』)
b. 晚饭后、想给绿子写信、但{反复写了几次}都没写好、最后给直子写了一封。(《挪》)
(没+V+C)
- (52)a. 天吾は{しばらく無言で牛河の顔を見ていた}。しかし何も読みとれなかった。(『1Q84(2)』)
b. 天吾不言不语地盯着牛河的脸{看了半天}、但什么也没读出来。(《1Q84(2)》)
(没+V+D)
- (53)a. 昨日は私(忙しくて)ろくに買物できなかつたし、冷蔵庫のありあわせのものを使ってさっと作っただけ。(『ノ(上)』)
b. “一点也不考究”绿子头也不回地说..昨天(忙)得我菜都没顾上买、只是把电冰箱里原有的统统掏出来应付一下。(没+V+D) (《挪》)

例文(50a) (51a)の前文では、「努めてきた」「何度も書き直す」と言った意志が強く、実行した。後文では努力した結果として結局実現しなかった事柄を表している。例文(50a) (51a)は「掴める」「書ける」ように期待し、努力したが、実現するのが難しかったことである。例文(52)aも同じである。(53a)では「買い物する」意志があったが、「忙しい」という状況のために実行できなかった。この場合、実行できなかった原因は外的な条件にある。

中国語の例文(50b)と(51b)は「結果補語」であり、例文(52b)と(53b)は「趨向補語」である。いずれも肯定文で述べた特徴が存在している。否定文にも前文と後文に同じ動詞が2回使われている。副詞も用いられている。

さらに、例文(50b)では「连…也…」が使われている。例文(52b)では「什么也…」を使用している。このような文型は張(1999:137)が示した「1. 企望意的表現」についての構文cである。可能表現では「V不C」しか使われないが、非可能表現では結果補語と趨向補語も使える。また、肯定文の場合では趨向補語がやり遂げたという意味の実現を表すが、否定の場合には未実行、未実

現を表す。

② 「V+得+様態補語」

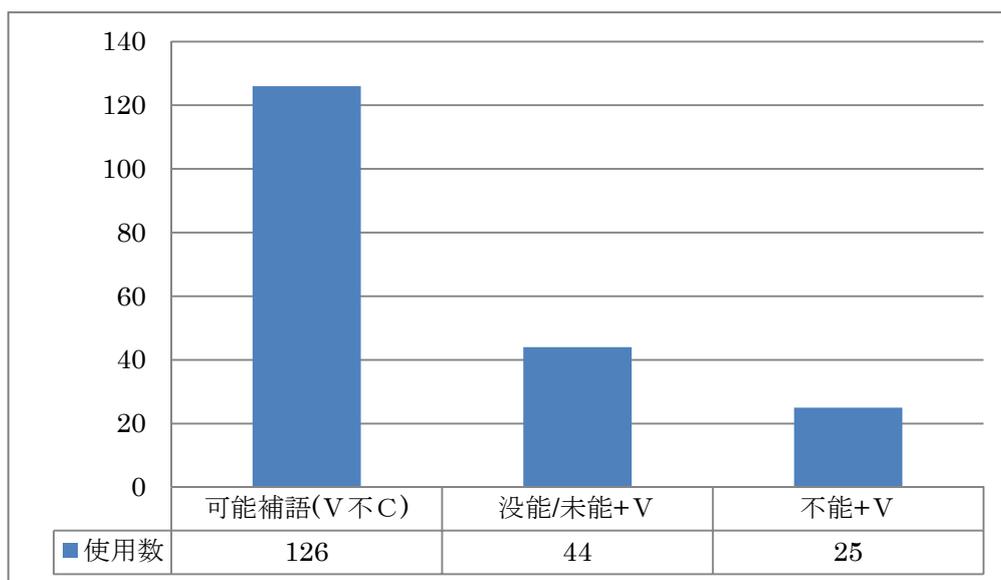
まず例文を挙げる。

- (54)a. そして、すぐにまた聞けて頭を中につっこんで筆箱から。ア。を書くための鉛筆を出す、いそいで閉めて。ア。を書きます。ところが、うまく書けなかったり、間違えたりしますね。 (『窓』)
- b. 接着、马上有打开盖子、把头钻到里面、从文具盒里取出铅笔来写‘a’字、匆匆关上盖子、写了一个‘a’字。但是、可能写得不好、或者写错了吧。 (《窗》)
(V+得+A)
- (55)a. 残念ながら僕らは親子としてあまりうまくやれなかったけど、それはまた別の問題です。 (『IQ84(2)』)
- b. 很遗憾、我们作为父子相处得不太好、但那是另一个问题。 (《IQ84(2)》)
(V+得+A)

例文(54)(55)のa文は肯定文 [4.1.1.3]の「様態補語」と同じく、評価を表す。だが、この部分は否定文であるため、出来事への悪い評価を表す。必ず「うまく」のような副詞が使われる。困難な実現ではなく、出来事の実現を表す。

2) 可能表現

【図3】が示しているように、日本語実現可能の過去形否定文に対応する中国語可能表現は「可能助動詞」と「可能補語」の両方とも使われている。可能助動詞を用いた例文で「会」「可以」が使われた例はなかったが、「没能/未能+V」(「未」の意味が「没」と同じである)と「不能+V」構文の用例は69例あった。可能補語との使用率に比べると可能助動詞は少ない。次の【図3】の通りである。



【図3】可能表現における対応表現の使用率

これから「1. 可能補語」、「2. 没/未+能+V」、「3. 不能+V」の順で分析する。

③ 可能補語

先行研究に述べたように、可能補語は、「1. 動詞(V)+得/不+結果補語/趨向補語(C)」、「2. 動詞(V)+得/不+了」、「3. 動詞(V)+得/不得」の3種類に分けられている。今度の調査で「1. 動詞(V)+得/不+結果補語(C)/趨向補語(D)」の使用率が高く、95%を占めているため、本研究では、「1. 動詞(V)+得/不+結果補語(C)/趨向補語(D)」に絞って分析する。

- (56)a. 直子はあなたに返事を{書こうとずっと悪戦苦闘していた}のだが、どうしても書きあげることができなかった。(『ノ』)
- b. 她写道、直子始终在为{写回信而竭尽全力}、但无论如何也写不出来。(《挪》)
(可能補語)
- (57)a. それは僕が残してきた唯一の写真だった。僕は写実を撮られる機会をあらゆる手を尽して{避けてきた}。でもクラス写真の撮影だけはどうしても逃れられなかった。(『海(下)』)
- b. 那是我留下的唯一相片。我千方百计{逃避照相}的机会、但全班集体照无论如何也逃不掉。(可能補語) (《海》)
- (58)a. 彼女は{大声で笑い出したく}もあつたし、同時に{泣き出したく}もあつた。しかしそのどちらもできなかった。(『IQ84(2)』)
- b. 她很{想}放声大笑、同时又{想}放声大哭、但都做不到。(《IQ84(2)》)
(可能補語)
- (59)a. どれだけ{考えてみても}、そこで自分が抱くであろう感情を、天吾はうまく探り当てられなかった。(『IQ84(2)』)

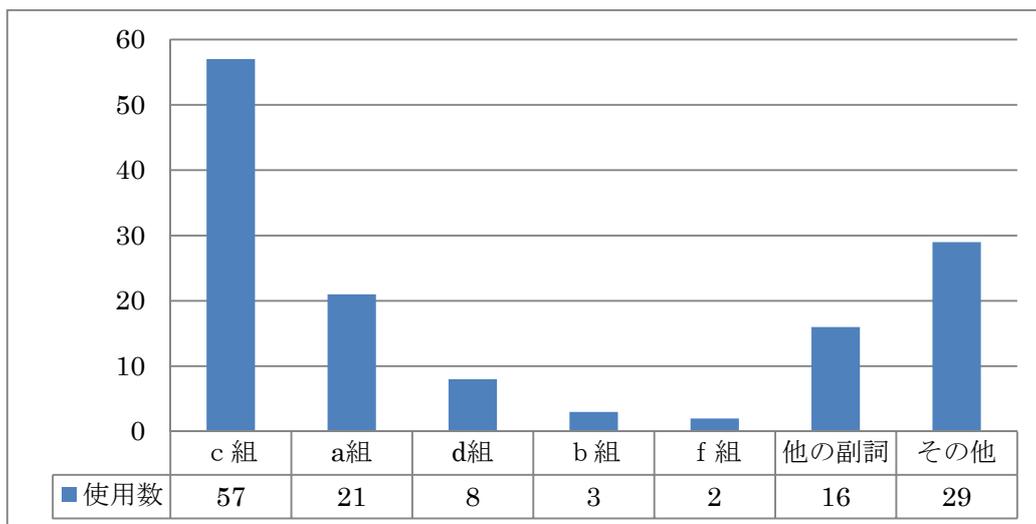
a. 无论怎么{思索}、天吾也找不到这种情况下自己可能抱有的情感。（《1Q84(2)》）
 （可能補語）

(60)a. (会話の速い流れ)に青豆はついていくことができなかつた。彼女は聞置き、呼吸を整えた。（『1Q84(2)』）

b. 〈交談的速度过快〉、青豆跟不上了。她停顿了一下、调整呼吸。（《1Q84(2)》）
 （可能補語）

例文(56)～(60)の a 文は意志を表す{ }部分や原因を表す()部分がよく現れた。例文(56)aの動詞「書く」が「悪戦苦闘」で「書く」意志が強いことを伝え、「書きあげる」意図を達成できるように頑張った。だが、努力した結果として実現しなかつた。副詞「どうしても」により実現の難しさが示され、「実現できなかつた」結果に至る。例文(57)～(59)の a も例文(60)と同じく動詞を発動(試行)し、努力した結果として実現が不可能であったことを表す。例文(60)a は外的な条件可能構文であり、「会話のスピートが速い」という原因があつたため、青豆が努力しても「ついていく」ことが実現できなかつたことを表す。

日本語の例文(56)a、(57)a に使われている「どうしても」に対し、中国語の例文(56)b、(57)b に「无论如何也+可能補語」が用いられ、困難的な実現を表すことができたと思われる。翻訳された中国語の例文(57)～(59)の b では一文に同じく 1つの動詞を 2回使う特徴があり、いずれも動作主が結果の達成を期待し、ある動作・行為を行つたが、望んだ通りにその結果が実現しなかつたことを表している。例文(60)b は「交談的速度过快」という原因が実現を妨げることになり、動作主である青豆の意図が実現しなかつた。张旺熹(1999)で述べた「意図+原因+実現しなかつた」構文の特徴 a と c が例文に現れ、日本語の「実現」に対応できるのではないかと考えられる。今度の考察で日本語実現系可能の否定文に対し、中国語の可能補語「V不C」構文が最も多く、136例があつた。张旺熹(1999)の分類に従つて、a組～f組がどのように示しているのかを調査した。結果としては、以下の通りである。



【図4】张旺熹(1999)の分類による「V不C」構文の分析

【図4】では、e組が現れなかった。a組～f組に取り上げられていない副詞を「他の副詞」にし、この分類に沿っていないものがその他にした。最も多いのはc組である。次にはa組である。

例文(56)bでは、「无论如何也+可能補語」がc組の特徴であり、動詞「写」が2回使われ、a組の特徴である。例文(56)bと例文(59)bも同じくa組とc組の特徴が1文に現れている。複数の特徴が1文に現れる現象が例文(58)bにもあった。例文(58)bでは「想」を用いられ、b組の特徴であり、2回使われることがa組の特徴である。また、例文(60)bではd組の特徴があり、原因が前文にあることである。結果補語と趨向補語の分析でも「意図+原因+実現できなかった」を表す「V不C」構文の特徴aとcが現れ、この部分の「実現」の性質と似ている。

④「没能/未能+V」

「没能+V+補語」(25例)と「未能+V+補語」(19例)は過去に実現できなかった事柄を表す意味が含まれている。まず、例文をみる。

- (61)a. 少なくとも天吾にはそれらしきものは聞き取れなかった。 (『IQ84(2)』)
b. “您听明白了吗?” 男人问。声音里不含任何感情。至少天吾没能听出类似的东西。
(没能+V) (《IQ84(2)》)
- (62)a. にもかかわらずというか、それがあまりにも中心にあったために、かえってその意味を掴み切れなかったみたいだ (『IQ84(2)』)
b. 长期以来始终不变地在我的内心深处，对我这个人起了重要的镇石的作用。尽管如此，因为它的位置太靠近中心，我反而没能好好把握它的意义。 (《IQ84(2)》)
(没能+V+C)
- (63)a. その原因はおそらく根深いものだった。しかしその結婚を阻止することは誰にもできなかつた。 (『IQ84(1)』)
b. 在老夫人眼里，那个男人显然拥有扭曲的灵魂，以前也引发过问题、其原因恐怕根深蒂固。但是，谁也未能阻止这场婚姻。 (《IQ84(1)》)
(未能+V+C)
- (64)a. 『空気さなぎ』は話題になりすぎて選考委員に敬遠され、芥川賞をとることはできなかつたが、小松の率直な表現を借りるなら「そんなもの要らん」くらい本は売れた。 (『IQ84(2)』)
b. 他圆满地完成了这项工作，作品获得了文艺杂志新人奖、出了书、成了大畅销书。由于《空气蜗》引起太多话题，以致评审委员们敬而远之，最终未能获取芥川奖。
(未能+V+C) (《IQ84(2)》)

例文(61)～(64)のaでは、いずれも目的があった。例えば、例文(61)aでは「意味を掴み切る」ことが目的であった、外的な条件である「あまり中心にあった」ことで、実現しなかった。例文(62)～(64)のaも目的だったが、発動(試行)されていたにも関わらず、希望通りに行かなかった動作である。

中国語の例文(61)～(64)のbでは、「没能+V」が使われ、実行する意志があつたが、能力と可能性が実現できなかったことを表す。「能」の否定形は一般的には「不能」を使うが、実現済みの場合には「没能+V」も使われる。例文(61)bでは動詞「把握」の意志があつたが、「没好好把握」が実現できなかったことを表す。例文(62)～(64)のbではいずれも実現を表すことができる。また、中国語の例文では、副詞「至少」「反而」「最终」と文型「谁也」も使われる。

⑤ 「不能+V」の場合

「不能+V+補語」(25例)は「可能・不可能」を表す意味が含まれている。

- (65)a. 時間がたてばそんなことも{忘れちゃうだろうと私は思ってたんだけど}、でもうまく忘れられなかったの。 (『ノ(下)』)
- b. 我本以为随着时间的推移会{淡忘的}、但却偏偏不能痛快忘掉。 (《挪》)
(不能+副詞+V+C)
- (66)a. しかしどれだけそう{自分に言い聞かせても}、心の底から納得することができなかった。 (『1Q84(2)』)
- b. 但{不论怎样努力说服自己}、她都不能由衷地信服。她就在刚才亲手杀了一个非同一般的人。(不能+副詞+V+C) (《1Q84(2)》)

日本語の例文(65)aの前文では「忘れる」、(66)aが「言い聞かせる」という動作が発動(試行)されたが、望みの通りに実現しなかったことを表している。しかし、中国語の例文(65)b(66)bでは「不能」が使われた。「不能+V」と「没能/未能+V」の違いは、「不能+V」が動作主の主観的な「不可能」を表し、「没能/未能+V」が客観的な条件で、実現できなかったことを表す。つまり、「不能」は「能力・可能性」を表す用法が一般的であるため、「能」は省略できない。一方、「没/未+能」の場合には客観的な結果として使われているので、「能」を省略しても、前文の意味は変わらない。小説の文脈によって、日本語の実現系可能を「不能」で翻訳したが、中国語の場合には「可能・不可能」の表現を使った方がよく伝える可能性があり、どのように翻訳するかは翻訳者の語感次第である。

本章では、日本語実現可能構文に対し、肯定文と否定文に分け、中国語の対応表現を分析してきた。中国語の分析を通し、分かった点が2つある。

第一、非可能表現については、肯定文、否定文ともに、結果補語と趨向補語が使われる。結果補語と趨向補語の例文では「意図({ })+原因(〈 〉)+実現した・実現しなかった([])」構文で「意図({ })」を明示する例文が多く、意志や期待があることが見受けられる。動作主の意図によって期待された動作・状態の実現/非実現の可能/不可能になった事柄を表す。また、文脈の特徴から見ると、副詞がよく使われる特徴があり、困難的な実現を表している。これらの副詞の特徴は張旺熹(1999)も取り上げている。副詞だけではなく、「実現」を表す構文の特徴bとcも結果補語と趨向補語の例文の中に表れた。

第二、中国語の可能表現については、可能補語(126例)が使用され、否定文にしか現れていなかった。副詞がよく使われるという特徴もある。日本語の「どうしても」に対し、中国語の「无

论如何也」という大変さを強調する表現もあり、実現の難しさが表れる。「意図({ })+原因(< >)+実現した・実現しなかった([])」構文に対し、今回の考察で「V不C」構文の特徴は張旺熹(1999)が述べた a 組の特徴と c 組の特徴の場合が多かった。この特徴からはやり遂げる意志や努力する意志の強さが表れている。

以上の分析から分かるように、結果補語、趨向補語の例文の特徴は日本語の可能補語の対応表現と似ている。同じく意図({ })を明示する構文が多かった。その他の「趨向補語」、「没/未+能+V/補語」、「実現・完了を表す“了”」、「能/会/可以+V/補語」は、意図({ })と原因(< >)を示す例文があまり見られていない。

もう一つの「不能+V+補語」(25例)は「可能・不可能」を表すが、日本語実現可能の過去形否定文で、「不能+V+補語」も使用されたが、「実現」を表せるかどうかは次の節で検証する。

【表3】小説における日本語実現可能と中国語の対応表現

	中国語非可能表現	中国語可能表現
日本語実現可能の過去形肯定文	V+結果補語 V+趨向補語 様態補語 「実現・完了を表す“了”」	「能/会/可以+V/補語」
日本語実現可能の過去形否定文	没+V+結果補語 没+V+趨向補語 様態補語	「不能+V/補語」 「没能/未能+V」 可能補語

6.4.3 日本語実現可能に対する中国語可能表現使用の可否についての考察

第4章で日本語実現系可能構文に、対応する中国語の表現を肯定文と否定文に分け、考察してきた。考察から肯定文も否定文も可能表現と非可能表現にも翻訳されることが明らかになった。

しかし、日本語実現系可能の性質は「可能」の意味より「実現」を表すものである。この日本語の特徴に中国語の可能表現が対応するか検討する余地がある。

本章では中国語の可能表現が日本語実現系可能構文の「実現・結果」と対応関係にあるかに焦点を当て、可能表現と非可能表現の置換えが可能であるかを考察する。

6.4.3.1 肯定文の場合

肯定文においては、第4章で見た中国語の翻訳文に、非可能表現と可能表現があった。非可能表現は「結果補語」、「趨向補語」、「様態補語」、「完了・実現を表す“了”」がある。可能表現は唯一「能+V+(C/D)」だけであった。非可能表現と可能表現の置換えパターンは次の3類に分けられる。A類. 意味と形態ともに置換え可能で意味もあまり変わらない。B類. 置換え不可能。C類. 置換え可能だが、意味が変わる。

1) A類. 意味と形態ともに置換え可能で意味もあまり変わらない場合

この部分では非可能表現から可能表現への置換えも可能表現から非可能表現への置換えに該当する例文は1つも見つからなかった。置き換えると、意味と形態が不可能であるか、意味が変わる

かになってしまう。

2) B類. 置換不可能

a) 非可能表現から可能表現への置換

第4章で分析した「意図({ })+原因(< >)+実現した・実現しなかった([])」構文から「能+V」への置換えはできない。

(31)a. {長いことかかって}やっと問題をはっきりさせることができた。(前掲) (『ネ』)

b. {闹了半天}才把问题 (弄清楚/*能弄清楚)。 (同上)

(32)a. {長いことかかって}やっと思い出すことができた。(前掲) (同上)

b. 我{回忆}了很久才(回忆起来/*能回忆起来)。 (同上)

(33)a. うっかりして車が泥沼にはまってしまい、皆で懸命に押してやっと脱出できた。

(前掲) (同上)

b. 一不小心、汽车陷进泥里去了、大家{推}了半天才(推出来/*能推出来)。 (同上)

例文(31)～(33)のbは「意図+原因+実現した・実現しなかった」構文が使われ、努力を経て望んだ通りにその結果が実現されたことを表している。例文(31)bの「弄清楚」が「V+結果補語」であり、「回忆起来」「推出来」「挤出」は「V+趨向補語」である。いずれも「結果」を表している。例文(31)bの構文を「能+V+(C/D)」と置換えると、「我能弄清楚」のように動作主の能力を表し、客観的な可能ではなく主観的な「能力・可能性」を表すこととなる。例文(32)bと(33)bの場合も置換えると、同じくニュアンスの「能力・可能性」を表すため、置換えはできない。「能+V+(C/D)」構文より「意図+原因+実現した・実現しなかった」構文は「結果補語」「趨向補語」の方と共起しやすい。

b) 可能表現から非可能表現への置換

①「能+V+(C/D)」構文の後ろに目的語がない場合に、「完了・実現を表す“了”」での置換えはできない。

“

(48)a. その時点でこっちも『先生、そいつはやばいですよ。ちょっと乗れませんね』と断ることもできた。(前掲) (『1Q84(1)』)

b. 所以在这层意义上嘛、也算得上公平交易。当时我们也(可以拒绝/*拒绝了): “老师、这可有点危险。” (《1Q84(1)》)

(49)a. なるほど。君の気持ちはおおむね理解できたような気がする。(前掲) (『1Q84(1)』)

b. 青豆想起了自己的小学时代。教团孩子们不愿意去上学的心情、她也(能理解/*理解了)。 (《1Q84(1)》)

例文(48)(49)のaでは動作主の行動によって「断ること」「理解すること」が実現した。翻訳された中国語は「可以拒绝」「能理解」のように、目的語が付いていない。この場合に、「完了・

実現を表す“了”と置換えると、例文の後文が落ち着かないため、不自然である。「完了・実現を表す“了”」の構文は「V+了+目的語」というふうに表現しているため、例文(48)b、(49)bの「可以拒绝」「能理解」の後ろに目的語がある場合には「完了・実現を表す“了”」との置換えができると思われる。

② 「能+V+(C/D)」から様態補語への置換えはできない。

- (49)a. なるほど。君の気持ちはおおむね理解できたような気がする。(前掲) (『1Q84(1)』)
b. 原来如此。我觉得大致 (能理解/*理解得+様態補語) 你的心情。 (《1Q84(1)》)

「様態補語」は「写得好」のように「V+得+A」で表す。形容詞の使用が多いため、「能+V」の動詞(V)から「様態補語」に置換えることはできない。

3) C類. 置換可能だが、意味が変わる場合

a) 非可能表現から可能表現への置換

①結果補語と趨向補語から「能+V+(C/D)」への置換えはできない。

- (34)a. 大型クレーン車を持ってきてやっとあの大きな石を吊り上げられた。(前掲)
(『ネ』)
b. 开来一辆大吊车才把那块大石头 (吊起来/△能吊起来)。
(35)a. こんなに苦しい生活を、意外にも彼女は辛抱できた。(前掲) (同上)
b. 这么困苦的生活、她居然忍受下来了。(同上)
(36)a. 最後まで喧嘩もせずに彼女と共同作業ができたのは僕一人だけだった。(前掲)
(『中』)
b. 直到最后也不发一句牢骚而同她搭档(干下来/△能干下来)的只有我这样的人。
(《去》)

例文(34)～(36)の b は、「吊起来」「忍受下来」「干下来」がやり遂げたことを表している。「能+V+(C/D)」構文と置換えると、意味にかなりの差が出るため置換不可能。この構文は動作主の「能力」あるいはその「能力」を身に付けたことを表す。

例文(34)b は動詞の「吊り上げる」の実現を表す。大型クレーンを持って来る前に、吊り上げることが試行されたと思われ、大型クレーンを持ってきてから、この動作の可能性が実現した。「能+V」構文と入れ替えると、「大型クレーン車が吊り上げることができる」能力を表す意味になってしまい、「実現」を表す意味はなくなる。不可能から可能への「実現の可能性」を表している。「実現の可能性」は「実現」したことと異なると思われる。例文(35)b の場合は自分が「我慢できる」かどうか分からないが、最後まで意外に我慢できたことを表す。「能+V」構文である「能忍受下来了」に置換えたら、「我慢できない」状態から「我慢できる」状態への可能性を表せる。不可能から可能への状態を表現している。前掲例文(36)b も最後までやり遂げるかどうか

分からないが、努力して実現したことを表す。「能+V」構文と入れ替えると、過去と言う時間と関係がなく、「我」の動作主が「喧嘩もせず共同作業できること」が「我」しかないという能力の意味を表している。いずれも意味が変わるため、置き換えが不可能である。

② 様態補語から「能+V+(C/D)」構文に置き換えると、「能力」を表す。

- (39)a. 彼女はやり手なので、うまく対応できた。(前掲) (『ネ』)
 b. 她很能干、事情(办得很漂亮/△能办得很漂亮)。(同上)
- (40)a. このドラマはうまく改編できた。(前掲) (同上)
 b. 这个电视剧(改编得很成功/△能改编得很成功)。(同上)
- (41)a. 今学期の中国語のテストが一番よくできた。(前掲) (同上)
 b. 这学期汉语考试(考得最好/△能考得最好)。(同上)
- (42)a. 比較的良く書けた作品もあれば、箸にも楨にもかからないものも——もちろんあとの方が圧倒的に多いんだけど——ありました。(『IQ84(1)』)
 b. 其中既有(写得相对不错/△能写得相对不错)的作品、也有根本不值一提的作品——当然是后者居多。(同上)

例文(39)～(42)のbでは様態補語を使い、出来事を評価する意味を表している。日本語の例文aではいずれも副詞を使用している。この場合は「能+V/補語」構文に置換えると、いずれも動作主の「能力」を表す文になる。例えば、例文(39)bは様態補語「办得很漂亮」が実現済みの事柄を良い評価で表現している。「能+V」構文で置換え、動作主「她」が能力を持っているため、「やると上手にできる」という可能を意味することになる。例文(40)bでは「改编得很成功」が実現済みの事柄を表すが、「能+V」と置換え、「上手く改編することができる」というようにまだ発生していない事の可能性を表す。例文(41)bと(42)bも同じである。

③ 「完了・実現を表す“了”」から「能+V」への置換えはできない。

- (43)a. 『空気さなぎ』を書き直す許可を、僕は先生から与えられたのでしょうか?
 (前掲)(『IQ84(1)』)
 b. 老师、您是否把改写《空气蜗》的许可(给了我/△能给我了)? (《IQ84(1)》)
- (44)a. そういう経緯で、私はその人と電話で直接話をすることができたわけ。(前掲)
 (『IQ84(1)』)
 b. 就这样、我跟此人直接(通了话/△能通话了)。(《IQ84(1)》)
- (45)a. もちろんはじめから上手くいったわけじゃないけれど、少しずつ友だちもできたし、学校に行くのも以前ほど苦痛じゃなくなってきたわ。(前掲) (『中』)
 b. 当然一开始并不顺利、后来多少(有了朋友/△能有朋友了)、上学也不像以前那么难受了。(《去》)

例文(43)～(45)のaはいずれも過去の一時的な出来事であり、実現を表す。中国語の例文(43)～(45)のbはいずれも「完了・実現を表す“了”」を用い、実現済みの事柄を表している。しかし、「能+V」構文で置替える場合にはまだ実現していない事を表すことになる。例えば、例文(43)は「给了我」を使うと、「私にくれた」という実現済みの出来事を表す。だが、「能+V」の「能给我了？」を使うと、「私にしてくれることができるようになりましたか？」の意味を表し、許可を求めている意志を伝えているように思われる。日本語の例文と、出来事の発生時の時制とが違うため、日本語実現可能構文と対応しにくいと考えられる。

b) 可能表現から非可能表現への置換

①「能+V」が目的語を伴う場合、「完了・実現を表す“了”」で置き換える。

(67)a. しかし着ているビューゴ・ボスのスーツやミッソーニ・ウォーモのネクタイを見れば、彼らの勤務先が三菱や三井といった大手不動産会社出でないことは推察できた。
(『1Q84(1)』)

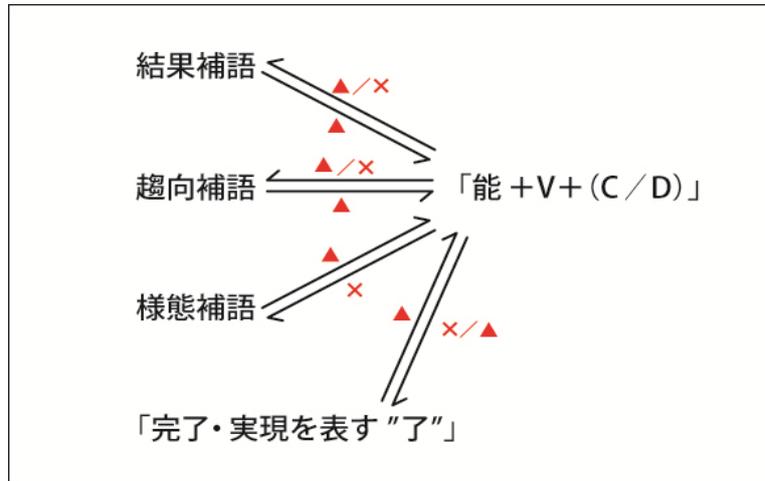
b. 但看他们身上的胡戈·波士西服和米索尼·尤莫领带,便(能推断出/○推断出了)他们供职的地方不会是三菱或三井那样的大房地产公司,而是更具攻击性、更灵活的公司,大概拥有一个片假名写的公司名称。

(68)a. 天吾はその波の音を耳にすることができた。(『1Q84(1)』)

b. 天吾(能听见/○听见了)那波浪的咆哮声。

上記の中国語の例文(67)bと(68)bでは、置換えることにより、「完了・実現を表す“了”」の方が「実現」を表していることが分かる。「能+V」構文の「能推断出」、「能听见」がいずれも「能力」の可能を表し、日本語の例文と意味に差異が生じる。

以上の内容から「結果補語」「趨向補語」「様態補語」と「能+V」との置換は意味が変わらないA類は確認できなかった。つまり、置換えると、意味変化するか、置換できないかのパターンに限られる。この結果から、「結果補語」「趨向補語」「様態補語」のような非可能表現と「能+V」構文の用法が異なることは明確である。「結果補語」「趨向補語」「様態補語」が「結果」「実現」の意味を表す用法を持っているため、日本語実現系可能の過去形肯定文に対応できる。しかし、「能+V」は「実現」より「可能・可能性」の意味が中心で、客観より主観に焦点が当てられているため、日本語実現系可能の過去形肯定文と対応する場面は限られてくる。「能+V」構文で翻訳するか否かは文の前後関係や小説の特定の場面によって判断される。置き換えの対応関係を図3にまとめた。



【図5】置き換えの対応関係図⁴⁾

6.4.3.2 否定文の場合

肯定文の場合は置換えると、A類の置換える例文がなかった。否定文の場合も同じであるのか、或いは異なるのかを分析する。

1) A類. 意味と形態ともに置換可能で意味もあまり変わらない。

a). 非可能表現から可能表現への置換

① 結果補語・趨向補語を用いた「意図+原因+実現した・実現しなかった」構文で、動詞を2回使用する場合、結果補語・趨向補語は「没能+V」「可能補語」に置換えられる。

(69)a. その広告はしっかりくっついていて、どうなにはがそうとしても、綺麗にはがせなかった。(『ネ』)

b. 那些广告粘得太结实、我撕了半天也(没撕干净/○没能撕干净/○撕不干净)。

(70)a. この字は一生懸命消そうとしたけれど消せなかった。(同上)

b. 这个字我涂了半天也(没涂掉/○没能涂掉/○涂不掉)。

(71)a. 彼はカバンの中をしばらくかき回していたが、お金を取り出せなかった。(同上)

b. 他在书包里掏了半天也(没掏出来钱来/○没能掏出来钱来/○掏不出来钱来)。

(72)a. しばらく考えたが、彼が誰だか思い出せなかった。(同上)

b. 我想了半天也(没有想起来/○没能想起来/○想不起来)他是谁。

上記の例文(69)(70)のbは結果補語であり、例文(71)(72)のbは趨向補語である。動詞を二回繰り返すことにより、意志は強いが、達成できなかったことを表現している。「没能+V」と「V不C」と置換えても、「実現しなかった」ことを表す。だが、結果補語の用法からすると、出来事の「結果」に着目しており、「可能」の意味に焦点を当てていない。一方、可能表現は「没能+V」と「V不C」で出来事の可能・可能性を表すのが一般的である。この場合には実現・達成しなかったことを表す用法であり、結果補語の「実現」に近いと考えられる。結果補語、「没能+V」、

「V不C」は日本語の「実現」と対応できると言える。

② 様態補語から「没能/未能+V+(補語)」へ置換えられる

- (55)a. そして、すぐにまた聞けて頭を中につっこんで筆箱から。ア。を書くための鉛筆を出すと、いそいで閉めて、。ア。を書きます。ところが、うまく書けなかったり、間違えたりしますね。(前掲) (『窓』)
- b. 接着、马上有打开盖子、把头钻到里面、从文具盒里取出铅笔来写‘a’字、匆匆关上盖子、写了一个‘a’字。但是、可能(写得不好/○没能/未能写好)、或者写错了吧。
- (56)a. 残念ながら僕らは親子としてあまりうまくやれなかったけど、それはまた別の問題です(前掲) (『1Q84(2)』)
- b. 很遗憾、我们作为父子(相处得不太好/○没能/未能相处好)、但那是另一个问题。

日本語の前掲例文(55)(56)のaに対し、いずれも実現した結果の状態を描写している。例文(55)(56)のbは様態補語を用い、悪い評価を表現している。「没能+V」に置換えても、「実現しなかった」状態を表せる。意志性という点においては、「没能+V」構文の「うまくやっていく」という意志の方が様態補語より強いと思われる。様態補語の方は出来事の評価への描写に過ぎない。

b). 可能表現から非可能表現への置換

① 「可能補語」「没能/未能+V+(補語)」から「結果補語」「趨向補語」への置換え。

- (73)a. 彼らは手でもぎ取ろうとしたがへうまくはがすことができなかった。(『海(上)』)
- b. 他们用手抓扯、但轻易(扯不下来/○没扯下来)。
- (74)a. しかしナカタさんの言っている意味は理解できなかった。(『海(下)』)
- b. 星野就此沉思片刻、但(捉摸不出/○没捉摸出)中田的意思。
- (75)a. どうやら話の流れからすると、君がかけた相手の電話番号は、持ち主がはっきりしなくてたどれなかったみたいだ。(『海(下)』)
- b. 从话的前后关系分析、警察好像(没能查明/○没查明)你所打电话号码的机主、或许是用现金卡的手机。

例文(73)のbにも述べたように、動詞を二回繰り返し、努力したことを強調している。例文(73)bと(74)bの可能補語を「結果補語」に置換えても、ほぼ同じ意味である。例文(75)bは「没能/未能+V」構文が用いられたが、「結果補語」「趨向補語」に置換えても意味は差ほど変わらない。しかし、前にも述べたように、「結果補語」「趨向補語」の場合には事柄の結果に着目しており、視点の違いがある。例文(75)の「没听出」より「没能听出」の意志が強いことを表している。

2) B類. 置換不可能

a) 非可能表現から可能表現への置換

- ①「意図+原因+実現した・実現しなかった」構文にある「結果補語」「趨向補語」は、「不能+V+(C/D)」に置換えられない。

- (52)a. 夕食のあとで緑に手紙を{書こうとした}が何度書きなおしてもうまく書けなかったので、結局直子に手紙を書くことにした。(前掲) (『ノ(下)』)
- b. 晚饭后想给绿子写信、但反复写了几次都(没写好/*不能写好)、最后给直子写了一封。

前掲例文(52)bでは「結果補語」の「没写好」を「不能+V」に置換えると、不可能という例文である。「結果補語」の焦点は実行した結果にあり、「不能+V」は、動作の可能性に焦点を当てている。

また、「意図+原因+実現した・実現しなかった」構文で、動詞を二回使用する場合に「没能/未能+V+(C/D)」と「V不C」が使われるが、「不能+V+(C/D)」は「可能・不可能」を表す主観的な可能に着目しているため、「不能+V+(C/D)」が使えない。

「様態補語」から、「不能+V+補語」への置換え

- (55)a. そして、すぐにまた聞けて頭を中につっこんで筆箱から‘ア’を書くための鉛筆を出すと、いそいで閉めて、‘ア’。を書きます。ところが、うまく書けなかったり、間違えたりしますね。(前掲) (『窓』)
- b. 接着、马上有打开盖子、把头钻到里面、从文具盒里取出铅笔来写‘a’字、匆匆关上盖子、写了一个‘a’字。但是、可能(写得不好/*不能写得好)、或者写错了吧。
- (56)a. 残念ながら僕らは親子としてあまりうまくやれなかったけど、それはまた別の問題です。(前掲) (『1Q84(2)』)
- b. 很遗憾、我们作为父子(相处得不太好/*不能相处得好)、但那是另一个问题。

例文(55)(56)のbで使われている「写得不好」「相处得不太好」は「様態補語」であり、実現したことの状態を描写している。一方、「不能+V」は上述のように、「能力」「可能性」を表す用法に着目しているため、日本語の例文(55)a、(56)aの実現系可能構文の意味的な特徴に対応しないと思われる。

b). 可能表現から非可能表現への置換

「没/未+能+V+(C/D)」、「不能+V+(C/D)」、「可能補語」の「(C/D)」が動詞(V)の場合には、「様態補語」への置換えが不可能である。

- (63)a. 少なくとも天吾にはそれらしきものは聞き取れなかった。(前掲) (『1Q84(2)』)
- b. “您听明白了吗?” 男人问。声音里不含任何感情。至少天吾(没能听出/*听得出)类

似的東西。

- (25)a. 直子はあなたに返事を{書こうとずっと悪戦苦闘していた}のだが、どうしても書きあげることができなかった。(前掲) (『ノ(下)』)
- b. 她写道、直子始终在为{写回信而竭尽全力}、但无论如何也 (写不出来/ *写得不出)。

前掲(63)b、(25)bの「様態補語」の構造が「V+得+A」であるため、「没能/未能+V」、「不能+V」、「V不C」(Cが動詞の場合)から「様態補語」への置換えは形態の変換に問題があり、置換えが不可能である。

3) C類. 置換可能だが、意味が変わる場合

a) 非可能表現から可能表現への置換

「様態補語」から「可能補語」への置換えはできるが、意味に多少「ずれ」がある。

- (55)a. そして、すぐにまた聞けて頭を中につっこんで筆箱から‘ア’を書くための鉛筆を出すと、いそいで閉めて、‘ア’を書きます。ところが、うまく書けなかったり、間違えたりしますね。(前掲) (『窓』)
- b. 接着、马上有打开盖子、把头钻到里面、从文具盒里取出铅笔来写‘a’字、匆匆关上盖子、写了一个‘a’字。但是、可能 (写得不好/△写不好)、或者写错了吧。
- (56)a. 残念ながら僕らは親子としてあまりうまくやれなかったけど、それはまた別の問題です。(前掲) (『1Q84(2)』)
- b. 很遗憾、我们作为父子 (相处得不太好/△相处不好)、但那是另一个问题。

日本語の例文(55)a、(56)aの「書けなかった」「やれなかった」に対し、中国語は「写得不好」「相处得不太好」と翻訳されている。「書いた」「やった」ことの結果を評価している。例文(55)b、(56)bの様態補語から可能補語の「写不好」「相处不好」に置換えると、「うまく書けない」「うまくできない」という可能性を表す。過去に発生した事柄であるかどうかとは関係ない。

b) 可能表現から非可能表現への置換

- ① 「没能/未能+V+ (C/D)」から「結果補語」「趨向補語」への置換え。両者は置換えることができるが、入れ替えると意味が変わる例文もあった。下記の通りである。

- (63)a. 少なくとも天吾にはそれらしきものは聞き取れなかった。(前掲) (『1Q84(2)』)
- b. “您听明白了吗?” 男人问。声音里不含任何感情。至少天吾 (没能听出/△没听出) 类似的东西。
- (64)a. その原因はおそらく根深いものだった。しかしその結婚を阻止することは誰にもできなかった。(前掲) (『1Q84(1)』)
- b. 在老夫人眼里、那个男人显然拥有扭曲的灵魂、以前也引发过问题、其原因恐怕根深蒂固。但是、谁也 (未能阻止/△没阻止) 这场婚姻。

前掲例文(63)b では「没能听出」の場合は聞く意図があったが、実現できなかった。しかし、「没听出」に置換えすれば、天吾が聞く意志もない可能性もある。日本語の前掲例文(64)a の「できなかった」に対し、中国語の前掲例文(64)b では、「未能阻止」が用いられ、「阻止」したが、望み通りには実現しなかったことを表す。「阻止」する意図や意志はあった。しかし、「没阻止」に置換えると、誰も阻止しなかった意味になり、「阻止」しようという意志もなかった事になる。この2文は置換えの前後で文意の変化が著しい例文である。

② 「不能+V+(補語)」構造から「結果補語」、「趨向補語」への置換え

(76)a. 僕にはその事実がまだどうしても呑みこめなかった。 (『ノ(下)』)

b. 我无论如何也(不能理解/△没理解)这一事实、无论如何也不能相信

(77)a. 授業で教えられる教科はほとんど理解できなかったけれど、わからないなりに教室の隅で静かに座っていることだけはできた。(『海(上)』)

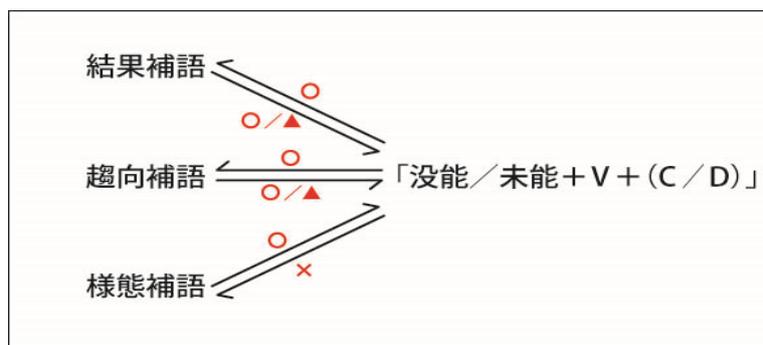
b. 课上教的内容虽然几乎(不能领会/△没领会)、但稀里糊涂地静坐在教室角落还是可以做到的、老师叫干什么就乖乖干什么、不给任何人添麻烦。

例文(76)b、(77)bの「不能理解」「不能领会」より「没理解」「没领会」の方が客観的な「実現」を表す。「不能+V」は人の「能力」に着目している用法でよく使われる。このような差異があるため、「不能理解」より「没理解」の方が日本語の例文(76)a、(77)aの「実現」の意味に近いと考えられる。ただし、翻訳の際には、文脈と人物の性格や背景などにより、「可能」であるのか、「実現」であるのか、翻訳者の語感によって判断される。

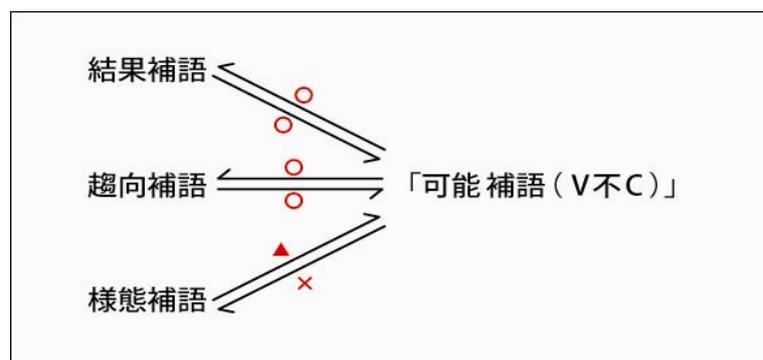
日本語実現系可能の過去形否定文に対し、中国語の対応表現の対応性を考察した。置換えができるものは対応性が強く、置換えができないものは対応性が弱いと言える。図4.5.6を参考にしながら、本節の分析結果を述べていきたい。IはA類のまとめ、IIはB、C類のまとめである。

I. 図4~6では「結果補語」「趨向補語」と「V不C」はお互いに置換えができる。特に、「意図+原因+実現した・実現しなかった」構文においては置換えても意味に差異は見られないことが分かった。日本語の「実現」と対応すると言える。

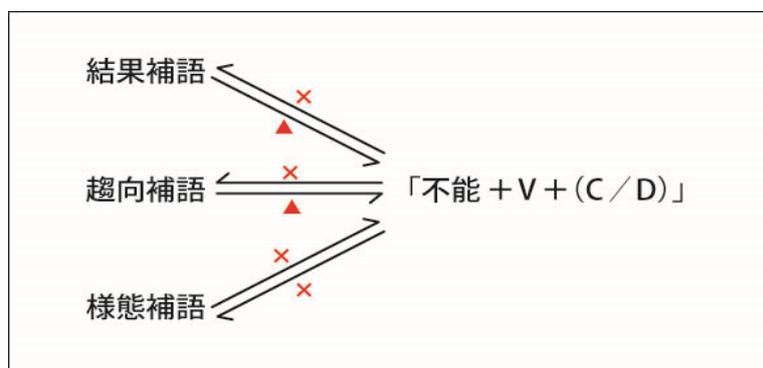
II. 図4では「結果補語」「趨向補語」から「未/没能+V+(補語)」構造に置換えられるが、「未/没能+V」から「結果補語」「趨向補語」へ置換える場合は意味が変化することもある。「未/没能+V」から「未/没+V」に置換えると、「可能・可能性」より「結果・実現」の意味に焦点が置かれ、意味が変わるからである。図6では「結果補語」「趨向補語」「様態補語」と「不能+V+(補語)」との置換えはほぼできない。置換えられる場合でも意味が変わる。「不能+V+(補語)」は「可能・不可能」を表す用法であるため、日本語実現系可能の過去否定文との対応性が弱い、対応しないのではないだろうかと考えられる。置き換えの対応関係は図4.5.6の通りである。



【図6】非可能表現と「没能/未能+V+(C/D)」の対応関係図



【図7】非可能表現と「可能補語(V不C)」の対応関係図



【図8】非可能表現と「不能+V+(C/D)」の対応関係図

6.5 まとめ

本研究では、潜在可能と実現可能の過去形肯定文・否定文に対し、中国語との対応表現と対応関係を考察した。対応関係に「ズレ」があることが明らかになった。また、日本語実現可能の過去形否定文は「意図+原因+実現しなかった」を表す中国語の可能補語「V不C」構文に対応することも分かった。以上の分析によって、次の【表4】に纏めてみた。

【表 4】 潜在可能・実現可能と中国語の対応表現

	日本語の特徴	対応する中国語の特徴
「潜在可能＋ 「過去の『タ』 形」の肯定文	以前からずっとその能力が持っていたが、今はその能力を失ったことを表している。実現可能の「やろうとしてその行為が実現した」と全く異なっている。	●可能表現に対応する。「能」や「会」などの可能表現を省略してはいけない。その「能力」を表しているので、省略すると、前文の意味が変わる。
「潜在可能＋ 「過去の『タ』 形」の否定文	主語の属性と関わりがあって不可能だったことを表現している。動作主の「ポテンシャルな特性として捉えられている」と思われる。	●可能表現に対応しない。 中国語に翻訳すると、可能表現が使いにくく、経験や履歴などを表す「过」の否定を用い、「やったことがない」というふうに表示する。(また考察する必要がある)
「実現可能＋ 「過去の『タ』 形」の肯定文	「期待される結果の実現が難しい」、困難を乗り越え、期待した結果がやっと実現された時の喜び・慨嘆などを込める。	●可能表現に対応しない。 ●「結果補語」、「程度補語」、「了」で完成した事を表す。 ●この部分では、山田(2008)が述べた通りに、「現代中国語では、動作の状態が可能か不可能を表すのが可能補語であり、動作が完成かどうか、実現されたかどうかを表すのが結果補語である」。
「実現可能＋ 「過去の『タ』 形」の否定文	「やろうと思ったが、何かの原因で実現しなかった」。一回性であるかどうかの語感が読み取れない。	●可能表現に対応する。 ●結果補語も使える。

以上の分析から、日本語の実現可能と潜在可能の4つのグループに対して、中国語の可能表現に対応することができるもの、できないものを分析した。次の3点が分かるようになったと思われる。

- ① 実現済みや結果を表す a グループに対しては、日本語では可能表現が使えるが、中国語の対応表現では可能表現が使いにくい。中国の可能表現の肯定文には「結果」「実現」を表すのが困難である。従って、実現済みの結果を表す日本語の過去の可能表現の肯定文は中国語の可能表現に対応しにくい。
- ② ①に対して、否定の場合には中国語の可能表現が使える。また、可能補語で「実現」「結果」を表すことができるため、日本語の可能表現に対応する。
- ③ 潜在可能構文は中国語に翻訳しやすいと言われているが、全ての中国語の可能表現になれるというわけではない。一部が難しいということが分かった。

また、日本語の実現系可能の過去形否定文に対し、中国語では「V 不 C/D」に翻訳され、126 例もあった。その使用率が非常に高い。126 例の中で、張旺熹(1999)で述べた「意図+原因+実現し

なかった」構文のa組とc組が良く使われている。この構文は「結果補語」に置換えても意味が変わらないことは「5.3.4.3」で証明した。筆者が第1章で疑問を持った例文(30)(31)もa組とc組の特徴が備えている。

- (26) 彼の質問に私は1つも答えられなかった。(前掲) (『ネ』)
 (27) このパズルは長い時間かけたが完成できなかった。(前掲) (同上)
 (30) 这个拼图我拚了半天也拼不好。(前掲) (同上)
 (31) 他写道、直子始终在为写回信而竭尽全力、但无论如何也写不出来。(前掲) (《挪》)

上記の例文(26)(27)は先行研究の渋谷(1993)の分類からすると、能力条件可能構文である。例文(30)(31)は中国語の可能補語「V不C」を使用した「意図+原因+実現しなかった」構文である。この場合は「V不C」構文しか「実現」を表せないため、中国語の可能補語の一部だけ日本語の実現可能の否定文に対応すると言える。

また、可能助動詞を用いた表現である「没能+V+C/D」も現れた。例文(31)の「写不出来」を「没能+V+C/D」に置換えても意味は変わらない。

日本語実現可能の過去形否定文の中国語翻訳で可能表現の中に「没能/未能+V+(C/D)」と「V不C/D」以外に中国語可能表現「不能+V」も現れたが、「不能忘掉」のように動作主の「主観的な可能」を表す。「没能+V+(C/D)」とは違い、「不能+V+(C/D)」が過去という時間帯に「実現」を表せないが、「没能+V+(C/D)」が「実現」を表すことができ、客観的な不可能を表していることが分かった。その結果を下記の表5にまとめる。対応するものを「○」で表示し、対応しないものを「×」で示す。肯定文には非可能表現しか対応しない個所が日中両言語の可能表現の「ずれ」であることを明確に示している。否定文には非可能表現も可能表現も対応することを解明した。

【表5】日本語実現系可能の過去形肯定文・否定文と中国語の対応関係

	中国語の非可能表現	対応可否	中国語の可能表現	対応可否
日本語実現可能の過去形肯定文	①V+結果補語 ②V+趨向補語 ③様態補語 ④「実現・完了」を表す「了」	○ ○ ○ ○	①「能/会/可以+V+(C/D)」	×
日本語実現可能の過去形否定文	①没+V+結果補語 ②没+V+趨向補語 ③様態補語	○ ○ ○	①不能+V+(C/D) ②没能/未能+V+(C/D) ③可能補語 追加：「意図+原因+結果」構文の可能補語(V不C/D)のみ	× ○ ○ ○

【注】

- 1) 本章の内容は修士論文「可能表現における日中対照研究」の一部を修正した内容が含まれている。
- 2) 魏(2011)を参照 p. 124。
- 3) 詳しくは、本研究の[4. 4]を参照。

第7章 結論

本研究は、可能表現の成立条件を踏まえながら、日本語の接辞を付加しにくい動詞の構文と実現可能構文について日本語の実現・不実現の「可能」の意味合いの生成が成立する要因を考察した。さらに、中国語の対応表現との比較を、意味論および対照言語学の方法をもって考察した。結論として、接辞を付加しにくい自動詞構文は「可能」の意味合いが生じる言語現象に関しては、動詞の意味分類、動詞の意味特徴、文脈の環境などの側面からの分析により、その要因を究明することができた。また、対照言語学の角度から日中両言語の対応関係を考察し、可能表現における両言語の「ズレ」を明らかにした。

本研究は以下の3つの問題点を中心に考察した。

- 1) 可能形の接辞を付加しにくい動詞は、どのような場合において「可能」のニュアンスが生じやすくなるのか。
- 2) 過去・現在・未来において実現可能構文の性質とは何か。なぜ意志性のない文脈で「可能・可能性」のニュアンスが弱まるのか。
- 3) 日中両言語の可能表現における共通性、個別性はどのようにしてあらわれるのか。及び、可能表現における両言語の「ズレ」は何があるのか。

この3つの問題点を解決することによって可能表現をもっと深く理解する一助となり、将来の日本語教育と中国語教育に裨益する。

その考察結果を各章ごとにまとめた上で、残された課題と今後の展望を述べる。

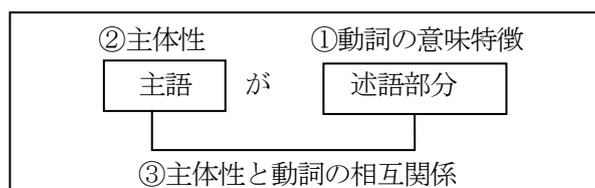
7.1 本研究の結論

第1章では日本語の可能表現と中国語の可能表現を概観し、可能表現の成立条件について考察した。日本語については先行研究を踏まえて可能表現の形態と意味分類を整理して、主体(A)と客体(B)の観点から6つのグループに再分類を行った。可能文の成立条件は「語形」「動詞の意味特徴」「格構造」などが大きく影響していた。本章では主に「動詞の意味特徴」を決定づける要素である「意志性」「主体性」「命題内容」を考察し、その他の成立条件は第2、3章で具体的な分析を加えた。一方、中国語の可能表現の成立条件については「語形」「可能表現の生成条件」を分析した。可能表現における日中両言語の「ズレ」に関する考察は第5章と第6章に譲った。

第2章では、日本語の可能表現の生成条件である「語形」を中心に可能形の接辞付加について考察した。可能形の接辞を付加しにくい自・他動詞をまとめ、早津(1987、1989)の意味分類に従って分類した。結果は、接辞を付加しにくい自動詞の分類と他動詞の分類が多少異なることが分かった。さらに、接辞を付加しにくい自動詞の意味素性を考察し、自動詞自体で表す事象には人間の存在や外的な変化・状態という要素がある場合は意志性の潜在が生じ、「可能」の意味合いが生じやすいという内容を示した。

第3章では、第2章の考察結果を踏まえ、構文上で日本語の可能表現の生成条件である「動詞の意味特徴」「格構造」をめぐって考察した。日本語の可能形の接辞を付加しにくい動詞が使われる構文は可能構文ではないが、「可能」の意味合いが含まれている。この言語現象でなぜ日本語で

は「可能」のニュアンスが生じるのかを分析した。その要因として図1の「①動詞の特徴」「②主体性」「③主体性と動詞の相関関係」に着目した。文脈上において可能形を付加しにくい自動詞構文は、構文の背景に人間の参与が現れ、意志性が潜在している場合に日本語の「可能」の意味合いが生じやすい。否定文によく現れ、特に「主体性(意志性が強い)+動詞の意味特徴(意志性が強い)」の構文と「原因+理由+実現できなかったこと」などの文脈の環境では生じやすくなることが分かった。さらに、このような文脈の環境で「～しようとしたが、～」「～ても～」と「なかなか」「結局」などの文型と副詞がよく現れることも判明した。



【図1】 成立条件に関わる要素の関係図

第4章では、日本語の実現可能を中心に過去・現在・未来という時間軸上で、意志性が存在する構文と意志性が存在しない構文の中で実現可能の性質を考察した。まず、アスペクトの視点から日本語の可能表現が潜在可能構文と実現可能構文に分類され、潜在可能構文と実現可能構文の性質の異なり、時間軸上の事象の生成を中心に考察した。過去・現在・未来という時間の区分で「可能」と「実現」を表す用法と事象の生成を分析し、実現可能構文の角度から日本語の「実現」を表す可能表現の性質を意志性のある構文と意志性のない構文で明らかにした。

第5章では、対照言語学の視点から第3章の内容を踏まえ、日本語の可能形を付加しにくい自動詞文は「可能」の意味合いが生じる場合にどのような中国語の対応表現があるのかを考察した。中国語の対応表現では自動詞の否定文が中国語の可能補語「V不C」に対応するものが多く、動作の不実現を表す「可能・不可能」であることが分かった。可能形を付加しにくい自動詞構文が「可能」の意味を内包する場合には中国語の実現可能構文「V不C」に対応することを明らかにした。

最後に第6章では、対照言語学の視点から第4章の内容を踏まえ、日本語の実現可能「タ」形と中国語の対応表現を考察した。日本語の実現可能「タ」形の肯定文は中国語の「結果補語」に対応する用例数が多いが、「可能補語」に対応する用例数が非常に少ない。「タ」形の否定文には中国語の「可能補語」に対応する用例が非常に多いことが明らかにした。この考察結果で日中両言語の可能表現において「ズレ」が生じる傾向が分かった。

7.2 本研究で明らかになったこと

結論の冒頭に取り上げている3つの問題点を順次に説明し、第2章から第6章の考察で解明ができた結果をまとめる。

I) 「語形」の考察と成立条件の相互関係

可能形の接辞を付加しにくい動詞は、文脈上でどのような場合において「可能」のニュアンス

が生じやすくなるのか。この問題点に関しては、主体性と動詞の意味特徴との相互関係や構文上「可能」の含意が生じやすい文脈環境などを考察した。

ア)日本語の可能形の接辞を付加しにくい自動詞と付加しにくい他動詞の分類から動詞の性質が異なることが分かった。可能形の接辞を付加しにくい自動詞の分類では「事物の変化(外因)」の意味特徴から人間の参与があり、意志性が潜在しているため、構文上で「可能」の意味合いが生じやすくなると推測される。他動詞には人間の存在があるとしても意志性が低い場合に、コントロールできない事象や命題内容の適切性に制限される要因があることが分かった。詳しい分類は以下のとおりである。

【自動詞】1) 人間の働きかけとコントロールの強弱に制限されるもの。

自然現象	例: 晴れる、曇る、降る、など
事物の状態	例: ある、属する、など
事物の変化(内発)	例: 腐る、錆びる、濁る、など
事物の変化(外因)	例: 切れる、納まる、決まる、など
抽象的な現象	例: こじれる、寂れる、栄える、など
生理の変化	例: 死ぬ、病む、疲れる、など

2) 動詞の性質が形容詞であるもの。

例: (人間に関するもの) 優れる、秀でる、似合う、など
(物に関するもの) 聳える、冴える、優れる、など

【他動詞】1) 命題内容の制限

例: 飽きる、呆れる、懂れる、焦る、怒る、など

2) 感情・心理・態度

例: 励ます、おだてる、いじめる、恐れる、好む、など

3) 授受表現

例: 差し上げる、くださる、くれる、よこす、授かる、など

4) 再帰的

例: 失う、病む、患う、挫く、損ねる、損なう、など

イ)文脈上で人間の働きかけが文脈の背景に潜んでいる場合は(ア)の「事物の変化(外因)」を表す自動詞が多く、「可能」の意味合いが生じやすくなる。視点の置き方が自動詞の可能構文と異なる。「可能」の解釈をもつことのできる自動詞構文の視点は客観的な事象に置かれるため、客観的な事柄を述べる性質がある。これについては意志性がない自動詞の本質である客観性を維持するままで客観的な視点で実現の「可能・可能性」を表すと主張したい。自動詞可能文の視点は主動者の能力や力に視点が置かれ、実現の「可能・可能性」を表す。前者は日本語の可能形の接辞を付けにくい自動詞構文が可能表現ではないが、「可能」の意味合いが含まれている事象に対して、文脈の背景に人間の働きかけが潜んでいて、日本語の「可能」を含意することは確かである。このような自動詞構文が次の構文環境で生じやすことが分かった。

① 主体と動詞の意味特徴がお互いに牽制されているが、主体と動詞の意味特徴の相関関係の

分析で A タイプは「可能」の意味合いが生じやすい場合である。B タイプが「可能」の意味合いが生じにくい場合であることが分かった。C タイプと D タイプについては生じやすいものも生じにくいものも存在しているため、判断しにくい。

- A: 主体(意志性が強いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が強いもの)
- B: 主体(意志性が弱いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が弱いもの)
- C: 主体(意志性が弱いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が強いもの)
- D: 主体(意志性が強いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が弱いもの)

②一定な文型と副詞が存在している文脈環境の中、あるいは一定的な原因と条件が前文にある文脈環境の中で自動詞の「可能」の意味合いが生じやすい。構文の特徴は次の通りである。

- (a) 文中に「うまく、すぐに、ようやく、はっきり、すでに、やっと、全部、よく、綺麗に、意外に、十分、ついに」などの副詞がよく使われているもの。
- (b) 文中に「あまり～ない。～ようとしたが、～。何も～。誰も～。何度も～ない。いつも～ない。どうしても～ない。～しか～ない。」などの文型がよく現れるもの。
- (c) 前文に状況や原因により、実現した・しなかったもの。
- (d) 動詞によって意図・意志があるもの

ウ)漢語サ変動詞が自・他動詞の可能形の接辞付加と異なるため、個別として可能形の接辞付加を考察した。漢語サ変動詞の可能形の付加について、「できる」「することができる」と共起しにくい動詞を次のように分類した。

- ・抽象的な現象 例: 影響する、挫折する、大敗する、など
- ・心理、感情の変化 例: 苦心する、苦勞する、決心する、など
- ・非意志的な生理現象 例: 混乱する、心配する、出生する、など
- ・自然現象 例: 紅葉する、など
- ・物事の状態や変化 例: 流行する、衰弱する、蒸発する、など
- ・命題内容が望みに反するもの 例: 悪化する、後悔する、など

以上の内容は可能形の接辞を付加しにくい動詞を中心に動詞自体の意味特徴と構文上の相互関係から考察した。日本語の「可能」を内包する場合には一定な構文環境(イ)で、動詞自体の背景に人間の参与がある(ア)[事物の変化(外因)]の存在で生じやすくなることが明白にした。

II) 実現可能・潜在可能の視点からの分析

この部分の考察については、過去・現在・未来において実現可能構文の性質とは何か。文中に意図・意志がある構文と文中に意図・意志がない構文に対して考察した。なぜ意志性のない文脈で「可能・可能性」のニュアンスが弱まり「実現」「結果」を表すのかについては、解明されなか

った点が1つと解明された点が2つある。

エ) 文中に意図・意志がない構文については、実現可能文であるかどうかを判断しにくい。実現可能は過去・現在・未来に使われる用法で「実現・達成」に重点が置かれていることは分かりやすい、意志性が現れない場合は次の3つのパターンで分析した。

- ①文中に意図・意志がなくても動作主体の行動によって実現した結果を表すもの。(例文1)
- ②自然になった事態について意図・意志が表わしていないもの。(例文2)
- ③ 結果を表す事態について主語が現れず、結果だけを表すもの。(例文3)

- (1) 長い熱心な拍手だった。ブラヴォ! というかけ声も時折聞こえた。(『IQ84(1)』)
- (2) 彼はそこに着いてすぐ、親友が一人できた。(『ネ』)
- (3) 燃料をタイミングよく補充できた。(同上)

意志性がない「実現」を表す可能文は自発文に近いので、「実現」と「自発」の境目を見極めることは困難である。

オ) 意図・意志がない構文では、出来事の結果や実現が結果として表れることがある。また、「このドラマはうまく改編できた」のように「可能」のニュアンスが薄くなり、評価を表す用法であるが、人間の働きかけと切り離せない。

カ) 文中に意図・意志があるものに関しては、文型や副詞と共起する特徴が存在している。この特徴が上記(1)の(ウ)に述べた「可能」の解釈をもつことのできる自動詞構文の特徴と類似であり、構文環境で実現・不実現が生じる。

Ⅲ) 日中対照言語学の視点からの分析

日中両言語の可能表現における共通性、個別性はどのようにして現れるのか、可能表現における両言語には「ズレ」があるのか、を解明した。小説の対訳状況を整理し、日本語の自動詞構文と実現可能構文の用例を考察した。日本語と中国語の「ズレ」を可能表現の制限から両言語の個別性をまとめる。まず、「可能」を表す共通性、個別性が生じる対応関係である。

キ) 意味分類からの制限

第2章で解明した可能形の接辞を付加しない動詞の分類の中に、主体が人間であるが、主体性が低い性質を持つ動詞がある。たとえば、(ア)生理の変化を表す自動詞感情・心理・態度を表す他動詞、(ウ)の漢語サ変動詞などがある。事象へのコントロールが低いため、主体性が低く可能表現を使用しない。しかし、中国語の可能表現にはこのような動詞でも可能表現は使える。つまり、日本語の可能表現は動詞の意味特徴によって可能表現を使用するか否かを制限する個別性があるが、中国語はそうではない。

ク) 中国語の個別性については中国語の可能表現が品詞分類に制限されている。当然のことであるが、日本語との対照で同形語の存在があり、両言語の品詞分類が異なるため、可能表現にも「ズ

レ」が生じる。さらに説明すると、中国語の品詞分類で可能表現に使えないが、日本語の場合には使えることがある。例えば、中国語(名詞)と中国語(副詞)は可能表現に使えないが、中国語(形容詞)と中国語(動詞)は可能表現に使える。下表の(A)は日本語で可能表現が使えるもので、(B)は使えないものである。日中両言語で同様に使えるものはウ(A)とエ(A)であり、どちらも使えないものがア(B)とイ(B)である。

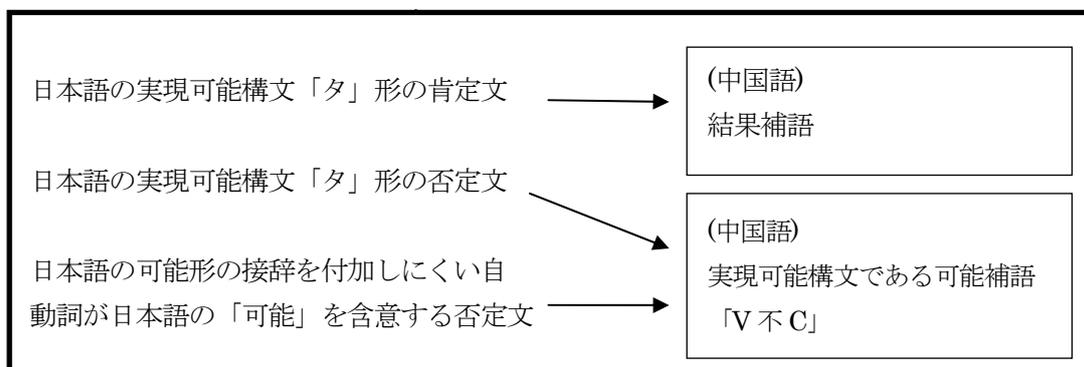
【表 5-7】 「同形語」の品詞分類¹⁾

日本語の 可能表現 中国語の 品詞分類	(A) 日本語の可能表現と共起しやすいもの	(B) 日本語の可能表現と共起しにくいもの
ア. 中国語(名詞)	同感する、作用する、記憶する、始末する、など	意図する、外交する、故障する、作文する、紅葉する、など
イ. 中国語(副詞)		一貫する、一致する、連続する
ウ. 中国語(形容詞)	乾燥する、緊張する、興奮する、安心する、満足する、など	混雑する、腐敗する、沈黙する、浪費する、混乱する、など
エ. 中国語(動詞)	利用する、使用する、処理する、呼吸する、制作する、など	拍手する、造船する、蒸発する、噴出する、沸騰する、など

次に、両言語の共通性と個別性が共存している場合である。

ケ)時間軸上において、日本語の可能表現は時制に制限されないが、意志性に制限される。中国語の場合には時制に制限され、可能の意味があれば可能表現を使うが、可能の意味合いがなければ可能表現を使用しない。

本研究では、主に実現可能の「タ」形を中心にして日中両言語の対応表現を考察した。考察する際に「タ」形を過去形肯定文・否定文に分け、中国語との対応表現と対応関係を分析した。考察結果としては、日本語の実現可能「タ」形の肯定文が中国語の結果補語に翻訳されている用例が多く、可能補語の用例数が少ない。つまり、一つの事象に対して、日本語が実現可能で「結果」「実現」を表すが、中国語の場合には結果補語で表す場合が多い。その逆に、「タ」形の否定文に対して、中国語の可能表現である可能補語に対応する用例が多く、結果補語が少ない。言い換えると、中国語の可能補語が「結果」「実現」を表す場合には日本語の実現可能に対応することが分かった。さらに、日本語の《可能》の解釈をもつことのできる自動詞構文に対して、中国語の対応表現が実現可能である可能補語「V 不C」に対応する。以下の図2でこのような「ズレ」を提示する。



【図2】日中両言語の実現可能の対応関係

日本語の可能表現は意志性に制限されるが、可能形の接辞を付加しない動詞がなぜ「可能」の意味合いが生じやすいかをめぐって成立条件を中心に考察し、中国語との対応関係で生じやすい文脈環境を明らかにした。結論イ)①②に示したように一定な文脈環境の中で、接辞を付加しない自動詞は「可能」の意味合いが生じやすいことを明らかにした。この特徴については日本語の実現可能構文にも中国語の可能補語の構文にも表れている。だが、意志性が文脈に潜んでいる自動詞文は日本語の「可能」を含意する場合は、否定文が中国語の実現可能文に対応することが多く、肯定文は少ない。

最後に、日本語の可能形の接辞を付加しにくい自動詞構文に「可能」の意味合いが含まれる場合には、客観的な立場に立って事象の「結果」「実現」の可能・不可能を表すが、人間の能力や物の属性に視点が置かれると可能表現を用いる。この点は自動詞構文が中国語の可能補語に対応する要因である。

7.3 残された問題点と展望

(I)主語が無情物の自動詞構文に2つの類型がある。一つは自動詞構文が日本語の「可能」を含意する場合に視点が客観的な事象に置かれ、人間の動きと意志でコントロールできない類型である。もう一つには無情物自身の属性や変化を表し、人間の動きと意志に関係ない客観的な事象である類型である。

前者の使用が好まれる理由は何か、語用論の視点からさらに考察する必要がある。たとえば下記の例文で視点の置き方の違いで発話者の伝えたいことがどう異なるのかを考察してみたい。

(4) A: 車輪の収納扉が閉まらないよ!
B: 見せて、見せて。

(5) A': 車輪の収納扉が閉められないよ!
B': 見せて、見せて。

Aの発話時に問題があるのは収納扉であり、壊れているという事実が視点が置かれる。しかし、A'の場合は主動者である自身の力が足りないのか、ほかの理由で収納扉を閉められないという能力の可能を主張したいのか、はっきりしない。このような場合なぜ「車輪の収納扉が閉まらないよ」のように自動詞構文をよく使用するのかを語用論の視点から考察したい。

(Ⅱ)本研究では可能形の歴史変遷について考察が及ばよかった。可能形の接辞を付加しやすい動詞と付加しにくい動詞が、なぜ分かれていたのかを歴史的な変遷から分析する必要もある。通時の研究では自動詞構文が日本語の「可能」を含意する現象の生成の経緯をも明らかになると思われる。

(Ⅲ)今回、主に動詞が可能形の接辞を付加しない自・他動詞と漢語サ変動詞を考察し、非可能構文であるが、日本語の「可能」を含意することを考察した。日本語の可能形で使われる構文は多いが、非可能形で「可能・可能性」を表す構文も多く存在している。例えば「～しにくい」「～しかねる」「～が可能だ」「～得る」「～かねる」など。これらの構文が日本語の「可能」を表現するときに、日本語の可能表現の成立条件との関係がどうなっているのかについて分析する必要もある。

今回の研究はただ可能表現に関する内容の一部分に過ぎない。残されている問題点をさらに進展させ、歴史と現代語の繋がりをより明白に、可能表現をより深く考察することで、将来の日本語教育と中国語教育に生かしたい。

【注】

1) 【表 5-7】は第 5 章の表 7 を指す。

【用例出典一覧】

例文の出典及び訳者名の表記について

本研究で用いた用例資料を(著者 50 音順) 出版年は初版を示す。例文の作品名について、論文の中では次の()で示したように、全て略称で示す。(筆者訳)と示したのは、日本語文献からの引用を筆者が訳したものである。

I 小説

<日本語版>

- 『詩』: 茨木のり子『詩のこころを読む』(岩波ジュニア新書)岩波書店 1995
『青』: 石川達三『青春の蹉跎』新潮社 1995
『五』: 乙武洋匡『五体不満足』講談社 1998
『名』: 川端康成『名人』新潮社 1962
『窓』: 黒柳徹子『窓際のトットちゃん』講談社1984
『心』: 『こころ』夏目漱石 角川文庫 1973
『文』: 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書 1973
『母』: 田中寛『母といた夏』国際語学社 2012
『薪』: 細川英雄・細川たかみ『薪ストーブのある暮らし』筑摩書房 1995
『孟①』: 宮城谷昌光『孟嘗君①』講談社 1998
『孟②』: 宮城谷昌光『孟嘗君②』講談社 1998
『孟③』: 宮城谷昌光『孟嘗君③』講談社 1998
『孟④』: 宮城谷昌光『孟嘗君④』講談社 1998
『孟⑤』: 宮城谷昌光『孟嘗君⑤』講談社 1998
『船』: 三浦しをん『船を編む』光文社 2011
『ノ』: 村上春樹『ノルウェイの森(上)(下)』講談社文庫2004
『1Q84(1)日』: 村上春樹『1Q84 (book I)』新潮社2009
『1Q84(2)日』: 村上春樹『1Q84 (book II)』新潮社2009
『海(上)』: 村上春樹『海辺のカフカ(上)』新潮社2002
『海(下)』: 村上春樹『海辺のカフカ(下)』新潮社2005
『中』: 村上春樹『中国行きのスロウ・ボード』中央公論社1997
『時』: 楊逸『時が滲む朝』文藝春秋 2009
『羊』: 村上春樹『羊をめぐる冒険(下)』講談社文庫 1985
『恋』: 村上春樹『スプートニクの恋人』講談社文庫 2001
『風』: 村上春樹『風の歌を聴け』講談社文庫 2001
『ピ』: 村上春樹『1973年のピンボール』講談社文庫 1983
『沈』: 山崎豊子『沈まぬ太陽』1999
『大』: 山崎豊子『大地の子』1991
『阿』: 渡辺淳一『阿寒に果つ』角川書店 1982

『野』：渡辺淳一『野わけ』集英社 1974

『ロ』：渡辺淳一『ロマンチズムとしての未来』講談社 1984

<中国語版>

《挪》：村上春樹著、林少华译《挪威的森林》上海译文出版社 2007

《窗》：黒柳徹子著、赵玉皎译《窗边的小豆豆》南海出版社2011

《1Q84(1)中》：村上春樹著、施小炜译《1Q84 (book I)》南海出版社 2010

《1Q84(2)中》：村上春樹著、施小炜译《1Q84 (book II)》南海出版社2010

《海》：村上春樹著、林少华译《海边的卡夫卡》上海译文出版社 2007

《去》：村上春樹著、林少华译《去中国的小船》上海译文出版社2008

《寻》：村上春樹著、林少华译《寻羊冒险记》上海译文出版社 2001

《斯》：村上春樹著、林少华译《斯普特尼克恋人》上海译文出版社 2001

《且》：村上春樹著、林少华译《且听风吟》上海译文出版社 2002

《弹》：村上春樹著、林少华译《一九七三年的弹子球》上海译文出版社 2001

《心》：夏目漱石著、周大勇译《心》上海译文出版社 1988

II 辞典類・学習書・資料類

《日动》：潘贤忠・张国强《日语常用自他动词用例》北京工业大学出版社 2001

《日活》：清水仁/王辉《日语基本动词活用例解》大连理工大学出版社 2007

『日教』：相澤正夫『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所 1993

『日基』：小泉保『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店 1989

『日ヴォ』：大東文化大学外国語学部日本語学科『日本語のヴォイスに関する用例集—受身・使役・可能—』日本語学研究資料用例集① 1997

『外』：文化庁『外国人のための基本語用例辞典』（第二版）大蔵省印刷局 1971

『ネ』：陳文芷、陸世光主編『ネイティブ中国語補語例解』大修館書店 2008

『動』：侯精一・徐枢・蔡文蘭『動詞・形容詞から引く中国語補語 用例 20000』東方書店 2015

III 社説

朝日新聞(2014年5月～7月の3か月間の社説、2015年8月～現在の社説)

IV 『新潮文庫の100冊CD-ROM版』（1995）新潮社

V コーパス

1) KOTONONA『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』国立国語研究所

2) (2002 - 2003)『中日対訳語料庫 (BJSTC)』北京日本学研究中心(日本語名：『中日対訳コー

パス』)

『中日対訳コーパス(第一版)』

文学作品：中国 23 篇、日本 22 篇とその訳本を合わせて 105 件

文学以外：中国 14 篇、日本 14 篇、日中共同 2 篇とその訳本を合わせて 45 件

【参考文献】

〈日本語〉

- 相澤正夫(1993)「『日本語教育のための基本語彙調査』と複合サ変動詞」『研究報告集』第14号, pp. 281-321, 国立国語研究所
- 青木ひろみ(1997)「『可能』における自動詞の形態的分類と特徴」『言語科学研究』第3号, pp. 11-26, 神田外語大学大学院紀要
- 青木博史(1996)「可能動詞の成立について」『語文研究』第81号, pp. 56-45
- 荒井文雄(2006)「日本語における可能表現の習得過程」『京都産業大学論集』第34号, pp. 1-23, 京都産業大学
- 安達太郎(1995)「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」『日本語類義表現の文法(上)』pp. 121-131, くろしお出版
- 井島正博(1991)「可能文の多層的分析」『日本語のヴォイスと他動と他動性』pp. 149-189, くろしお出版
- 伊藤さとみ(2003)「中国語の可能補語」『日本東洋文化論集:琉球大学法文学部紀要』第9号, pp. 1-16
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』pp. 97-155, 大修館書店
- 庵功雄(2008)「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』第11号, pp. 47-63
- (2010)「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因—非対格自動詞の場合を中心に—」『日本語教育』146号, pp. 174-181
- 庵功雄[ほか](2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』pp. 81-89, スリーエーネットワーク
- 庵功雄[ほか](2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』pp. 174-185, スリーエーネットワーク
- 伊藤加奈子(2011)「可能表現の使用に関する日中比較」『信州大学人文科学論集・文化コミュニケーション科学編』第45号, pp. 19-33
- 市川保子(1991)「可能動詞の助詞に関する一考察」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第6号, pp. 1-17
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(下)』pp. 63-140, 大修館書店
- 石毓智(2001)〈动补结构语法化的句法环境〉『现代中国語研究』第3期, pp. 45-56, 朋友書店
- 遠藤紹徳(1989)『中・日翻訳表現文法—中文日訳・日文中訳の原点とテクニック』pp. 101-112, バベル・プレス
- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」『ことばの科学』pp. 181-212, むぎ書房
- (1998)「現実・可能・必然(下)」『ことばの科学』pp. 13-17, むぎ書房
- 尾上圭介(1998)「文法を考える—5 出来文(1)」『日本語学』17(5-9), pp. 76-83, 明治書院
- (1998)「文法を考える—6 出来文(2)」『日本語学』17(10-14), pp. 90-97, 明治書院
- (1999)「文法を考える—7 出来文(3)」『日本語学』18(1-4), pp. 86-93, 明治書院

- 王学群(2008)「「見える」と“看得見”について」『日本語と中国語の可能表現』 pp. 27-53, 白帝社
- 大崎志保(2005)「日本語の自動詞による可能表現—動詞制約を中心に—」『日本語文法』第5巻1号, pp. 196-211
- 大河内康憲(1980)「中国語の可能表現」『日本語教育』第41号, pp. 61-73
- 小野秀樹(1991)「中国語における可能表現の“否定”—“他動性”を通しての「不能VR」及び「V不R」の考察—」『中国語学』第238号, pp. 11-19, 日本中国語学
- 大江元貴(2014)「日本語における無情物・無意志の可能表現について」『文藝言語研究・言語篇』第66号, pp. 1-19, 筑波大学大学院
- (2015)「中国語の可能形式“能” “会” “可以”—「可能」概念を構成する力に着目した分析—」『文藝言語研究・言語篇』第67号, pp. 41-67, 筑波大学大学院
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版
- (1999)『形態論と意味』くろしお出版
- (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 関承(2013)「中国語母語話者における日本語可能表現の習得について—無対動詞の有・無標識可能表現に着目して—」『国際協力研究誌』第20巻第1号, pp. 21-30
- 金子尚一(1981)「能力可能と認識可能をめぐる—非情物主語ということ—」『教育国語』第65号, pp. 103-111
- (1986)「日本語の可能表現〈現代語〉—標準語のばあい—」『国語解釈と鑑賞』51(1), pp. 74-90
- 加藤弘(2001)「非起動化辞と再帰・自発・可能表現」『東北大学留学生センター紀要』第5号, pp. 1-9, 東北大学留学生センター
- 金田一春彦(1957)「時・態・相および法」『日本文法講座I総編』明治書院
- (1976)『日本語動詞のアスペクト』麦書房
- 北原保雄監修・尾上圭介編(2004)『朝倉日本語講座6・文法II』ひつじ書房
- 北村保雄(1989)『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』明治書院
- 金京淑(2005)「朝鮮語と日本語の可能表現の対照研究—価値の可能表現を中心に」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』5号, pp. 263-275, 北海道大学大学院文学研究科
- (2006)「日中朝の可能表現に関する対照研究—許可・許容の意味を中心に」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』6号, pp. 195-206, 北海道大学大学院文学研究科
- 魏美平(2011)『可能表現における日中対照研究—実現系可能の過去形肯定文・否定文からの分析—』大東文化大学大学院外国語学研究科修士論文
- (2011)「日中可能表現の対照研究—実現系可能文と潜在系可能文の使用実態から」『指向』8号, pp. 124-131, 大東文化大学大学院外国語学研究科
- (2012)「可能表現における日中対照研究—実現系可能の過去形肯定文・否定文からの分析—」『指向』9号, pp. 149-164, 大東文化大学大学院外国語学研究科
- (2012)「日中対照研究—実現系可能と潜在系可能の視点からの考察—」『外国語学会誌』第41号, pp. 315-329, 大東文化大学外国語学会
- 楠木徹也(2009)「無標可能表現に関する一考察」『東京外国語大学論集』第79号, pp. 65-85

- (2014)「有対自動詞可能構文における意味的組成関係—他動詞有標可能構文との比較において—」『留学生日本語教育センター論集』第40号, pp. 103-111, 東京外国語大学
- 熊薇(2013)「V型の日中2字同形漢語の自他性について」『国際文化学』第26号, pp. 105-120, 神戸大学国際文化学研究所
- 久野暉(1972)『日本文法研究』大修館書店
- (1983)『新日本文法研究』大修館書店
- 小矢野哲夫(1979)「現代日本語可能表現の意味と用法(I)」『大阪外国語大学学報』pp. 83-98, 大阪外国語大学
- (1980)「現代日本語可能表現の意味と用法(II)」『大阪外国語大学学報』pp. 19-33, 大阪外国語大学
- (1981)「現代日本語可能表現の意味と用法(III)」『大阪外国語大学学報』pp. 21-34, 大阪外国語大学
- 小松英雄(1999)『日本語はなぜ変化するか—母語としての日本語の歴史—』笠間書院
- 小泉保 他編(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 洪競春(1995)「日本語の可能表現の形態と意味」『中日本自動車短期大学論叢』第25号, pp. 39-50, 中日本自動車短期大学
- 吳麗君[ほか](2005)「可能補語」『中国語の誤用分析—日本人学習者の場合—』関西大学出版部, pp. 109-138
- 黃麗華(1995)「中国語の可能表現「能」「可以」「会」」『日本語研究』, pp. 78-87, 東京都立大学
- 高恩淑(2010)「可能表現の意味分類に関する一考察—実現余地の在り処を基準に—」日本語学会研究会の発表, 日本語学会2010年度春季大会研究発表(日本女子大学)
- (2011)「現代日本語における可能表現の意味分類について—実現可能性の在り処を基準に—」『京都大学言語学研究』第30号, pp. 51-70
- (2012)「「動詞の意志性」を問う—可能形式との関わりを中心に—」『日本語文法』12巻2号, pp. 111-127
- 吳麗君[ほか]『中国語の誤用分析—日本人学習者の場合—』関西大学出版部
- 坂梨隆三(1969)「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』第46巻第11号, pp. 34-45
- 佐藤琢三(2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 申鉉竣(2003)『近代日本語における可能表現の動向に関する研究』絢文社刊
- 下岡邦子(2004)「可能形式の多様性」『日本言語文化研究』第6号, pp. 10-21
- 施小炜(2002)「中国語と日本語における表現の具体性について(2)可能表現をめぐる」『明治学院大学外国語教育研究所紀要』第12号, pp. 97-116, 明治学院大学外国語教育研究所
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1), 大阪大学
- (1998)「中間言語における可能表現の諸相」『阪大日本語研究』第10号, pp. 67-82, 大阪大学
- (1995)「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版, pp. 111-120
- (2005)「日本語可能形式にみる文法化の諸相(特集)日本語における文法化・機能語化」

- 『日本語の研究』1(3), pp. 32-46, 日本語学会
- (2002)「可能」『方言文法調査ガイドブック』
- 〈[http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/02_kanoo.pdf#search=可能 渋谷勝巳](http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/02_kanoo.pdf#search=可能%20渋谷勝巳)〉
- 周国龍(2013)「何故日本語は曖昧だと思われるのか(4)——可能表現に関する日中対照の視点から——」
- 『鈴鹿国際大学紀要』第19号, pp. 9-20
- 鈴木忍・川瀬生朗(1981)『日本語初歩』国際交流基金日本語国際センター
- 鈴木重幸(1965)「現代日本語動詞のテンス」『ことばの研究』第2集, 国立国語研究所
- 鈴木一(1971)「主体」『日本文法大辞典』p. 320, 明治書院
- 杉村博文(1988)「可能補語の考え方」『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』pp. 213-232, くろしお出版
- (1979)「能学好, 学得好, 能学得好」『日本語と中国語の対照研究 4』pp. 16-37, 大阪外国語大学外国語学部中国語学科
- 曾根博隆(1988)「日中同形語に関する基層的考察」『明治学院論叢』第424号, pp. 61-96
- 高橋太郎[ほか](2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 高橋太郎[ほか](2003)『日本語の文法』海山文化研究所
- (1994)『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』pp. 121-165, むぎ書房
- 田中寛(1989)「タイ語の可能表現について」『言語と文化』第2号, 文教大学, pp. 71-107
- (2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- (2004)『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』白帝社
- 高橋弥守彦(2008)「可能表現に用いる能願動詞“能”」『日本語と中国語の可能表現』pp. 133-169, 白帝社
- (2006)「刊行の辞」、日中対照言語学会編『中国語の補語』p. i-iv, 白帝社
- (2006)『実用詳解中国語文法』pp. 287-294, 郁文堂
- 玉岡賀津雄(2005)「中国語を母語とする日本語学習による正順・かき混ぜ語順の能動文と可能文の理解」『日本語文法』5巻2号, pp. 92-109
- 張威(1992)「「可能表現の本質」考：無標の可能表現へのアプローチ」『中京大学教養論叢』32(4), pp. 1351-1373, 中京大学
- (1993)「述語動詞のル形の文法機能：結果可能表現との関連から」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』3号, pp. 147-162, 独立行政法人国際交流基金
- (1996)「結果可能表現における否定の特異性」『国際関係学部紀要』17号, pp. 179-195, 中部大学
- (1997)「現代日本語の短絡した連体修飾構文にみられる結果可能表現:「～がわかる本」の構文をめぐる」『中京大学教養論叢』38(2), pp. 253-271, 中京大学
- (1998)『結果可能表現の研究 — 日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版
- 張麟声(2003)「僕のストーブ、なかなか火がつくことができない→僕のストーブ、なかなか火がつかない【可能表現の諸問題】」『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』pp. 94-105, スリーエーネットワーク
- 遅蛟潔(2014)「現代日本語可能文における意志性と可能文の類型—中国語の“会”文と“能”文

- との対照から」『日中言語対照研究論集』第16号, pp. 111-130, 日中対照言語学会
- 鄭寅玉(1997)「日本語と韓国語の可能表現について—日本語の可能表現からみた韓国語の可能表現の形式と意味について」『日本語教育研究』第34号, pp. 94-110, 言語文化研究所
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- (1982)『外国語との対照』明治書院
- (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時衛国(2015)「程度表現の対照研究—可能のモダリティ表現—」国際連語論学会第3回大会研究発表原稿(大東文化会館ホール)
- 長友文子(1997a)「可能形における自動詞と他動詞—日本語教育から見た可能表現の研究(一)—」『和歌山大学教育学部紀要』第47集, pp. 9-16. 和歌山大学
- (1997b)「可能形における自動詞と他動詞—日本語教育から見た可能表現の研究(二)—」『和歌山大学教育学部紀要』第47集, pp. 1-8. 和歌山大学
- 中野琴代(2008)「日本語の可能動詞」『下関市立大学論集』第52巻, pp. 103-114
- 中俣尚己(2010)「学習者による『も』の使用状況」第15回中国語話者のための日本語教育研究会(一橋大学)
- 中石ゆうこ(2003)「対のある自動詞・他動詞の習得研究の動向と今後の課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部第52号, pp. 167-174
- 中島悦子(2007)『日中対照研究ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』おうふう
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4(モダリティ)』くろしお出版
- 仁田義雄・益岡隆志(1989)『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄(1981)「可能性・蓋然性を表す疑似ムード」『国語と国文学』第58巻第5号, pp. 88-100
- (2010)『日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書房
- 野田尚史(1991)『はじめての人の日本語文法』pp. 94-98, くろしお出版
- 早津恵美子(1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』第6号, pp. 79-109, 京都大学言語学研究会
- (1989)「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』第16巻第8号, pp. 353-363
- 原由起子・常次莉恵(2006)「“能背得动”、“背得动”、“能背动”の違いについて」『現代中国語研究』8号, pp. 74-85, 朋友書店
- ハンニー・セーリム(2014)「日本語母語話者にみる行為の結果を表す表現の使用傾向—実現可能場面における自動詞と他動詞の可能形—」『日本語・日本文化研究』第24号, pp. 48-59, 大阪大学大学院
- 姫野昌子(2001)「日本語教育における文法の指導—可能表現を例として—」『日本語教育と日本語文法(特集)』pp. 53-60
- 藤井正(1971)「可能」山口明穂, 秋本守英(編)『日本文法大辞典』pp. 124-125, 明治書院
- 福田翔(2009)『日本語と中国語の可能表現—可能と結果の隣接性—』東京外国語大学大学院地域文化研究科 修士論文
- 龐黔林(1999)「日中両国語の可能表現について—自動詞の可能表現を中心に—」『論集』第45

卷第3号, pp. 47-59

- 馬俊栄(2009)「日本語可能表現のタ形用法に対応する中国語表現をめぐって」『日中言語対照論集(第11号)』 pp. 108-121, 白帝社
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
- (2007)「可能表現と可能性表現」『日本語モダリティ探究』 pp. 187-198, くろしお出版
- (2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 松村明編(1969)『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社
- 松下大三郎(1930)『標準日本口語法』 pp. 161-171, 中文館書店
- 三上章(1972)『現代語法新説』 pp. 268-296, くろしお出版
- 宮島達夫 仁田義雄(1995)『日本語類義表現の文法(上)』
- 宮本厚子(2001)「現代中国語の可能表現—肯定形を中心に—」『論集』第53号, pp. 43-59, 駒澤大学
- 村木新次郎(1986)「ヴォイスの輪郭」『国文学解釈と鑑賞』第51巻11号, pp. 64-73
- (1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」, 仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』 pp. 1-30, くろしお出版
- 森田良行(1977)『基礎日本語3 意味と使い方』角川書店
- (1990)『日本語学と日本語教育』 pp. 105-136, 凡人社
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 望月圭子(2009)「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析」『東京外国語大学論集』第78号, pp. 461-471, 東京外国語大学
- (1977)「日本語の動詞について」『講座日本語教育』第13号, pp. 114-134, 早稲田大学日本語研究教育センター
- (2007)「可能の意味」『助詞・助動詞の辞典』 pp. 45-55, 東京堂出版
- 山田留理子(2003)「中国語可能補語の肯定形式について」『下関市立大学論集』 pp. 46-3, 下関市立大学
- (2007)「日本人学生の可能補語誤用分析」『下関市立大学創立50周年記念論文集』 pp. 247-254, 下関市立大学
- (2008)「可能補語—何を教えるか」『日本語と中国語の可能表現』 pp. 189-210, 白帝社
- 山口堯二(1996)『日本語接続法史論』 pp. 15-31, 和泉書院
- 山口佳紀(1989)『講座日本語と日本語教育5 日本語の文法・文体(下)』明治書院
- 安本真弓(2006)「結果補語の可能補語への変換条件」『現代中国語研究』第8号, pp. 87-97, 朋友書店
- (2007)「可能表現の否定形に関する一考察—日本語との比較から—」『日中言語対照研究論集』第9号, pp. 177-188, 日中対照言語学会
- (2008)「可能補語使用時の制約要因」『日本語と中国語の可能表現』 pp. 211-230, 白帝社
- (2009)「“能V得C/D”形式の意味範疇—“能VC/D”と“V得C/D”との比較を通して」『日中言語対照研究論集』第11号, pp. 79-92, 白帝社
- (2009)「日本語における可能表現の意味論的考察—中国語との比較を中心に—」『研究会報

- 告』第8号, pp. 48-64, 日本語文法研究会
- (2009)『現代中国語における可能表現の意味分析—可能補語を中心に—』白帝社
- (2010)「日中可能表現の文法機能に関する一考察」『高千穂論叢』第45巻第3号, pp. 63-79
- 山本捨(1982)「話し言葉における「来れる」・「見れる」・「出れる」等の可能表現の実態と文法教育(1)」『山梨大學教育學部研究報告』第一分冊(33), pp. 133-145, 山梨大学
- (1983)「話し言葉における「来れる」・「見れる」・「出れる」等の可能表現の実態と文法教育(2)」『山梨大學教育學部研究報告』第一分冊(34), pp. 147-161, 山梨大学
- (1984)「話し言葉における「来れる」・「見れる」・「出れる」等の可能表現の実態と文法教育(3)」『山梨大學教育學部研究報告』第一分冊(35), pp. 205-214, 山梨大学
- (1985)「話し言葉における「来れる」・「見れる」・「出れる」等の可能表現の実態と文法教育(4)」『山梨大學教育學部研究報告』第一分冊(36), pp. 101-108, 山梨大学
- 吉田雅子(2011)「漢語サ変動詞の日中対比」『専修大学外国語教育論集』第39号, pp. 39-56
- 吉田金彦(1971)『現代語助動詞の史的研究』明治書院
- 姚艷玲(2008)「〈不可能〉の言語化に関する日中両語の対照研究」『日本語と中国語の可能表現』pp. 88-111, 白帝社
- (2008)「可能補語使用時の制約要因」『日本語と中国語の可能表現』pp. 211-230, 白帝社
- (2007)「可能表現の否定形に関する一考察—日本語との比較から—」『日中言語対照研究論集』第9号, pp. 177-188, 日中対照言語学会
- (2006)「有対自動詞による無標可能文の成立条件—〈可能〉の意味合成のメカニズム—」『日本語教育』第128号, pp. 90-99, 日本語教育学会
- 林炜煌(1999)「可能の意味を表す慣用句型について—日本語から中国語に翻訳する際の問題点から—」『大阪大学言語文化学』第8号, pp. 198-206, 大阪大学
- 林青樺(2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相』くろしお出版
- (2005)「事象達成の観点から見たヴォイスの対立をめぐって—受身文の否定の意味解釈を通して—」『日本語文法』第5巻1号, pp. 104-120
- (2010)「潜在可能文と実現可能文との異同について—行為実現の確かさと限定性の観点から—」『日本語の研究』第6巻4号, pp. 89-96
- 李楓(2014)「漢語サ変動詞の卓立性の再考—動詞形・構文形比率を手掛かりとして—」『第6回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 63-72, 国立国語研究所
- 劉月華[ほか](1996)『現代中国語文法総覧』くろしお出版
- 呂雷寧(2006)「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」『ことばの科学』第19号, pp. 53-66, 名古屋大学言語文化研究会
- (2007)「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言葉と文化』第8号, pp. 187-200, 名古屋大学大学院
- (2008)「無意志自動詞の可能表現に関わる要因の分析—意志性・主体性・事態の性質を中心に—」『言葉と文化』第9号, pp. 271-286, 名古屋大学大学院
- 魯晓琨(1993)「「不能VR」と「V不R」」『中国語学』第240号, pp. 77-83, 日本中国語学会
- (2007)「日本人学生の可能補語誤用分析」『下関市立大学創立50周年記念論文集』

pp. 247-254, 下関市立大学

——(2008)「以“能”为纽带的现代汉语可能表达系统」『日本語と中国語の可能表現』pp. 170
- 186, 白帝社

〈中国語〉

北京语言学院语言教育研究所(1992)《现代汉语研究资料》北京语言学院出版社

丁声树(1979)《现代汉语语法讲话》商务印书馆

房玉清(1992)〈补语〉《实用汉语语法》北京语言学院出版社

胡裕树, 范晓主(1995)《动词研究》河南大学出版社

黄文龙(1998)〈“V 不了”的否定焦点与语法意义浅析〉《湘潭师范学院学报(社会科学版)》第 5 期,
pp. 85-86, 湘潭师范学院

李临定(1990)《现代汉语动词》中国社会科学出版社

刘月华(1980)〈可能补语用法的研究〉《中国语文》第 4 期

——(1986)〈可能补语〉《实用现代汉语语法》pp. 353-364, 商务印书馆

——(1989)〈可能補語用法的研究〉《漢語語法論集》pp. 1-28, 現代出版社

李锦姬(1996)〈两种可能式的语用分析〉《南京师大学报(社会科学版)》第 3 期, pp. 132-138

李晓琪(1985)〈关于能性补语式中的语素“得”〉《语文研究》第 4 期, pp. 11-18

——(2004)〈“做不到”“做不好”与“做不了”——兼论汉语补语教学〉《第 7 届国际汉语教学讨论会论文选》北京大学出版社

陆庆和(2006)《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社

劉月華他(1983)《实用现代汉语语法》外国語教学与研究出版社

吕叔湘主编(1999)《现代汉语八百词(增订本)》商务印书馆

——(1986)〈汉语句法的灵活性〉《中国语文》第 1 期, pp. 1-9

吕文华(1994)《对外汉语教学探索》北京语言学院出版社

卢福波(1997)《对外汉语教学实用语法》商务印书馆

鲁晓琨(2004)《现代汉语基本助动词语义研究》中国社会科学出版社

齐沪扬(2010)《现代汉语虚词研究与对外汉语教学》第三辑, 复旦大学出版社

秦礼君(2007)《日汉比较语法》中国科学技术大学出版社

沈家煊(2006)《认知与汉语语法研究》商务印书馆

——(2003)〈现代汉语“动补结构”的类型学考察〉《世界汉语教学》第 3 期, pp. 17-23

杉村博文(2010)〈可能补语的语义分析-从汉日语对比的角度〉《世界汉语教学(第 24 卷第 2 期)》
pp. 183-190, 外語教学与研究出版社

施关金(1985)〈关于助词“得”的几个问题〉《语法研究和探索(三)》pp. 247-279, 北京大学出版社

王红旗(1993)〈谓词充当结果补语的语义限制〉《汉语学习》第 4 期, pp. 19-21

——(1995)〈动结式述补结构配价研究〉沈阳·郑定欧(主编)《现代汉语配价语法研究》pp. 144-167,
北京大学出版社

吴福祥(2002)〈汉语能性述补结构“V 得/不 C”的语法化〉《中国语文》第 1 期, pp. 29-40

- 杨平(1989)〈“动词+得+宾语”结构的产生和发展〉《中国语文》第2期, pp. 126-136
- 岳俊发(1984)〈“得”字句的产生和演变〉《语言研究》第2期, pp. 10-30
- 袁毓林(2002)〈述结式配价的控制-还原分析〉《中国语文》第5期, pp. 399-410
- 于康(2004)〈“V 不得”的否定焦点与语法化过程〉《语文研究》第2期, pp. 15-19
- 朱德熙(1982)《语法讲义》pp. 182-185, 商务印书馆
- 朱庆明(2005)《现代汉语实用语法分析(上册)》清华大学出版社
- (2005)《现代汉语实用语法分析(下册)》清华大学出版社
- 赵长才(2002)〈结构助词“得”的来源与“V 得C”述补结构的形成〉《中国语文》第2期, pp. 123-129
- 张旺熹(1997)〈再论补语的可能式〉《第五届国际汉语教学讨论会论文选》北京大学出版社
- (1999)〈“V 不C”结构实现的语义条件〉《汉语特殊句法的语义研究》pp. 135-162, 北京语言文化大学出版社
- 张黎(2007)〈汉语的“能性确认”-由汉语“可能表达”说起〉《东方语言学》第2期, pp. 104-112, 上海教育出版社
- 张晓慧(2000)〈析可能补语和部分助动词之间的替换关系〉北京外国语大学国际交流学院编《汉日语言研究文集》北京出版社
- 张伯江(1991)〈关于动趋式带宾语的几种语序〉《中国语文》第3期, pp. 183-192

〈英語〉

- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Boston: MIT Press.
- Ellis, R. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Hopper, Paul J. and Thompson, Sandra A. (1980) *Transitivity in Grammar and Discourse, Language*. 56(2), 251-299.
- Halliday, M. A. K. 1970. *Language structure and language functions*. In J. Lyons (eds.),
- Halliday, M. A. K. 1973. *Exploration: the Functions of Language*. London: Edward Arnold.
- Jacoben, Wesley M (1991) *the transitive structure of Events in Japanese*. Kuroshio Publishers.
- Kaplan(ed.) Robert B, *The Oxford Handbook of Applied Linguistics*. Oxford University Press
- Krashen, S. 1987. *Principles and Practice in Second-Language Acquisition*. Oxford: Pergamon.

【辞典類】

- 青木怜子(1980)「可能表現」国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版
- 牛島徳治監訳(1992)『中国語用例辞典』東方書店
- グループ・ジャマシイ編著; 徐一平[ほか]訳(2001)『中文版日本語句型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所編(2004)『分類語彙表一増補改訂版一』大日本図書

- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 社団法人日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館書店
- 日本語文法学会編(2014)『日本語文法事典』大修館書店
- 森田良行(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- (2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版

【既発表論文と各章の関係】

本研究の出発点となったのは、2011年に大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻に提出した修士論文『可能表現における日中対照研究—実現系可能の過去形肯定文・否定文からの分析—』である。本研究の一部になった既発表論文と各章の関係を以下に示す。

第5章 「可能表現における日中対照研究 —自動詞・他動詞を中心に—」

『語学教育研究所 30 周年記念論集』大東文化大学語学教育研究所 2015 pp. 371-382

第6章 「日中可能表現の対照研究 —実現系可能文と潜在系可能文の使用実態から—」

『指向』第8号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2011 pp. 124-131

「日中対照研究 —実現系可能と潜在系可能の視点から考察—」

『外国語学会誌』第41号 大東文化大学外国語学会 2012 pp. 315-329

「可能表現における日中対照研究—実現系可能の過去形の肯定文・否定文から分析する—」

『指向』第9号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2012 pp. 149-164

「可能表現における習得の一考察 —初・中級日本語教科書をめぐって—」

『指向』第10号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2013 pp. 136-147

謝辞

本研究は現代日本語の可能表現を、主として可能構文の生成のメカニズムをさぐるべく種々の条件を考察したものである。序章に述べたように、そもそも可能、あるいは可能表現、可能構文というとき、その射程を定めるにあたってはいくつかの問題が生じる。我々の言語生活ではあえて可能という具体的な表現を持たない場合でも、場面によっては可能を内包する場合もあり、さまざまな状況の制約、環境によって可能は広く潜在していると思われるからである。例を出すまでもなく、「何分で到着できますか」「一時間で着きます／一時間で着けます」といった場面、「この排水管は何か詰まっていて水が流れない」「鞆が小さくて服が入らない」など頻繁に観察することができるが、学習者にとっては「水が流ることができない」「服を入れることができない」といった不自然な言い方をしてしまう、といった誤用も生じることになる。

こうした現象は日本語の動詞特有の意味によるものなのか、あるいは一般に個々の動詞成分の特質によるものなのかは定かではないが、日本語の曖昧性のひとつとして、筆者は大きな関心をいだいてきた。大学で日本語を専攻して以来、長い歳月が経ったが、依然としてこの現象は筆者の脳裏から離れることはなかった。この解明のためには実際の言語生活を享受し、そのなかで日本語の個別性と普遍性をたどることが必須である。日本に留学して以来、さまざまな言語現象に関心をもち、そのなかで、いわば複合的な言語現象の発現体としての可能という事象を捉えなければならないことに気づくようになった。同時に日本語と筆者の母語である中国語との間に可能をとらえる共通性、個別性により深く関心をいただくようになり、対照研究の必要性を痛感するようになった。

そうしたとき、早稲田大学大学院で研究生として学んでいた時、前田直子先生より大東文化大学教授田中寛先生をご紹介くださり、大東文化大学大学院に進学することになった。修士課程から本格的に上記の研究課題に取り組み、2012年に修士論文「可能表現における日中対照研究—実現系可能の過去形肯定文・否定文からの分析—」を提出した。しかし、修士論文ではまだ研究の入口にさしかかったところで、より本質的な研究はさらに多くの時間を費やす必要があった。

対照研究は二つの高い山を目指さなければならない。また、対照研究を進めるにあたってはその方法論も重要である。対象言語である日本語の研究を深めると同時に、母語の内省にも深く注意を払わなければならない。対照研究はその意味でも二倍も三倍も努力しなければならないことを痛感することになった。その後も博士後期課程に進み、研究を継続してこのたび、博士請求論文を提出することとなったが、本研究もまだ途上のものであり、結語でしめしたように幾つかの課題は依然として残されている。しかしながら、研究の一つの区切りとして、ここに現在到達した限りの成果をまとめておくことは今後の研究のためにも必要なことと考えた次第である。

本研究をこのようなかたちにとまとめるに際して、振り返ればさまざまな曲折があった。

将来の研究に悩んでいた時、前田直子先生から田中寛先生を紹介されたことは研究の大きな転回点となった。大学院では、とくに後期課程では研究の方法論について初歩的なところから多くのことを研鑽しなければならなかった。筆者が考えている研究方法はせまく、より広範な視角から言語事象を捉える必要があることを痛感する日々であった。また、田中先生からはひとつひとつの用例を丁寧に観察、吟味する姿勢がいかにも不足していることに気づいた。この研究を遂行するにあたり、田中先生は日頃から私の研究を気にかけていただき、幅広い知識から多くの有益なコメントを戴くことができた。本研究に関連する論文、参考書や資料の情報なども教えて戴くなど、大変お世話になった。論文の作成にあたり、これらの論文と資料から論文の進み具合の可能性を提示してくれたのではないかと考えている。ここに心から感謝の意を申し上げたい。

学内においては月例会の応用日本語学研究会での院生仲間との研鑽の機会が大きかったし、また学外では日本語文法学会をはじめ多くの学会に参加して研究の最前線に触れたことは研究の豊かな土壌になった。関東日本語談話会では関東の大学から若手研究者が発表する場としてさまざまな知見を吸収することができた。田中先生の指導の下から多くの人材が学位を取得し、現在はインドネシア、中国、タイに帰国し、大学機関で日本語教育に従事しているアリアルタデイ氏、邱麗君氏、スントアリー氏をはじめ多くの先輩諸氏にも学ぶところが多く、またさまざまな励ましを受けたことに心より感謝申し上げます。日本語のチェックには、中国言語文化専攻の博士後期課程の先輩と後輩にお世話になった。中国語も堪能である先輩からもたくさんの示唆を戴いた。ここに謝意を表したい。中国語の例文の確認やデータの確認などの作成において、本研究科の中国人の友達には大変お世話になり、研究遂行にあたり日頃より有益な討論とご助言を戴いたことに感謝の意を表す。また一橋大学の研究仲間からも多くの刺激を受けることが出来たことも記しておきたい。

本学大学院では田中先生のほかに上村圭介先生、福盛貴弘先生にも研究上のさまざまな方法論について温かいご指導を受けることが出来た。また、日中対照研究の実践的な場として、日中言語対照学会の研究例会、国際連語論学会にも参加することができたのは、筆者の研究をさらに推し進める原動力となった。研究発表に際してさまざまなご配慮をいただいた高橋弥守彦先生、安本真弓先生には心より感謝申し上げます。

ともすれば行き詰まり、停滞しがちな研究を常に励ましてくださった田中寛先生にはあらためて感謝申し上げます。また、大学院事務室のスタッフの皆様、語学教育研究所の益子様には学内機関誌の投稿などで大変お世話になった。研究がさまざまな恩恵のうえに成り立っていることにあらためて気づかされる。多くの皆様に支えられてようやくここまでたどり着くことができたが、また研究のスタートラインについたばかりである。今後、本研究をさらに進展させ、微力ながら日本と中国の学術交流、相互理解に少しでも貢献することができれば、と思っている。

2015年10月